

栄 工 田 遺 跡

— 四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1995. 3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

栄工田遺跡

— 四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1995. 3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

巻頭カラー 1



栄工田遺跡遠景（写真手前が栄工田遺跡）

卷頭カラー 2



J-VIII層出土遺物（縄文時代後期初頭）



縄文時代後期～晩期包含層出土石器（磨製石斧）

序

高知県は県土の80%を占める四国山地のため、古来他地域との陸上交通を隔絶された地域でした。しかし、この地形的制約の中で、険しい四国山地を横断する幾つかの山越えのルートが存在しました。そのルートの一つ、愛媛県川之江市と高知県南国市を結ぶラインに現代の高速道路—四国横断自動車道が建設され、高知と瀬戸内を結ぶ大動脈・大量輸送手段の一つとして、現在日々その重要性を認識されつつあります。

四国横断自動車道は、さらに高知平野の北端山麓部を縫うように、西に向かって工事が進んでおり、平成9年の南国～伊野間の開通により、高知県経済に与える影響がさらに大きくなるものと思われます。

今回調査された栄エ田遺跡は南国市岡豊町に位置し、高知平野で最初にまとまって縄文時代の土器が出土した遺跡として知られていました。近年の開発の増大に伴う発掘調査により、高知平野周辺の縄文時代の資料も増えつつあります。本調査でも多くの縄文遺物が出土しています。調査成果が当地の縄文文化解明の一助になれば幸いです。

遺跡周辺は高知県下でも遺跡が集中する地点であり、地形と温暖な気候も相俟って住むのに適した環境だったと考えられます。調査の結果、縄文時代から近世に至る人々の生活が連綿と営まれていたことが判り、それが裏付けられた形となりました。遺跡のある定林寺地区の先人たちの足跡を、わずかではありますが辿ることができたのではないのでしょうか。

最後にこの発掘調査にあたり御配慮、御協力いただきました関係各位に対しましてここに厚く御礼申し上げます。

平成7年3月31日

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所 長 原 雅 彦

例 言

1. 本書は、四国横断自動車道用地内における埋蔵文化財の記録保存を目的として行った発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は、日本道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受けて、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、試掘調査が平成5年2月17日～3月23日、本調査が平成5年5月17日～12月6日である。
4. 調査体制
庶務 三浦康寛（埋蔵文化財センター主事）
試掘調査 江戸秀輝（埋蔵文化財センター調査員）
本調査 江戸秀輝・松村信博（埋蔵文化財センター調査員）
5. 整理作業は下記の職員が行った。
松村信博・江戸秀輝
6. 本文の執筆・編集は松村が行った。なお、第I章第2節については江戸に資料提供を受けて松村がまとめた。また自然遺物の分析については菊地直樹氏（高知大学理学部地学科大学院）に依頼し報文をいただいた。
7. 発掘区の設定並びに遺構の測量にあたっては公共座標を使用した。標高は海拔高を示す。
8. 調査にあたっては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所・高知県教育委員会・南国市教育委員会・地元関係者に全面的な協力を得た。関係者各位に厚く御礼申し上げたい。
9. 報告書の作成にあたり、坂口隆（国学院大学考古学研究室）、平井勝（岡山県古代吉備文化財センター）、家根祥多（立命館大学）、中村健二（滋賀県埋蔵文化財センター）、橋本久和（高槻市埋蔵文化財センター）、森島康雄（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、前田光雄・出原恵三・廣田佳久・松田直則・池澤俊幸・吉成承三・浜田恵子・竹村三菜・山崎正明（以上高知県埋蔵文化財センター）の各氏には貴重なご助言・ご教示を頂いた。記して感謝する次第である。
10. 発掘作業及び整理作業には下記の方が従事した。
(発掘調査)
中西純子・西内宏美・岡田稔夫・小松重喜・小松光尾・小松浜子・小松木義・島井博志・島井澄子・島井周子・永田美津子・武市和子・吉川競・吉川勉・高橋弘喜・井上速男・井上郁雄・坂本憲彦・菊地直樹・大賀幸子・近藤幸子・藤方美香
(整理作業)
岩貞泰代・白木由里・楠瀬憲子・小松経子・竹村延子・中西純子・西内宏美・松木富子・宮本幸子・矢野雅・山本裕美子・山本純代

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過及び確認調査	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 確認調査	2
第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	11
第1節 調査の方法	11
1. 調査区の設定	11
2. 調査の方法	12
第2節 調査の概要	12
1. I区の概要及び基本層序	12
2. II区の概要及び基本層序	15
3. III区の概要及び基本層序	19
第Ⅳ章 調査の成果	22
第1節 縄文時代の遺構と遺物	22
1. 遺構	22
2. 遺物	27
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	80
1. I-1区	80
2. I-2区	83
3. I-3区	87
4. I-4・5区	90
5. II-1区	93
6. II-2区	101
7. II-3区	102
8. II-4区	110
9. II-5区	117
10. III-2区	120
11. III-4区	133
第Ⅴ章 考察	151
第1節 栄エ田遺跡出土の縄文時代後期土器について	151
第2節 栄エ田遺跡出土の縄文時代晩期土器について	154
第3節 栄エ田遺跡の位置付け～調査のまとめ～	158
第Ⅵ章 付編 栄エ田遺跡の動物遺存体について	164

挿 図 目 次

Fig. 1	試掘トレンチ位置図	2
Fig. 2	栄エ田遺跡周辺の地形	4
Fig. 3	栄エ田遺跡位置図	5
Fig. 4	高知県南国市（行政区画）	6
Fig. 5	栄エ田遺跡周辺の遺跡（S = 1 / 50,000）	8
Fig. 6	栄エ田遺跡調査区位置図	11
Fig. 7	I区調査区全体図	12
Fig. 8	I-1～3 調査区セクション	14
Fig. 9	I-4・5 調査区セクション	15
Fig. 10	II区調査区全体図	16
Fig. 11	II-1・2 調査区セクション	17
Fig. 12	II-3～5 調査区セクション	18
Fig. 13	III区調査区全体図	19
Fig. 14	III-2・4 調査区セクション	21
Fig. 15	III-2区グリッド位置図	22
Fig. 16	SR-1 平面図及び堆積状況	23
Fig. 17	縄文時代遺構平面・エレベーション（P-1～10・SK-1・2）	25
Fig. 18	III-2区バンク及びトレンチ位置図	26
Fig. 19	縄文土器（前期・中期）	27
Fig. 20	III-2区J-I層縄文土器出土状況	28
Fig. 21	縄文土器後期1（後期初頭-1類）	30
Fig. 22	縄文土器後期2（後期前半-2類）	31
Fig. 23	縄文土器後期3（後期前半-3類）	31
Fig. 24	縄文土器後期4（後期前半-4類）	32
Fig. 25	縄文土器後期5（後期中葉-5類）	32
Fig. 26	縄文土器後期6（後期中葉-6類1）	33
Fig. 27	縄文土器後期7（後期中葉-6類2）	34
Fig. 28	縄文土器後期8（後期中葉-7類）	35
Fig. 29	縄文土器後期9（後期後半-8類）	35
Fig. 30	縄文土器後期10（その他）	35
Fig. 31	縄文土器後期11（I-2区 出土遺物）	35
Fig. 32	縄文土器後期12（深鉢）	36
Fig. 33	縄文土器晩期1（晩期浅鉢1～3類）	38
Fig. 34	縄文土器晩期2（晩期浅鉢3類）	39

Fig. 35	縄文土器晩期 3 (晩期浅鉢4類)	40
Fig. 36	縄文土器晩期 4 (晩期浅鉢5類)	41
Fig. 37	縄文土器晩期 5 (晩期深鉢1類)	42
Fig. 38	縄文土器晩期 6 (晩期深鉢2類)	43
Fig. 39	縄文土器粗製深鉢 1 (1類 a)	45
Fig. 40	縄文土器粗製深鉢 2 (1類 a ~ c)	46
Fig. 41	縄文土器粗製深鉢 3 (1類 c)	47
Fig. 42	縄文土器粗製深鉢 4 (2類 a)	48
Fig. 43	縄文土器粗製深鉢 5 (2類 a・b)	49
Fig. 44	縄文土器粗製深鉢 6 (2類 b・c)	50
Fig. 45	縄文土器底部 1 (Ⅲ-2区)	51
Fig. 46	縄文土器底部 2 (Ⅲ-2・4区)	52
Fig. 47	Ⅲ-2区 J-I~Ⅲ層遺物出土状況 (石器・骨片・炭化物)	64
Fig. 48	出土遺物・石器 (縄文) 1	65
Fig. 49	出土遺物・石器 (縄文) 2	66
Fig. 50	出土遺物・石器 (縄文) 3	67
Fig. 51	出土遺物・石器 (縄文) 4	68
Fig. 52	出土遺物・石器 (縄文) 5	69
Fig. 53	出土遺物・石器 (縄文) 6	70
Fig. 54	出土遺物・石器 (縄文) 7	71
Fig. 55	出土遺物・石器 (縄文) 8	72
Fig. 56	出土遺物・石器 (縄文) 9	73
Fig. 57	出土遺物・石器 (縄文) 10	74
Fig. 58	出土遺物・石器 (縄文) 11	75
Fig. 59	出土遺物・石器 (縄文) 12	76
Fig. 60	出土遺物・石器 (縄文) 13	77
Fig. 61	I-1区遺構平面全体図	80
Fig. 62	I-1区 SD 1~4 平面図	81
Fig. 63	I-1区出土遺物	82
Fig. 64	I-2区遺構平面全体図	83
Fig. 65	I-2区出土遺物 (V層)	84
Fig. 66	I-2区出土遺物 (V層・試掘 TR 16・Ⅲ層)	85
Fig. 67	I-2区出土遺物 (石器)	86
Fig. 68	I-3区遺構平面全体図	87
Fig. 69	SD-8 平面・断面図及び出土遺物	88
Fig. 70	I-3区出土遺物 (Ⅲ層・TR15)	89

Fig. 71	I - 4 区遺構平面全体図	90
Fig. 72	I - 5 区遺構平面全体図	90
Fig. 73	SD-9~12 平面図	91
Fig. 74	I - 4・5 区 出土遺物	92
Fig. 75	II - 1 区遺構平面全体図	93
Fig. 76	SD-13平面図	94
Fig. 77	II - 1 区出土遺物 1 (SR-3)	95
Fig. 78	II - 1 区出土遺物 2 (SD-13)	96
Fig. 79	II - 1 区出土遺物 3 (SD-13・14)	97
Fig. 80	II - 1 区出土遺物 4 (SD-14)	98
Fig. 81	II - 1 区出土遺物 5 (SD-14・SR-3 石器)	99
Fig. 82	II - 1 区出土遺物 6 (SR-3 石器)	100
Fig. 83	II - 2 区遺構平面全体図	101
Fig. 84	II - 2 区出土遺物	102
Fig. 85	II - 3 区遺構平面全体図	103
Fig. 86	SD-17・18平面図	105
Fig. 87	SD-19平面図	105
Fig. 88	SD-20平面図	105
Fig. 89	II - 3 区出土遺物 1	106
Fig. 90	II - 3 区出土遺物 2	107
Fig. 91	II - 3 区出土遺物 3	108
Fig. 92	II - 3 区出土遺物 4 (石器)	109
Fig. 93	II - 4 区遺構平面全体図	110
Fig. 94	SD-21平面図	111
Fig. 95	SD-22・23平面図	112
Fig. 96	SA-1 平面図	112
Fig. 97	SB-1 平面図	112
Fig. 98	II - 4 区出土遺物 1 (試掘 TR 8・9、遺構出土遺物)	113
Fig. 99	II - 4 区出土遺物 2 (包含層)	114
Fig. 100	II - 4 区出土遺物 3 (包含層)	115
Fig. 101	II - 4 区出土遺物 4 (包含層・石器)	116
Fig. 102	II - 5 区遺構平面全体図	117
Fig. 103	SD-25平面図	118
Fig. 104	SK-7・8 平面図	118
Fig. 105	II - 5 区出土遺物	119
Fig. 106	III - 2 区弥生時代以降の遺構全体図及び SK-11・12 遺物出土状況	121

Fig. 107	SD-29 平面図・セクション図	123
Fig. 108	Ⅲ-2区出土遺物1	124
Fig. 109	Ⅲ-2区出土遺物2	125
Fig. 110	Ⅲ-2区出土遺物3	126
Fig. 111	Ⅲ-2区出土遺物4	127
Fig. 112	Ⅲ-2区出土遺物5	128
Fig. 113	Ⅲ-2区出土遺物6	129
Fig. 114	Ⅲ-2区出土遺物7	130
Fig. 115	Ⅲ-2区出土遺物8	131
Fig. 116	Ⅲ-2区出土遺物9	132
Fig. 117	Ⅲ-4区遺構平面全体図	133
Fig. 118	Ⅲ-4区出土遺物1	134
Fig. 119	Ⅲ-4区出土遺物2	135
Fig. 120	栄工田遺跡出土の縄文後期土器（1類～8類）	153
Fig. 121	栄工田遺跡出土の縄文晩期土器	155

表 目 次

Tab. 1	試掘トレンチの概要	3
Tab. 2	栄エ田遺跡周辺の遺跡地名表	7
Tab. 3	Ⅲ-2区層別出土遺物（縄文土器）	29
Tab. 4	縄文土器観察表(1)	53
Tab. 5	縄文土器観察表(2)	54
Tab. 6	縄文土器観察表(3)	55
Tab. 7	縄文土器観察表(4)	56
Tab. 8	縄文土器観察表(5)	57
Tab. 9	縄文土器観察表(6)	58
Tab. 10	縄文土器観察表(7)	59
Tab. 11	縄文土器観察表(8)	60
Tab. 12	縄文土器観察表(9)	61
Tab. 13	縄文土器観察表(10)	62
Tab. 14	石器（縄文時代）観察表(1)	78
Tab. 15	石器（縄文時代）観察表(2)	79
Tab. 16	遺物観察表（弥生時代以降）(1)	136
Tab. 17	遺物観察表（弥生時代以降）(2)	137
Tab. 18	遺物観察表（弥生時代以降）(3)	138
Tab. 19	遺物観察表（弥生時代以降）(4)	139
Tab. 20	遺物観察表（弥生時代以降）(5)	140
Tab. 21	遺物観察表（弥生時代以降）(6)	141
Tab. 22	遺物観察表（弥生時代以降）(7)	142
Tab. 23	遺物観察表（弥生時代以降）(8)	143
Tab. 24	遺物観察表（弥生時代以降）(9)	144
Tab. 25	遺物観察表（弥生時代以降）(10)	145
Tab. 26	遺物観察表（弥生時代以降）(11)	146
Tab. 27	遺物観察表（弥生時代以降）(12)	147
Tab. 28	遺物観察表（弥生時代以降）(13)	148
Tab. 29	遺物観察表（弥生時代以降）石器	149

写真図版目次

- PL 1 調査前の栄エ田遺跡（Ⅰ区からⅡ区方向をのぞむ）
Ⅰ－１区 完掘状況
- PL 2 Ⅰ－２区 完掘状況
Ⅰ－２区 遺物出土状況（弥生前期末）
- PL 3 Ⅰ－３区 完掘状況
Ⅰ－３区 南端堆積状況
- PL 4 Ⅰ－３区 SD 8 遺物出土状況
Ⅰ区全景
- PL 5 Ⅱ－１区 完掘状況
Ⅱ－Ⅰ区 SD-13・14
- PL 6 Ⅱ－２区 全景
Ⅱ－３区 遺構検出状況
- PL 7 Ⅱ－３区 遺構完掘状況（SD-17・18）
Ⅱ－３区より，西方Ⅲ区方向をのぞむ
- PL 8 Ⅱ－４区 遺構検出状況
Ⅱ－４区 SA-1，SB-1
- PL 9 Ⅱ－４区 遺構完掘状況（西から）
Ⅱ－４区 遺構完掘状況（東から）
- PL 10 Ⅱ－５区 遺構完掘状況（西から）
Ⅱ－５区 遺構完掘状況（東から）
- PL 11 Ⅲ－２区 調査前風景
Ⅲ－２区 表土除去後，調査区全景
- PL 12 Ⅲ－２区 中央バンク南壁，推積状況
Ⅲ－２区 縄文時代遺構（J-Ⅱ層上面）
- PL 13 Ⅲ－２区 J-I層遺物出土状況
Ⅲ－２区 SR-1（J-V層）礫出土状況
- PL 14 Ⅲ－２区 SR-1
Ⅲ－４区 調査区北西方向をのぞむ
- PL 15 調査に参加した人々（Ⅲ区）
調査に参加した人々（Ⅰ区）
- PL 16 Ⅰ～Ⅱ区 遺物出土状況
- PL 17 Ⅲ－２区 遺物出土状況（縄文土器）
- PL 18 Ⅲ－２区 遺物出土状況（石器及びSK12）
- PL 19 作業風景

- PL 20 縄文前期・中期土器
縄文後期土器（後期1類）
- PL 21 縄文後期土器（後期1類）外面
縄文後期土器（後期1類）内面
- PL 22 縄文後期土器（後期2類）外面
縄文後期土器（後期2類）内面
- PL 23 縄文後期土器（後期3・5類）外面
縄文後期土器（後期3・5類）内面
- PL 24 縄文後期土器（後期4類）
縄文後期土器（後期粗製深鉢）
- PL 25 縄文後期土器（後期6類）①外面
縄文後期土器（後期6類）①内面
- PL 26 縄文後期土器（後期6類）②外面
縄文後期土器（後期6類）②内面
- PL 27 縄文後期土器（後期6類）③外面
縄文後期土器（後期6類）③内面
- PL 28 縄文後期土器（後期7・8類，その他）外面
縄文後期土器（後期7・8類，その他）内面
- PL 29 縄文後期土器（後期粗製深鉢）外面
縄文後期土器（後期粗製深鉢）内面
- PL 30 縄文晩期土器（晩期浅鉢1・2類）外面
縄文晩期土器（晩期浅鉢1・2類）内面
- PL 31 縄文晩期土器（晩期浅鉢3類）外面
縄文晩期土器（晩期浅鉢3類）内面
- PL 32 縄文晩期土器（晩期浅鉢4類）外面
縄文晩期土器（晩期浅鉢4類）内面
- PL 33 縄文晩期土器（晩期浅鉢5類）外面
縄文晩期土器（晩期浅鉢5類）内面
- PL 34 縄文晩期土器（晩期深鉢1類）外面
縄文晩期土器（晩期深鉢1類）内面
- PL 35 縄文晩期土器（晩期深鉢2類）外面
縄文晩期土器（晩期深鉢2類）内面
- PL 36 縄文土器（粗製深鉢）
縄文土器（粗製深鉢）
- PL 37 縄文土器（粗製深鉢）
縄文土器（粗製深鉢）

- PL 38 縄文土器 (粗製深鉢)
縄文土器 (底部)
- PL 39 縄文土器 (底部) 外面
縄文土器 (底部) 内面
- PL 40 石器 (縄文時代) 石鏃, 石錘, 磨製石斧, スクレイパー類 (表面)
石器 (縄文時代) 石鏃, 石錘, 磨製石斧, スクレイパー類 (裏面)
- PL 41 石器 (縄文時代) 叩き石類 (表面)
石器 (縄文時代) 叩き石類 (裏面)
- PL 42 石器 (縄文時代) 磨製石斧 背面
- PL 43 石器 (縄文時代) 磨製石斧 腹面
- PL 44 I-1・2区出土遺物
- PL 45 I-3, II-3区出土遺物
- PL 46 I-1・3, II-1・3区出土遺物
- PL 47 II-3, II-4区出土遺物
- PL 48 II-4・5, III-2区出土遺物
- PL 49 III-2区出土遺物
- PL 50 III-2区出土遺物 (SD-29)
- PL 51 III-2区出土遺物 (SD-29)
- PL 52 III-2区出土遺物 (SD-29)
- PL 53 III-2区出土遺物 (SD-29)
- PL 54 III-4区出土遺物

第 I 章 調査に至る経過及び確認調査

第 1 節 調査に至る経過

昭和62年の南国～大豊間、平成4年の大豊～川之江間開通以来、四国横断自動車道が高知県に与えた影響には計り知れないものがある。高速かつ大量輸送手段として、期待されていた以上の経済効果をもたらし、瀬戸大橋（本州四国架橋）の開通とも相乗効果を生み出した。四国内の他都市のみならず、岡山をはじめとする中国圏、近畿圏との時間距離の短縮には目を見張るものがある。

この四国横断自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査であるが、高知県では現在までに2冊報告書が刊行されている。『銅古屋岩陰遺跡調査報告書』（1983年）¹⁾と『口ミノヲ谷古墳』（1984年）²⁾である。南国～大豊間は山岳部分がほとんどで、昭和51年に行われた分布調査で確認された遺跡数も25遺跡と比較的少ない。³⁾ところが、南国インター以西は、山麓部を通ることもあって遺跡数が多く、昭和48年の分布調査の段階で高速道路予定地及びその周辺に124遺跡、⁴⁾その後新たに確認される遺跡が相次いでいる。

四国横断自動車道は、南国インター以西須崎～南国間の平成9年開通を目指し、現在急ピッチで設計協議・建設工事が進行中である。埋蔵文化財発掘調査もこれに伴って急増し、平成4年度の栄エ田遺跡試掘調査を皮切りに、5年度7件（試掘・本掘）・6年度6件（本掘・整理）と高知県の発掘調査全体に占める割合も大きくなっている。

今回の調査は、日本道路公団高松建設局高知工事事務所による、四国横断自動車道南国地区定林寺工事用道路建設に伴うものである。定林地区は、一帯に縄文～近世の各時期の遺物が散布しており、周辺は遺跡の密集地として知られている。特に栄エ田遺跡は、過去の発掘調査（1982年、ビニールハウス建設に伴う調査）でも縄文後期・晩期の土器が出土しており、高知平野で初めてまとまった縄文土器が出土した遺跡として有名である。⁵⁾この道路建設予定地が遺跡の対象範囲と重なるため、平成4年度、遺跡の内容・性格・範囲等の基礎資料を得るための確認調査を実施した。その結果、道路工事予定地全域約2,000㎡の範囲に縄文～近世の遺構・遺物が遺存していることが判明した。

確認調査の結果に基づいて協議の結果、栄エ田遺跡の本発掘調査実施を決定、日本道路公団高松建設局高知工事事務所と高知県文化財団埋蔵文化財センターの両者が、平成5年4月1日付けで委託契約を締結した。調査は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが受託・実施した。発掘調査期間は平成5年5月17日から12月6日までであり、発掘調査面積は約2,400㎡である。

註 1) 森田尚宏 「銅古屋岩陰遺跡調査報告書」 日本道路公団・高知県教育委員会 1983年
2) 森田尚宏 「口ミノヲ谷古墳」 日本道路公団・高知県教育委員会 1984年
3) 「埋蔵文化財分布調査報告書―四国横断自動車道開設に伴う―」 高知県教育委員会 1977年
4) 「埋蔵文化財分布調査報告書―四国横断自動車道開設に伴う―」 高知県教育委員会 1973年
5) 南国市教育委員会による調査・報告書は未刊だが、岡本健児氏らによってその内容が紹介されている。
岡本健児 「栄エ田遺跡」『日本の古代遺跡39 高知』 保育社 1989年

第2節 確認調査

昭和57年のビニールハウス建設に伴う緊急調査の折、縄文土器がまとまって出土したこと、調査区全域から縄文～近世にいたる遺物が散布することから、遺跡地の広がり予想されていた。遺跡深度・遺構の広がり確かめるため、平成5年2月17日から3月29日にかけて確認調査を実施した。全域に2m×5mを基本とするトレンチを20ヶ所設定、パワーショベル及び人力により表土を除去した後、人力による遺構検出作業を行った。

設定したトレンチの位置は（Fig. 1）のとおりである。調査区全域に設定した20ヶ所のトレンチのすべてから遺物が出土しており、ほとんどのトレンチから遺構も検出されている。今回の道路建設予定区間全域について発掘調査の必要が生じた。トレンチのうちTR6からは、自然流路の一部が検出され弥生～古代にかけての遺物が確認されたのだが、図示し得る遺物はなく、確認調査の成果をもって調査を終了した。それ以外の地点については翌年度に本発掘調査を実施している。

確認調査で出土した遺物は、本報告書の中でその詳細について実測図とともに触れることとし、ここでは概略について述べるにとどめる。

全域にわたる確認調査の結果、遺跡の内容について何点かの貴重な知見が得られた。従来は縄文の遺物が出土し（緊急発掘調査による）、全域に弥生～近世にわたる広範な時期の遺物が散布していると認識されていた当遺跡について、①縄文遺物集中地点が2ヶ所あり、特に遺跡北西端（TR4を中心とする）には後期～晩期に至る良好な包含層が残されている。②何方所かのトレンチから弥生前期末の土器が出土している。③遺物の量が最も多くなるのは弥生後期後半から古墳時代の初頭にかけての時期で、調査区全域に当該期の遺物が集中する溝が分布しており、集落の存在が予想

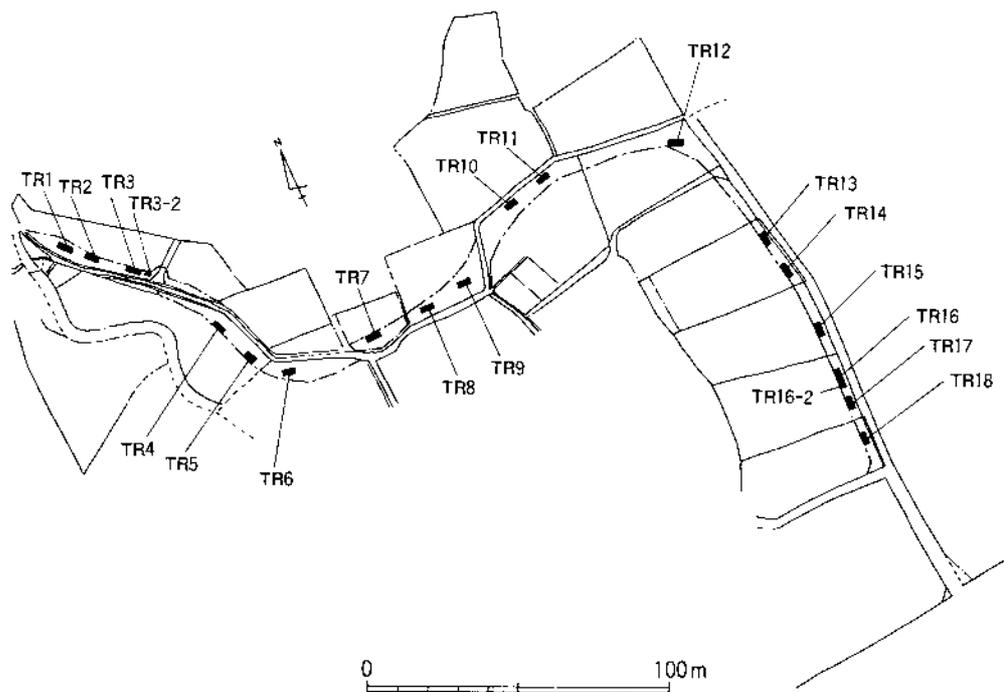


Fig. 1 試掘トレンチ位置図

Tab. 1 試掘トレンチの概要

試掘トレンチ	面積	検出遺構	出土遺物（時期）
TR1	10m ²	自然流路	古代～中世
TR2	〃	〃	縄文・弥生・古代
TR 3	〃	〃・溝	縄文～中世
TR3-2	〃	〃	〃
TR4	〃	溝・集石・土坑	縄文（後期・晩期）・古代
TR5	〃	自然流路	縄文～古代
TR6	〃	〃	細片のみ
TR7	〃	溝・柱穴	中世
TR8	〃	溝・柱穴・土坑	弥生～中世
TR9	〃	溝・柱穴	〃
TR10	〃	自然流路	弥生～古代
TR11	〃	溝・土坑	弥生～古墳・中世
TR12	〃	自然流路	弥生・古代
TR13	〃	柱穴	古代・近世
TR14	〃	〃	弥生・古代
TR15	〃	柱穴・土坑	弥生～中世
TR16	〃	自然流路	縄文～中世
TR16-2	〃	〃	〃
TR17	〃	〃	弥生～中世
TR18	〃	柱穴	弥生
合計	200m ²	自然流路・溝・柱穴・土坑	縄文～近世

される。④13世紀後半の龍泉窯青磁が数点出土、同時期の遺構も確認された。-など定林寺地区の歴史解明の手がかりとなる貴重な資料がそろった。量的に少ないが、①～④以外の時期の遺物も確認されている。Fig. 1 及び Tab. 1 に成果を簡単にまとめたが、遺跡の時期ごとの広がりについては、ある程度の予測が立つ。従来、縄文期の遺跡として知られていた栄工田遺跡だが、確認調査の結果を経て縄文期のみならず、弥生以降近世に至るまで、良好な遺構遺物の検出される遺跡として、一躍注目されるに至った。

特に弥生末～古墳時代初頭にかけての遺物は、他時期を圧倒する量出土しており、栄工田遺跡周辺は当該期に人口がピークに達する集落が展開していたと考えられる。

縄文時代についても、調査区南東端（昭和57年調査地点近辺）からはほとんど出土せず、遺跡地の北西から縄文後晩期の遺物がまとまって検出される地点があることが判明した。

なお、試掘調査で出土した資料については本報告書中においてまとめて記載する。

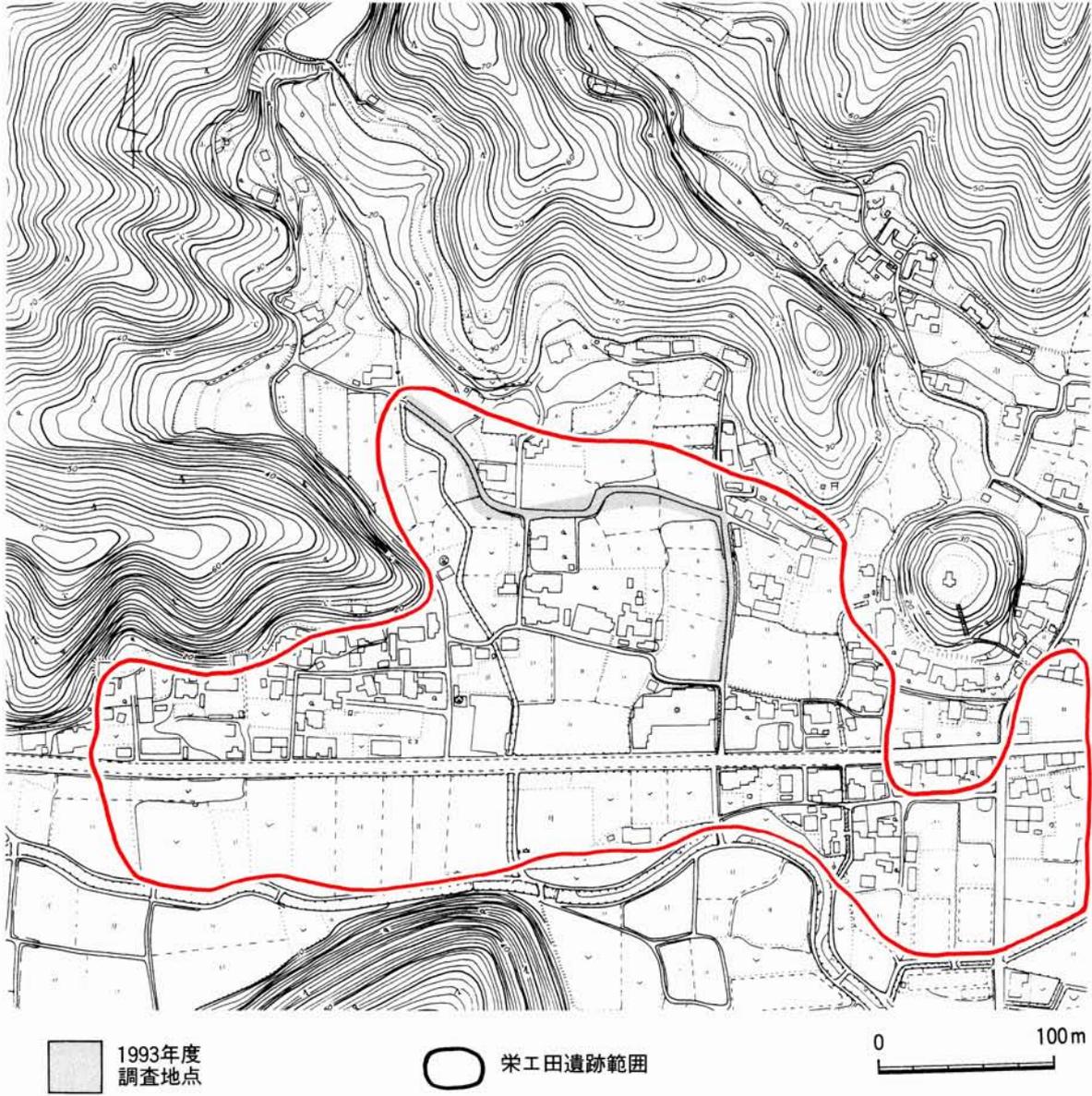


Fig. 2 栄工田遺跡周辺の地形

第Ⅱ章 遺跡周辺の地理的歴史的環境

第1節 地理的環境

栄工田遺跡の所在する南国市は、高知平野の中央部、高知市の東隣に位置する人口約4万5千人の自治体である。南北25km、東西8kmの南北に細長い地形的特徴を持つ市で、南は太平洋に面し北は四国山地に連なる北部山地へと続く。高知市の近郊として最近徐々に人口が増加しつつあるが、元来農村的色彩の強い町村が合併して出来た市であり、有する人口と比べ都市・中心地機能は弱く、合併前の町村が各々独自性を主張している。南国市で唯一市街地を形成する後免町は近世の新田開発に伴って成立した町で、昭和30年代にトラック輸送が中心になるまでは、河川交通による物資の集散地であり、街中に水路が張り巡らされた様から「土佐のベニス」と称されていた。近年、後免町を中心に都市化が進んだが、西隣の土佐山田町などと比較すると市街地は小さく、都市機能は高知市に依存する部分が多い。¹⁾

南国市の海岸線は物部川河口から浦戸湾に至る砂丘地帯を形成、砂丘及びその後背地は、施設園芸地帯となっている。砂丘自体の持つ温暖性と先人の努力により、春野町とともに高知県でも最も古くから野菜の促成栽培が盛んに行われた園芸農業先進地の一つである。明治の末に始まった促成栽培は、大正期には油紙を、昭和20年代にはビニールを利用したものとなり、さらには重油による火力加温の施設園芸農業へと変化していく。火力加温を最初に始めたのは南国市十市地区だとされるが、この火力加温によってどこでも促成栽培が可能となったことにより、砂丘の優位性が崩れ、園芸農業が急速に内陸部へと広がっていくのである。

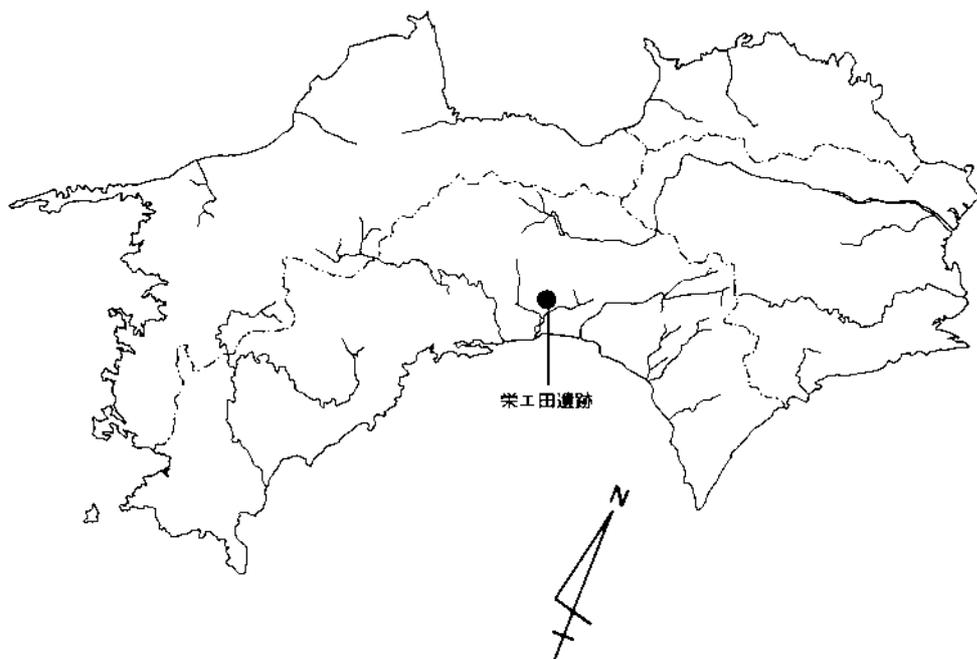


Fig. 3 栄工田遺跡位置図

海岸部の北側には高知平野東半部を構成する香長平野が広がり一大穀倉地帯を形成する。香長平野は物部川を中心に国分川・下田川などの河川によってつくられた沖積平野で、ほぼ全域に水田が分布している。温暖な気候を利用した日本でも有数の早場米地帯の一つである。7月後半～8月前半にかけて稲の刈り取り作業が平野のあちこちで繰り広げられ、炎天下で同時に田植えが行われる。県内各地から働きに来た人々が、そこかしこの水田で忙しく動き回る。このような米の二期作の光景も、現在では全く見られなくなってしまった。高知の二期作は昭和10年代を最盛期として、農村の労働力の減少・米と園芸作物との商品価値の差を主な原因として衰退

の一途をたどった。日本の二期作の北限はここ香長平野、南国市である。北限ではあるが、県内で最も盛んな地域であり、昭和40年代においても水田面積の三分の一では二期作の作付を行っていた。しかし、昭和50年には最盛期の作付面積の9%（360ha）となり、一貫性のない政府の減反政策の影響もあって、今は二期作自体がなくなってしまった。

この平野の北部には長岡台地が展開する。長岡台地は標高15m～50mの東西に細長く（幅2km長さ8km）舌状に延びた古期扇状地である。長岡台地の周縁部は弥生時代以降、開発が進み集落も営まれたが（東崎遺跡など）、台地上は水の便が悪く、開発が進んだのは近世になってから、台地上に舟入川が建設され水路としての機能を果たし始めてからのことである。平野部は長岡台地の北側、南国市北方山地が平野部に没する山麓部に至るまで続いている。北方山地には領石帯、白木谷層群を含み、石灰石の産出量では県内でも有数の白木谷鉾山がある。

栄エ田遺跡周辺は地質上でみれば黒瀬川構造帯に属し、蛇紋岩帯を含んでいる。遺跡南東に位置する岡豊山には石器原料となる蛇紋岩の露頭が知られている。南側を比江山断層線、北側には領石層、遺跡周辺は黒瀬川帯、それ故、遺跡地周辺は地山が蛇紋岩風化土層であり、谷筋に流れ込む岩石にはチャートが多く観察される。

遺跡のある岡豊町定林寺地区は南国市の平野部北端に位置し、南に蒲原山、南東に岡豊山、北に南国市北部山塊を控え、南を流れる国分川の支流・山崎川の扇状地上に遺跡地が形成される。南東に伸びる尾根及びに南側の山塊に囲まれるという地形的特徴により、古来温暖で住むのには適した土地であった。温暖な気候と高知空港に近いという特性を生かして、現在では花卉の栽培やトマトを中心とする園芸作物の栽培も盛んな地域である。遺跡の南東約1kmの地点に長宗我部氏の居城岡豊城が、約5kmの地点に土佐国衙跡がある。弥生以降の遺跡も多く、特に中世においては土佐の中心として栄えた地域であるが、長宗我部氏が岡豊城から浦戸城へと城下町の経営を移した後は静かな農村地帯としてのたたずまいをみせ、現在に至る。

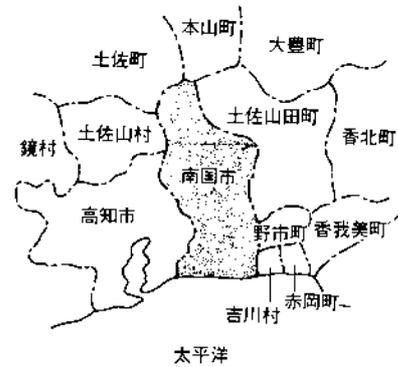


Fig. 4 高知県南国市(行政区画)

第2節 歴史的環境

栄工田遺跡周辺は、高知平野の中でも遺跡密度が高い地点である。地理的環境でも述べたように、当遺跡は南国市の北方山地が平野部に没する山麓部に位置し、比江山断層線の北側、ペルム期に形成された地層上にある。この平野部と山麓部の境界は、丘陵上に古墳後期の群集墳、平野部には集落遺跡など遺跡がいたるところで確認され、弥生以降には高度な土地利用がなされていたことが分かっている。微視的には、この「南国市北部、平野と山麓の境界」について理解すればよいのだが、遺跡のおかれた位置づけを知るために、高知平野東半部・香長平野の状況について簡単にまとめておく。

高知平野で最古の人の生活の痕跡は、旧石器時代最終末（約12,000年前）高知市高間原古墳出土の細石核（マイクロ・コア）である。残念ながら、当時（旧石器時代）の遺跡に伴うものではなく遺物のみが確認されたものだが、旧石器時代の遺物は高知平野周辺ではこの遺物だけである。周辺に旧石器の遺跡の存在が予想されており、今後調査例の増加に伴い発見される可能性は高い。

Tab. 2 栄工田遺跡周辺の遺跡地名表

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	栄工田遺跡	縄文～近世	24	清山遺跡	弥生～中世	47	三島遺跡	弥生～近世
2	滝本遺跡	古墳～近世	25	山崎遺跡	古墳	48	三添遺跡	中世
3	芝の前1号墳	古墳	26	阿豊城跡	中世	49	小籠土居城跡	弥生～近世
4	芝の前2号墳	古墳	27	国領遺跡	弥生～中世	50	小籠遺跡	古墳
5	芝の前3号墳	古墳	28	上岡越遺跡	奈良～平安	51	越戸1号墳	古墳
6	長畝1号墳	古墳	29	ハザマダ遺跡	古墳～平安	52	越戸2号墳	古墳
7	長畝2号墳	古墳	30	口ミノヲ谷古墳	古墳	53	坂折山1・2号墳	古墳
8	長畝3号墳	古墳	31	半月古墳	古墳	54	年越山1号墳	古墳
9	野津古墳	古墳	32	笹原古墳	古墳	55	年越山2号墳	古墳
10	大島遺跡	古墳	33	新城城跡	中世	56	年越山3号墳	古墳
11	千頭屋敷遺跡	中世	34	舟岩古墳群	古墳	57	野中庵寺跡	平安
12	小野古城跡	中世	35	市場遺跡	中世	58	忠兵衛遺跡	中世
13	奥谷北遺跡	縄文	36	吉田土居城跡	中世	59	若宮ノ東遺跡	弥生～中世
14	奥谷南遺跡	縄文	37	吉田遺跡	古墳～中世	60	北泉遺跡	弥生～平安
15	宮ノ前遺跡	弥生～平安	38	国分寺遺跡群	古墳～近世	61	大篠遺跡	弥生
16	小山田遺跡	弥生～中世	39	上佐国分寺跡	弥生～中世	62	東崎遺跡	弥生～中世
17	石谷土居城跡	中世	40	比江山城跡	中世	63	高天原古墳群	旧石器・古墳
18	天神の前遺跡	縄文・古墳	41	比江庵寺跡	白鳳・奈良	64	中島町田遺跡	古墳～平安
19	蒲原山古墳	古墳	42	土佐国府跡	弥生～中世	65	カヲツ池遺跡	中世
20	木ノ下遺跡	弥生・古墳	43	後藤丸遺跡	弥生～近世	66	明見彦山1～3号墳	古墳
21	土居ノ前遺跡	弥生・古墳	44	遍路石南遺跡	平安・中世	67	吾岡山古墳	古墳
22	蒲原屋敷遺跡	中世	45	土島田遺跡	弥生～平安	68	住吉山1～4号墳	古墳
23	薄原山中古墳	古墳	46	洲の上	弥生～平安	69	介良遺跡	弥生～中世



Fig. 5 栄工田遺跡周辺の遺跡 (S = 1/50,000)

縄文時代に入っても、県西部と比べると遺跡数は極端に少ない。地形の関係もあるが最大の要因は遺跡深度にある。近年の大規模調査とともに沖積平野の表土下数mの地点から確認される縄文期の遺跡例（高知市柳田遺跡など）が増えつつある。従来、高知平野周辺の縄文時代については断片的な表採資料（磨製石斧出土—南国市奥谷南・奥谷北・国分西熊野神社東裏など）が知られるのみであった。縄文早期の岩陰遺跡である土佐山田町飼古屋岩陰、物部川河岸段丘上に形成された香北町美良布遺跡（後期・晩期）・土佐山田町林田シタノジ遺跡（後期・晩期）、仁淀川下流の春野町西分増井遺跡（後期）、鏡川の沖積平野に形成された高知市柳田遺跡（後期・晩期）など近年の発掘調査によって徐々に縄文時代の状況が明らかになりつつある。物部川下流の田村遺跡群からも

後期の包含層が確認されている。吉野川上流域本山町松ノ木遺跡の発掘などもあり、高知県中央部の後期についてはある程度資料もまとまってきたが、中期以前、晩期の高知平野の状況は全くわからないといっても過言ではない。

縄文から弥生への移行期、高知平野は非常に興味深い状況を示す。南国市田村遺跡群からは、弥生前期初頭の村が検出されている。縄文晩期土器を伴わない最古の遠賀川式土器が確認された遺跡の一つとして注目される。ただ、弥生時代前夜、縄文晩期突帯文土器期の高知平野の様相は、ほとんど判っておらず、今後まとまった資料の出土が期待されている。田村遺跡群は弥生前期から後期にわたって続く拠点集落と位置付けられる遺跡で、集落は地点を変えつつ連綿と営まれる。高知平野の弥生時代の遺跡は前期末と後期後半の2時期に画期（遺跡数が急増）がある。前期前半の遠賀川式土器が卓越した段階では田村遺跡と春野町西分増井遺跡、仁ノ遺跡の3遺跡しか知られていないが、前期末に至って、南国市大篠小学校校庭遺跡、香我美町下分遠崎遺跡、柳田遺跡など周辺部に新たな集落が形成され、南四国の地域色の濃い土器文化を展開するようになる。2番目の画期、後期後半に至って集落は長岡台地上に進出する。土佐山田町ヒビノキ遺跡、ヒビノキサウジ遺跡、南国市金地遺跡、東崎遺跡など、技術上の制約もあって開発の及んでなかった長岡台地縁辺部に鉄器の普及とともに集落が急増してくる。同時に田村遺跡群では、急速に集落が衰退、その役割を終えるのである。

古墳時代前期・中期の高知平野周辺は集落・古墳ともに実態が分かっていない。弥生末～古墳時代初頭にかけて、急増した南四国中央部の人口もその後急減したのか、遺跡数自体も極めて少なくなる。栄エ田遺跡周辺の遺跡が増加に転じるのは、古墳時代後期になってからである。県下最大の古墳群である舟岩古墳群をはじめ、小蓮古墳群、蒲原山古墳群、長畝古墳群など山地が平野に没する南国市北部一帯の丘陵に古墳群が形成される。平野部に島状に形成される独立丘陵にも高間原古墳群、明見彦山古墳群などことごとく古墳が築造され、南国市北部は当時の土佐・高知平野の中心地の一つといった様相を呈するようになる。ただし、集落という観点から見ると現段階では不明な部分が多く、今後の発掘資料の蓄積が期待される。

古代から中世にかけて当遺跡東方1～5 kmのエリアは、各時期において高知平野の中心となった遺跡を有する地域である。特に比江廃寺跡・土佐国分寺跡・土佐国府跡・岡豊城跡の各遺跡は、各々数次～10数次の発掘調査を経た高知県考古学史においても重要な遺跡であり、全国的にも注目される内容をもっている。当遺跡周辺も当然これらの遺跡の影響下にあったと考えられる。影響を受けつつも、近現代にいたるまでしたたかに生き抜いてきた先人たちの姿がかいま見える。

この定林寺地区に、第2次世界大戦末期、本土決戦に備えて土佐湾沿岸部の上陸阻止を目的にした守備部隊（安芸兵団）が設置された。米軍の上陸に備え、山腹にタコ壺状の穴を掘って備えた守備部隊。将兵は地区でも有力者のもとに本陣と称して宿を構え、それ以外の兵は山麓で野営をしたという。地元の人々も、労働の可能なものはこの穴掘りに狩り出された。戦後50年近くを経た今でも、当時の記憶は鮮明である。山麓部にはあちこちにこの時掘られた穴が口を開けている。今回は、調査予定地内にこの塹壕はなかったが、今後戦時遺跡として調査の対象となる日が来るかもしれない。戦争体験を風化させないためにも、章の最後に付け加えておく。

参考文献

- 『南国市史』 南国市教育委員会 1983年
『日本の地質 8 四国地方』 共立出版 1991年
『田村遺跡群』 第1分冊・3分冊・5分冊 高知県教育委員会 1988年
出原恵三 『松ノ木遺跡Ⅰ』 本山町教育委員会 1992年
出原恵三 『松ノ木遺跡Ⅱ』 本山町教育委員会 1992年
前田光雄 『松ノ木遺跡Ⅲ』 本山町教育委員会 1992年
森田尚宏・藤方正治・吉成承三 『柳田遺跡現地説明会資料』 1993年
山崎正明 『林田シタノヂ遺跡Ⅱ』 土佐山田町教育委員会 1993年
出原恵三 『西分増井遺跡群』 春野町教育委員会 1990年
出原恵三 『比江廃寺跡発掘調査概報』 高知県教育委員会 1991年
廣田佳久 『土佐国衙跡発掘調査第9集』 高知県教育委員会 1989年
森田尚宏・松田直則・岡本桂典 『岡豊城跡1～5次調査』 高知県教育委員会 1990年

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の方法

1. 調査区の設定

工事用道路の幅4～6m、総延長約450mの区間を対象とする発掘調査である。それ故調査区は水田・畑等地形に即して、便宜的にしかも細分して設定することとなった。

まず調査区を道路の走る方向により大きく3つに区分、南東から北西に向かってⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区とした。調査の進行状況に即してⅠ→Ⅲへと順次命名したために試掘調査時とは順番が逆になる。Ⅰ区は遺跡の東端で南北方向に展開する調査区、Ⅱ区は遺跡の中央部を東西方向に横断する調査区、Ⅲ区は遺跡の西端の南北方向の調査区である。これらⅠ～Ⅲの3つの調査区を各々4～5の小区に分け、小区毎に公共座標に即して4mグリッドを設定した。

調査予定地は、前年度まで水田あるいは生姜畑として利用されていた。今回の工事は、定林地区の生活道あるいは農作業用の畦道を利用し、その拡幅によって工事用道路を建設しようとするものである。したがって、設定した調査区はすべて生活道沿いの農地で、利便性が高い。

なおⅢ区のうちⅢ-1・Ⅲ-3の2小区については、設定はしたものの、試掘調査で調査を終了した調査区（Ⅲ-1、TR6）及び図示不可能な小片が若干出土した調査区（Ⅲ-3）であったという理由から、本報告書ではその地点のみを図示するにとどめる。（Fig. 1参照）

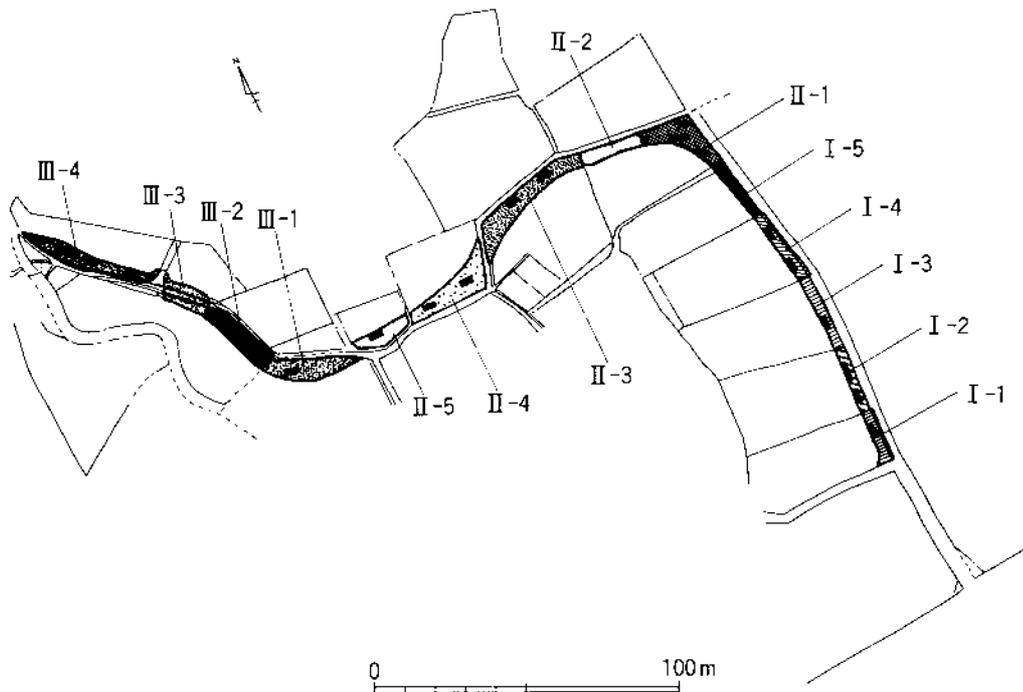


Fig. 6 栄工田遺跡調査区位置図

2. 調査の方法

調査区毎に生い茂った雑草を刈り取った後、確認調査の結果判明している包含層直上まで、重機により土を剥ぎ取る。それから下は人力によって遺構検出した後、遺構の調査を行う。遺構及び出土遺物については、基本的に1/20のスケールで実測した後、標高を測量、土層断面図についても同スケールで実測、記録保存の資料とした。測量は調査対象地全域をカバーする公共座標に基づく4 mグリッドを基準に行う。調査区内におけるグリッドの設定は工事用道路建設用の調査区内付設測量杭を利用、標高についても同様に各小区内へ移設の上、調査に利用した。

第2節 調査の概要

調査区を全体に12の小区に区分して調査を進めたのだが、大別すると3つのまとまりに分けることができ、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの調査区がそれに相当する。Ⅰ区は遺跡地南東に位置し、南北方向に約120mの調査区、Ⅱ区は遺跡中央部を東西方向に横断する約160mの調査区、Ⅲ区は遺跡北西に位置する南北方向約120mの調査区である。小区ごとに遺跡の内容は大きく異なる。ここでは、Ⅰ～Ⅲの調査区の単位ごとに遺跡の内容を大まかにまとめた上で、小区ごとの基本層序についての報告を行う。遺構・遺物についての詳細に関しては後章に記載を譲ることとする。

1. Ⅰ区の概要及び基本層序

(1) 概要

調査対象地の東端に位置するⅠ区は、調査前にはすべて水田として利用されていた。地表面の標高は9～10m、耕作土除去後の地形は東から西方向に向かって若干傾斜した地点が多く、落ち口に包含層を形成、弥生時代から古代にかけての遺物が確認されている。特に弥生後期末の遺物が多く、Ⅰ-2区では弥生後期末に堆積したと想定される良好な包含層（Ⅴ層）も認められた。同層中より弥生前期末の遺物も一定量出土しており、栄エ田遺跡に前期末の段階で集落が進出していた傍証として重要である。

幅3 mの調査区という地形的な制約か住居址あるいは建物跡と特定できる遺構は確認できなかった。Ⅰ区

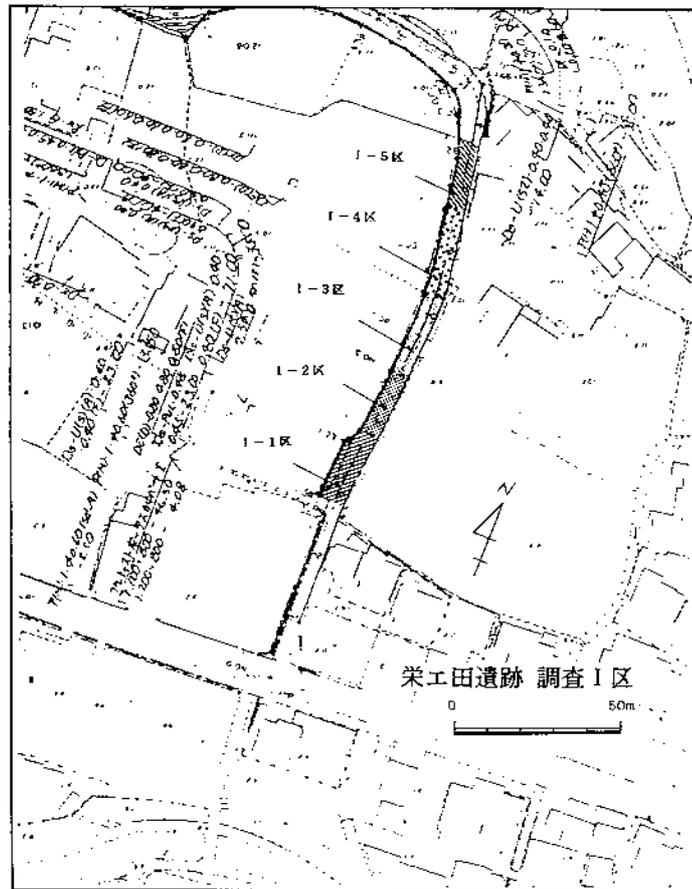


Fig. 7 Ⅰ区調査区全体図

全域で12条の溝状遺構が検出されている。古墳時代前期、高知平野の編年で古式土師器Ⅲ期に相当する遺物が出土したI-3区SD-8など良好な遺構も認められるが、遺構形成の時期の特定できないものも多い。遺物の出土状況から判断して、今回の調査地点の東側一帯の舌状に張り出した微高地に、弥生～中世にかけての集落が広がっており、I区はその集落の縁辺部に位置するものとみられる。

縄文時代

I-2区から、小破片だが縄文後期の土器（北白川上層Ⅲ式併行-中葉）が出土している。昭和57年の調査地点に接する部分であり、遺構の存在なども予想されたのだが、今回は遺物自体もほとんどない状況で調査を終えることとなった。縄文時代の遺物は1点のみである。

弥生時代

前期末・中期末・後期後半の遺物が確認されている。前期末の分村により、栄エ田遺跡周辺に進出した人々は、居住域を移動しながら後期後半にいたって集落の規模を拡大したのか。包含層中から出土する遺物は約1,500点と、後期後半になって急増する。弥生中期の遺物としてI-1区から完形のサヌカイト製石槍が出土している。高地性集落が急増する弥生中期末～後期初頭の高知平野を象徴する遺物である。

古墳時代

古式土師器Ⅱ期の甕・高坏を出土する溝を確認したが、それ以外に遺物は、ほとんど出土していない。

古代

8世紀～9世紀にかけての須恵器が出土しているが、小破片を含めても30点程で、この時期の様相は明確でない。8世紀後半の円面硯が1点出土しており、注目される。

(2) 基本層序

耕作土（灰褐色粘土）→床土（黄褐色土）→旧耕作土（暗褐色粘土）→古代包含層（褐色～暗褐色土）→弥生包含層（黒褐色～黒色土）→地山（蛇紋岩風化土）の堆積状況を示す。地点により若干の差はあるがI区を通じて基本的に同じ堆積状況である。調査区は広義の谷の出口にあたり、侵食を受けた部分の堆積が若干複雑になっているが、基本的には同じような状況を示していると思われる。

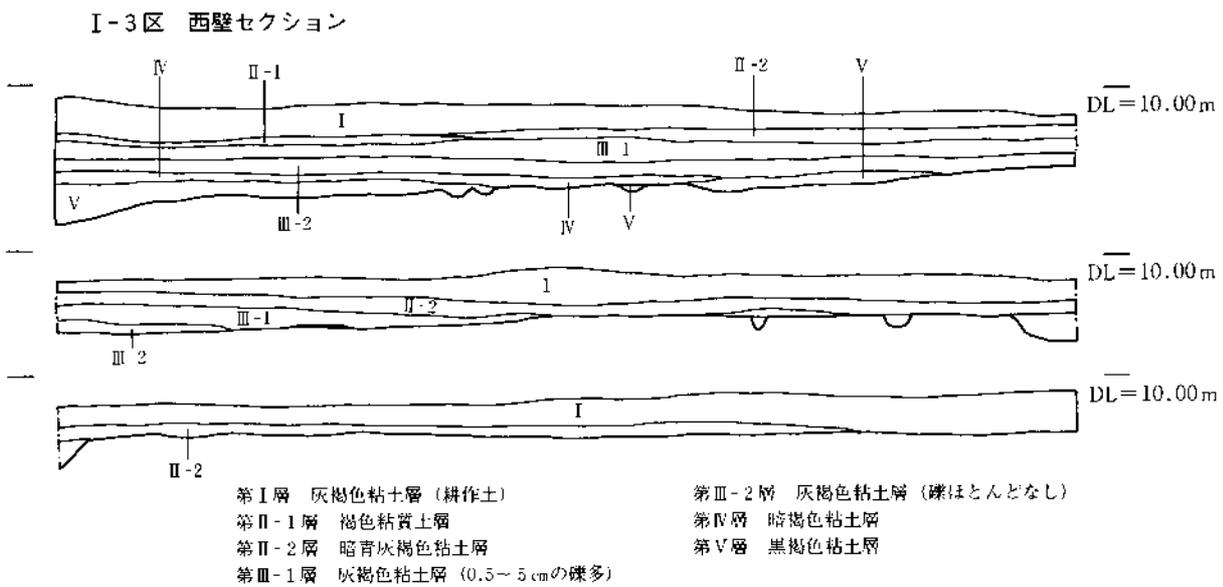
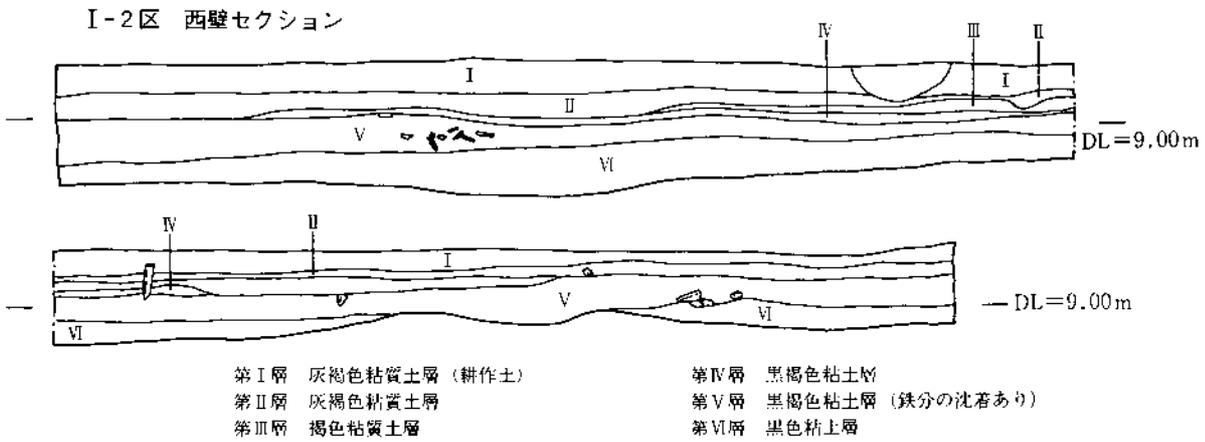
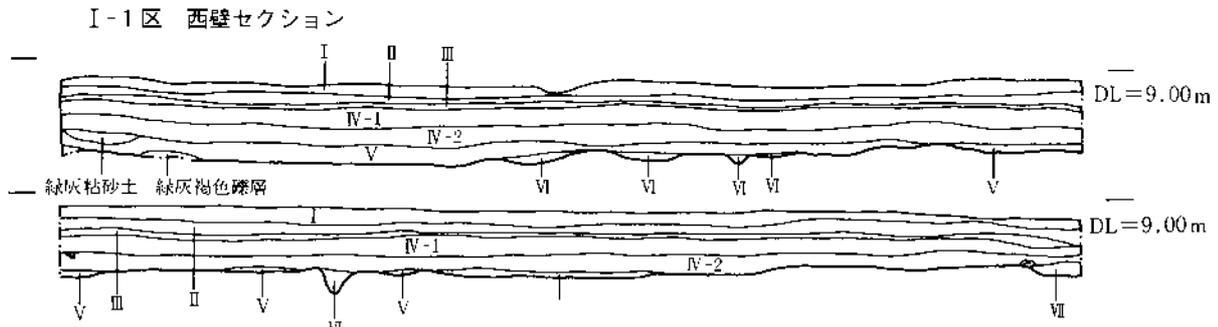


Fig. 8 I-1~3区調査区セクション

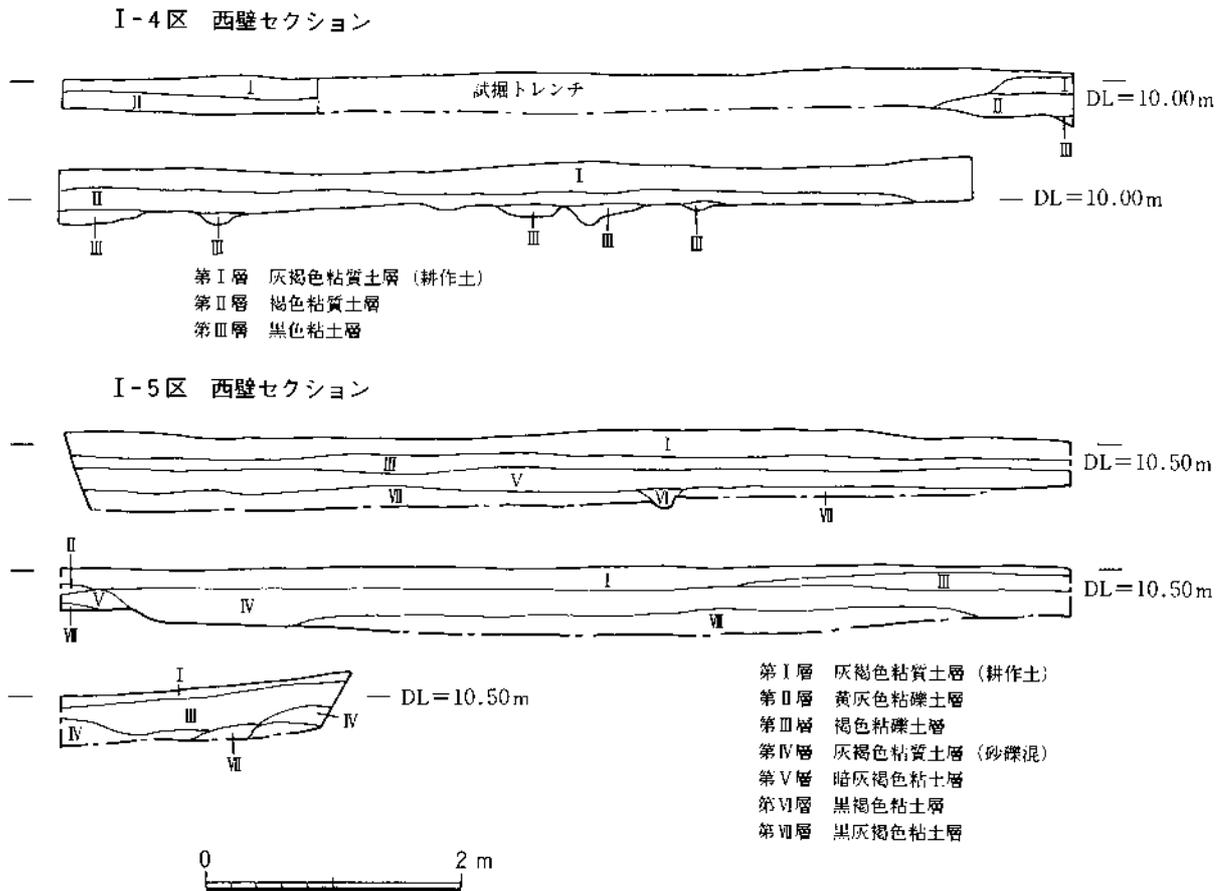


Fig. 9 I-4・5調査区セクション

2. II区の概要及び基本層序

(1) 概要

II区は栄エ田遺跡北端を東西方向に横断する調査区である。東半は標高9~11m前後、西半は標高12~13m前後で、北西方向から南東方向に向かって緩やかに傾斜している。II区の溝状遺構はこの北西→南東あるいは北→南の地形上の傾斜に制約されており、おおむねこの傾斜に沿って流れている。

II-1区は東側谷の最深部にあたり、溝状遺構及び自然流路の痕跡が確認される。II-1~3区の遺構は溝が中心で、住居と断定可能な遺構は認められない。II-4~5区は溝も検出されたが、同時に多数の柱穴・土坑も確認された。古代~近世の何時期かに渡って生活が営まれたものと考えられる。II-4区で晩期縄文土器(晩期終末、刻目突帯文土器)が1点と石斧2点が確認された以外は、弥生~近世の遺物である。調査小区ごとに出土遺物も変化しており、時期ごとの居住領域の移動が予想される。II-5区から鎌倉時代の溝が確認されている。

縄文時代

II-4区から晩期末の刻目突帯文土器小片が1点と磨製石斧が2点確認されている。それ以外の遺物は出土していない。

弥生時代

前期末・中期末～後期初頭・後期後半の遺物が確認された。前期末の遺物は、Ⅱ-4区では弥生前期末の土器がまとまって出土した。(実測遺物22点) 逆し字状口縁の瀬戸内の土器もあり、高知平野の前期末の特徴的な土器組成を示している。Ⅱ-1区のSD-13・14には弥生後期初頭から後期後半にかけての遺物が、Ⅱ-3区のSD17～19には弥生後期後半～古墳初頭の遺物がまとまって出土しており、弥生集落の中心が東→西へと移動した可能性が考えられる。後期の遺物はⅡ区東半に集中している。

古墳時代

古墳時代初頭の溝(Ⅱ-3区SD-17～19)が検出された。Ⅱ-1区からは6世紀代の須恵器も出土している。古墳時代初頭(ヒビノキⅢ式)を除くと遺物はほとんど確認されていない。

古代～近世

Ⅱ-4区・Ⅱ-5区が中心となる。柱穴約180基が検出され、何時期かに渡る生活面が予想されるものの、出土遺物が少なく、実態を十分に把握することができなかった。8世紀、10～11世紀、12～13世紀、13世紀、14世紀、17～18世紀の各時期の資料が断片的ではあるが出土している。確認さ

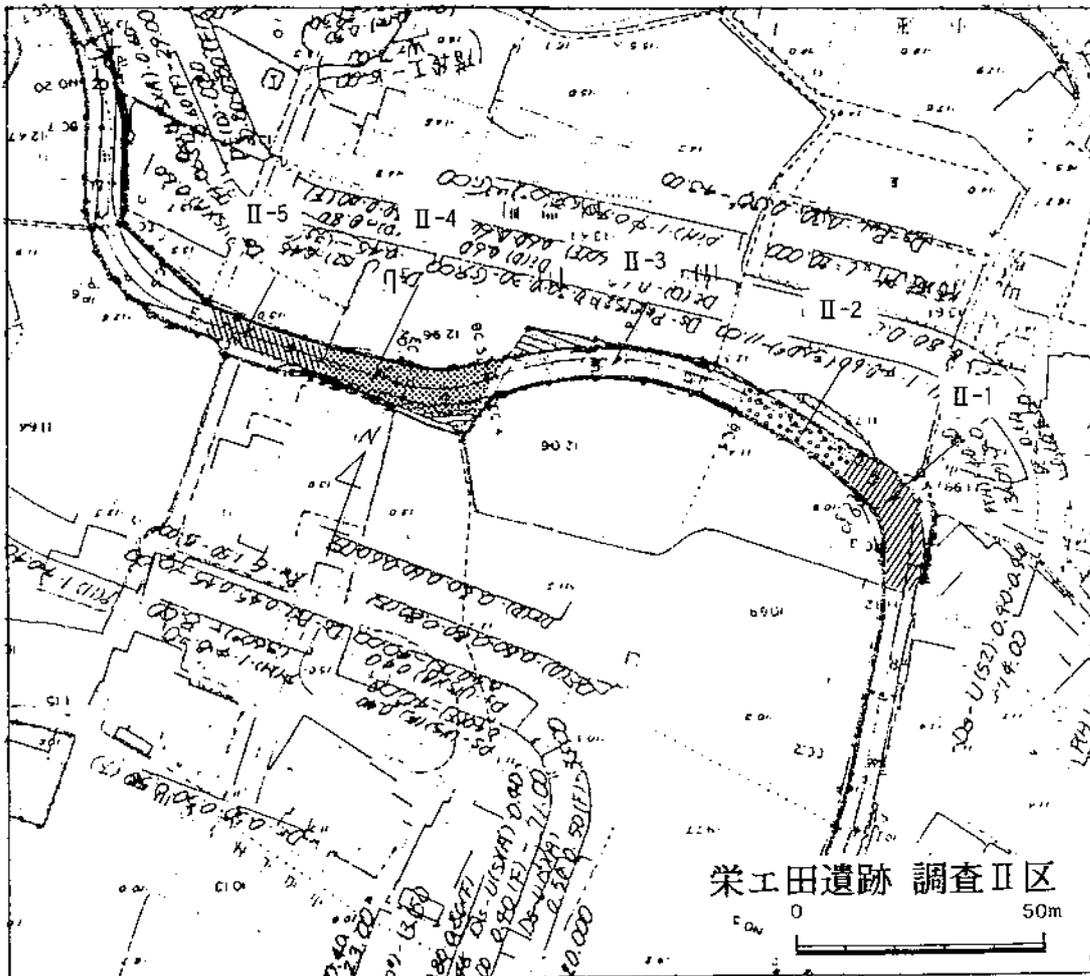


Fig. 10 Ⅱ区調査区全体図

れた遺物は、土師器・須恵器・東播系須恵器・白磁・同安窯青磁・龍泉窯青磁・瓦器・瓦質土器・常滑・備前・肥前系陶器・肥前系陶胎染付・伊万里・土鍾など多岐にわたる。

(2) 基本層序

地点ごとに堆積状況が大きく異なっている。1～5の小区ごとの図面を提示する。地山の標高に対応して堆積する土の厚さに差が生じている。西(Ⅱ-5)が薄く、東へ行くほど厚い堆積がみられ、Ⅱ-I区が遺跡東側の最深部を形成する。I区の東側に舌状に張り出した微高地が存在するが、それに対応するようにⅡ-5～4区にかけても、舌状に張り出した微高地の先端を形成する。

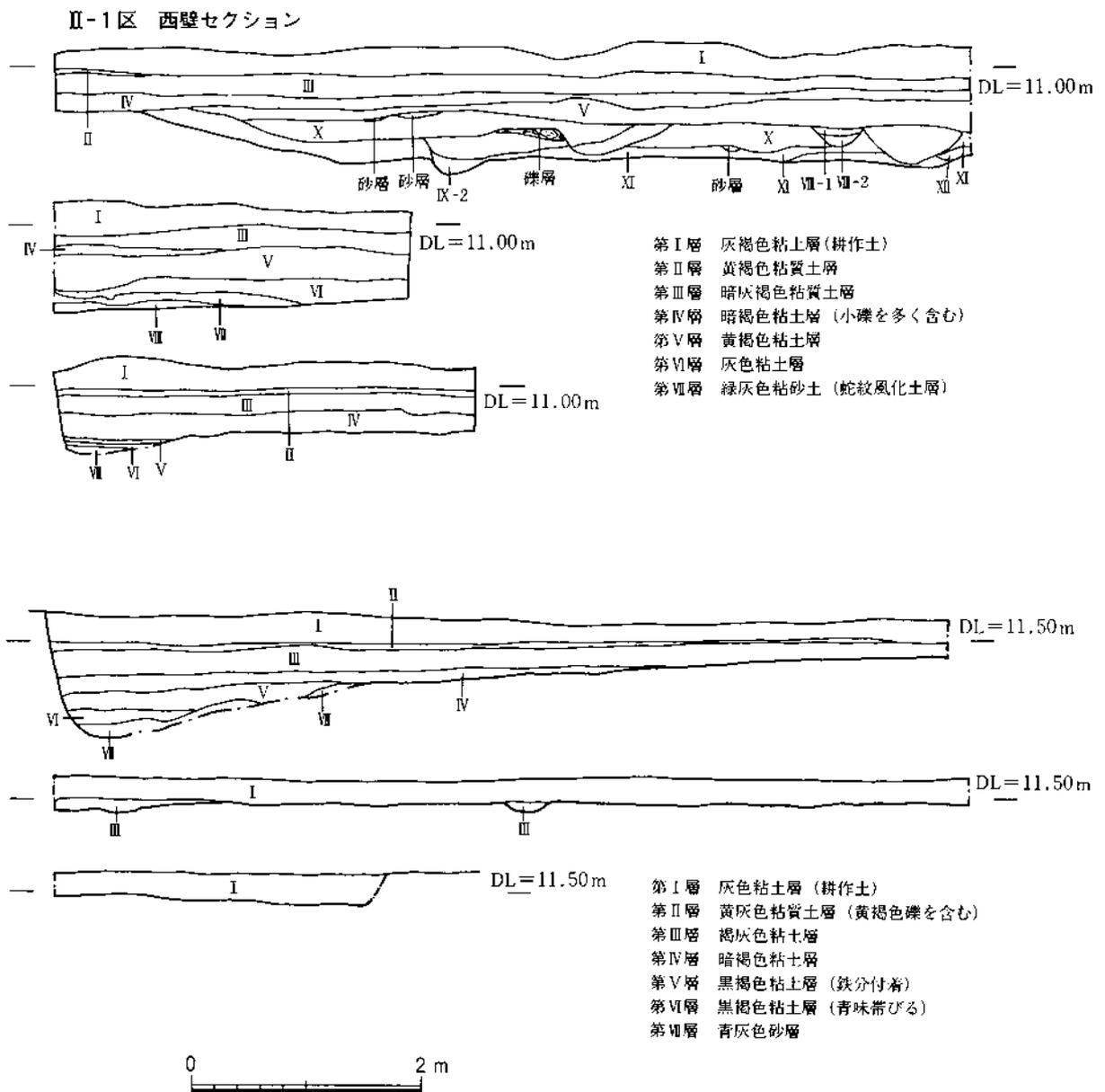
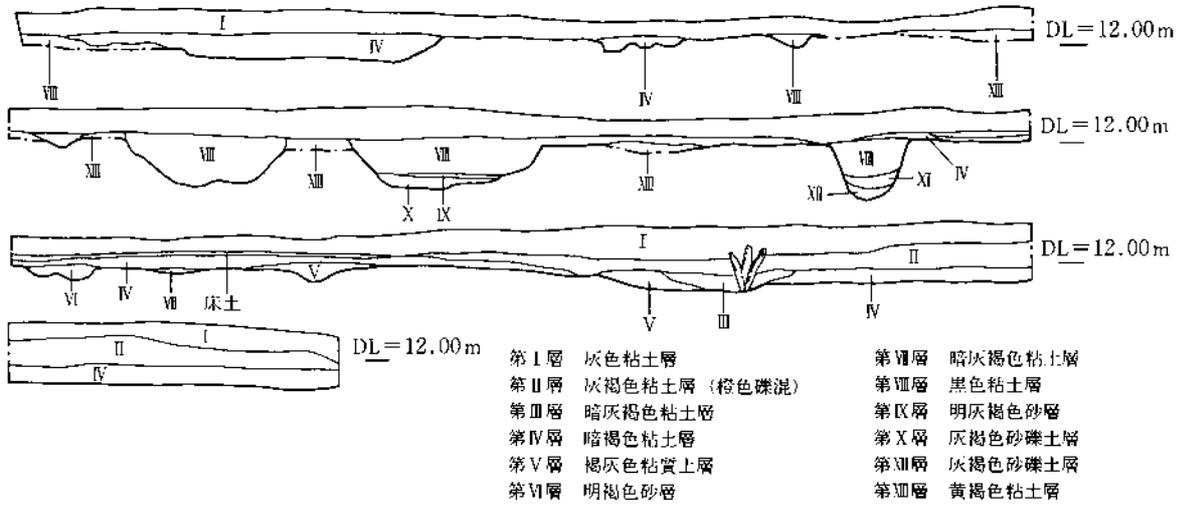
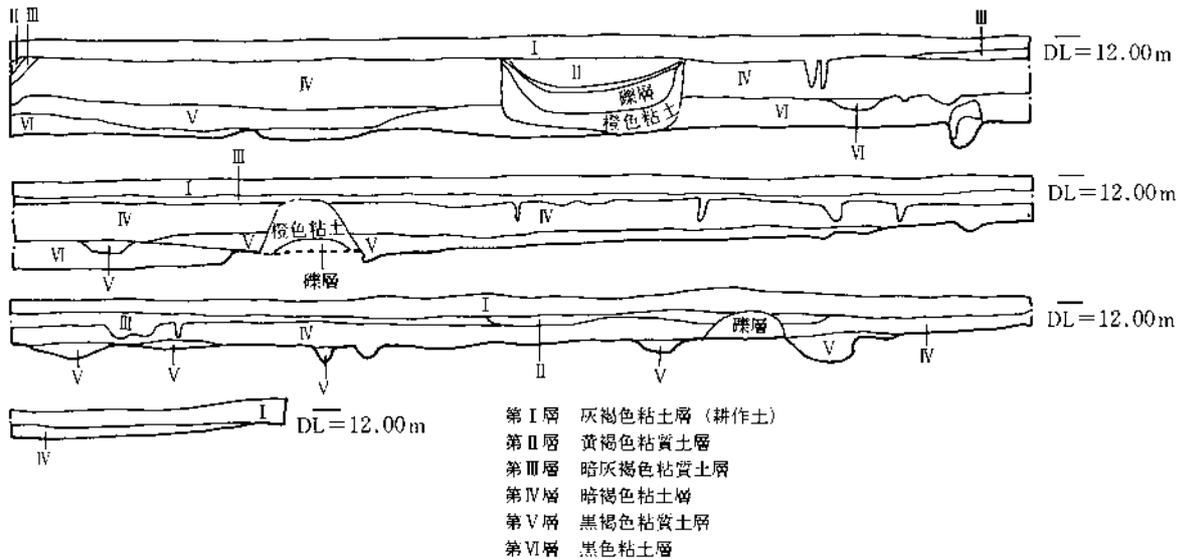


Fig. 11 Ⅱ-1・2区調査区セクション

II-3区 西壁セクション



II-4区 東壁セクション



II-5区 北壁セクション

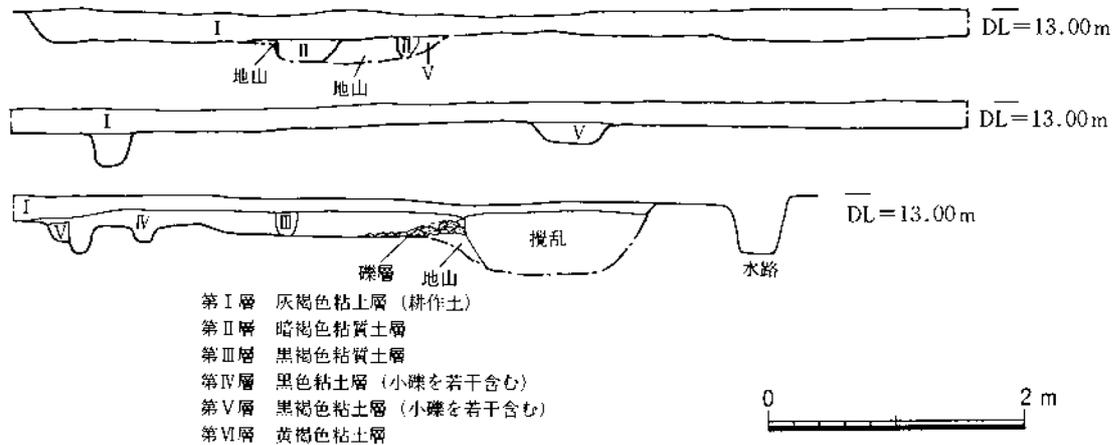


Fig. 12 II-3~5区調査区セクション

3. Ⅲ区の概要及び基本層序

(1) 概要

遺跡地北東端の調査区がⅢ区である。生姜畑として利用されており、調査区の20～30m西側を現在の谷川が流れている。調査区の東側が尾根の先端部にあたり、生姜畑の標高と比較すると2mほど高くなっている。Ⅲ-1区・Ⅲ-3区については遺物細片が出土したのみだが、Ⅲ-2・Ⅲ-4区から自然流路に伴う縄文後期・晩期の遺物がまぎって出土している。またⅢ-2区からは弥生後期の溝、古代～中世の遺構面が検出された。

縄文時代

出土した縄文土器破片数の合計は5,450点に達し、小破片が多いものの高知平野の縄

文後晩期の空白を埋める貴重な資料を得ることができた。流路の下層からアカホヤ（約6,400年前）の堆積が確認され、その上部には土壌化したアカホヤの2次堆積土（黒色土）が認められた。縄文土器はこの黒色土から上に堆積した層中に含まれる。流路及び縄文包含層は大別して8層に分層され、これをJ-I～J-VIII層として遺物の取り上げを行った。遺物を含む最下層（J-VIII層）から後期初頭の中津式土器が出土している。流路はJ-III～J-VII層で、縄文後期土器を含む。流路上層の包含層はJ-I～J-II層にあたり、後期晩期の広範な時期の遺物を含むが、最も新しい遺物は晩期終末・刻目突帯文土器期の遺物であり、縄文晩期終末に形成された包含層であると判断される。

縄文後期の土器は、初頭から後半にわたる資料がみられ、少量ながら従来南四国中央部で確認されていなかった後期後半の伊吹町式を含む。また晩期土器も同様に、少量だが前半・中葉（3時期）・後半の5時期に細分できた。200㎡程と狭い範囲に、後期初頭から晩期終末に至る長期に、断続的に生活が営まれたのであろう。なお、小片2点だが前期初頭の羽島下層式土器も出土している。

今回の調査で特筆されるのは、縄文の包含層中より、合計27点の蛇紋岩製磨製石斧及び未製品が出土したことである。その多くが伐採斧であり、完形品は全く含まれず刃部あるいは基部の一部のみの残存品であった。これらの石斧が確認されたのは川岸に当たる包含層中である。破損した石斧

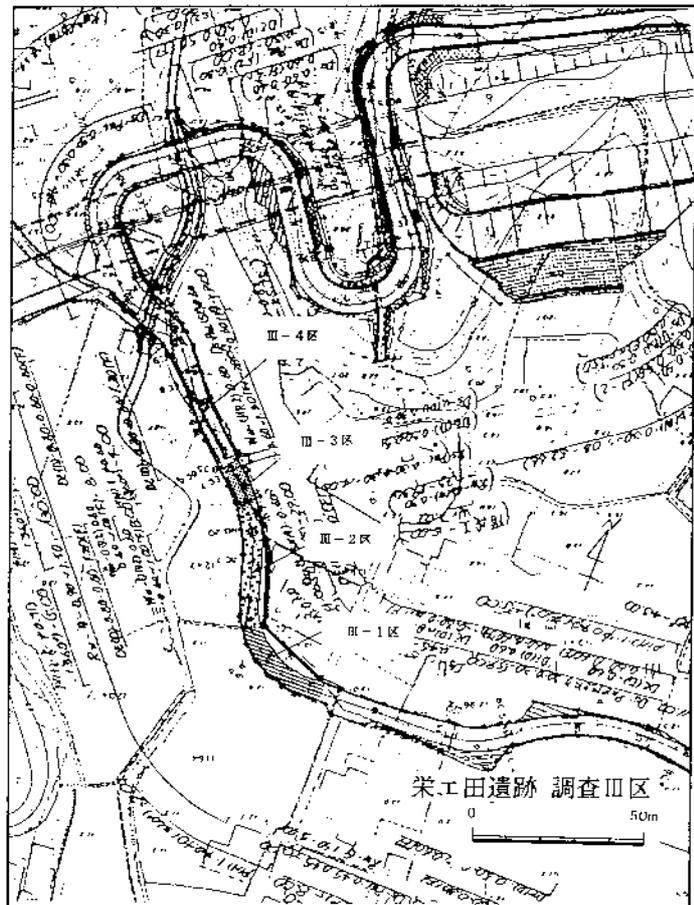


Fig. 13 Ⅲ区調査区全体図

が使用に耐えられなくなったため、一定の場所に廃棄され、廃棄された原位置からさほどの移動をみずに出土した可能性が強い。出土した包含層は後期晩期の遺物が混在しており、これらの磨製石斧の正確な時期は特定できない。形態から時期の特定が可能かどうか、今後の検討課題である。

流路内あるいは包含層中より、何点かの獣骨が出土している。細片もあり、種類の特定できないものもあるが、イノシシ・シカの骨があることは確認できた。特に並んで出土したイノシシの歯から、それが2才半の成獣のものであると断定できたのは大きな成果であった。骨は火をうけている。イノシシあるいはシカは流路の川岸近辺で解体され、縄文人の食卓に供されたものであろう。

弥生時代

Ⅲ-2区の弥生の溝状遺構からは弥生終末のヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式への移行期にあたる資料がまとまって出土した。甕が大半を占め、壺・鉢が確認されている。壺は2重口縁の壺が確認されるものの、口縁に加飾のある資料は少ない。また高知平野の西分増井遺跡、東崎遺跡などで、この時期に多く確認される他地域の搬入土器は認められなかった。Ⅰ・Ⅱ区同様、弥生後期末の集落については、その本体である住居址に当たらず周縁部に位置すると見られる溝及び包含層の確認にとどまった。

古代～中世

遺構から11世紀後半の一括資料が出土している。楠葉型瓦器椀と土師器・須恵器・布目瓦が共伴しており、11世紀後半の土佐の状況を示す資料として重要である。楠葉型瓦器椀はⅠ期の資料であり、高知県内では初めての例であり、西日本でも古代官衙あるいはそれに準ずる遺跡などのみから出土する遺物である。栄エ田遺跡の性格を示す資料として注目される。

(2) 基本層序

Ⅲ-2区・Ⅲ-4区とも自然流路の落ち際（川岸）に位置する。現在の谷の位置は当時と比べると20m以上も西側に移動している。当時の流路の堆積とその下層の火山灰（アカホヤ）関連堆積物、その上方に形成された包含層が相俟って複雑な堆積状況を示している。

ここではⅢ-2区・Ⅲ-4区各々一地点ずつの代表的な土層堆積状況図を提示する。

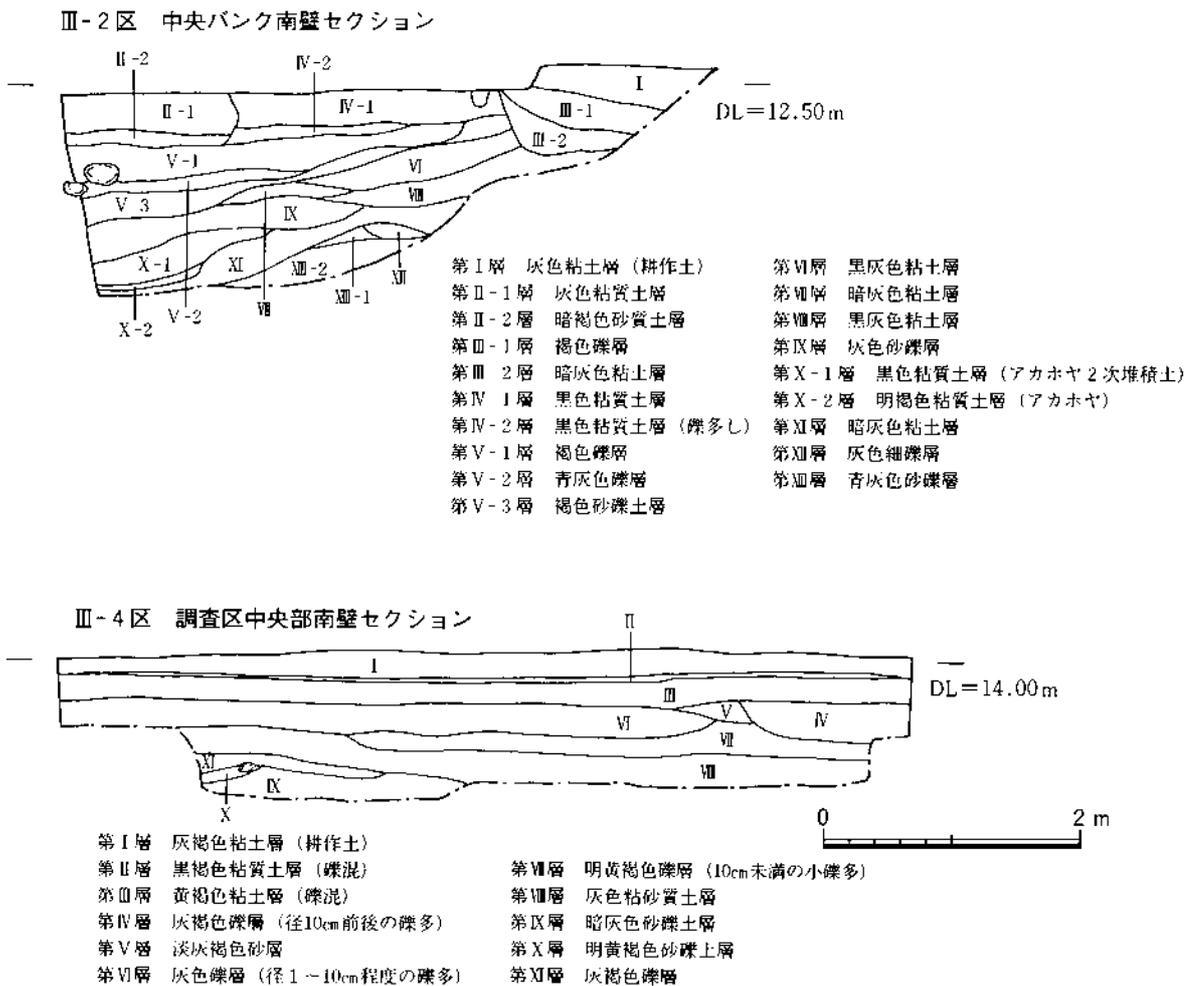


Fig. 14 Ⅲ-2・4区調査区セクション

第Ⅳ章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の生活の痕跡はⅠ-2・Ⅱ-4・Ⅲ-2・Ⅲ-4の各調査小区から確認されている。確認された遺物のほとんどが、Ⅲ-2区に集中しており、それ以外の調査区では、少量が弥生時代以降の包含層や流路から検出されたものである。はっきりとした遺構は、ほとんどなかったが、縄文期に埋積した流路と上面の包含層からは、縄文前期～晩期にわたる遺物が混在する状態で出土している。特に後期・晩期の資料は多くの時期(12時期以上)が確認されており、高知平野の従来の空白を埋める資料を含んでいる。

Ⅲ-2区の調査では、調査区を公共座標に即して4mグリッドに設定、さらに北半を1mグリッドとし、縄文土器の地点別出土状況を確認した。また、下層の堆積状況確認のため、試掘トレンチとは別にTR-A～Jのトレンチを設定、土層確認のためバンクを数カ所残しながらの調査となった。グリッド及びトレンチ・バンクの位置はFig. 15・18のとおりである。

1. 遺構

縄文時代の遺構としてはⅢ-2区から縄文時代後期から晩期にかけて埋積したと考えられる自然流路(谷川-SR1)と、縄文晩期の包含層上に形成されたピット、土壌が確認されている。

(1) 自然流路(谷川)SR-1

Ⅲ-2区の調査区北端から南端にかけて、南北方向に長さ約15mほどにわたって検出された。古代以降に堆積したとみられる流路(SR-8)によって、その南半の一部は削り取られているものの、縄文時代の谷川(SR-1)は埋積時の姿を極めてよくとどめている。調査区の関係上、東岸のみの検出となったが、今回確認できた流路の最深部は地表下3mに達する。

流路の最下層にはアカホヤとみられる幅5cmほどの、火山ガラスを含む層が確認された。その上層にはアカホヤが土壌化した後の2次堆積とみられるガラス質を含む黒色土が谷全域を覆うように

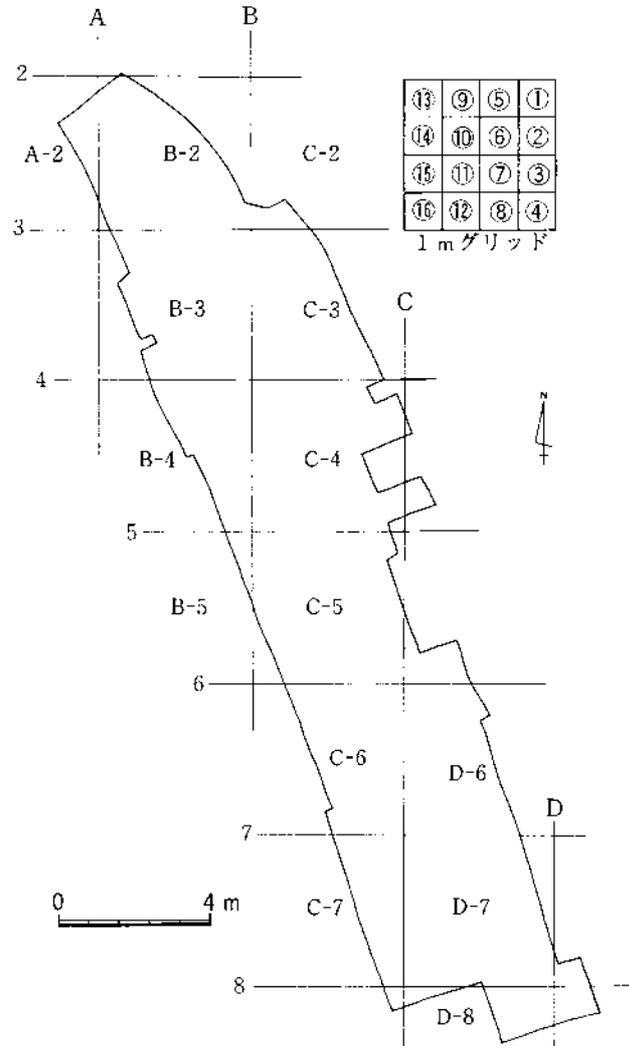


Fig. 15 Ⅲ-2区グリッド位置図

厚さ30~100cmで堆積している。この黒色土をJ-VIII層、その上層に部分的に存在する粘土層をJ-VII・VI層、SR-1が谷川として機能していたことを示す礫を含む層をJ-V~III層、谷川がIII-2区の範囲で機能を終えた後全域に堆積した包含層（黒褐色土）をJ-I・II層として調査を行った。（J-I層の上面には現在の耕作土に至るまで7層に分層可能な堆積がみられる。）

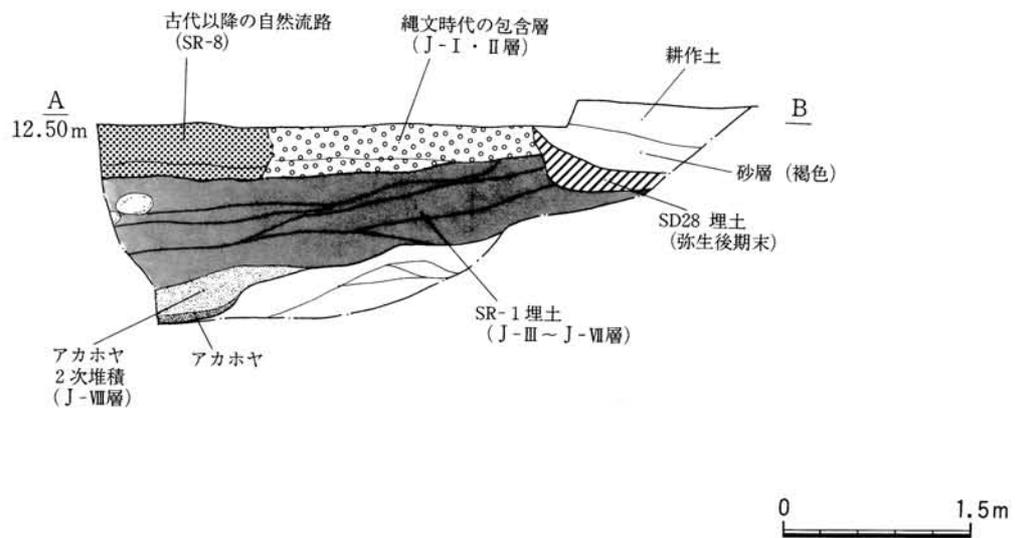
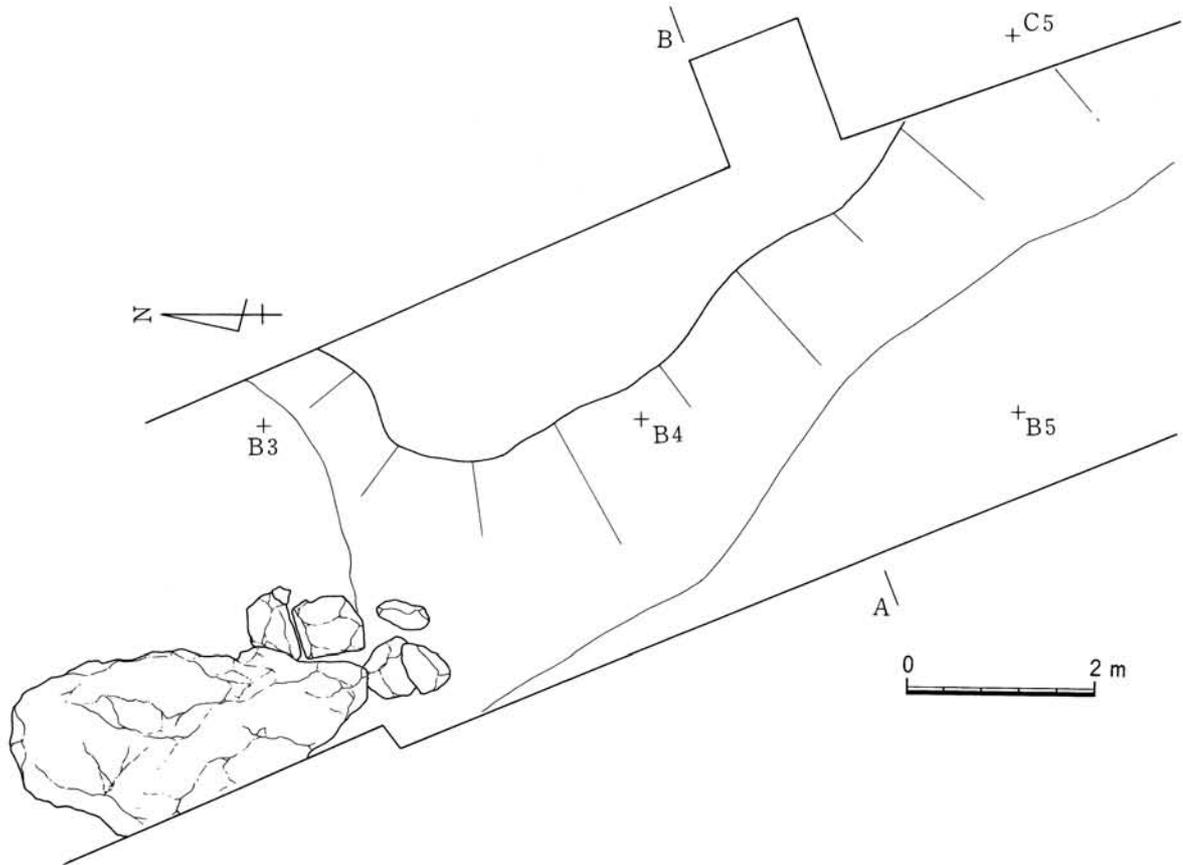


Fig. 16 SR-1 平面図及び堆積状況

(2) 縄文時代の包含層上に形成された遺構（P-1～10、SK-1～2）

縄文時代の自然流路が埋まった後形成された包含層（J-II層）を掘り込んで形成された遺構である。遺構中からはJ-I層に含まれていたであろう縄文のある小破片（後期）あるいは晩期の浅鉢の小破片などが確認されているが、遺構の形成時期は縄文時代晩期であり、J-I層に含まれている遺物から考えて晩期終末である可能性が強い。

遺構から出土した遺物は包含層に含まれていた土器小片以外に獣骨の小片が確認されている。イノシシ・シカなどの獣骨で、骨の部位や年齢が特定可能な大きさのものは遺構からは出土していない。包含層中から出土した獣骨にイノシシの2歳半になる個体の歯が確認されている。遺構の性格は特定できなかったが、自然流路（谷川）の川岸近くで、食料となる獣類を解体した可能性も考えられる。

SK-1

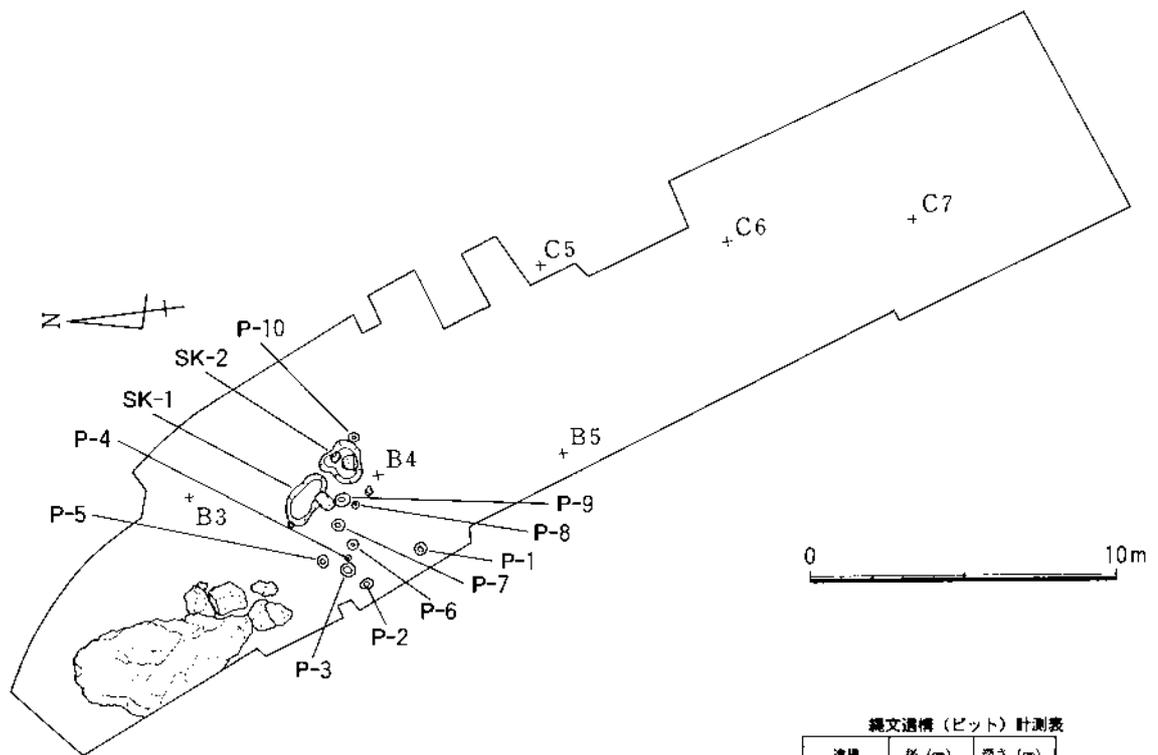
最大径60cm、最小径40cmの隋円形を示す。浅い皿状の土壙で深さ8cm。縄文後晩器土器小片を含む。

SK-2

最大径120cm、最小径40cmの不整円形を示す。浅い皿状の土壙で深さ10cm。縄文後実測番号土器の小片を含む。埋土はJ-I層とほぼ同じ黒褐色粘土だが、小礫をほとんど含まない。被熱した獣骨片が確認された。小破片だったために、骨の部位・種類は特定できなかった。

P-1～9

直径12～20cmの小ピットで、深さ5cm～20cmと残存状況は良好ではない。埋土はJ-I層と同じ、黒褐色粘土だが小礫は含まない。各ピットの平面形、径、深さ等はFig. 17に示した。



縄文遺構（ピット）計測表

遺構	径 (cm)	深さ (cm)
P-1	22	20
P-2	22	18
P-3	22×34	12
P-4	12	5
P-5	20	5
P-6	18	5
P-7	22	5
P-8	16	6
P-9	28	6
P-10	18	10

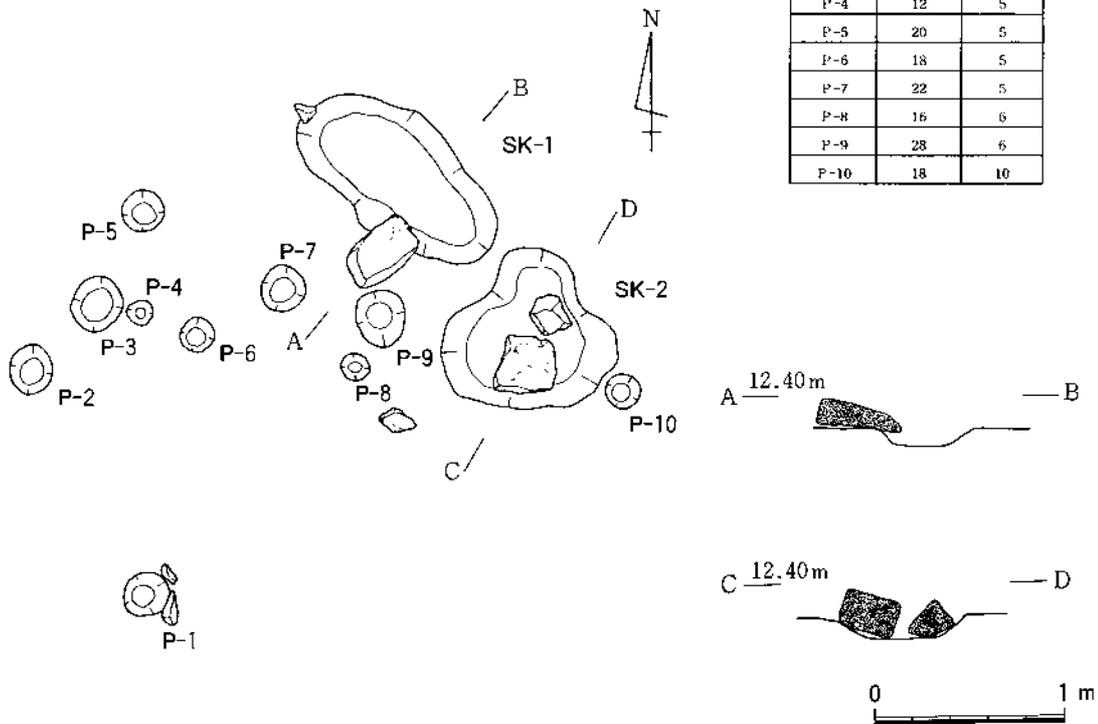


Fig. 17 縄文時代遺構平面・エレベーション (P-1~10・SK-1・2)

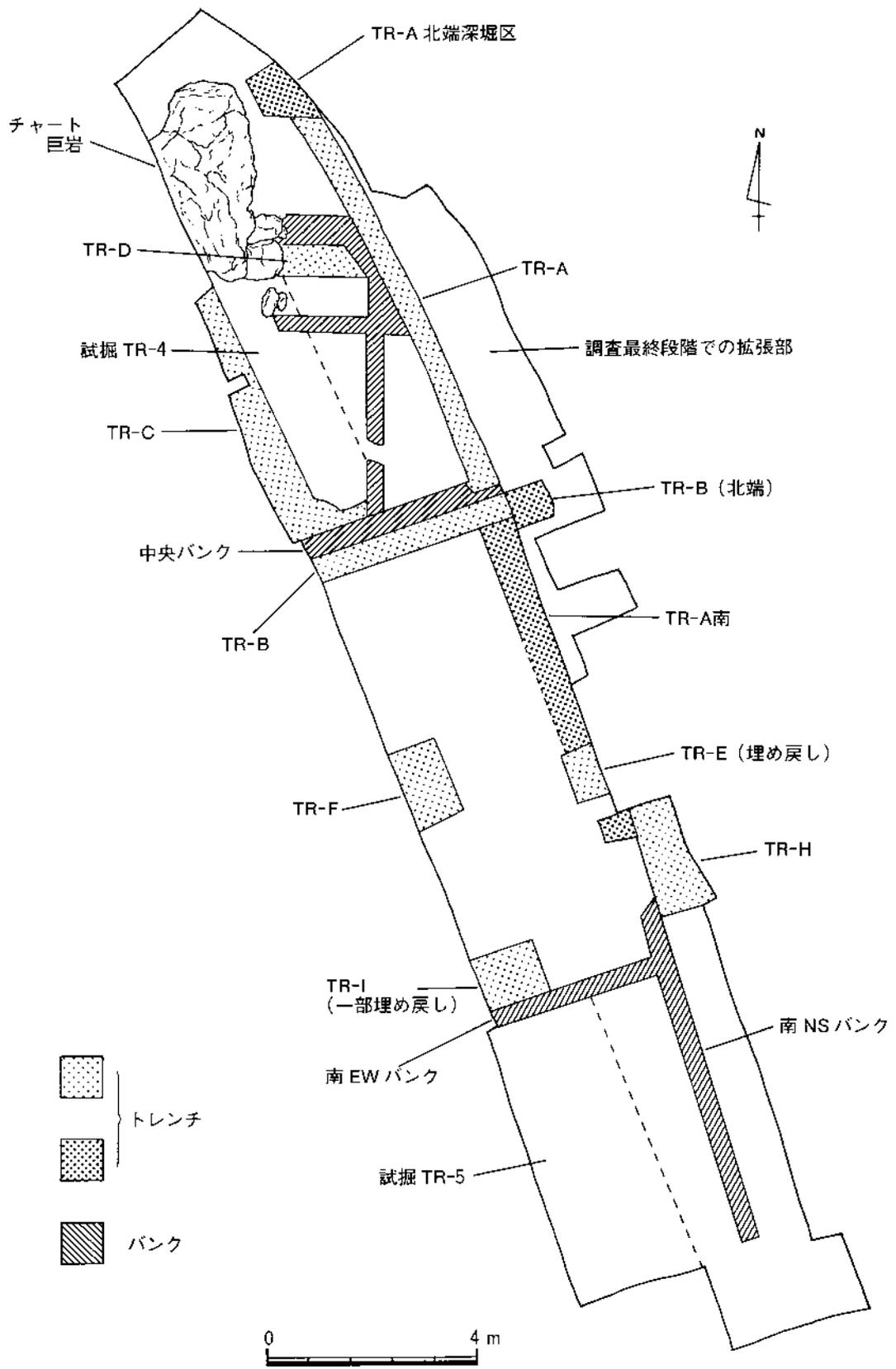


Fig. 18 III-2区バンク及びトレンチ位置図

2. 遺物

縄文時代の遺物としては、Ⅰ-2区から縄文土器1点、Ⅱ-4区から縄文土器1点、Ⅲ-2区から縄文土器5,450点と石器220点、Ⅲ-4区から縄文土器20点ほどが出土している。その中で、図示し得る土器332点と石器95点については図版に示した。(実測図 Fig. 28~70、観察表 Tab. 3~14) 確実に遺構に伴うものではなく、包含層および自然流路からの出土が大多数を占める。土器については、形態から時期が特定可能なものは時期ごとに分類し、時系列にそって提示した。縄文前期・中期・後期・晩期の各時期の土器が確認されたが、前期土器は前期初頭の羽島下層式併行の土器が2点、中期土器は中期の可能性のある土器が1点確認されたのみで、それ以外の土器は後期・晩期に属する。

またⅢ-2区からは、被熱した獣骨小片が粘土層中より出土している。

(1) 縄文土器

A. 前期土器 (Fig. 19-1・2)

羽島下層式とみられる土器の口縁部小片が2点確認された。

B. 中期土器 (Fig. 19-3)

胴部の破片だが、施文縄文が羽状になるという特徴により、中期の土器として分類した。中期初頭から前半に位置付けられる可能性があるが詳細は不明。

C. 後期土器 (Fig. 21~ Fig. 32)

後期晩期の土器が包含層中で混在するため、後期土器としての正確な点数は把握できない。後期・晩期と分類可能な遺物についてのみ見れば、後期土器は全体の約65%を占める。Ⅲ-2区の包含層中に3,500点ほどの縄文後期土器が含まれていたと推定される。後期土器を1~8類に分類、各々ごとにさらにa~hに細分した。出土遺物の提示に際して、出土層位・出土地点による順番ではなく、この分類に基づく順番で整理を行った。

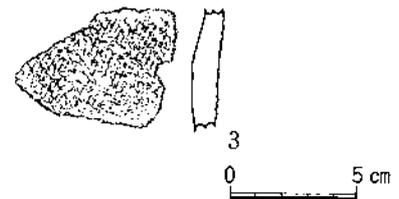


Fig. 19 縄文土器 (前期・中期)

(後期土器分類基準)

後期土器を分類する基準として、時期を優先させ、それから形態による分類を行った。

1類土器 (Fig. 21-4~27) 後期初頭の土器である。(初頭~前葉にかけての可能性もある)

- a. 2本1単位の沈線で文様を施し、沈線間に貝殻腹縁による擬縄文を有するもの。胴部の破片(4~6)と口縁部(7)があり、口縁部が残るものには棒状原体による刻み目を施す。
- b. 縄文施文後、沈線で文様を施すもの。沈線は浅いが、沈線脇の土手が残る。(8)
- c. 波頂部が肥厚するもの。縄文のないもの(10・C1類)と縄文地に短沈線と横位の沈線を組み合わせて施文するもの(11・C2類)がある。C2の波頂部は沈線を環状にめぐらせる。

d. 沈線による区画文をもつ。(12~19) 口縁部が残るもの(19)は波状口縁で、口唇にヘラ状原体による刻目を有する。

e. 条痕地に沈線による文様を施すもの。(20~27) 山形の沈線文を持つもの(e1類)と沈線を強く施文、内面もわずかに盛り上がるもの(e2類)がある。いずれも沈線脇の土手を残し、調整は内面がナデ、外面条痕。

2類土器 (Fig. 22-28~41) 後期前半の土器。

a. 2本沈線による磨消縄文。擬縄文(28-a1類)と縄文(29~38-a2類)があり、縄文原体はRLが多い。

b. 3本沈線による磨消縄文。(39・40)

3類土器 (Fig. 23-42~47) 後期前葉~中葉にかけての土器。(瀬戸内系)

a. 口縁部は内面が肥厚し、口唇は内傾する面をなす。(42・43)

b. 口縁部はわずかに肥厚し、内外面に縄文帯をもつ。内面縄文帯下に1条の沈線をめぐらせる。(44)

c. 口縁部内外面に縄文施文。(45~47)

4類土器 (Fig. 24-48~54) 後期前半~中葉にかけての土器。(九州系)

a. 3本沈線の磨消縄文。(48・49)

b. 2本沈線の磨消縄文。(50・51)

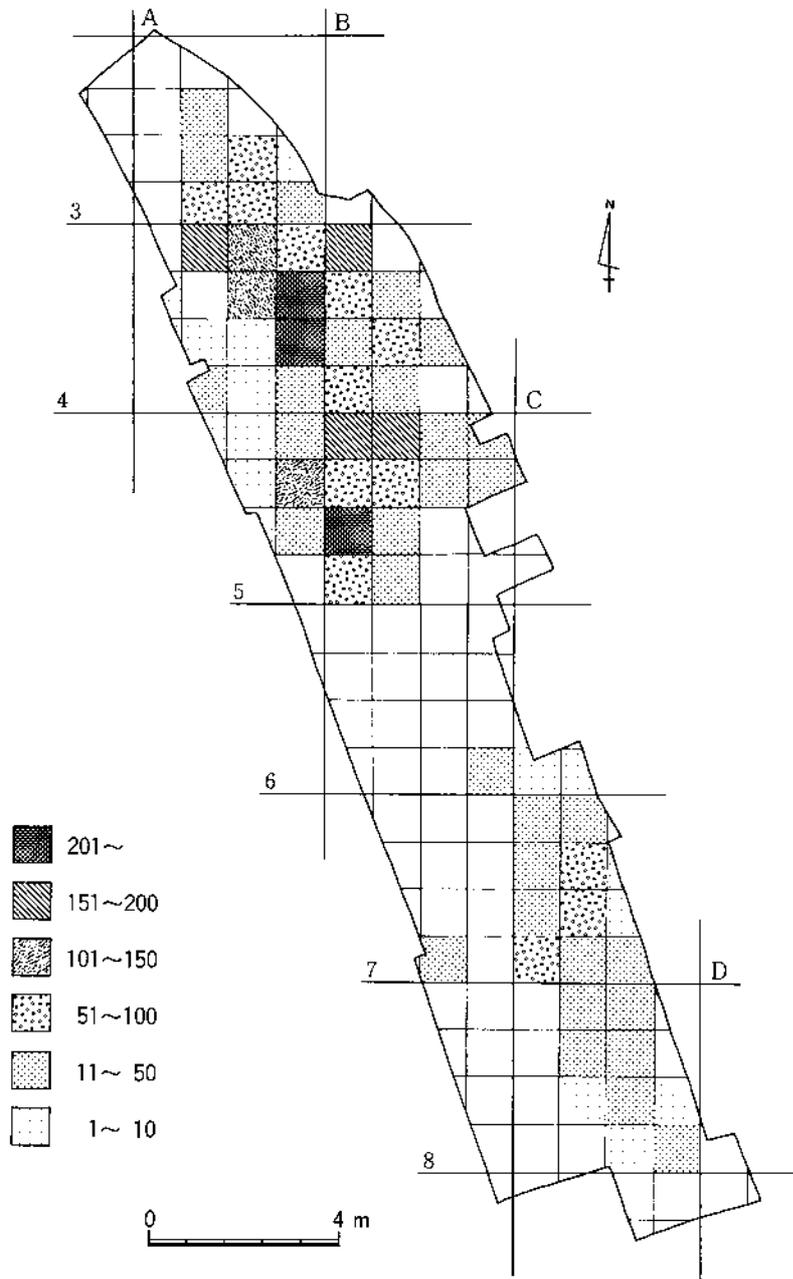


Fig. 20 III-2区J-I層縄文土器出土状況

c. 波状口縁の鉢で、外面に沈線で文様施文。(52)

d. 口縁がくの字状に屈曲する鉢。横方向の強いナデにより、口縁下外面に1条、屈曲部(頸部)に2条の沈線を持つ。(53・54)

5類土器 (Fig. 25-55~60) 後期中葉の土器。(彦崎K-2式土器)

a. 口縁はわずかに肥厚する。外面に幅6mmの縄文帯をもつ。(55~58)

b. 口縁はわずかに肥厚し、内面に1条の沈線をめぐらせる。口唇内外面に縄文施文。(59・60)

6類土器 (Fig. 26~27-61~125) 後期中葉の土器。(片柏式土器)

a. 口縁部外面に縄文帯を持ち、頸部無文で胴部以下に縄文を施文する。(61~100) a 1類(61~67)は口縁はわずかに外反気味だが直線的に立ち上がる。口縁外面の縄文帯は幅6~10mm、頸部は無文で胴部以下に縄文施文。内面、頸部外面はナデで仕上げる。縄文はRL。これに対してa 2類(68~72)は外反する口縁を持つ。a 1類と較べると外反の度合いが強く器壁は薄い。内面、頸部外面は磨きあるいは丁寧なナデで仕上げる。68には径6mmの補修孔をもつ。(73~100は胴部・頸~胴部の小破片)

b. 口縁内面にLR、外面にRLの縄文を施文、内面に短沈線を配する。(101~106)

c. 3本沈線による磨消縄文。波状口縁。(107)

d. 2本沈線による磨消縄文。(108~110) 109・110は頸部の屈曲部上下に沈線を配し沈線間に縄文を施文する。

e. 口縁外反気味、口唇に5mm幅の縄文帯を持ち頸部無文。胴部にも縄文を施文する。頸部と胴部の間に一条の沈線を有する。(111)

f. 口縁部外面を肥厚させ肥厚部に縄文施文。肥厚部下に一条の沈線を有する。(112)

g. 外面に2本あるいは3本を1単位とする平行線による文様を施す。(113)

h. 口縁を肥厚させ外面は縄文地に沈線で文様を施す。口唇は面をなし縄文施文。(114~125)

Tab. 3 III-2区層別出土遺物(縄文土器)

層位	後期1類	後期2類	後期3類	後期4類	後期5類	後期6類	後期7類	後期8類	後期深鉢	晩浅1類	晩浅2類	晩浅3類	晩浅4類	晩浅5類	晩深1類	晩深2類	深鉢1類	深鉢2類	合計
J-I層	9	10	2	4	3	40	0	2	1	6	6	8	9	8	4	6	16	15	149
J-II層	0	1	2	0	0	4	0	0	0	0	1	2	2	2	1	0	4	1	20
J-III層	0	1	0	1	0	4	1	1	0	0	0	1	0	0	2	0	5	0	16
J-IV層	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	4
J-V層	3	1	1	2	2	10	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	1	0	25
J-VI層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J-VII層	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
J-VIII層	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
その他	4	0	1	1	1	5	0	0	0	1	3	1	3	2	1	4	10	14	51
合計	23	14	6	8	6	64	1	3	6	7	10	12	14	12	10	10	37	30	269

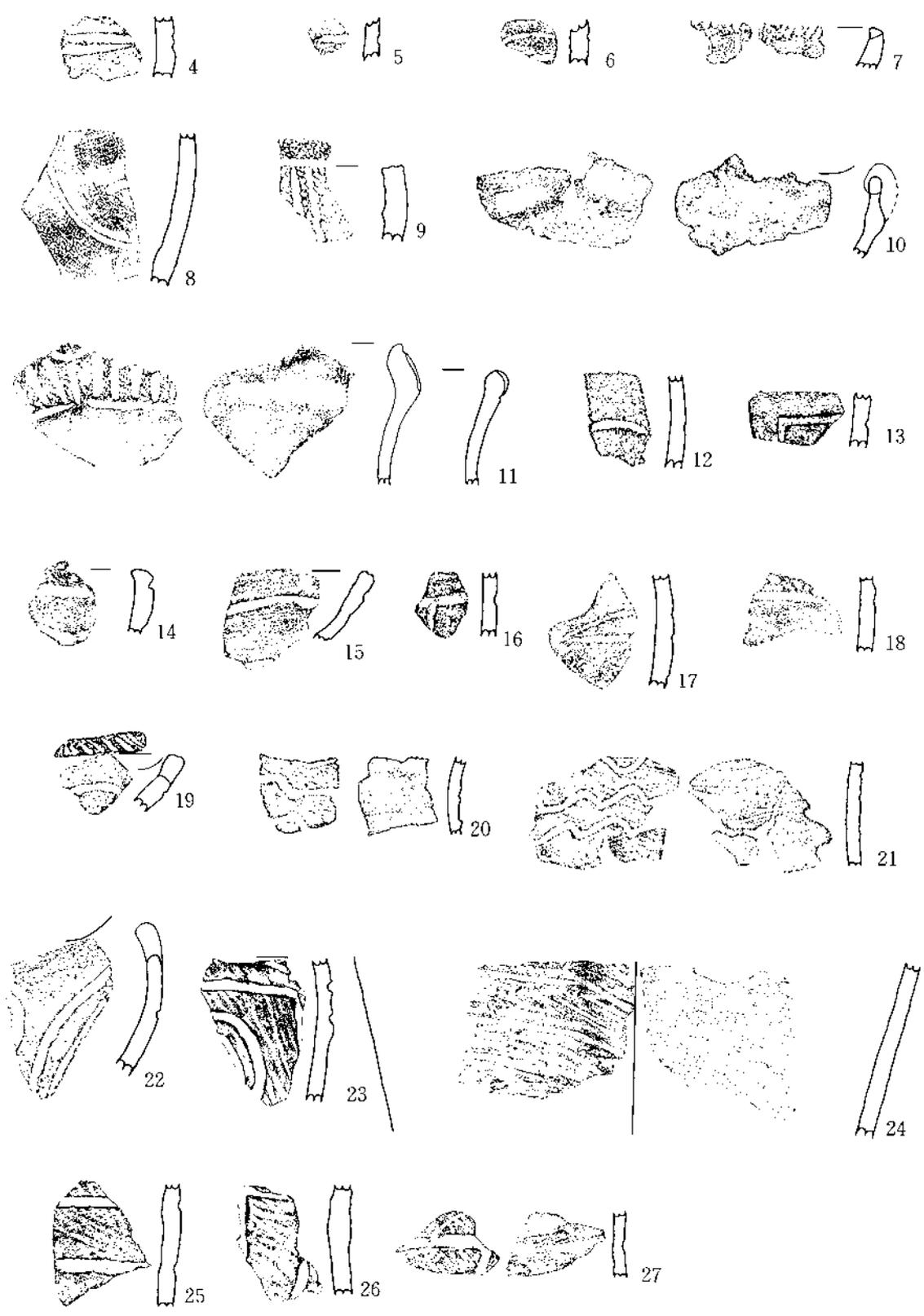


Fig. 21 縄文土器後期1（後期初頭—1類）

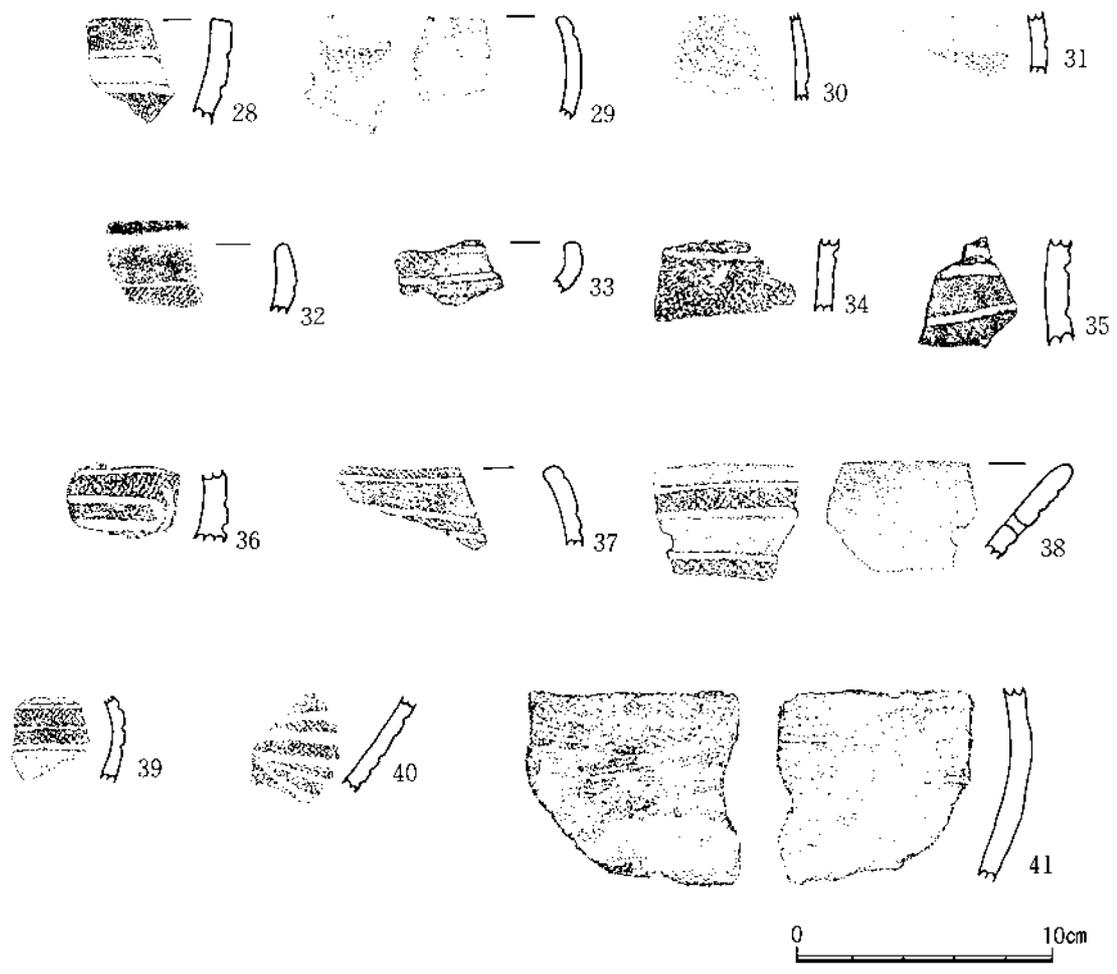


Fig. 22 縄文土器後期2（後期前半—2類）

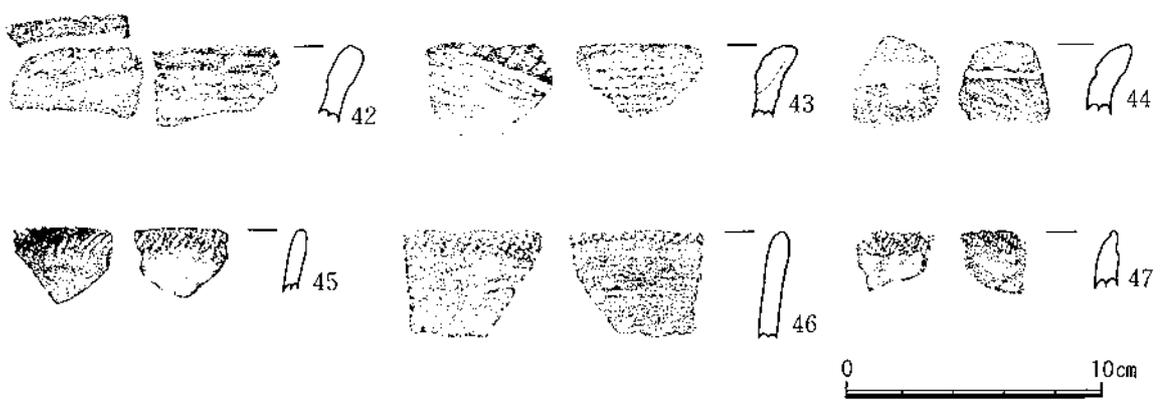


Fig. 23 縄文土器後期3（後期前半—3類）

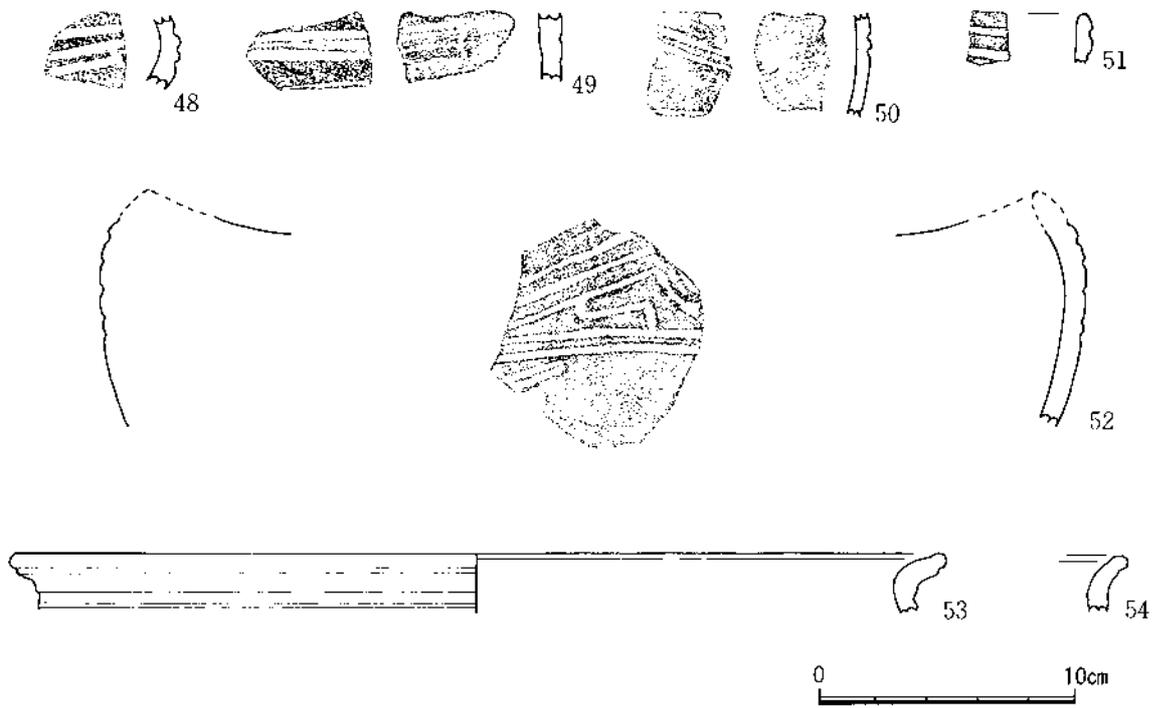


Fig. 24 縄文土器後期4（後期前半—4類）

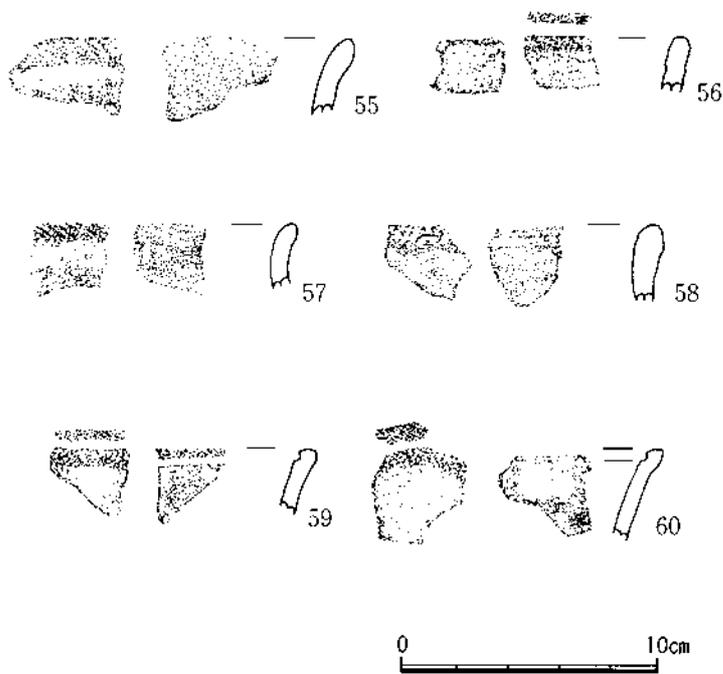


Fig. 25 縄文土器後期5（後期中葉—5類）

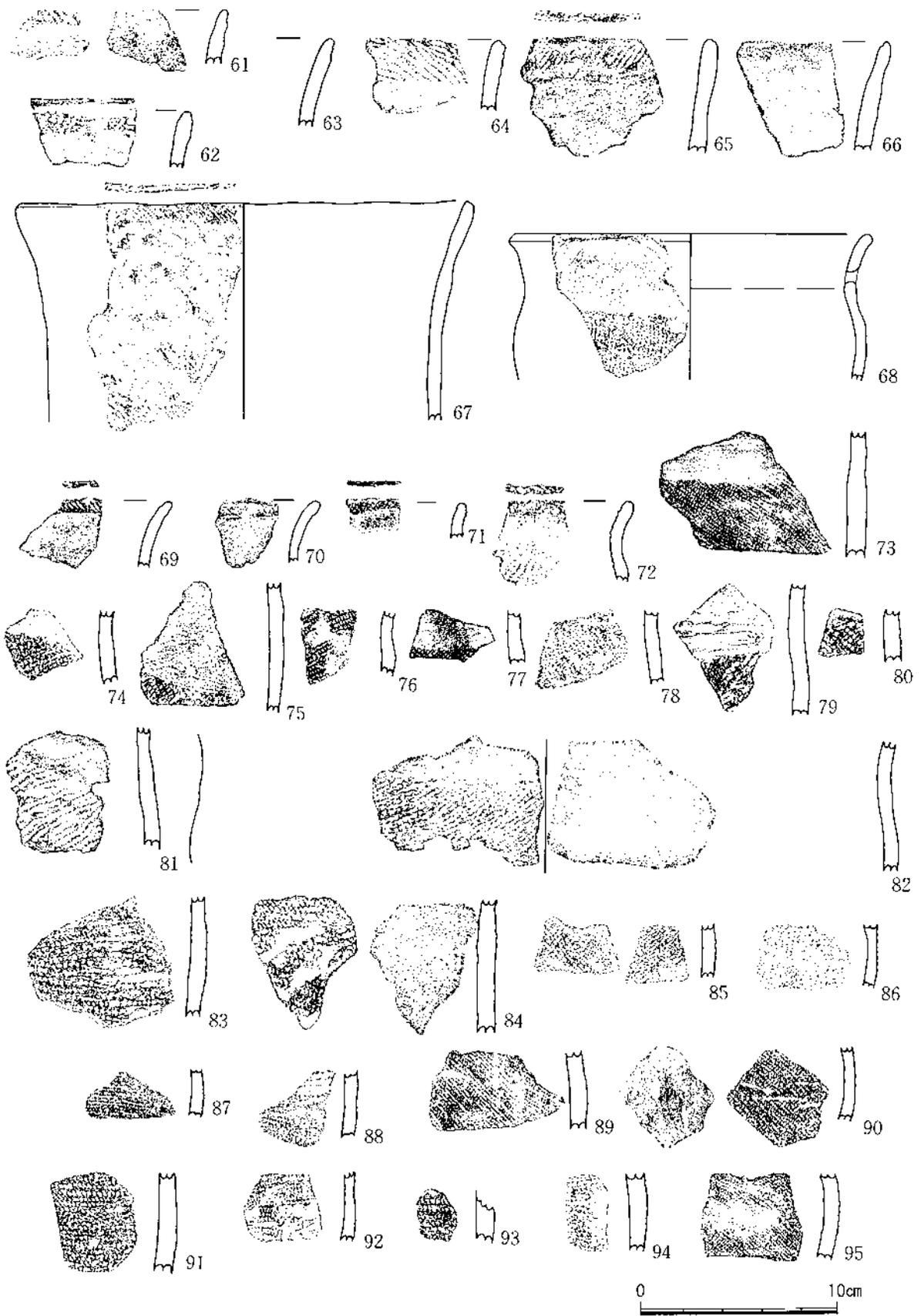


Fig. 26 縄文土器後期6 (後期中葉—6類1)



Fig. 27 縄文土器後期7（後期中葉一6類2）

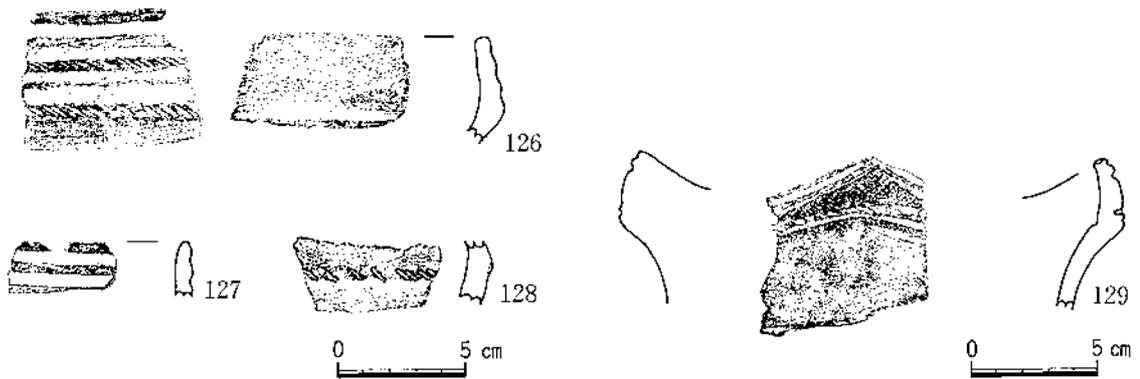


Fig. 28 縄文土器後期8 (後期中葉—7類)

Fig. 29 縄文土器後期9 (後期後半—8類)

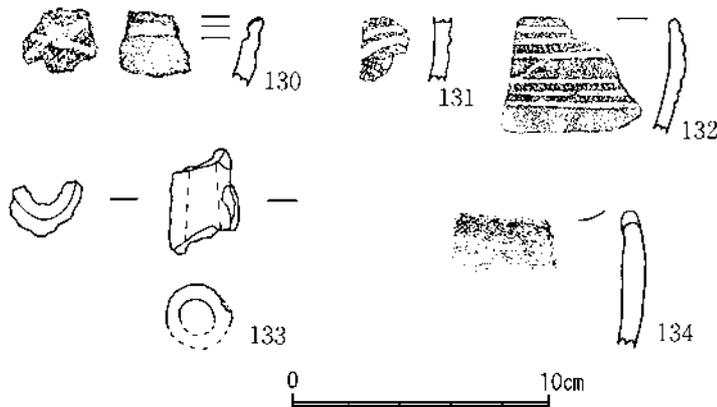


Fig. 30 縄文土器後期10 (その他)

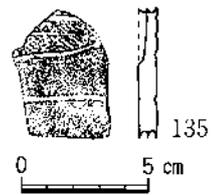


Fig. 31 縄文土器後期11

(I-2区出土遺物)

7類土器 (Fig. 28-126~128) 後期後半の土器。(元住吉山I式土器)

外面に凹線を持つ土器。凹線間に刻目を有する。

8類土器 (Fig. 29-129) 後期後半の土器。(伊吹町式土器)

波状口縁で、外面に2本1単位の沈線で区画された文様を持つ。沈線間に縄文施文。くびれ部上の沈線に刺突文。

なお、所属時期不明の1~8類に分類できない土器もあり、1~8類以外の土器 (Fig. 30-130~134) として一括して扱った。133は注口土器の注口部の小破片である。

また Fig. 31-135はI-2区出土の北白川上層Ⅲ式併行の土器である。

時期は不明だが、後期に堆積したとみられるJ-V層出土の土器に「丁寧なナデあるいは磨きにより仕上げる」深鉢がある。これを後期深鉢として後期に分類して提示する。

(出土状況)

後期土器は包含層・流路中からの出土であり、遺構出土のものは弥生後期の溝など他時期の遺構への混入があるのみで、後期に形成された遺構は確認できなかった。J-I~Ⅲ層では後期晩期が混在するが、J-V層は後期土器のみが出土 (後期1類~6類) する層であり、遺物包含最下層のJ-VⅧ層からは後期1類e (条痕地に沈線、沈線脇の土手あり) のみが出土するという状況が確認された。

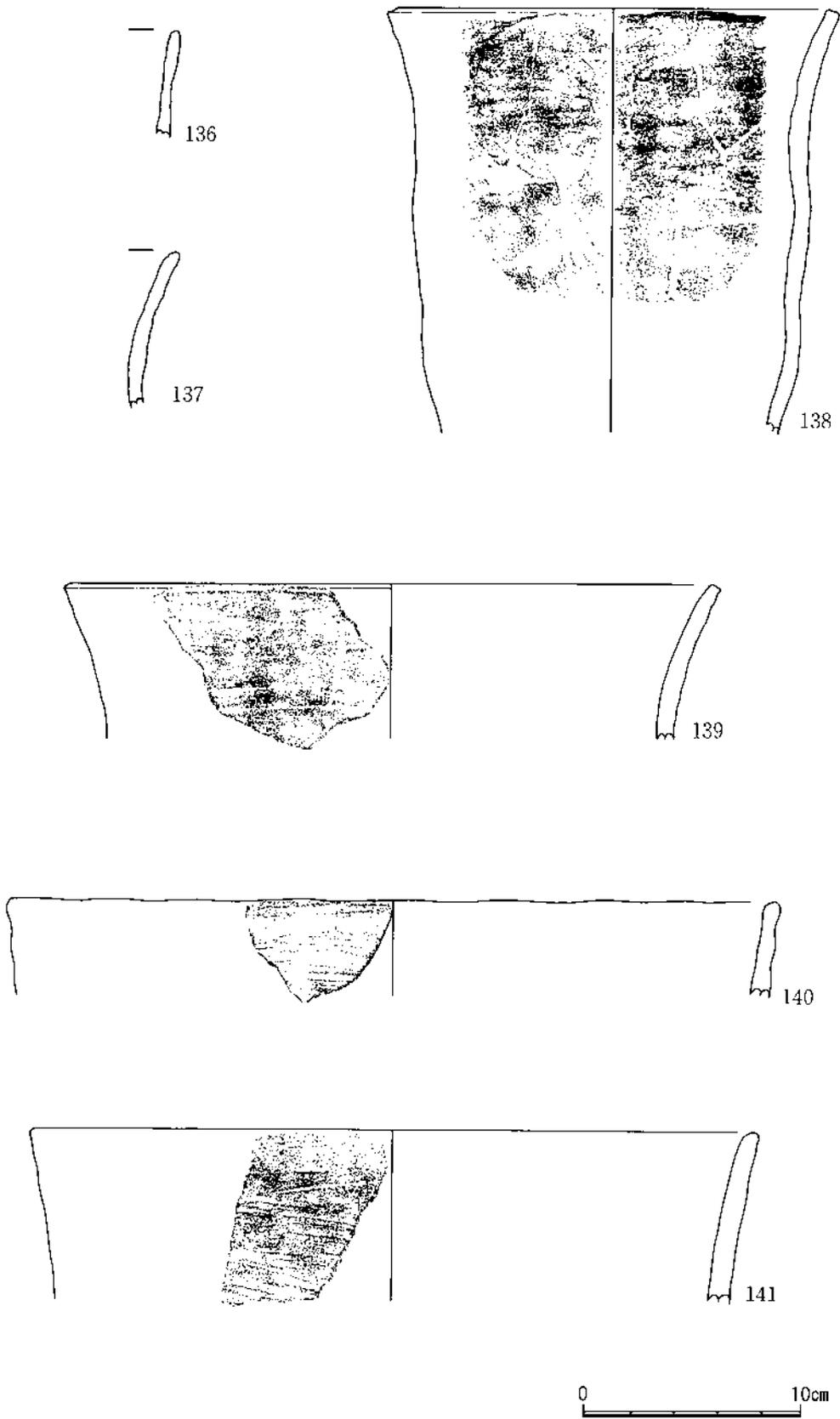


Fig. 32 縄文土器後期12 (深鉢)

D. 晩期土器

浅鉢と深鉢が確認されている。浅鉢を1～5類、深鉢を1～2類に分類した。器種ごとに同じ時期だと考えられる土器をまとめ、その中で細分する。

(晩期土器分類基準)

浅鉢1類 (Fig. 33-142～148) 晩期前半。

1類a-口縁は強く屈曲して上方へ立ち上がり、外面に1条の沈線を有する。(142～145)

1類b-口縁は屈曲して外上方へ開き気味に立ち上がる。外面に1条の沈線。(146・147)

1類c-口縁は強く屈曲して立ち上がり、内面に沈線を有する。(148)

浅鉢2類 (Fig. 33-149～158) 晩期中葉。

2類a-強く2段に屈曲する口縁を持つもの。(149)

2類b-口縁下で一旦屈曲した後、大きく開いて口唇に至る。内面に沈線なし。(b 1-150) 内面に沈線あり。(b 2-151)

2類c-口縁は大きく開いてわずかに外反気味に口唇に至る。内面に沈線あり。(152～158)

2類d-大きく開く口縁。口唇が肥厚する。(157・158)

浅鉢3類 (Fig. 33・34-159～170) 晩期中葉。

3類a-強く2段に屈曲する口縁を持つもの。2類aと較べ、屈曲が強く口径大。159～161

3類b-わずかに外反気味に大きく開く口縁。162～165

3類c-口縁部内面に1条の沈線を持つ。

3類d-胴部がくの字状に屈曲、さらに口縁下で逆に屈曲して肥厚する口縁に至る。

3類d-胴部がくの字状に屈曲、くびれ部上に1条の沈線を持つ。

浅鉢4類 (Fig. 35-171～186) 晩期中葉。

4類a-丸みを帯びた胴部から口縁は強く屈曲して短く立ち上がる。口唇内面が肥厚する。(171～174・179) 174はリボン状突起。

4類b-大きく開いた口縁で、内面が肥厚する。(175～178・180・183・184) 内面の肥厚がわずかなもの(b 1-175)、はっきりと肥厚するもの(b 2-176～8)、肥厚部が稜を成す程明瞭なもの(b 3-180)、肥厚部がT字状を呈するもの(b 4-183・184)に分かれる。

4類c-口縁は2段に強く屈曲する。

4類d-口唇にヘラ状原体による刻目を有す。口縁部外面に段部を形成、内面に1条の突帯をめぐらす。(182)

浅鉢5類 (Fig. 36-187～200) 晩期後半。

5類a-逆くの字状浅鉢の口縁部。(187～192) 強く屈曲し内面に一条の沈線をめぐらすもの(a 1-187)、わずかに折り曲げ外面が肥厚するもの(a 2-188～190)、口唇が丸みを帯びて肥厚するもの(a 3-191・192)がある。

5類b-直線的に開いて立ち上がり、稜をなす口縁に至る。(193・194)

5類c-逆くの字状に屈曲する胴部。屈曲部は段を形成する。(195～197)

5類d-逆くの字状に強く屈曲する胴部。(198・199)

5類e-口縁は内湾気味に開いて立ち上がる。ボール状の浅鉢。

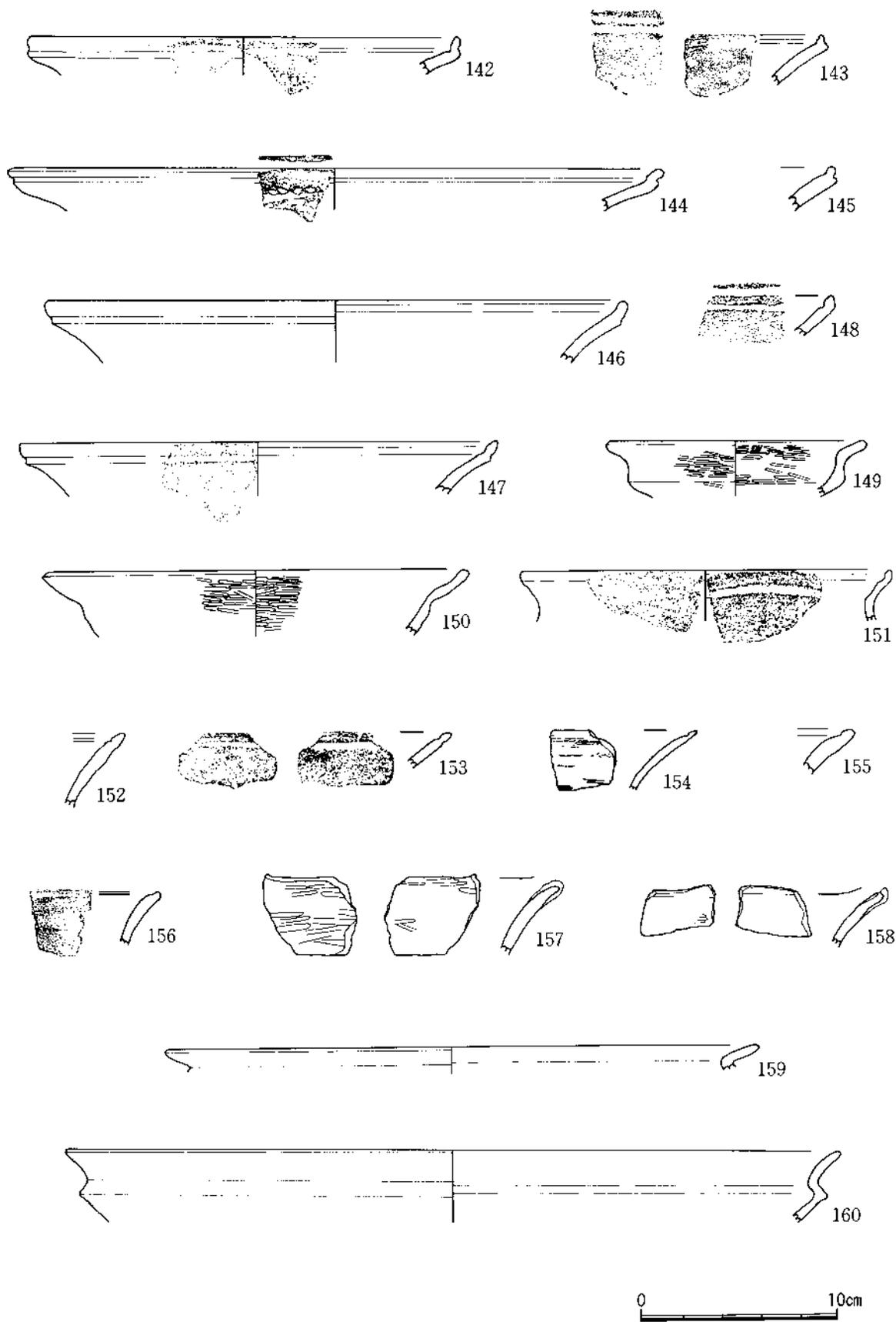


Fig. 33 縄文土器晩期1 (晩期浅鉢1類142~148、2類149~158、3類159・160)

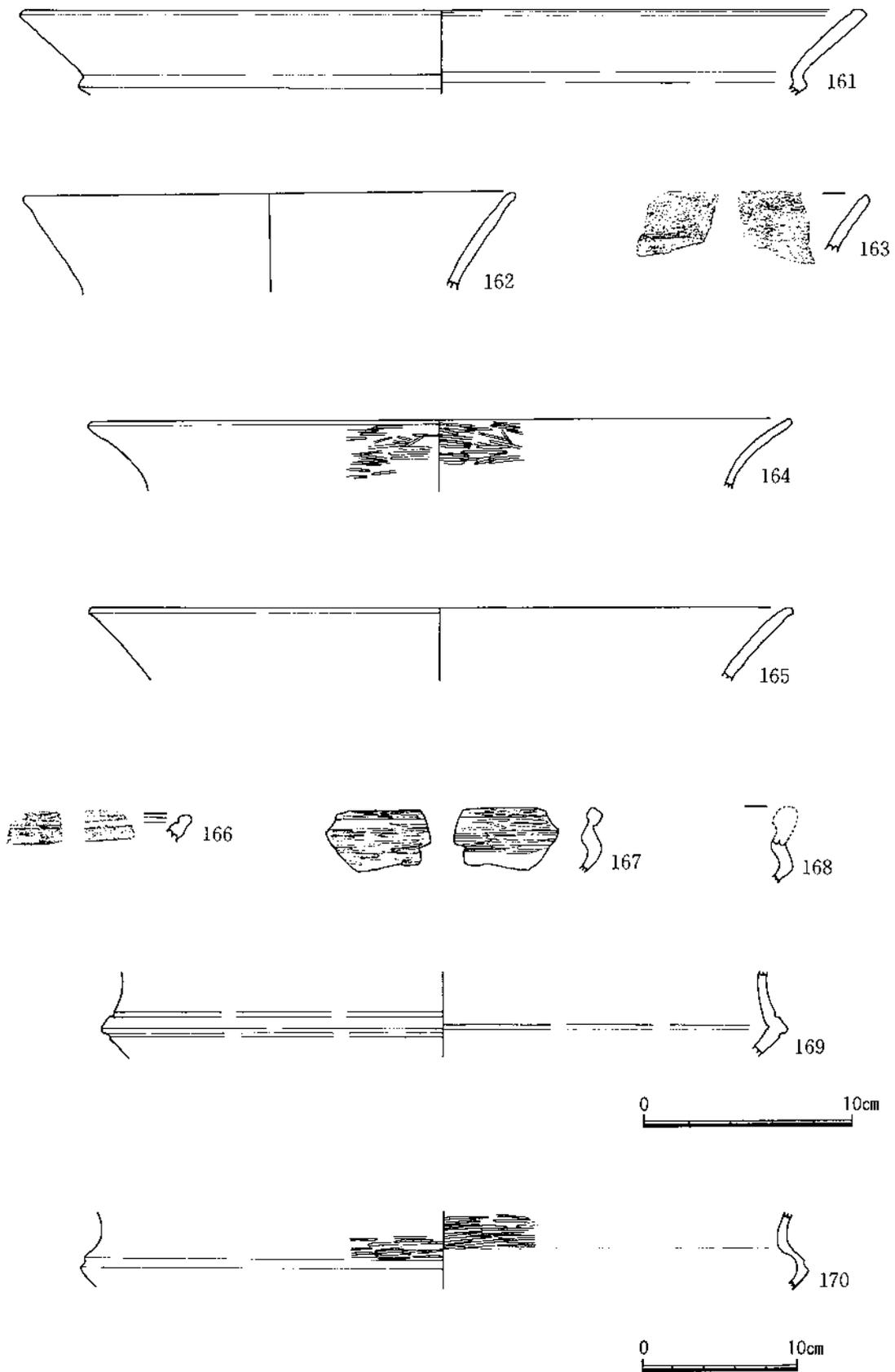


Fig. 34 縄文土器晩期2（晩期浅鉢3類）

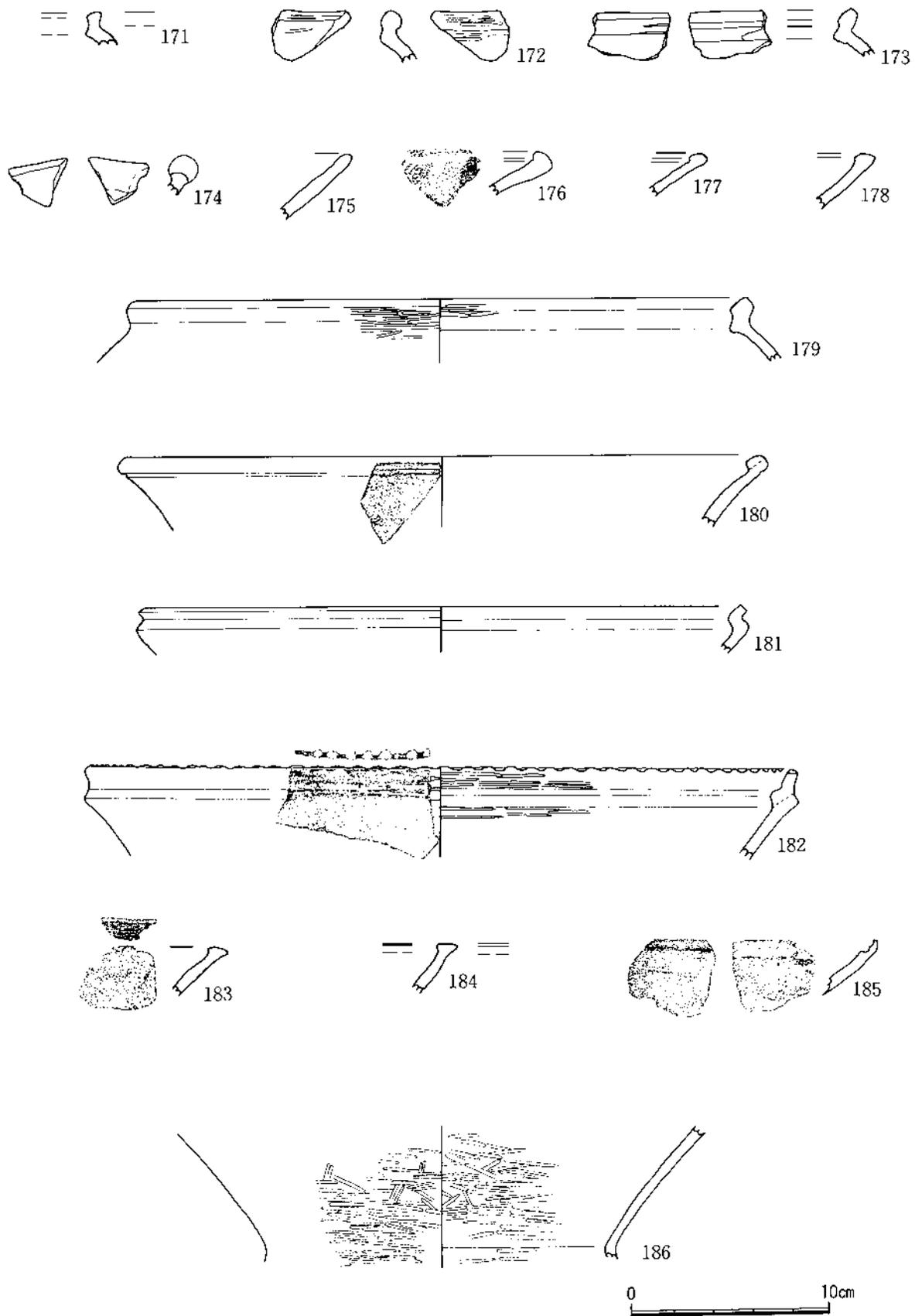


Fig. 35 縄文土器晩期3（晩期浅鉢4類）

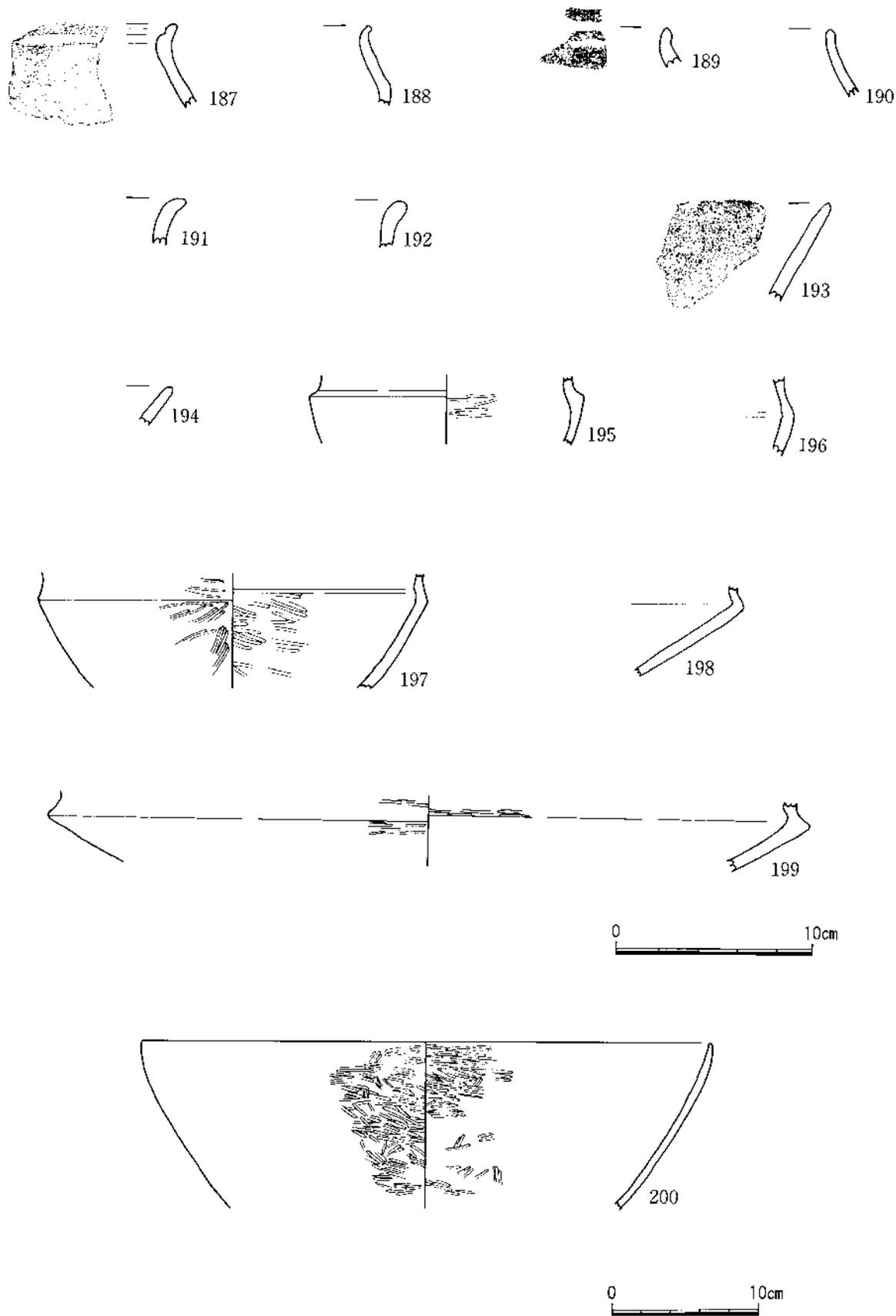


Fig. 36 縄文土器晩期 4 (晩期浅鉢 5 類)

深鉢1類 (Fig.37-201~207) 晩期中葉。

1類a - 口縁に鱗状突起を持つ深鉢で平縁のもの。(201~203) 突起部内面に爪型の圧痕が残るもの(201) や突起部貼付時の圧痕が観察できるものがある。(203)

1類b - 口縁に突起部を持ち、口唇にヘラ状原体による刻目を持つもの。(204)

1類c - 口縁に粘土塊を上方から押圧により貼付した形状の突起部を持つ。(205・206)

1類d - 口縁に鱗状突起を持ち、口縁は波状を呈するもの。(207)

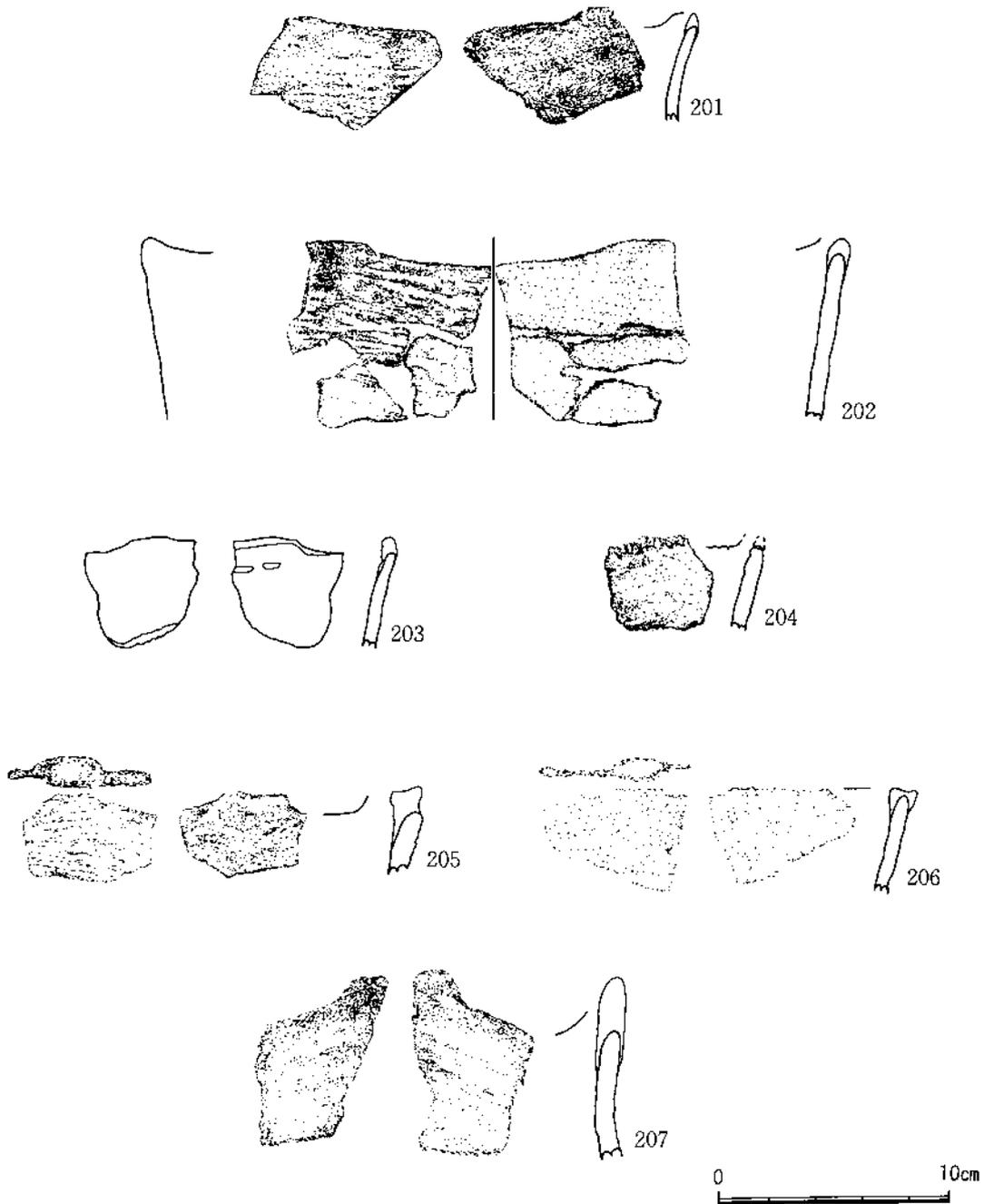


Fig. 37 縄文土器晩期5 (晩期深鉢1類)

深鉢 2 類 (Fig. 38-208~219) 晩期後半。

2 類 a - 口縁外面に刻目突帯をもち、口唇に突帯と同一原体 (ヘラ状原体) 刻み目を施すもの。
(208~216・218・219)

2 類 b - 口縁外面に刻目突帯をもち、口唇に貝殻腹縁による刻み目を施すもの。(217)

なお、217はⅡ-4区出土、218・219はⅢ-4区出土土器で、それ以外はⅢ-2区出土土器である。

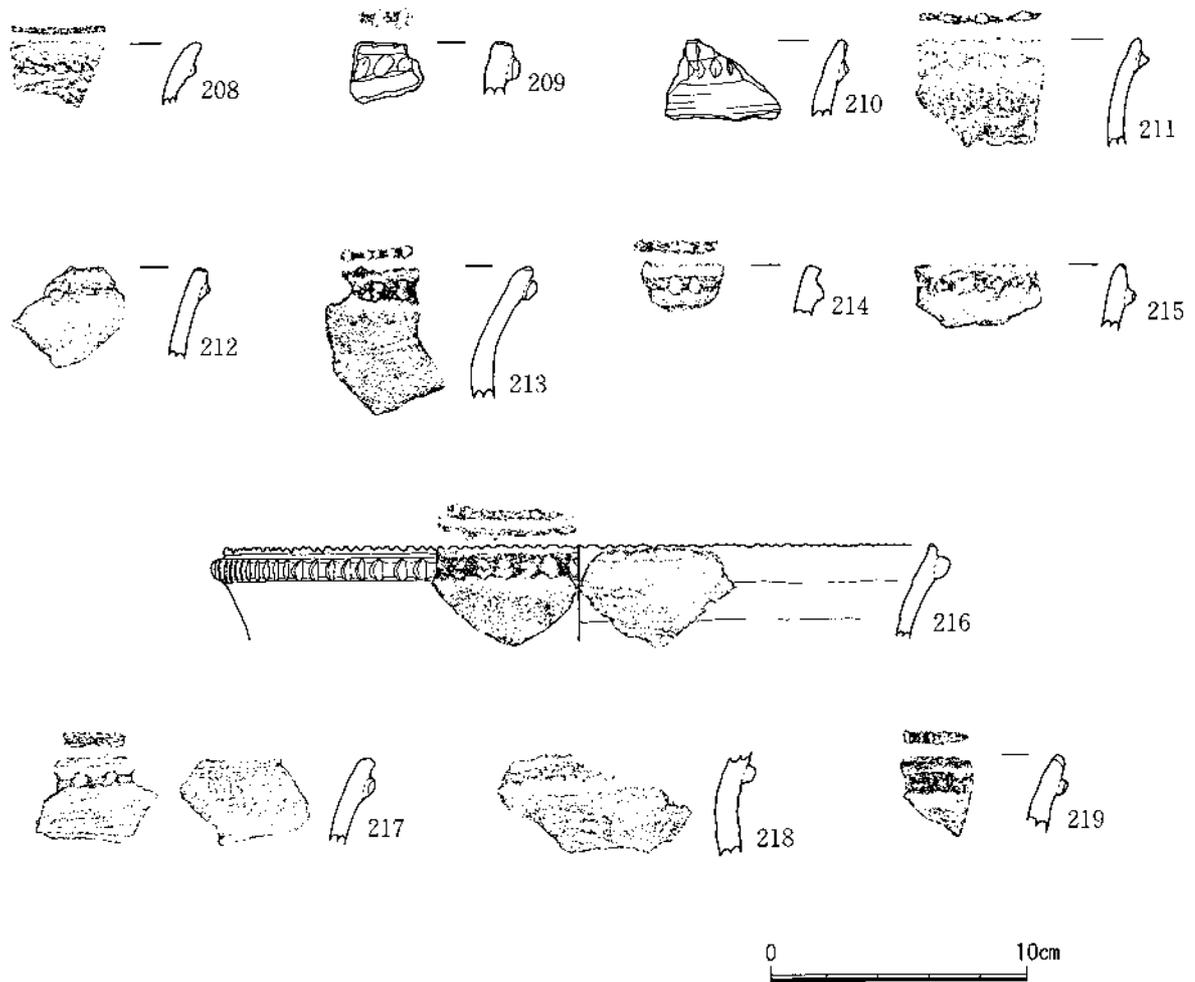


Fig. 38 縄文土器晩期 6 (晩期深鉢 2 類)

E. 粗製深鉢（後期・晩期）

包含層出土の小破片が多くを占める。後期あるいは晩期に属するものと考えられる。（少量だが前期中期の深鉢も混入する可能性がある。）出土層位での分類・時期特定が困難なため、口縁部の刻目の有無と形態による分類を行った。

口唇に刻目を持つものを1類、持たないものを2類とし、1類の中でも施文原体の違いにより、ヘラ状の原体によるものを1類a（220～232）、指頭等の押圧によるものを1類b（233～235）、貝殻腹縁によるものを1類c（236～256）とした。貝殻腹縁よる口唇の刻目は縄文後期にはほとんど例がなく、1類cは下層からの出土も見られないことから晩期の土器である可能性が高い。

2類については口唇形状の違いで、a－丸みを帯びたもの（257-276）、b－口唇が面をなすもの（277～283）、c－口唇が面をなし若干外方へ拡張するもの（284・285）に細分した。

F. 底部

平底・上げ底気味・上げ底・高台状を呈する、といった底面の形状の違いと、直線的・くびれる・大きく開くといった底部から体部への立ち上がり方の違いで分類した。

1類は平底の底部で、底径の違いにより10cm以内（1類a）と10cm以上（1類b）に分ける。2類は上げ底気味の底部。3類は上げ底で、円柱状の底部で体部が一旦くびれ内湾気味に立ち上がるもの（3類a）と底面からそのまま内湾して立ち上がるもの（3類b）に分類した。4類は高台状の底部で、極端に高台が高く他の土器と異なる形態のもの1点のみを4類bとし、それ以外は4類aとする。5類は上げ底気味の底部から大きく開く体部を有する土器で、鉢あるいは浅鉢の底部である。

多分に便宜的な分類で、器種の弁別も十分できず、5類を鉢とした以外は深鉢にしたのだが、その中に一定量の鉢あるいは浅鉢が含まれるものとする。

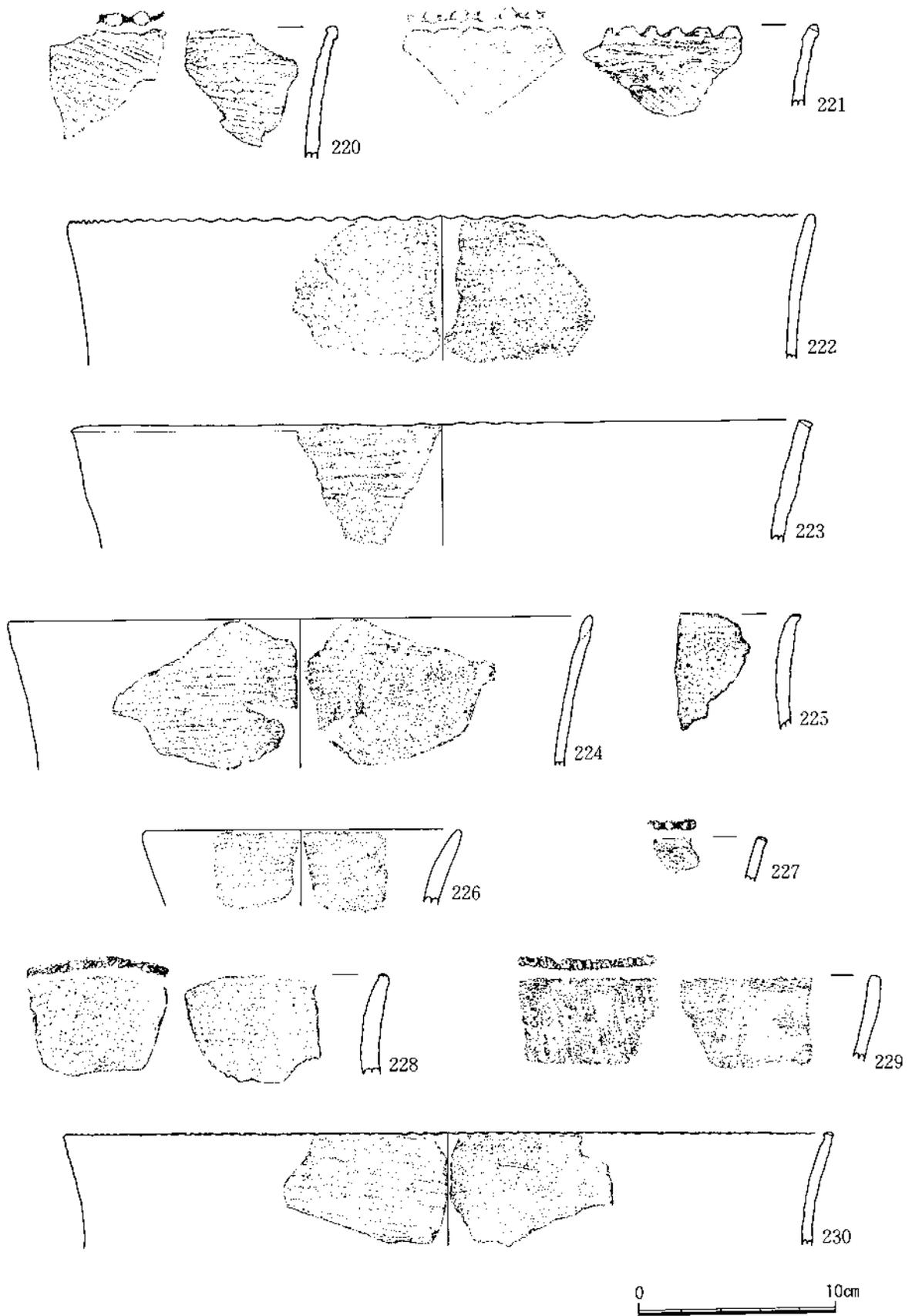


Fig. 39 縄文土器 粗製深鉢1 (1類a)

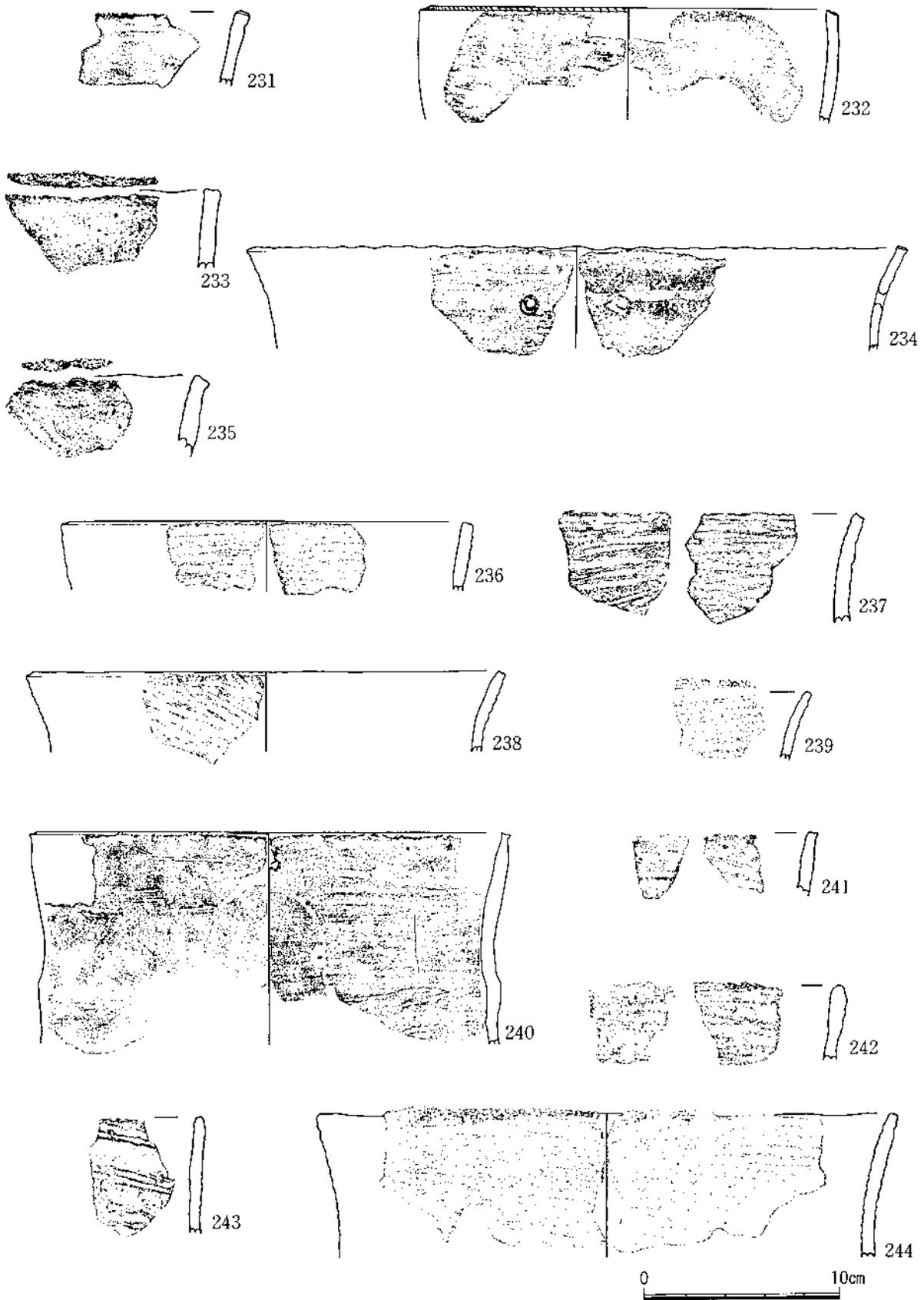


Fig. 40 縄文土器 粗製深鉢2 (1類 a 231・232、1類 b 233~235、1類 c 236~244)

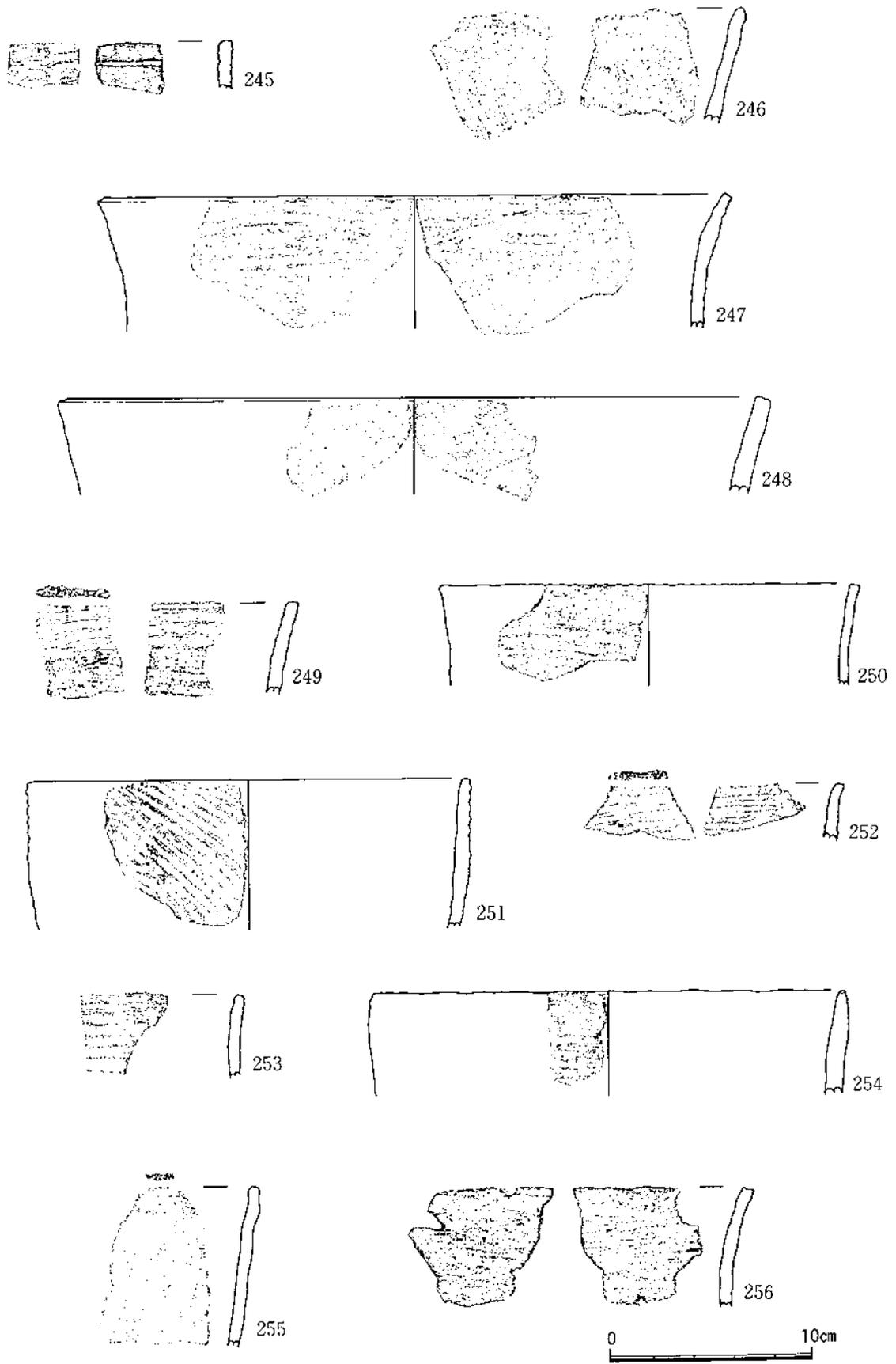


Fig. 41 縄文土器 粗製深鉢3 (1類c)

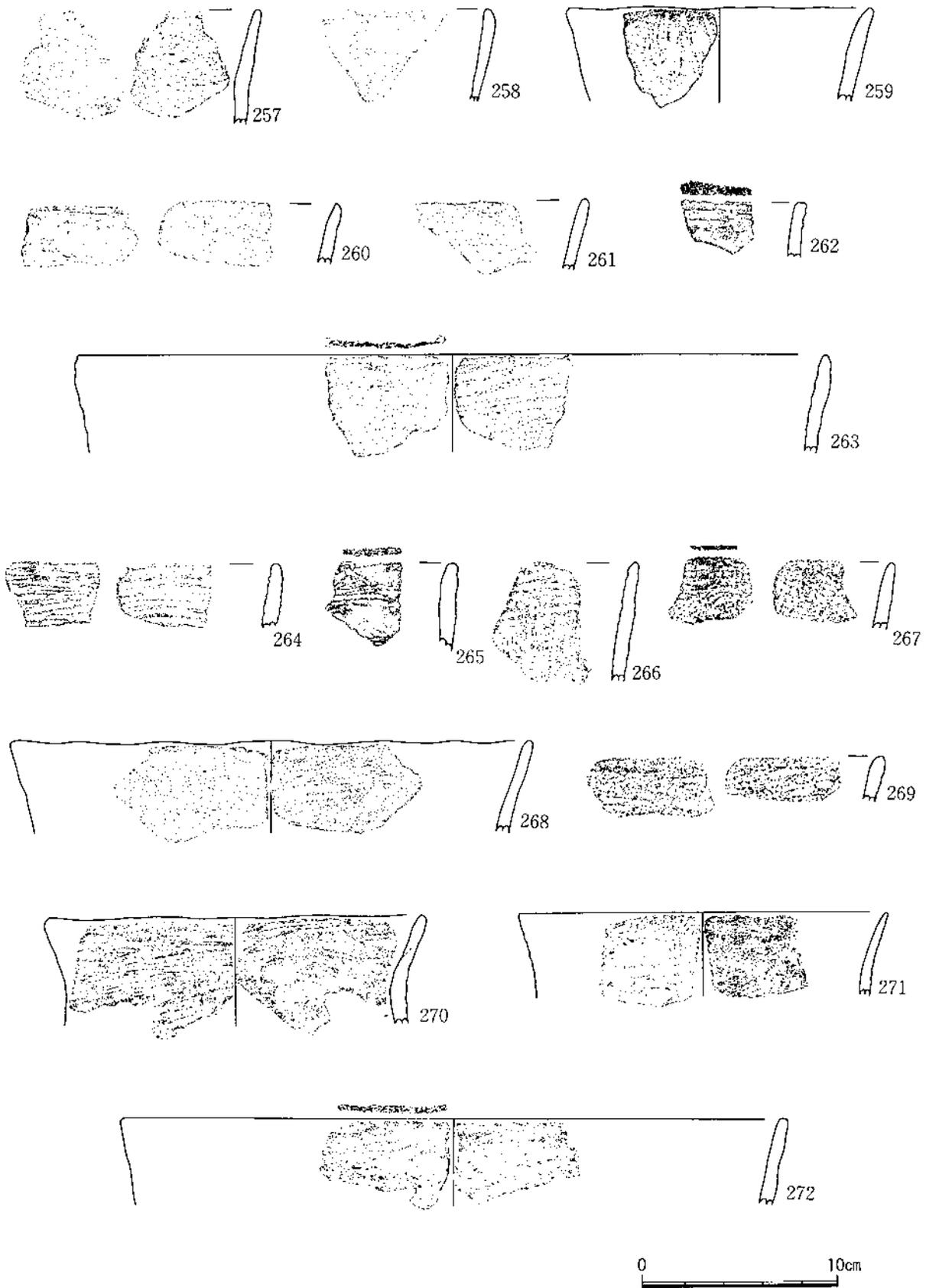


Fig. 42 縄文土器 粗製深鉢4 (2類 a)

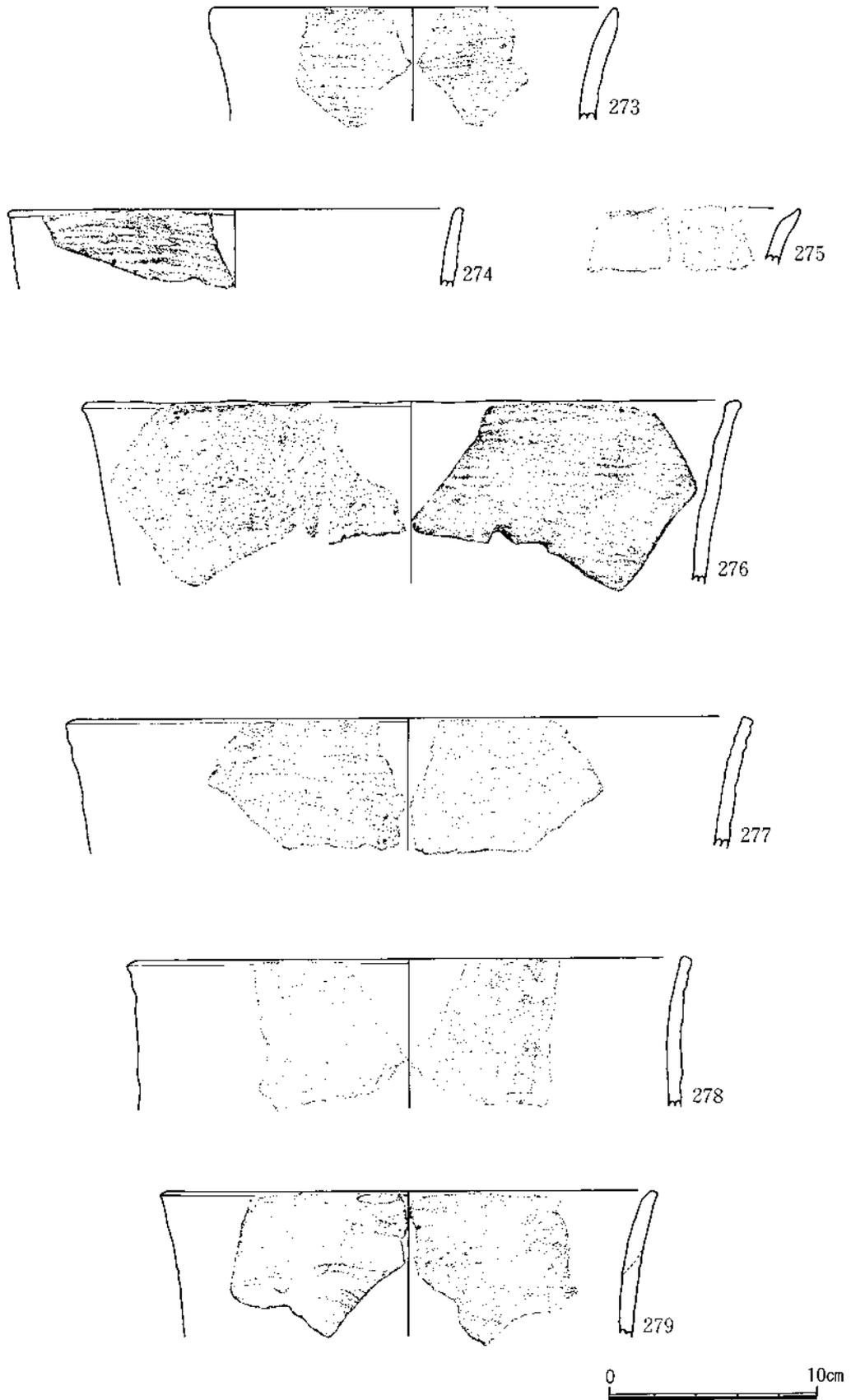


Fig. 43 縄文土器 粗製深鉢5 (2類a 273~276、2類b 277~279)

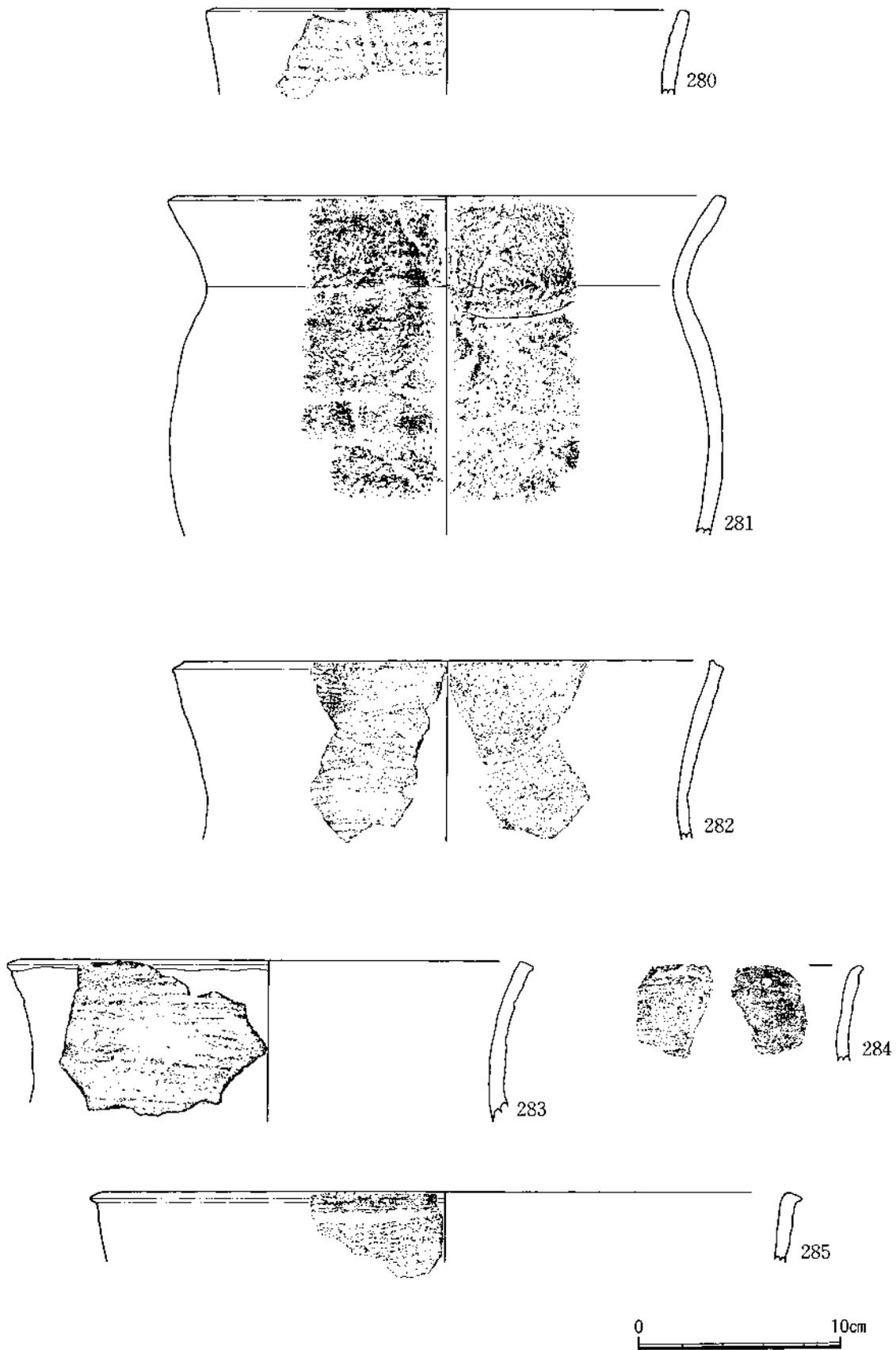


Fig. 44 縄文土器 粗製深鉢6 (2類b 280~283、2類c 284・285)

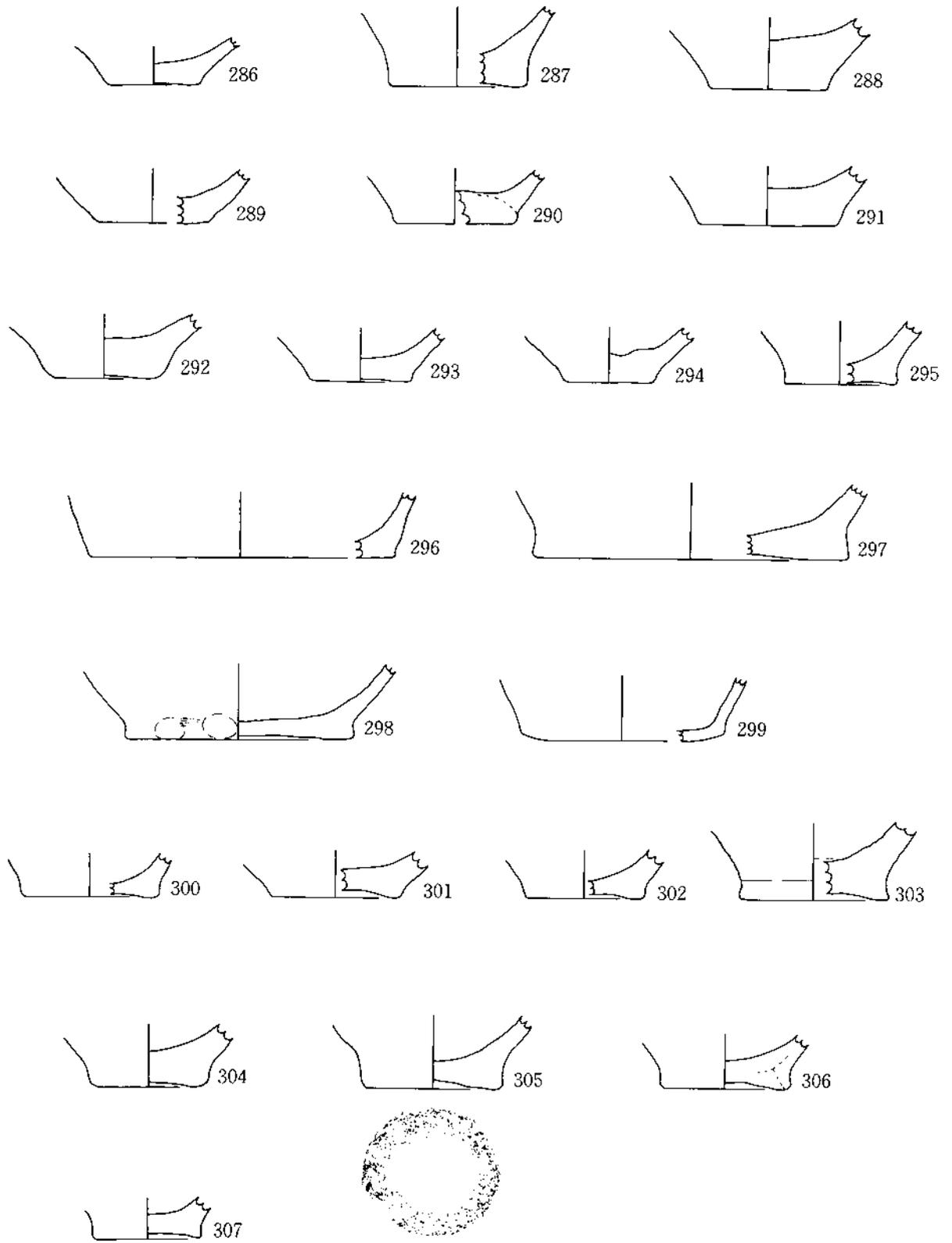


Fig. 45 繩文土器 底部1 (Ⅲ-2区)

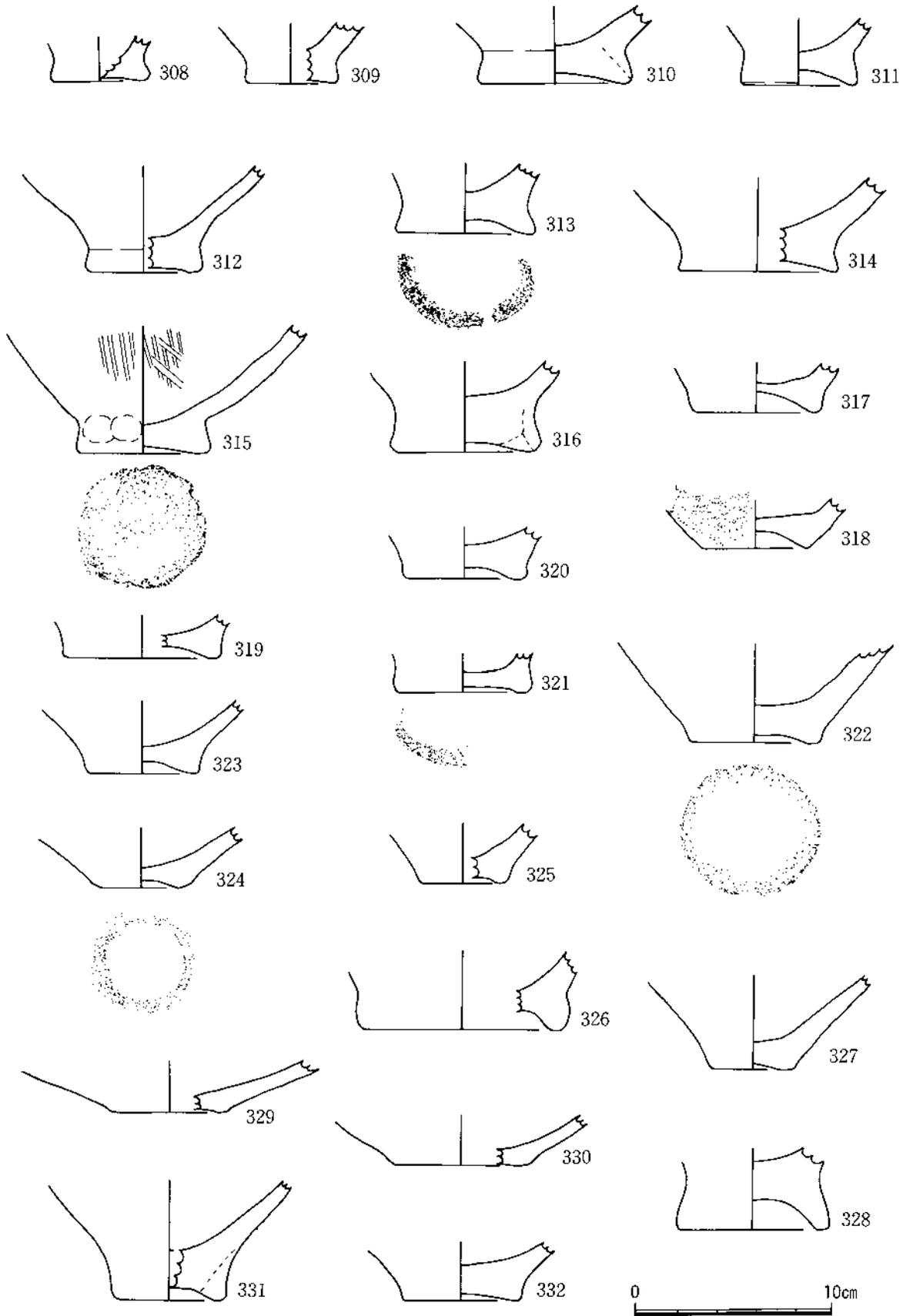


Fig. 46 縄文土器 底部 2 (Ⅲ-2区308~330、Ⅲ-4区331・332)

Tab. 4 縄文土器観察表(1)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層名	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文 原体	調整	特 徴
1	19	D-7 NS バンク	深鉢		前期	胎土は精選されており砂粒を少し含む。内外面灰色。		磨き	口縁部外面に1条の沈線を有し、沈線下に刺突による爪形文。
2	〃	J-I層 No.62	深鉢		前期	胎土は精選されており砂粒を少し含む。内外面褐色灰色。		磨き	口縁部外面に刺突による爪形文。口縁は肥厚、沈線1条。
3	〃	J-V層 B-2	深鉢		中期	精選された胎土。雲母片を含む。内外面明赤褐色。		ナデ	深鉢胴部破片。縄文原体を転がす方向で羽状を意識する。
4	21	J-I層 B-3-③	鉢		後期1類a	砂粒を多く含む。内外面とも灰白色。	貝殻擬縄文	ナデ	外面に2条の沈線で文様を施す。貝殻腹縁による擬縄文あり。
5	〃	J-I層 B-3-⑧	鉢		後期1類a	チャートの砂粒を若干含む。内外面ともぶい黄褐色。	貝殻擬縄文	ナデ	沈線と擬縄文。
6	〃	J-I層	鉢		後期1類a	チャートの砂粒を若干含む。内外面ともぶい黄褐色。	貝殻擬縄文	ナデ・条痕	2本の沈線で区画した中に擬縄文。
7	〃	J-I層 D-7	鉢		後期1類a	チャートの砂粒を若干含む。内外面ともぶい黄褐色。	貝殻擬縄文	ナデ	口唇に棒状原体による刻み目を施す。外面に擬縄文。
8	〃	J-V層 B-2 No.401	深鉢		後期1類b	チャートの砂粒を含む。内面にぶい褐色、外面褐色。	RL	内面ナデ	縄文施文後沈線で文様を施す。沈線は浅いが沈線脇の土手を残す。
9	〃	J-V層 TR-A 北	深鉢		後期1類b	チャート砂粒やや多し。石英・長石含む。内外面灰白色。	LR	内面ナデ 外面条痕	口唇は面をなし、LRの縄文を施す。外面は3条の沈線施文後、LRの縄文施文。
10	〃	J-I層 No.181	深鉢		後期1類c	砂粒多く含む。内面にぶい橙褐色、外面灰色。		ナデ	波状口縁。波頂部は肥厚、口縁外面に指頭押圧による段部を形成する。
11	〃	J-V層 B-3 No.302	深鉢		後期1類c	チャートの砂粒をやや多く含む。内面灰白色、外面黄灰色。	RL	ナデ	波状口縁で口縁部は肥厚する。縄文地に短沈線と横位の沈線を組み合わせて施文、波頂部は沈線を環状にめぐらせる。
12	〃	J-I層 TR-A ③	鉢		後期1類d	砂粒やや多く含む。チャート。内面にぶい黄褐色、外面浅黄褐色。		磨耗顕著	外面に沈線による区画文あり。
13	〃	J-I層 TR-A ③	鉢		後期1類d	砂粒を若干含む。内外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	沈線による区画文。
14	〃	J-I層 B-3-③	鉢		後期1類d	砂粒やや多く含む。内面浅黄褐色、外面にぶい褐色。		ナデ	口縁はわずかに内傾する面をなし、外面に沈線による区画文。
15	〃	J-K層 B-2	鉢		後期1類d	砂粒多く含む。チャート・長石・石英。内面にぶい黄褐色、外面灰黄色。		内面ナデ 外面条痕 後ナデ	口縁外面に沈線による区画文あり。
16	〃	NS バンク	鉢		後期1類d	細砂粒を若干含む。内面にぶい黄褐色、外面にぶい褐色。		磨耗顕著	外面に沈線による区画文あり。
17	〃	J-V層 B-3	鉢		後期1類d	砂粒多し。チャート。内面浅黄褐色、外面黄灰色。		磨耗顕著	外面に沈線による区画文あり。
18	〃	J-I層 TRA-③	鉢		後期1類d	砂粒やや多く含む。チャート。内面にぶい黄褐色、外面浅黄褐色。		磨耗顕著	外面に沈線による区画文あり。
19	〃	J-V層 B-3	鉢		後期1類d	砂粒やや多く含む。内面灰白色、外面にぶい黄褐色。		ナデ	波状口縁。口唇に刻みをもつ。外面に沈線により施文。
20	〃	J-I層 No.170	深鉢		後期1類e	チャートの砂粒を含む。内面にぶい褐色、外面灰色。		内面ナデ 外面条痕	条痕地に沈線で山形文(残3条)を描く。
21	〃	J-V層 C-4	深鉢		後期1類e	チャートの砂粒をやや多く含む。内外面ともぶい黄褐色。		条痕	条痕地に沈線で山形文(残3条)を描く。沈線脇に土手を残す。
22	〃	J-V層 B-3	深鉢		後期1類e	砂粒やや多し。石英・長石含む。内面灰色、外面灰白色。		内面ナデ 外面条痕	波頂部をわずかに肥厚させる波状口縁で沈線による区画文を有す。沈線脇の土手を残す。
23	〃	J-V層 TRDNo.1	深鉢		後期1類e	砂粒やや多し。石英・長石含む。内面灰色、外面浅黄色。		内面ナデ 外面条痕	条痕地に沈線による区画文を有す。沈線脇の土手を残す。
24	〃	J-V層 B-3	深鉢		後期1類e	石英・長石含む。内面灰白色、外面にぶい黄褐色。		内面ナデ 外面条痕	条痕地の深鉢。
25	〃	TR-A 北 (深掘り)	深鉢		後期1類e	チャートの砂粒をやや多く含む。内外面ともぶい黄褐色。		条痕	条痕地に沈線文を施す。
26	〃	J-V層 B-3	深鉢		後期1類e	砂粒やや多し。石英・長石含む。内面灰黄色、外面灰黄褐色。		内面ナデ 外面条痕	条痕地に沈線文を施す。沈線脇の土手を残す。
27	〃	J-V層 C-3	深鉢		後期1類e	チャートの砂粒をやや多く含む。内外面とも灰黄褐色。		条痕	条痕地に沈線文を施す。
28	22	試 TR4	鉢		後期2類a	精選された胎土。雲母・石英・角閃石を含む。内外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。貝殻腹縁による擬縄文施文。
29	〃	J-I層	鉢		後期2類a	砂粒を若干含む。長石。内外面褐色灰色。	RL	ナデ・磨き	2本沈線による磨消縄文。波状口縁。
30	〃	J-I層	鉢		後期2類a	細砂粒を含む。雲母片が観察される。内面黒褐色、外面黄灰色。		ナデ	2本沈線による磨消縄文。
31	〃	J-I層	鉢		後期2類a	精選された胎土。雲母を多く含む。内外面灰黄色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。
32	〃	J-I層	鉢		後期2類a	砂粒を若干含む。長石多し。内外面灰黄褐色。	LR	不明	2本沈線による磨消縄文。
33	〃	J-I層	鉢		後期2類a	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。

Tab. 5 縄文土器観察表(2)

図版番号	挿図番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
34	22	J-I層 B-3-③	鉢		後期2類a	チャートの砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。
35	〃	D-7 NSバンク	鉢		後期2類a	精選された胎土。長石を多く含む。内面黒褐色、外面褐色。	不明瞭	ナデ	2本沈線による磨消縄文。
36	〃	J-I層 TR-A	鉢		後期2類a	精選された胎土。内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色。	RL	磨き	2本沈線による磨消縄文。
37	〃	J-III層	鉢		後期2類a	精選された胎土。雲母・長石を含む。内外面黒褐色。	RL	磨き	2本沈線による磨消縄文。
38	〃	J-V層 No.K-7	鉢		後期2類a	砂粒を若干含む。長石多し。内外面褐色。	RL	磨き	2本沈線による磨消縄文。
39	〃	J-II層 B-3	鉢		後期2類b	細砂粒を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL	磨き	3本沈線による磨消縄文。
40	〃	J-I層 B-3-②	鉢		後期2類b	チャートの砂粒を若干含む。内面にぶい黄褐色、外面浅黄褐色。	RL	丁寧なナデ	3本沈線による磨消縄文。
41	〃	J-V層 B-3	深鉢		後期2類	チャートの砂粒を多く含む。内外面灰白色。	RL	条痕後ナデ	胴部破片
42	23	J-I層 B-2-⑬	深鉢		後期3類a	チャートの砂粒を多く含む。内外面灰白色。		条痕・ナデ	口縁部は内面が肥厚し、口唇は内傾する面をなす。
43	〃	J-II層	深鉢		後期3類a	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。	RL	条痕	口縁部は内面を肥厚させた後縄文を施し、さらに条痕で仕上げる。
44	〃	TR-J	深鉢		後期3類b	細砂粒をや多く、長石を多く含む。内外面褐色。	RL	不明	口縁部はわずかに肥厚し、内外面に縄文帯をもつ。内面縄文帯下に1本の沈線をめくらせる。
45	〃	TRA-⑦	深鉢		後期3類c	チャートの砂粒を若干含む。内外面灰黄褐色。	L	ナデ	口縁部内外面に縄文施文。無節のLの縄文。
46	〃	J-II層	深鉢		後期3類c	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄色。	LR	ナデ	口縁部内外面に縄文施文。
47	〃	J-V層 C-5	深鉢		後期3類c	胎土は精選されている。内外面にぶい赤褐色。	RL	磨き	口縁部内外面に縄文施文。
48	24	B-2	鉢		後期4類a	胎土は精選されている。内面にぶい褐色、外面にぶい褐色。	LR	磨き	3本沈線の磨消縄文。
49	〃	J-V層 C-3	鉢		後期4類a	胎土は精選され、雲母角閃石を含む。内外面にぶい褐色。	RL	ナデ磨き	2本沈線の磨消縄文。
50	〃	J-I層 C-3-15	鉢		後期4類a	胎土は精選され、雲母角閃石を含む。内外面浅黄褐色。		ナデ磨き	2条一単位の沈線を持つ。
51	〃	J-I層 B-3-4	鉢		後期4類a	胎土は精選されている。内面にぶい黄褐色、外面褐色。		ナデ	2条一単位の沈線を持つ。
52	〃	J-III層 C-4	鉢		後期4類a	胎土は精選され、雲母含。内面にぶい赤褐色、外面赤褐色。		磨き	波状口縁による鉢で、沈線により施文。
53	〃	J-I層 TR-B	鉢		後期4類a	胎土は精選され、雲母角閃石含。内外面にぶい黄褐色。		ナデ	くの字状に折れ曲がった口縁。外面には口縁下に1条、屈曲部に2本の沈線をめくらす。
54	〃	J-V層 C-4	鉢		後期4類a	胎土は精選され、雲母角閃石含。内面にぶい黄褐色。		ナデ	くの字状に折れ曲がった口縁。
55	25	J-I層 SK-11	深鉢		後期5類a	チャートの砂粒を多量に含む。内面浅黄褐色、外面にぶい褐色。		ナデ	口縁は肥厚し、外面に幅10mmの縄文帯をもつ。
56	〃	J-I層 B-3	深鉢		後期5類a	チャートの砂粒を若干含む。内外面にぶい黄褐色。	不明	ナデ	口縁はわずかに肥厚する。外面に幅6mmの縄文帯。
57	〃	J-V層 C-3	深鉢		後期5類a	チャートの砂粒を若干含む。内外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	口縁はわずかに肥厚する。外面に幅6mmの縄文帯。
58	〃	J-V層 C-4	深鉢		後期5類a	チャートの砂粒を多量に含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	口縁は肥厚し、外面に幅9mmの縄文帯をもつ。
59	〃	J-I層 B-3-2	深鉢		後期5類b	チャートの砂粒を若干含む。内外面にぶい黄褐色。	LR	ナデ	口縁はわずかに肥厚し、内面に1本の沈線をめくらせる。口唇内外面に縄文施文。
60	〃	J-I層 B-3-1	深鉢		後期5類b	チャートの砂粒を多量に含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	口縁はわずかに肥厚し、内面に1本の沈線をめくらせる。口唇内外面に縄文施文。
61	26	J-I層 B-3 No.224	深鉢		後期6類a	チャートの砂粒を少し含む。内外面灰色。	RL	ナデ	口唇は面をなし、口縁外面に幅8mmの縄文帯を持つ。頸部無文。
62	〃	J-I層 B-2-II	深鉢		後期6類a	砂粒を少し含む。内面褐色、外面灰褐色。	RL	ナデ	口唇は面をなし、口縁外面に幅10mmの縄文帯を持つ。頸部無文。
63	〃	TR-A-⑥	深鉢		後期6類a	砂粒を少し含む。内外面灰白色。	RL	ナデ	口唇は丸く収める。口縁外面に幅10mmの縄文帯を持つ。頸部無文。
64	〃	J-III層 B-4	深鉢		後期6類a	砂粒を少し含む。内外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	口唇は丸く収める。口縁外面に幅20mmの縄文帯を持つ。頸部無文。
65	〃	J-III層	深鉢		後期6類a1	砂粒をやや多く含む。内面浅黄褐色、外面にぶい黄褐色。	L無節	ナデ	口唇は丸く収める。口縁外面に幅12mmの縄文帯を持つ。
66	〃	J-V層	深鉢		後期6類a1	チャートの砂粒をやや多く含む。内外面浅黄褐色。	RL	ナデ磨き	口唇は丸く収める。口縁外面に幅6mmの縄文帯を持つ。頸部無文。
67	〃	J-V層 C-3 No.1	深鉢	口径22.8	後期6類a1	チャートの砂粒を少し含む。内面灰白色、外面にぶい褐色。	RL	ナデ条痕	口唇は面をなし、口縁外面に幅8mmの縄文帯を持つ。頸部無文で胴部以下は縄文を施す。

Tab. 6 縄文土器観察表(3)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層名	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文 原体	調整	特 徴
68	26	J-I層 TR-D	深鉢		後期 6類a2	胎土は精選されており長石粒を含む。内外面にぶい黄褐色。	RL	磨き	丸みを帯びた胴部から外反気味に口縁に至る。口縁外面わずかに肥厚し縄文帯を持つ。補修孔あり。
69	〃	J-I層 B-3-②	深鉢		後期 6類a2	胎土は精選され、長石を含む。内面黒色、外面浅黄褐色。	RL	磨き	口縁は外反気味。口縁外面わずかに肥厚し縄文帯を持つ。
70	〃	J-I層	深鉢		後期 6類a2	胎土は精選され、長石を含む。内外面灰黄色。	RL	丁寧なナデ	口縁は外反気味。口縁外面わずかに肥厚し縄文帯を持つ。
71	〃	J-I層 B-3-①	深鉢		後期 6類a2	胎土は精選され、長石粒を含む。内外面灰黄褐色。	LR	磨き	口縁は外反気味。口縁外面わずかに肥厚し縄文帯を持つ。
72	〃	J-I層 B-3-②	深鉢		後期 6類a2	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。	不明	不明	口縁は外反気味。口縁外面わずかに肥厚し縄文帯を持つ。
73	〃	SK-2 No.2	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内外面とも浅黄褐色。	RL	ナデ磨き	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
74	〃	SK-2	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面とも浅黄褐色。	LR	ナデ磨き	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
75	〃	TR-A-⑧	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面灰色、外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
76	〃	J-I層 C-3-⑬	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面灰色、外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
77	〃	J-I層 B-3-②	深鉢		後期 6類a	胎土は精選され、雲母角閃石を含む。	RL	磨き	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
78	〃	J-I層 B-3	深鉢		後期 6類a	精選された胎土。内外面浅黄褐色。	RL	ナデ磨き	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
79	〃	J-I層 B-3-②	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面とも黒灰色。	LR	磨き	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
80	〃	J-V層 C-3	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面とも浅黄褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
81	〃	J-V層	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面褐色。	LR	ナデ	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
82	〃	J-I層 No.190	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面浅黄褐色。	LR	ナデ	胴部外面に縄文施文。頸部無文。
83	〃	J-I層 TR-A-⑨	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面ともぶい褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。
84	〃	J-I層 B-3 No.13	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面明褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。
85	〃	J-I層 C3 No.211	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面淡黄色。	LR	ナデ	胴部外面に縄文施文。
86	〃	J-I層 B-2	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面黄褐色、外面灰黄褐色。	LR	ナデ	胴部外面に縄文施文。
87	〃	J-I層 B-3-④	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面とも浅黄褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。
88	〃	J-I層 B-3	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。	RL	磨き	胴部外面に縄文施文。
89	〃	TR-A-⑬	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内外面とも灰白色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。節の整った縄文。
90	〃	SK-2			後期 6類a	砂粒を少量含む。雲母含。内面黒色、外面にぶい黄褐色。	RL	ナデ	胴部外面に縄文施文。
91	〃	TR-A-⑬	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面にぶい褐色、外面灰白色。	RL		深鉢の胴部。外面に縄文施文。
92	〃	TR-A-⑬	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内面にぶい褐色、外面にぶい黄褐色。	RL	内面ナデ	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
93	〃	J-I層 B-3	深鉢		後期 6類a	砂粒を多く含む。内外面明褐色。	RL	内面ナデ	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
94	〃	J-I層 C-4-⑬	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内面にぶい黄褐色、外面にぶい赤褐色。	RL	条痕	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
95	〃	J-II層 B-3	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面黒褐色、外面浅黄褐色。	RL	ナデ	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
96	27	J-II層 C-3	深鉢		後期 6類a	砂粒を少し含む。内面灰色、外面にぶい褐色。	RL	ナデ	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
97	〃	J-III層 B-2	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面にぶい褐色、外面灰白色。	RL		深鉢の胴部。外面に縄文施文。
98	〃	J-III層 B-3	深鉢		後期 6類a	精選された胎土で長石粒を含む。内外面明褐色。	RL	磨き	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
99	〃	J-V層 B-3	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色。	LR	磨き	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
100	〃	J-V層 TR-A南	深鉢		後期 6類a	砂粒をやや多く含む。内面灰黄褐色、外面褐色。	LR	内面ナデ	深鉢の胴部。外面に縄文施文。
101	〃	J-I層 B-2-II	深鉢		後期 6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL LR	ナデ	口縁内面にLR 外面にRLの縄文を施文、内面に短沈線を配する。
102	〃	J-II層	深鉢		後期 6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	口縁部を肥厚させ外面に縄文施文。
103	〃	J-V層 C-4	深鉢		後期 6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	口縁部を肥厚させ外面に縄文施文。

Tab. 7 縄文土器観察表(4)

図版番号	挿図番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
104	27	J-I層 TR-D	深鉢		後期6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	不明	ナデ条痕	縄文地深鉢の頸部。
105	〃	J-I層 TR-A	深鉢		後期6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	縄文地深鉢の胴部。
106	〃	J-V層	深鉢		後期6類b	精選された胎土で雲母を含む。内外面赤褐色。	RL	ナデ	縄文地深鉢の胴部。
107	〃	J-I層 C-4-15	鉢		後期6類c	内外面黄灰色。			3本沈線による磨消縄文。波状口縁。
108	〃	J-I層 No.163	鉢		後期6類d	精選された胎土で雲母を含む。内外面黒褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。
109	〃	表採	鉢		後期6類d	精選された胎土で雲母を含む。内外面黒褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。頸部の屈曲部上下に沈線を配し沈線間に縄文施文。
110	〃	J-I層 B-3	鉢		後期6類d	精選された胎土で雲母を含む。内外面黒褐色。	RL	ナデ	2本沈線による磨消縄文。
111	〃	J-V層 C-6	鉢		後期6類e	精選された胎土で雲母を含む。内面褐色、外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	口縁外反気味、口唇に5mm幅の縄文帯を持ち頸部無文。胴部にも縄文施文。
112	〃	J-I層 B-2	鉢		後期6類f	精選された胎土で雲母を含む。内面黒色、外面にぶい黄褐色。	RL	磨き	口縁部外面を肥厚させ肥厚部に縄文施文。肥厚部下に1本の沈線。
113	〃	J-I層 C-3 No.211-212	鉢		後期6類g	砂粒を多く含む。内面褐色、外面褐色。		磨耗顕著	外面に2本あるいは3本を1単位とする平行線による文様を施す。
114	〃	J-I層 B-3 No.113	深鉢		後期6類h	砂粒を多く含む。内面褐色、外面褐色。	RL	ナデ	口縁を肥厚させ外面に縄文施文後沈線を描く。口唇面をなし縄文施文。
115	〃	J-I層 C-3-⑩	鉢		後期6類h	砂粒を多く含む。内面褐色、外面褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
116	〃	J-I層 B-3-⑥	鉢		後期6類h	砂粒を若干含む。内面褐色、外面黒色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
117	〃	J-I層 TR-D	鉢		後期6類h	精選された胎土。内外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
118	〃	J-I層 TR-D西	鉢		後期6類h	精選された胎土。内外面赤褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
119	〃	TR-A-③	鉢		後期6類h	砂粒を若干含む。内面明赤褐色、外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
120	〃	J-I層 TR-D西	鉢		後期6類h	胎土は精選され、雲母を含む。内面赤褐色、外面黒褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。
121	〃	J-I層 No.84	鉢		後期6類h	細砂粒を多く含む。内外面褐色。		ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。胴部破片。
122	〃	J-I層 B-3	鉢		後期6類h	精選された胎土。雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	LR	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。胴部破片。
123	〃	J-II層 B-3	鉢		後期6類h	精選された胎土。雲母を含む。内外面褐色。	LR	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。胴部破片。
124	〃	J-IV層 C-4	鉢		後期6類h	精選された胎土。雲母を含む。内面暗赤褐色、外面にぶい赤褐色。	LR	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。胴部破片。
125	〃	J-V層 C-3	鉢		後期6類h	精選された胎土。雲母を含む。内外面にぶい赤褐色。	RL	ナデ	縄文地に沈線で文様を施す。胴部破片。
126	28	J-I層 No.205	鉢		後期7類	精選された胎土、雲母、角閃石を含む。内面褐色、外面黄灰色。		ナデ磨き	口縁外面に3本の凹線を施す。くびれ部と1・2条目の凹線の境界に刻み目を施す。
127	〃	J-I層 B-3 No.231	鉢		後期7類	砂粒やや多く含む。内面黒褐色、外面浅黄褐色。		ナデ磨き	口唇を丸く収め、刻み目を施す。口縁外面に2条の凹線が残る。
128	〃	J-III層	鉢		後期7類	雲母片を多く含む。内面灰白色、外面にぶい黄褐色。		ナデ磨き	くびれ部に段を形成、段上に刻み目を施す。
129	29	J-III層 TR-C	深鉢		後期8類	精選された胎土。内面暗赤褐色外面赤褐色。	LR	ナデ	波状口縁で、外面に2本1単位の沈線で区画された文様を持つ。沈線間に縄文施文。くびれ部上の沈線に刺突文。
130	30	J-I層 C-3-3	鉢		後期	砂粒やや多く含む。内外面にぶい黄褐色。		ナデ	内面に1本の沈線をめぐらせる。外面は縄文地に沈線で文様を施す。
131	〃	J-I層 B-2	鉢		後期	砂粒やや多く含む。内外面にぶい黄褐色。		ナデ	縄文地に沈線。
132	〃	J-I層 B-2	鉢		後期	砂粒やや多く含む。内外面にぶい黄褐色。		磨き	3本沈線の磨消縄文。
133	〃	J-I層 B-3	注口土器		後期	砂粒やや多く含む。内面黄褐色、外面黄灰色。		磨耗顕著	注口土器の注口部と考えられるが、一部破片のみで詳細不明。
134	〃	J-V層	鉢		後期	砂粒多く含む。内面浅黄褐色、外面灰色。		ナデ	擬縄文。
135	31	I-2区 VI層	深鉢		後期	砂粒を若干含む。内外面とも褐色。		ナデ	3本沈線による磨消縄文。
136	32	J-IV層 C-6	深鉢		後期深鉢	砂粒をやや多く含む。内外面褐色。	RL	ナデ	口唇は丸く収める。
137	〃	J-V層 C-4	深鉢		後期深鉢	砂粒を若干含む。内外面褐色。		ナデ	口唇は丸く収める。

Tab. 8 縄文土器観察表(5)

図版番号	挿図番号	出土地点・層名	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
138	32	J-V層 C-4	深鉢		後期深鉢	砂粒を若干含む。内面にぶい黄橙色、外面灰色。		磨き	口唇は横方向の強いナデにより面をなす。
139	〃	J-V層 C-3	深鉢		後期深鉢	砂粒をやや多く含む。内外面とも浅黄橙色。		ナデ	口唇は横方向の強いナデにより面をなす。
140	〃	J-V層 C-4	深鉢		後期深鉢	砂粒をやや多く含む。内外面とも浅黄橙色。		ナデ	口唇は丸く収める。
141	〃	J-I層 TR-A-1	深鉢		後期深鉢	砂粒を若干含む。内面灰白色、外面にぶい橙色。		磨き	口唇は丸く収める。
142	33	J-I層 B-3-③	浅鉢	口径 22.0	晩浅 1類a	砂粒を少し含む。内面黒褐色、外面浅黄褐色。		ナデ	口縁は強く屈曲し短く直立する。外面に一条の沈線を巡らせる。
143	〃	試TR4	浅鉢		晩浅 1類a	砂粒をやや多く含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。		ナデ	口縁は強く屈曲し短く直立する。外面に一条の沈線を巡らせる。
144	〃	J-I層 B-3-⑨	浅鉢	口径 33.2	晩浅 1類a	砂粒を少し含む。内外面灰色。		ナデ	口縁は強く屈曲し短く直立する。外面に一条の沈線を巡らせる。横方向の強いナデのため内面に弱い段部を形成。
145	〃	D-7	浅鉢		晩浅 1類a	砂粒をやや多く含む。内外面黒褐色。		ナデ	口縁は強く屈曲し短く直立する。外面に一条の沈線を巡らせる。横方向の強いナデのため内面に弱い段部を形成。
146	〃	J-I層 D-6	浅鉢		晩浅 1類b	砂粒を少し含む。内外面灰白色。		磨耗顕著	大きく開く体部から口縁部は屈曲し上方へ立ち上がる。外面に一条の沈線。
147	〃	SD-29	浅鉢		晩浅 1類b	砂粒を少し含む。内面黒褐色、外面浅黄褐色。		磨耗顕著	大きく開く体部から口縁部は屈曲し上方へ立ち上がる。外面に一条の沈線。
148	〃	J-I層 B-2-A	浅鉢		晩浅 1類c	胎土は精選されており砂粒を少し含むのみ。内外面灰黄褐色。		磨き	口縁内面に沈線。外面は稜を成しわずかに上方へ屈曲。
149	〃	J-I層 No.113	浅鉢	口径 13.0	晩浅 2類	胎土は精選されている。内外面黒色。		磨き	口縁は2回屈曲した後外反して口唇に至る。
150	〃	J-I層 C-3	浅鉢	口径 21.4	晩浅 2類	胎土は精選されている。内外面褐色。		磨き	口縁は緩やかに屈曲した後大きく開いて口唇に至る。
151	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内面灰色、外面灰白色。		磨き	口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。
152	〃	J-II層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内外面灰色。		磨き	口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。
153	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内面黒色、外面にぶい橙色。		磨き	口縁部内外面に沈線をめぐらす。
154	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内面黒褐色、外面灰褐色。		磨き	口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。
155	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内面灰黄色、外面にぶい黄褐色。		磨き	口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。
156	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内外面にぶい黄褐色。		磨き	口縁部内面に一条の沈線をめぐらす。
157	〃	J-IV層	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内外面褐色。		磨き	口縁は大きく外反し、口唇がわずかに肥厚、突起部を持つ。
158	〃	J-I層 TR-A	浅鉢		晩浅 2類	精選された胎土。内外面黄灰色。		磨き	口縁は大きく外反し、口唇がわずかに肥厚、突起部を持つ。
159	〃	J-II層	浅鉢		晩浅 3類	胎土は精選されており砂粒を少し含むのみ。内外面黄灰色。		磨き	屈曲した後大きく外方へ開く口縁。
160	〃	試 TR4	浅鉢		晩浅 3類	胎土は精選されている。内外面にぶい黄褐色。		磨き	口縁は2回屈曲した後外反して口唇に至る。
161	34	NSバンク D-7	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内外面とも橙色。		磨き	口縁は強く2回屈曲した後大きく開いて口唇に至る。
162	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内面灰色、外面灰黄色。		ナデ	口唇内面がわずかに肥厚する。
163	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内面褐色、外面灰黄褐色。		磨き	口縁部は大きく開き、口唇は面をなす。
164	〃	J-II層 B-2	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内面黒色、外面褐色。		磨き	口縁部は大きく開き、口唇は面をなす。
165	〃	J-III層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内外面とも灰黄色。		磨き	口縁部は大きく開き、口唇は面をなす。
166	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内外面とも黄灰色。		磨き	口縁部内面に1条の沈線をめぐらせる。
167	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内外面とも黄灰色。		磨き	胴部は口縁下で2段に屈曲した後肥厚する口唇に至る。
168	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内面灰色、外面浅黄褐色。		磨き	2段に屈曲する浅鉢胴部。
169	〃	SK-2	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土で、雲母を含む。内面灰黄褐色、外面黒褐色。		磨き	浅鉢の胴部。逆くの字状に強く屈曲、屈曲部上に一条の沈線をめぐらせる。
170	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 3類	精選された胎土。内面褐色、外面にぶい黄褐色。		磨き	浅鉢の胴部。逆くの字状に強く屈曲、屈曲部上に一条の沈線をめぐらせる。

Tab. 9 縄文土器観察表(6)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文 原体	調整	特 徴
171	35	NSバンク 中央サブトレ	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面とも褐灰色。		磨き	丸みを帯びた胸部から口縁は強く屈曲して短く立ち上がる。口唇内面が肥厚する。
172	〃	SD-29	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面とも灰黄色。		磨き	丸みを帯びた胸部から口縁は強く屈曲して短く立ち上がる。口唇内面が肥厚する。
173	〃	D-7	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内面にぶい黄褐色、外面にぶい橙色。		磨き	丸みを帯びた胸部から口縁は強く屈曲して短く立ち上がる。口唇内面が肥厚する。
174	〃	J-I層 B-3	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面とも橙色。		ナデ	リボン状突起。
175	〃	NSバンク D-7	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面とも橙色。		磨き	口縁は強く2回屈曲した後大きく開いて口唇に至る。口唇内面がわずかに肥厚する。
176	〃	J-I層 B3③103	浅鉢		晩浅 4類	砂粒をやや多く含む。内外面とも明褐色。		不明	口縁は大きく開いて立ち上がり、内面が肥厚する。
177	〃	J-I層 C-4	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面ともにぶい黄褐色。		不明	口縁は大きく開いて立ち上がり、内面が肥厚する。
178	〃	J-V層 B-2	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面ともにぶい黄褐色。		不明	口縁は大きく開いて立ち上がり、内面が肥厚する。
179	〃	TR-B	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内外面とも褐灰色。		磨き	丸みを帯びた胸部から口縁は強く屈曲して短く立ち上がる。口唇内面が肥厚する。
180	〃	TR-A	浅鉢		晩浅 4類	精選された胎土。内面灰黄褐色、外面褐色。		磨き	口縁は大きく開いて立ち上がり、内面が肥厚する。肥厚部はしっかりした造りで稜を成す。口縁外面に1条の浅い沈線を巡らせる。
181	〃	J-II層 C-4	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されており、雲母片を含む。内外面灰色。		磨耗顕著	口縁下で2段に屈曲する。
182	〃	J-I層 D-6	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されている。内面黒褐色、外面灰褐色。		磨き	口唇にヘラ状原体による刻目を有す。口縁部外面に段部を形成、内面に1条の突帯をめぐらす。
183	〃	J-I層 C-4	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されている。内面黒色、外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	口縁部は肥厚し、T字状を呈する。
184	〃	J-I層 C-4	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されている。内面灰白色、外面灰色。		磨耗顕著	口縁部は肥厚し、T字状を呈する。
185	〃	TR-A	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されている。内面黄灰色、外面暗灰黄色。		磨き	浅鉢の胸部破片。
186	〃	J-I層 No.159	浅鉢		晩浅 4類	胎土は精選されている。内面黒色、外面灰黄色。		磨き	頸部でくの字状に屈曲した後、大きく開いて立ち上がる。
187	36	J-I層 TR-A	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内面灰褐色、外面にぶい赤褐色。		ナデ磨き	内傾して立ち上がる頸部からくの字状に屈曲する口縁に至る。口唇部内面に1条の沈線をめぐらせる。
188	〃	J-I層	浅鉢		晩浅 5類	砂粒をやや多く含む。内外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	内傾して立ち上がる頸部からくの字状に屈曲する口縁に至る。
189	〃	J-I層 B-2	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選されており雲母を含む。内外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	内傾して立ち上がる口縁。口唇外面は肥厚する。
190	〃	TR-B No.B-5	浅鉢		晩浅 5類	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。		磨き	内傾して立ち上がる口縁。口唇外面は肥厚する。
191	〃	J-I層 B-3-6	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内外面にぶい黄褐色。		磨き	口縁部は外反し、丸味を帯びて肥厚する口唇に至る。
192	〃	J-V層 C-3	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内面にぶい黄褐色、外面にぶい褐色。		磨き	口縁部は外反し、丸味を帯びて肥厚する口唇に至る。
193	〃	J-I層 No.162	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選され、長石・雲母を含む。内外面にぶい黄褐色。		磨き	口唇は稜をなす。
194	〃	J-I層 B-2-8	浅鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内面にぶい黄褐色、外面灰黄褐色。		磨き	口唇は稜をなす。
195	〃	J-I層 C-4	浅鉢		晩浅 5類	砂粒をやや多く、長石を含む。内面褐灰色、外面にぶい黄褐色。		磨き	胸部は逆くの字状に屈曲する。
196	〃	J-I層 B-2	鉢		晩浅 5類	砂粒を多し。内外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	胸部は逆くの字状に屈曲する。
197	〃	J-I層 No.173	鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内面褐灰色、外面灰黄褐色。		磨き	胸部は逆くの字状に屈曲する。
198	〃	J-V層	鉢		晩浅 5類	胎土は精選され、雲母・石英を含む。内外面にぶい橙色。		磨き	胸部で逆くの字状に強く屈曲する。
199	〃	B-2-IV	鉢		晩浅 5類	胎土は精選され、雲母・角閃石を含む。内面黒褐色、外面灰褐色。		磨き	胸部で逆くの字状に強く屈曲する。
200	〃	J-I層	鉢		晩浅 5類	胎土は精選されている。内外面にぶい黄褐色。		磨き	内湾気味に大きく開き口縁に至る。
201	37	J-III層 C4 TRB	深鉢	口径 27.0	晩深 1類	チャートの砂粒を多く含む。内外面黄褐色。		条痕	口縁に鱗状突起を持つ深鉢。突起部内面に爪型の圧痕が残る。
202	〃	J-III層 B-4	深鉢		晩深 1類	チャートの砂粒を多量に含む。内外面浅黄褐色。		条痕	口縁に鱗状突起を持つ。口縁は平縁。

Tab.10 縄文土器観察表(7)

図版番号	挿図番号	出土地点・層名	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
203	37	J-I層 C-4	深鉢		晩深1類	チャートの砂粒をやや多く含む。内外面にぶい橙色。			口縁に鱗状突起を持つ。突起部内面に圧痕が残る。
204	〃	J-I層 C-4	深鉢		晩深1類	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。			口縁に突起部を持ち、口唇に刻み目を施す。突起部の形状は不明。
205	〃	J-I層 B-3-②	深鉢		晩深1類	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。			口縁に粘土塊を上方から押圧により貼付した形状の突起部を持つ。
206	〃	SD-29 D-6	深鉢		晩深1類	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。			口縁に粘土塊を上方から押圧により貼付した形状の突起部を持つ。
207	〃	J-II層 B-3-②	深鉢		晩深1類	チャートの砂粒を多く含む。内外面浅黄褐色。		条痕	口縁に鱗状突起を持つ。口縁は波状を呈する。
208	38	J-I層 B-4-I	深鉢		晩深2類	砂粒をやや多く含む。内外面灰色。		ナデ条痕	口縁外面に刻目突帯貼付、口唇は面をなし。
209	〃	J-I層 B3 No.100	深鉢		晩深2類	砂粒をやや多く含む。内外面ともにぶい橙色。		ナデ	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
210	〃	J-I層 No.123	深鉢		晩深2類	砂粒をやや多く含む。内外面ともにぶい橙色。		ナデ条痕	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
211	〃	J-I層 C-4-⑬	深鉢		晩深2類	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。		ナデ	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
212	〃	J-I層 TR-B	深鉢		晩深2類	砂粒を多量に含む。内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色。		磨耗顕著	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
213	〃	J-I層 D6 NSバンク	深鉢		晩深3類	砂粒を多量に含む。内面淡赤褐色、外面明褐色。		ナデ	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
214	〃	D-6	深鉢		晩深2類	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。		ナデ	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
215	〃	試 TR3	深鉢		晩深2類	砂粒を多量に含む。内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色。		ナデ	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は細く仕上げ刻み目を施す。
216	〃	J-I層 C-6	深鉢		晩深2類	砂粒を多量に含む。内面にぶい赤褐色、外面灰褐色。			口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
217	〃	II-4区	深鉢		晩深2類	砂粒を多く含む。内外面灰色。		ナデ条痕	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は丸く収め貝殻縁部を使用した刻み目を施す。
218	〃	III-4区 SR-9	深鉢		晩深2類	砂粒を多く含む。内面灰褐色、外面にぶい橙色。		ナデ	口縁外面に突帯を貼付する。口唇部は欠けており、口唇の形状は不明。また、磨耗のため突帯上の刻み目の有無も不明瞭であり確認できない。
219	〃	III-4区 SR-9	深鉢		晩深2類	砂粒を多く含む。内面明赤褐色、外面にぶい赤褐色。		不明	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は丸く収め刻み目を施す。
220	39	J-I層 TR-D西	深鉢		深鉢1類a1	砂粒を多量に含む。内面にぶい赤褐色、外面灰褐色。		条痕	口縁外面に刻目突帯を貼付、口唇は面をなし刻み目を施す。
221	〃	J-III層	深鉢		深鉢1類a1	砂粒をやや多く含む。内外面黄灰色。		条痕ナデ	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
222	〃	J-I層	深鉢		深鉢1類a1	砂粒を多量に含む。内面灰色、外面浅黄褐色。		不明	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
223	〃	J-IV層 TR-A南	深鉢		深鉢1類a1	砂粒を多量に含む。内面褐色、外面灰褐色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
224	〃	J-I層 B-2	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内面にぶい黄褐色、外面灰黄色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
225	〃	J-I層 C-4	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内面にぶい黄褐色、外面灰黄色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
226	〃	J-I層 No.127	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内外面灰色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
227	〃	J-I層 C-4	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内外面浅黄褐色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
228	〃	J-I層 TR-II	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内外面浅黄褐色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
229	〃	J-III層 TR-B	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多く含む。内外面灰色。		条痕	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
230	〃	J-III層	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内面橙色、外面にぶい橙色。		条痕ナデ	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
231	40	中央バンク	深鉢		深鉢1類a2	砂粒をやや多く含む。内外面浅黄褐色。		条痕ナデ	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
232	〃	J-II層 C-3	深鉢		深鉢1類a2	砂粒を多量に含む。内面橙色、外面浅黄褐色。		条痕ナデ	口唇にヘラ状原体による刻み目を施す。
233	〃	TR-I	深鉢		深鉢1類b	砂粒を多量に含む。内面にぶい赤褐色、外面灰褐色。		条痕	口唇に上方からの押圧により肥厚し、刻み目状になる。
234	〃	TR-A北	深鉢		深鉢1類b	砂粒を多量に含む。内面にぶい黄褐色、外面浅黄褐色。		条痕ナデ	口唇にユビ押さえによる刻み目を施す。焼成後穿孔(補修孔)あり。
235	〃	J-VI層 C-2	深鉢		深鉢1類b	砂粒を多量に含む。内外面黄灰色。		磨耗顕著	口唇は上方からの押圧により外方へ拡張。
236	〃	SD-29	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含む。内面灰黄色、外面灰褐色。		条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。

Tab. 11 縄文土器観察表(8)

図版番号	挿図番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
237	40	試 TR4	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含み、内外面にぶい黄橙色。		条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
238	〃	J-I層 C-4	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含み、外面にぶい橙色。		条痕ナデ	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
239	〃	J-I層	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含み、内面にぶい橙色、外面浅黄褐色。		条痕ナデ	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
240	〃	J-I層	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含み、内面褐灰色、外面灰白色。		内面ナデ 外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
241	〃	J-I層 B-2	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面灰色。		調整不明	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
242	〃	J-I層 B-2	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面灰色、外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
243	〃	J-I層 B-2-7	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含む。内外面浅黄褐色。		外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
244	〃	J-I層 B-2-8	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
245	41	J-I層 B-3-9	深鉢		深鉢1類c	砂粒をやや多く含む。内外面褐灰色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
246	〃	J-I層 No.161	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面棕色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
247	〃	J-I層 C-3 No.216	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面棕色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
248	〃	J-I層 B-3 No.108	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面灰白色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
249	〃	J-I層 TR-A	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面灰色、外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
250	〃	J-I層 B-3	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面灰色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
251	〃	J-II層 B-3	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面褐灰色、外面灰白色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
252	〃	J-II層 B-3	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
253	〃	J-II層 B-3	深鉢		深鉢1類c	砂粒をやや多く含む。内面にぶい黄褐色、外面褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
254	〃	J-III層 C-4	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内外面灰黄色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
255	〃	J-III層 C-4	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多く含む。内面にぶい褐色、外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
256	〃	J-V層 C-4	深鉢		深鉢1類c	砂粒を多量に含む。内外面にぶい褐色。		内外面条痕	口唇に貝殻縁片を使用した刻み目を施す。
257	42	J-I層 No.156	深鉢	口径 38.4	深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面にぶい黄褐色、外面浅黄褐色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
258	〃	J-I層 No.165	深鉢	口径 38.4	深鉢2類a	砂粒を多く含む。内外面ともにぶい褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸く収める。
259	〃	J-I層 No.163	深鉢	口径 15.6	深鉢2類a	砂粒を多く含む。内外面とも灰白色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸く収める。へらの圧痕か、縦方向の線状の圧痕が残る。
260	〃	J-I層 No.159	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内面棕色、外面浅黄褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸く収める。
261	〃	J-I層 No.158	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面棕色、外面浅黄褐色。			口唇は丸く収める。
262	〃	J-I層 B-3-1	深鉢		深鉢2類a	砂粒をやや多く含む。内面棕色、外面浅黄褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸みを帯びた面をなす。
263	〃	J-I層 B-3	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面ともにぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
264	〃	J-I層 B-2-⑧	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面灰黄褐色、外面にぶい黄褐色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
265	〃	J-I層 B-2	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面にぶい棕色、外面灰黄褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸く収める。
266	〃	J-I層 No.156	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内外面とも灰白色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
267	〃	J-I層 No.155	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内外面ともにぶい黄褐色。		内面ナデ、 外面条痕	口唇は丸く収める。
268	〃	J-I層 No.153	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面とも灰白色。		内面条痕、 外面不明	口唇は丸く収める。
269	〃	J-I層 No.147	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面とも灰白色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
270	〃	J-I層	深鉢		深鉢2類a	砂粒をやや多く含む。内面にぶい棕色、外面褐灰色。		内面ナデ、 外面条痕	
271	〃	J-I層 No.24	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面とも灰白色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
272	〃	J-I層 No.137	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面とも灰白色。		条痕	口唇は丸く収める。

Tab.12 縄文土器観察表(9)

図版番号	挿図番号	出土地点・層名	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文原体	調整	特徴
273	43	J-I層 B-3 No.11	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面にぶい橙色、外面灰白色。		内外面条痕	口唇は丸く収める。
274	〃	J-I層 TRA-②	深鉢		深鉢2類a	砂粒を少し含む。内外面ともぶい黄褐色。		内面ナデ、外面条痕	口唇は丸く収める。
275	〃	J-I層 No.160	深鉢		深鉢2類a	砂粒を多く含む。内面灰色、外面灰白色。		内外面条痕	口唇は細く仕上げる。
276	〃	TR-B No.B-2	深鉢	口径31.0	深鉢2類a	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		内面条痕	丸みを帯びた口唇。
277	〃	SK-2	深鉢	口径32.4	深鉢2類b	砂粒を多量に含む。内外面浅黄橙色。		内外面条痕	口唇は面をなす。
278	〃	J-I層 No.170	深鉢	口径26.4	深鉢2類b	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		条痕口縁、内面ナデ	口唇は面をなす。
279	〃	J-I層 B-2 No.24	深鉢	口径23.4	深鉢2類b	砂粒をやや多く含む。内面にぶい褐色、外面褐色。		内面ナデ、外面条痕、後ナデ	口唇は面をなす。
280	44	J-I層 B-3 No.12	深鉢	口径23.2	深鉢2類b	砂粒を多く含む。内外面灰色。		内外面条痕	口唇は面をなす。
281	〃	J-I層 C-3 No.211	深鉢	口径32.4 胴径	深鉢2類b	砂粒を多量に含む。内外面淡黄色。		外面条痕	丸みを帯びた胴部から、頸部で一端くびれた後外反する口縁に至る。口唇は面をなす。
282	〃	J-I層 No.146	深鉢	口径26.4	深鉢2類b	砂粒をやや多く含む。内外面灰白色。		内面ナデ、外面条痕	強い横方向のナデにより口唇は面をなす。
283	〃	J-II層 C-3	深鉢	口径25.2	深鉢2類b	砂粒を多く含む。内面橙色、外面にぶい黄褐色。		内面ナデ、外面条痕	口唇は面をなす。
284	〃	J-I層 No.201	深鉢		深鉢2類c	砂粒を少し含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。		内外面ナデ	口唇は面をなし、外方へ拡張する。
285	〃	J-I層 TR-D西	深鉢	口径34.0	深鉢2類c	砂粒を多く含む。内外面灰色。		内外面条痕	口唇は面をなし、外方へ拡張する。
286	45	J-V層 TR-A	深鉢	底径4.6	底部1類a	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		ナデ	平底。
287	〃	TR-A-2	深鉢	底径6.4	底部1類a	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		条痕	平底。
288	〃	TR-A-8	深鉢	底径6.0	底部1類a	砂粒を少し含む。内面灰白色、外面にぶい黄褐色。		不明	平底。
289	〃	J-I層	深鉢	底径5.8	底部1類a	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		不明	平底。
290	〃	J-I層 C-3-15 No.227	深鉢	底径6.0	底部1類a	砂粒を少し含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。		不明	平底。
291	〃	J-I層 B-3 No.12	深鉢	底径7.0	底部1類a	砂粒を多量に含む。内面浅黄橙色、外面灰白色。		不明	平底。
292	〃	J-I層 No.301	深鉢	底径5.0	底部1類a	砂粒を多く含む。内面灰色、外面灰白色。		不明	平底。
293	〃	J-I層 B-2	深鉢	底径5.0	底部1類a	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		不明	平底。
294	〃	No.66	深鉢	底径4.6	底部1類a	砂粒を多く含む。内外面にぶい橙色。		ナデ	平底。
295	〃	SK-2	深鉢	底径5.6	底部1類a	砂粒を多く含む。内面にぶい橙色、外面浅黄橙色。		ナデ	平底。
296	〃	J-I層 No.124	深鉢	底径15.6	底部1類b	砂粒を多く含む。内面灰色、外面にぶい橙色。		ナデ	平底で底径が広い。
297	〃	J-V層 B-3	深鉢	底径16.0	底部1類b	砂粒を多量に含む。内外面灰白色。		ナデ	平底で底径が広い。
298	〃	J-V層 No.304	深鉢	底径11.4	底部1類b	砂粒を多く含む。内面褐色、外面にぶい黄褐色。		内面条痕、外面ナデ	平底で底径が広い。
299	〃	J-I層 B-3	深鉢	底径10.0	底部2類	砂粒を多量に含む。内外面浅黄橙色。		条痕	やや膨らみ気味の平底。
300	〃	B-3 No.109	深鉢	底径6.6	底部2類	砂粒を多く含む。内面灰白色、外面淡橙色。		条痕	わずかに上げ底。
301	〃	J-I層 B-3	深鉢	底径6.4	底部2類	チャート砂粒をやや多く含む。内面灰色、外面浅黄橙色。		条痕	上げ底気味の底部。
302	〃	J-I層 TR-A	深鉢	底径6.0	底部2類	砂粒をやや多く含む。内外面灰白色。		不明	上げ底気味の底部。
303	〃	D-7	深鉢	底径7.4	底部2類	砂粒をやや多く含む。内外面灰白色。		ナデ	上げ底気味の底部。
304	〃	J-I層 No.174	深鉢	底径6.0	底部2類	砂粒をやや多く含む。内外面浅黄橙色。		不明	上げ底気味の底部。
305	〃	J-III層 B-3	深鉢	底径6.6	底部2類	砂粒多量。内外面にぶい黄褐色。		不明	上げ底気味の底部。
306	〃	J-V層 TR-A	深鉢	底径6.0	底部2類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		不明	上げ底気味の底部。

Tab. 13 縄文土器観察表(10)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層位	器種	法量	分類	胎土・色調	縄文 原体	調整	特 徴
307	45	J-Ⅲ層 B-4	深鉢	底径 5.2	底部 2類	砂粒多量に含む。内面橙色、外面 にぶい黄橙色。		不明	上げ底気味の底部。
308	46	No. 132	深鉢	底径 4.8	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		不明	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
309	◇	J-I層 No. 159	深鉢	底径 4.6	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面浅黄橙色。		条痕	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
310	◇	J-I層 B-3 No. 12	深鉢	底径 7.6	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		不明	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
311	◇	J-I層	深鉢	底径 6.0	底部 3類	砂粒多量に含む。内面にぶい黄橙 色、外面灰白色。		条痕	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
312	◇	No. 21	深鉢	底径 5.6	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		不明	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
313	◇	No. 136	深鉢	底径 7.0	底部 3類	砂粒多量に含む。内面灰白、外面 浅黄橙色。		ナデ	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
314	◇	J-Ⅲ層 TR-B	深鉢	底径 8.0	底部 3類	砂粒多量に含む。内面灰白色、外 面浅黄橙色		条痕	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
315	◇	No. 157	深鉢	底径 6.6	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		条痕、 ナデ	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
316	◇	J-Ⅳ層 TR-B	深鉢	底径 7.0	底部 3類	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		不明	上げ底で円柱状の底部。体部は一 旦くびれたのち内湾気味に立ち上 がる。
317	◇	J-I層 No. 128	深鉢	底径 6.2	底部 3類	砂粒多量に含む。内面灰色、外面 にぶい橙色。		底面磨き 内面ナデ	上げ底。断面三角形の高台状に設 置する。体部は内湾して立ち上 がる。
318	◇	No. 65	深鉢	底径 5.4	底部 3類	砂粒多量に含む。内面灰白色、外 面橙色。		内面ナデ 外面条痕	上げ底。断面三角形の高台状に設 置する。体部は内湾して立ち上 がる。
319	◇	J-I層 B-3 No. 12	深鉢	底径 8.2	底部 4類a	砂粒多量に含む。内面橙色、外面 にぶい黄橙色。		外面条痕	高台状を呈する。
320	◇	TR-A-8	深鉢	底径 6.0	底部 4類a	砂粒多量に含む。内外面橙色。		不明	高台状を呈する。
321	◇	J-I層 B-3	深鉢	底径 6.6	底部 4類a	砂粒多量に含む。内外面にぶい橙 色。		条痕	高台状を呈する。
322	◇	J-I層 No. 204	深鉢	底径 6.6	底部 4類a	砂粒多量に含む。内外面灰白色。		内面ナデ 外面条痕	高台状を呈する。
323	◇	J-I層 B-3-6 No. 231	深鉢	底径 5.6	底部 4類a	砂粒やや多く含む。内面灰白色、 外面灰黄色。		底面磨き 条痕ナデ	高台状を呈する。
324	◇	J-II層 B-3 No. 303	深鉢	底径 4.0	底部	細砂粒多く含む。内面灰色、外面 にぶい黄橙色。		条痕	高台状を呈する。
325	◇	No. 160	深鉢	底径 4.0	底部 4類a	砂粒やや多く含む。内面灰白色、 外面灰黄橙色。		不明	高台状を呈する。
326	◇	TR-A-3	深鉢	底径 10.0	底部 4類a	砂粒多量に含む。内面にぶい橙色、 外面灰白色。		ナデ	高台状を呈する。
327	◇	J-Ⅲ層	深鉢	底径 4.2	底部 4類a	砂粒多量に含む。内外面浅黄橙色。		不明	高台状を呈する。
328	◇	B-3-9 No. 122	深鉢	底径 7.8	底部 4類b	砂粒やや多く含む。内面にぶい橙 色、外面橙色。		不明	高い高台状を呈する。底面の厚さ 2cm。他の底部と異なり、異彩を 放つ。
329	◇	J-Ⅳ層 B-2	鉢	底径 6.0	底部 5類	砂粒多く、雲母を含む。内外面灰 黄褐色。		磨き	上げ底気味の底部から体部は大き く開いて立ち上がる。
330	◇	J-V層 C-3 No. 4	鉢	底径 6.8	底部 5類	砂粒やや多く含む。内外面浅黄橙 色。		磨き	上げ底気味の底部から体部は大き く開いて立ち上がる。
331	◇	Ⅲ-4区 SR	深鉢	底径 6.0	底部 3類a	砂粒多量に含む。内外面浅黄色。		調整不明	上げ底。一旦くびれた後で、体部 は内湾気味に立ち上がる。
332	◇	Ⅲ-4区 SR	深鉢	底径 6.0	底部 2類	砂粒多く含む。内面浅黄橙色、外 面にぶい橙色。		調整不明	上げ底気味の底部。

(2) 石器

縄文時代の石器類として、硬玉・石鏃・石錘・磨製石斧・叩き石・剥片石器など220点の石器類が確認されている。縄文時代の包含層から出土したものが多数を占めるが、弥生時代以降の層出土のものも、形態上縄文時代の石器と判断可能なものは縄文時代の石器として分類した。

A. 石鏃 (334～339)

すべてサヌカイト製で、凹基の二等辺三角形の石鏃に分類できるが、脚部欠損のため明瞭でないものもある。長さ1.6～2.0cm、重量0.4～1.1g。336は他と異なり、片面のみを加工。

B. 石錘 (340・341)

長軸両端に敲打による抉入を持つタイプで、泥質片岩製のものが2点出土している。

C. 磨製石斧 (348～379)

Ⅲ-2区から集中して出土した蛇紋岩製の磨製石斧(350～379)は注目される。未製品も含めて30点、縄文後晩期土器の出土する包含層・流路中からの出土ゆえに、後期・晩期のどの時期のものなのか特定は困難である。完形品はなく、すべてに刃部、基部の破損がみられる。製品以外に未製品・原材・製作時(使用時)剥片なども認められた。谷川の川岸近くの包含層、谷川の流路内から検出された磨製石斧は、その出土状況と破損品であるということから、廃棄された品であると想定される。破損により本来の機能を喪失し、集落の縁辺に位置したであろう谷川に棄てられたものなのか。

完形品がないため残存部の割合からの推定になるが、これらの伐採斧は全長12～14センチ前後で、300～500グラム程度の重量のものが主体だと見られる。

348・349は小型のノミ状の磨製石斧で、刃部のみを研磨したもので全長9.7センチ重量50グラム(348)、全長5.8センチ重量23グラム(349)、蛇紋岩製の伐採斧とは異なりともに緑色片岩製である。

D. 打製石斧 (380)

1点だけだが、泥質片岩製の打製石斧が出土している。撥型を呈し、刃部には使用による刃毀れが観察される。

E. 剥片石器 (343～347)

スクレイパー類が主体で、いずれもサヌカイト製のものである。343は抉入状石器であり、横長剥片を素材としている。

F. 叩き石・磨石類 (381～418)

叩き石・磨石類で図化したものは38点、すべて砂岩製である。411は2条の溝を持つ有溝砥石である。

G. その他

333の硬玉製の小玉など、A～F以外の石器も出土している。342の蛇紋岩製の石製品は、全面を磨いて側面を面取りし、両端を細く仕上げたもの(長さ12.1センチ、重量25グラム)だが用途は不明である。

(3) 獣骨等自然遺物

流路から、イノシシ・シカとみられる獣骨の小片が確認されている。骨は被熱しており、出土地点近辺で解体・調理され、縄文時代人の食卓に供された可能性が高い。流路出土のイノシシの歯に生後2年半と推定され、繁殖期から算定して、縄文時代の動物利用の在り方を示す資料の一つとなる。

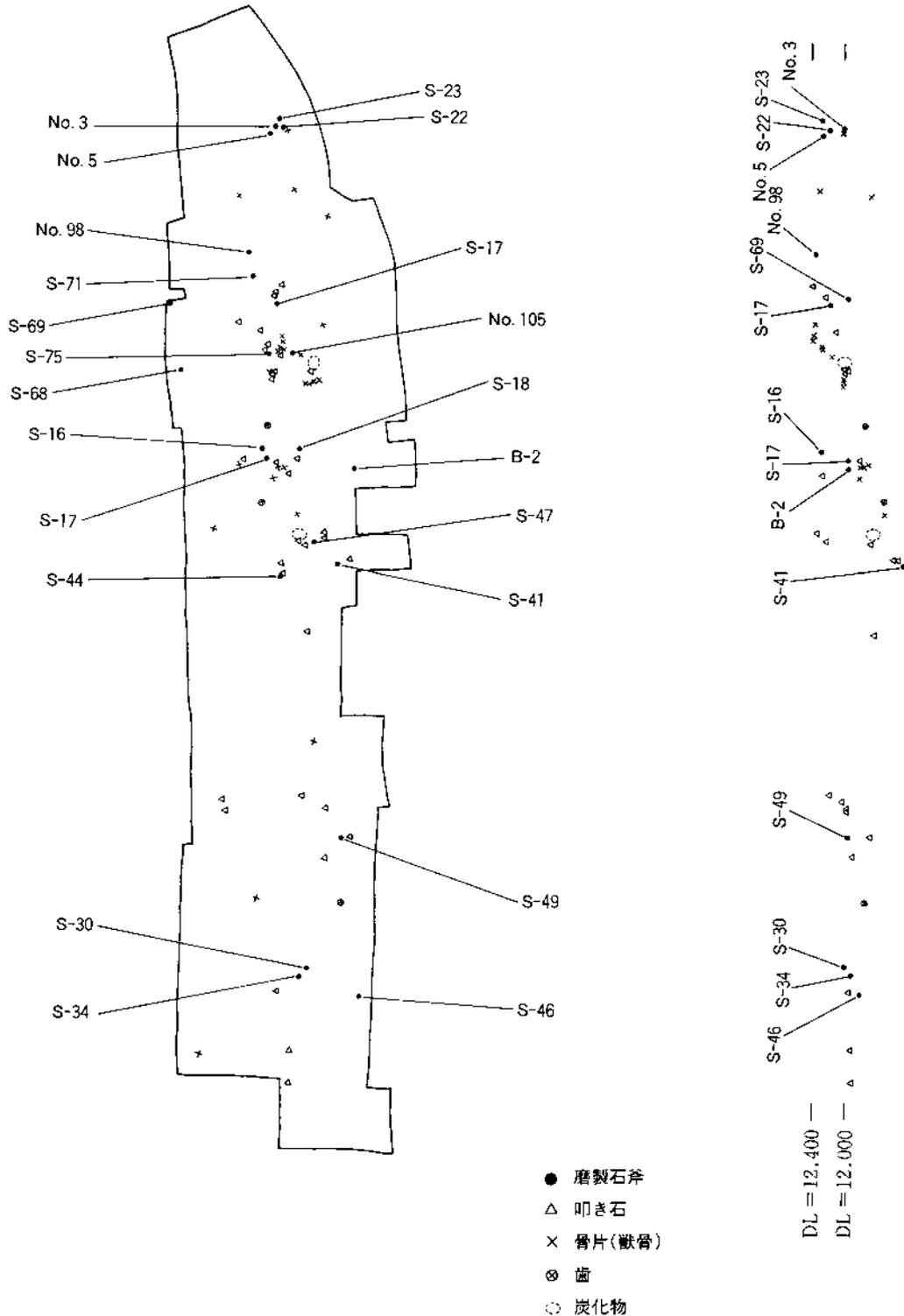


Fig. 47 Ⅲ-2区 J-I~Ⅲ層遺物出土状況(石器・骨片・炭化物)

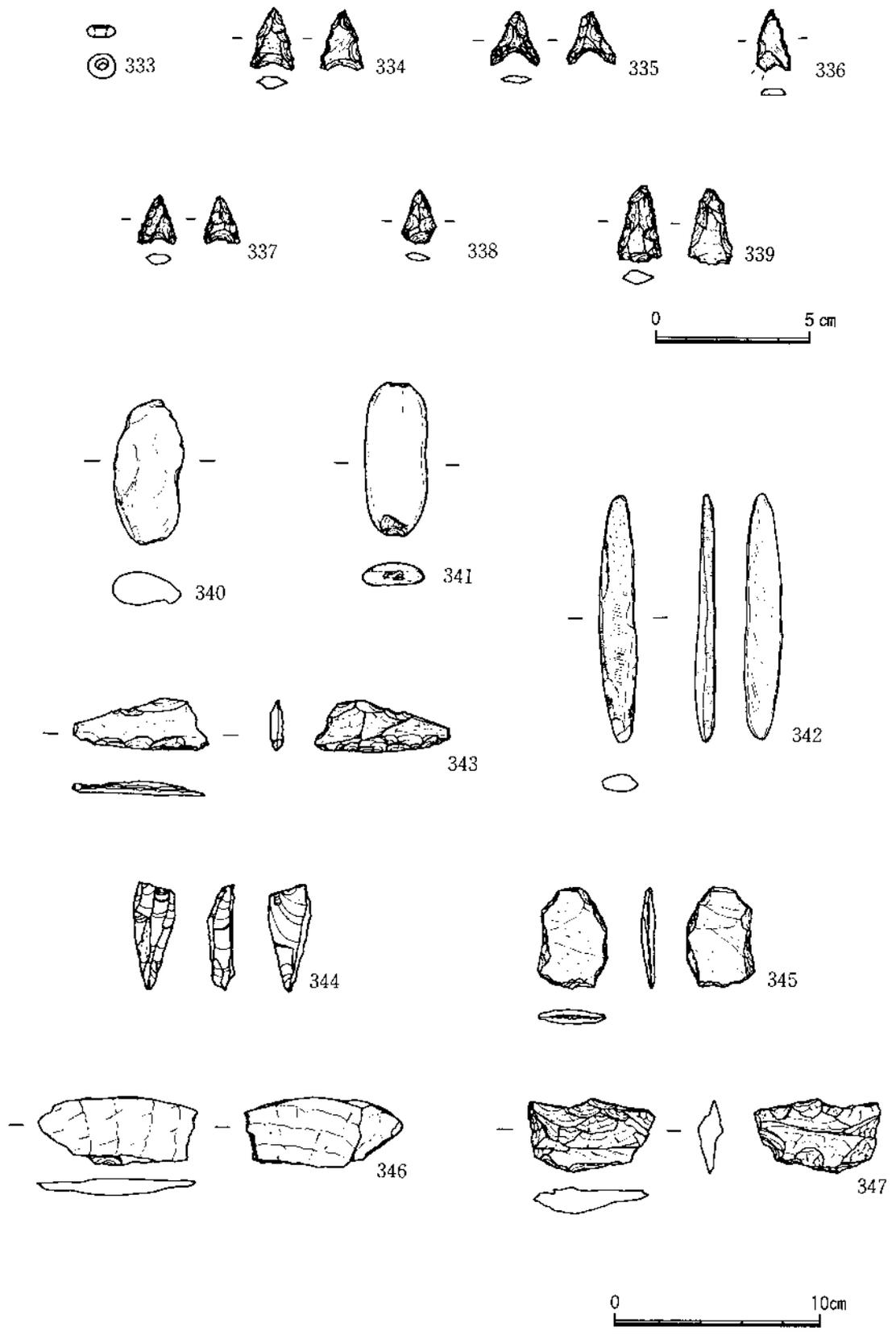


Fig. 48 出土遺物・石器（縄文）1

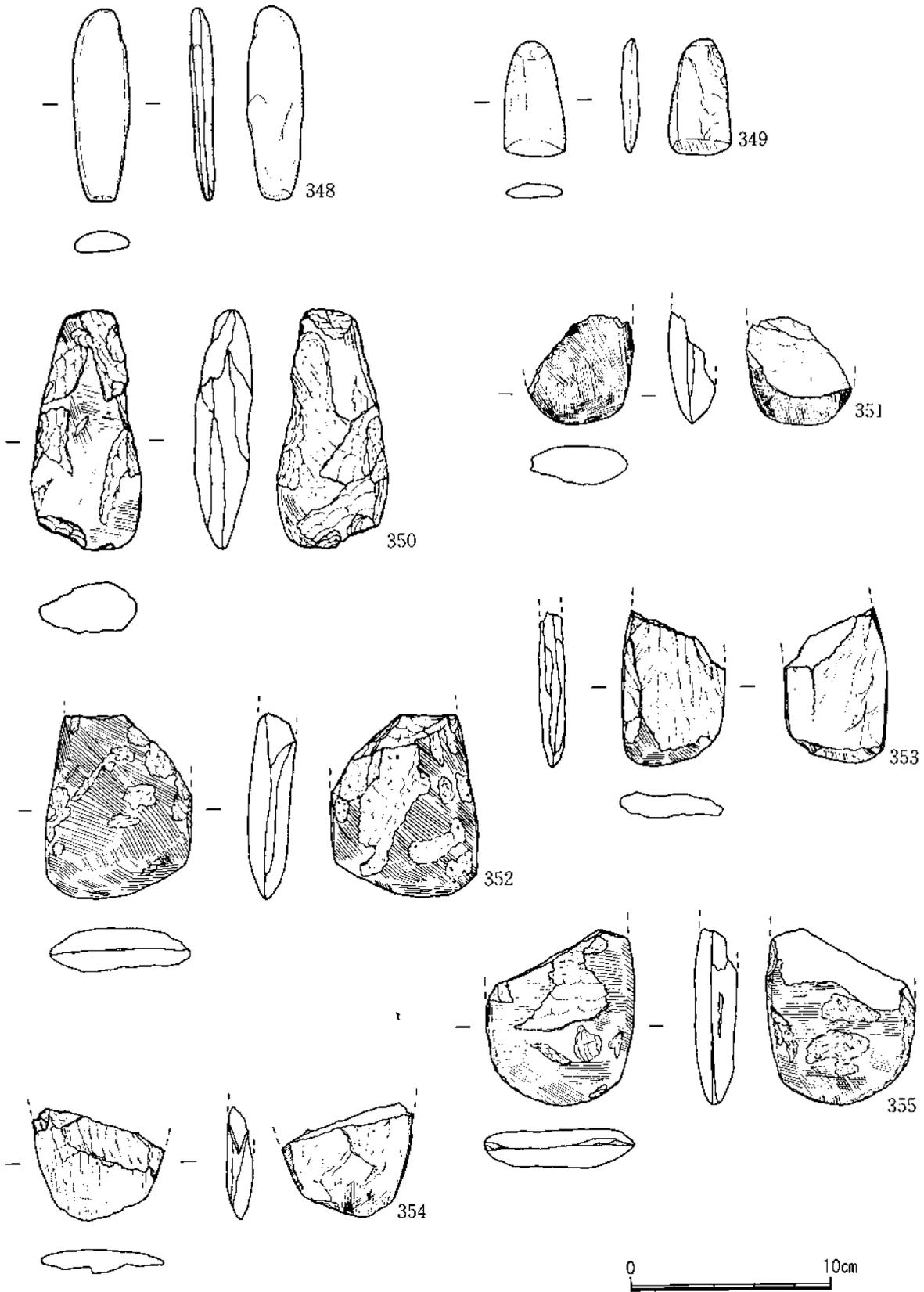


Fig. 49 出土遺物・石器（縄文）2

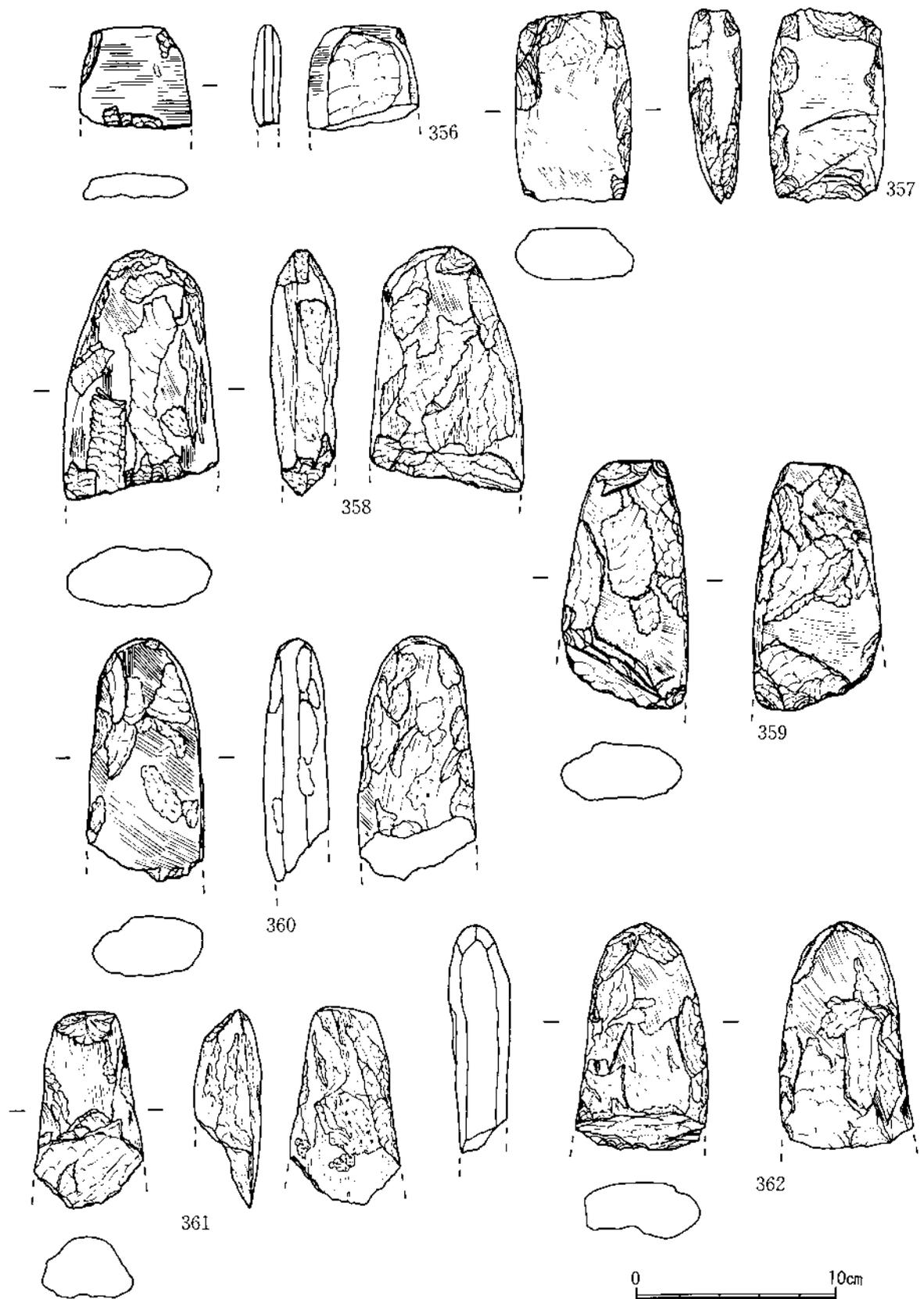


Fig. 50 出土遺物・石器（縄文）3



Fig. 51 出土遺物・石器（縄文）4

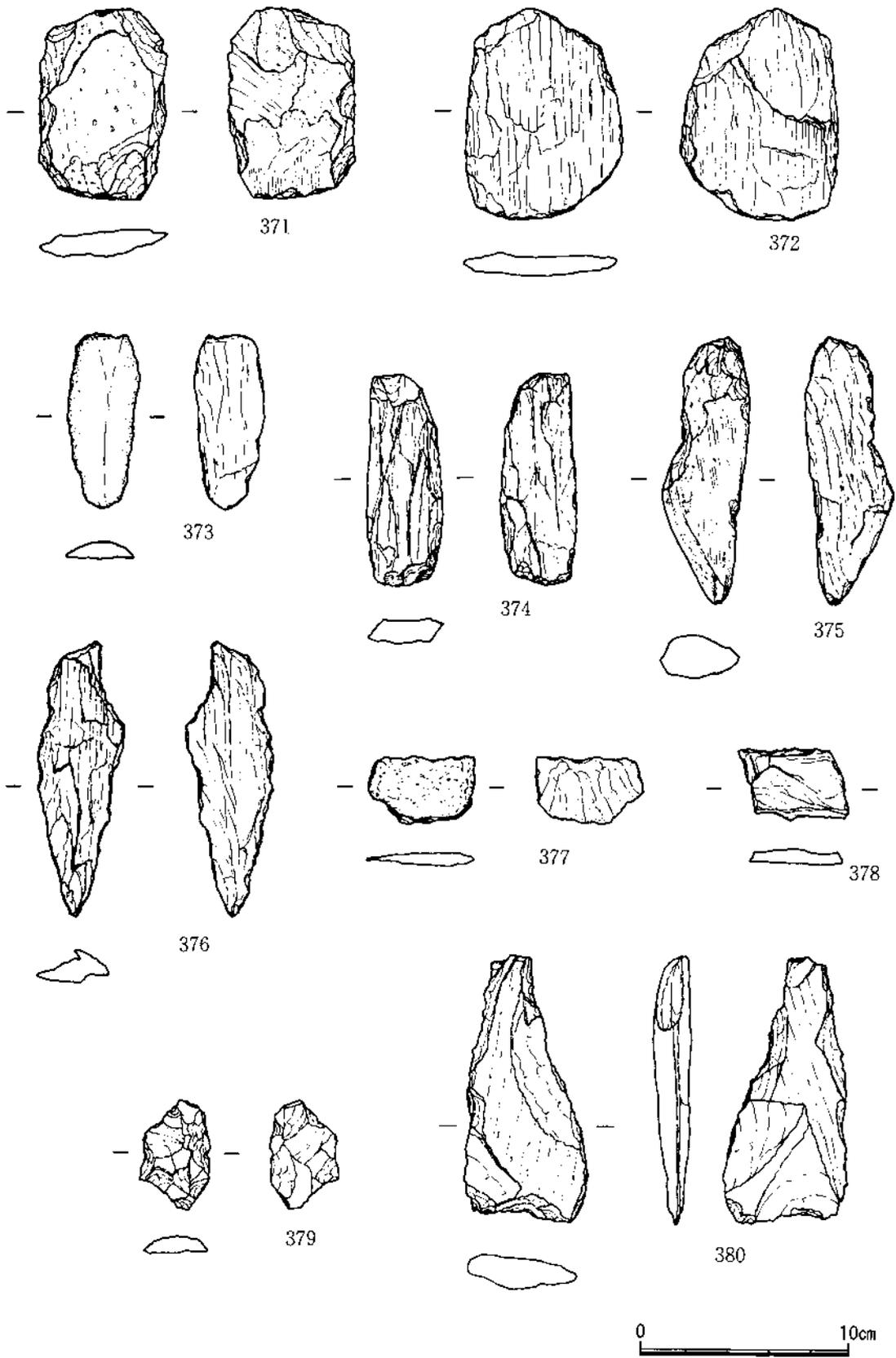


Fig. 52 出土遺物・石器（縄文）5

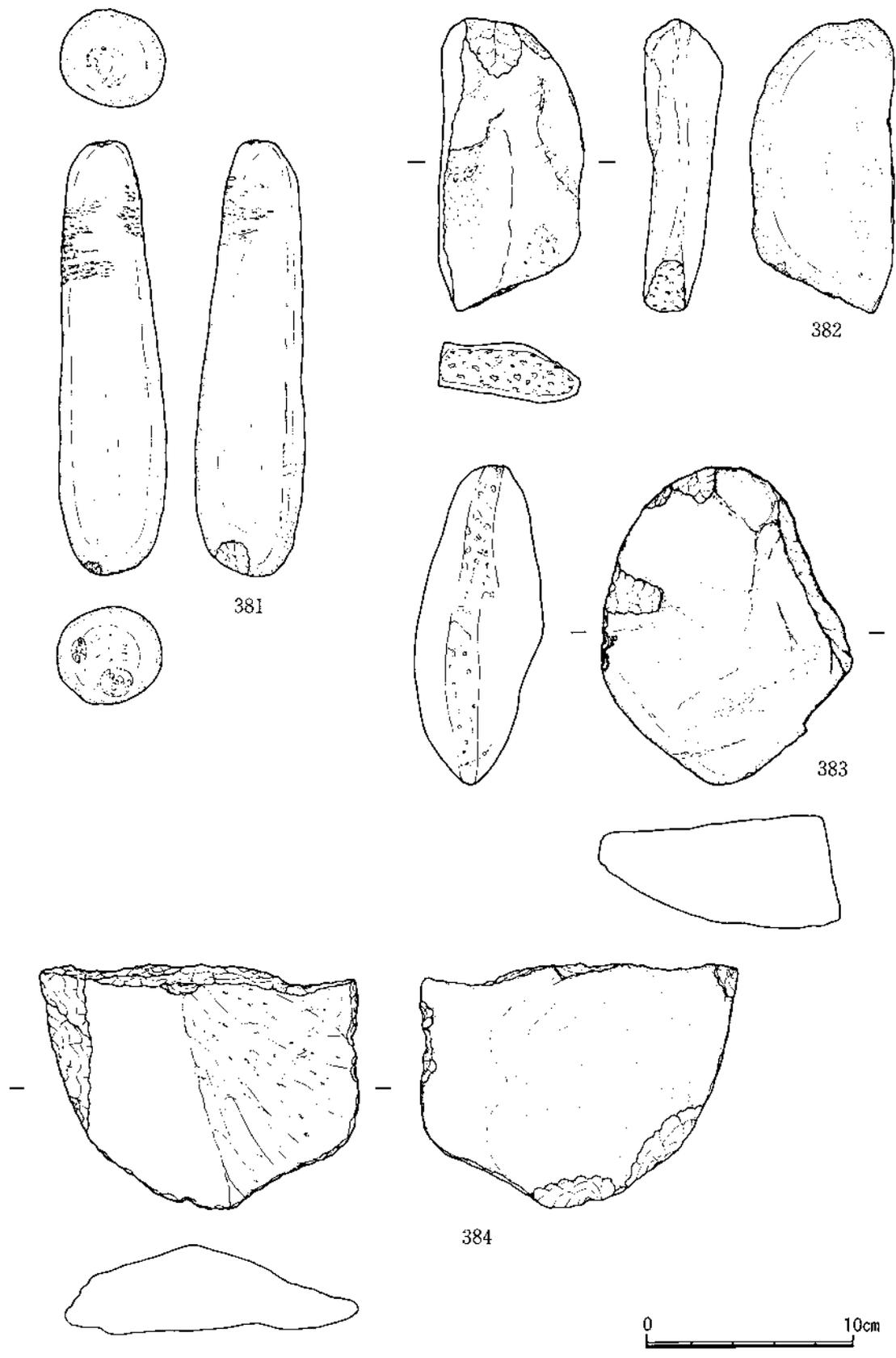


Fig. 53 出土遺物・石器（縄文）6

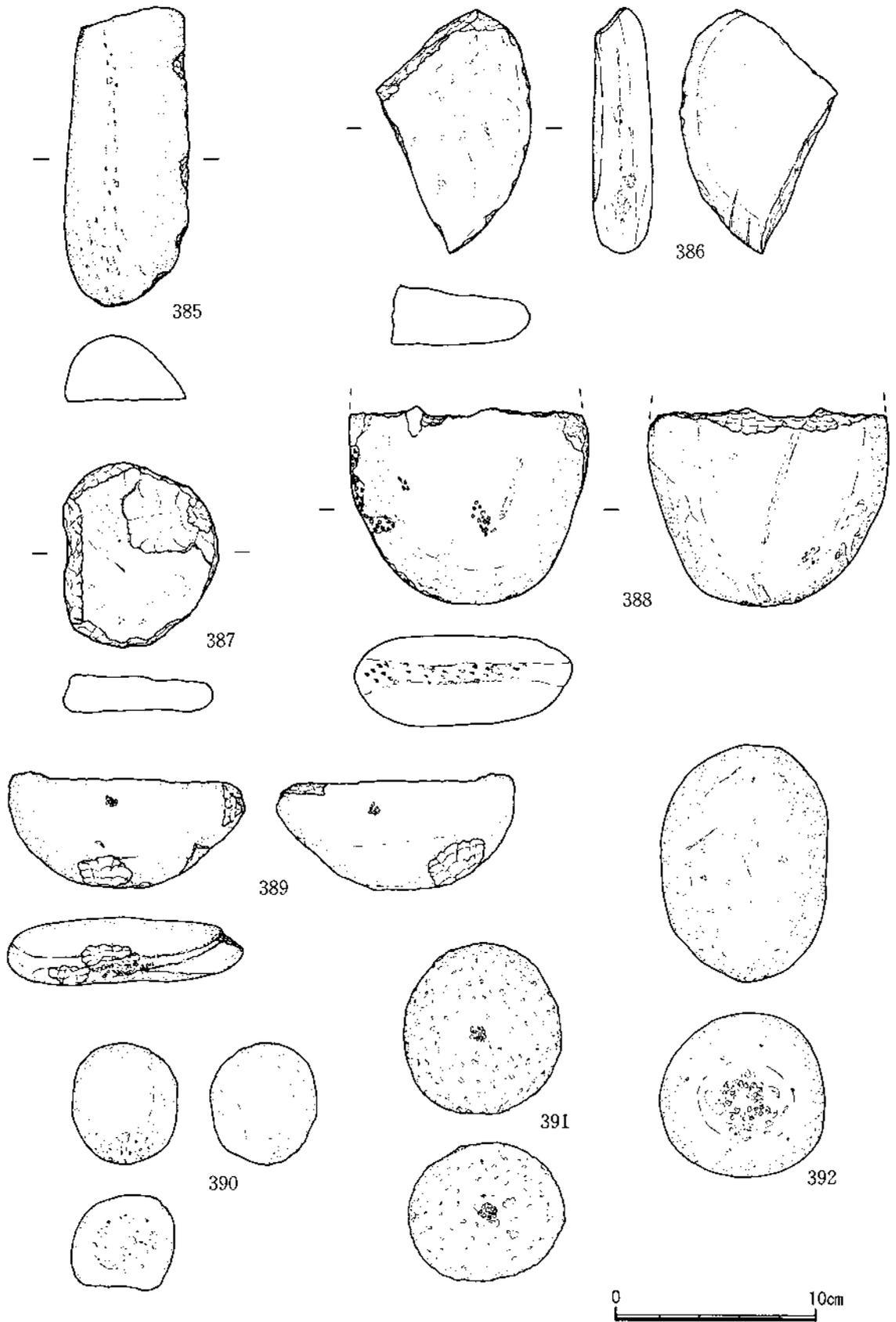


Fig. 54 出土遺物・石器（縄文）7

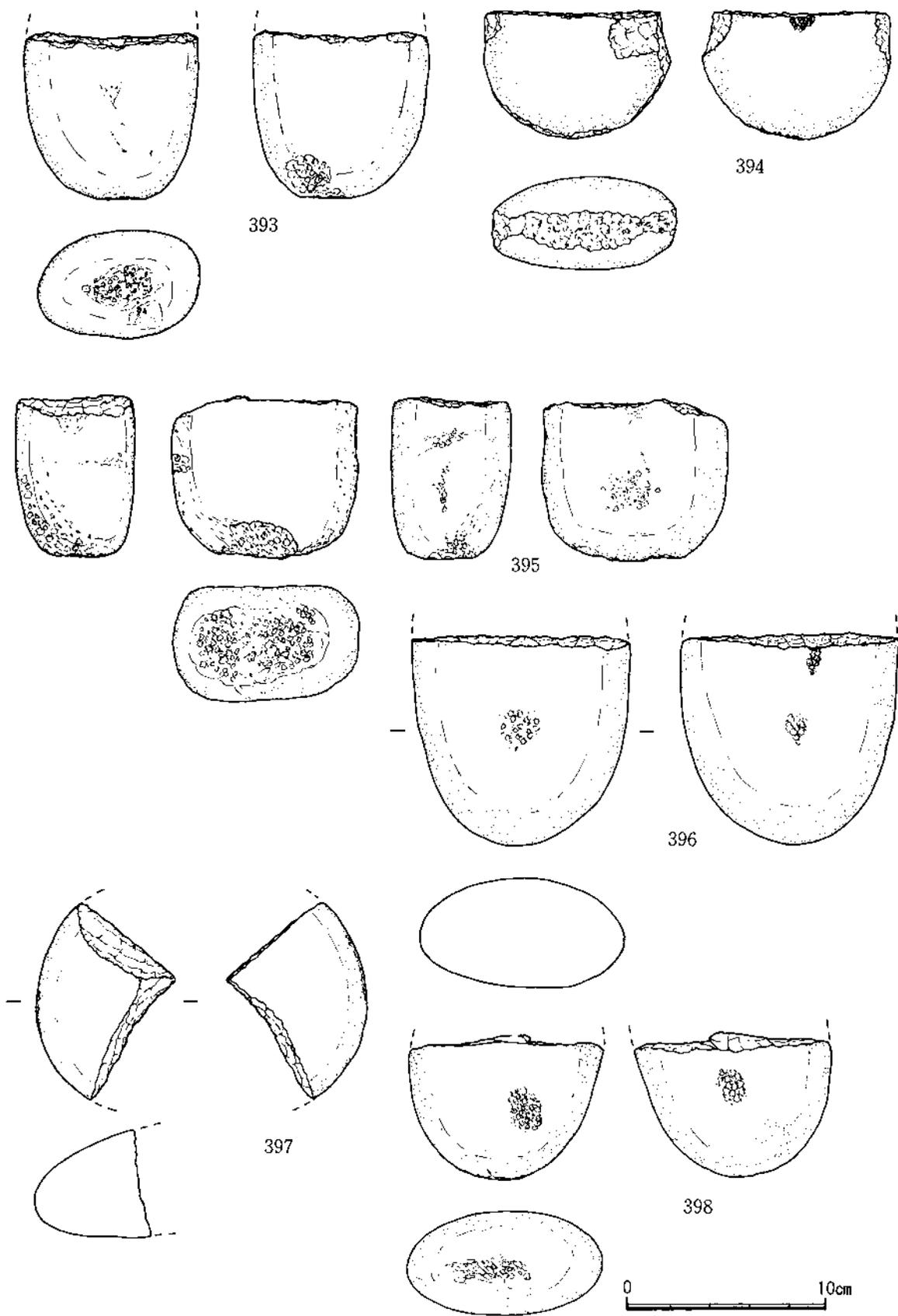


Fig. 55 出土遺物・石器（縄文）8

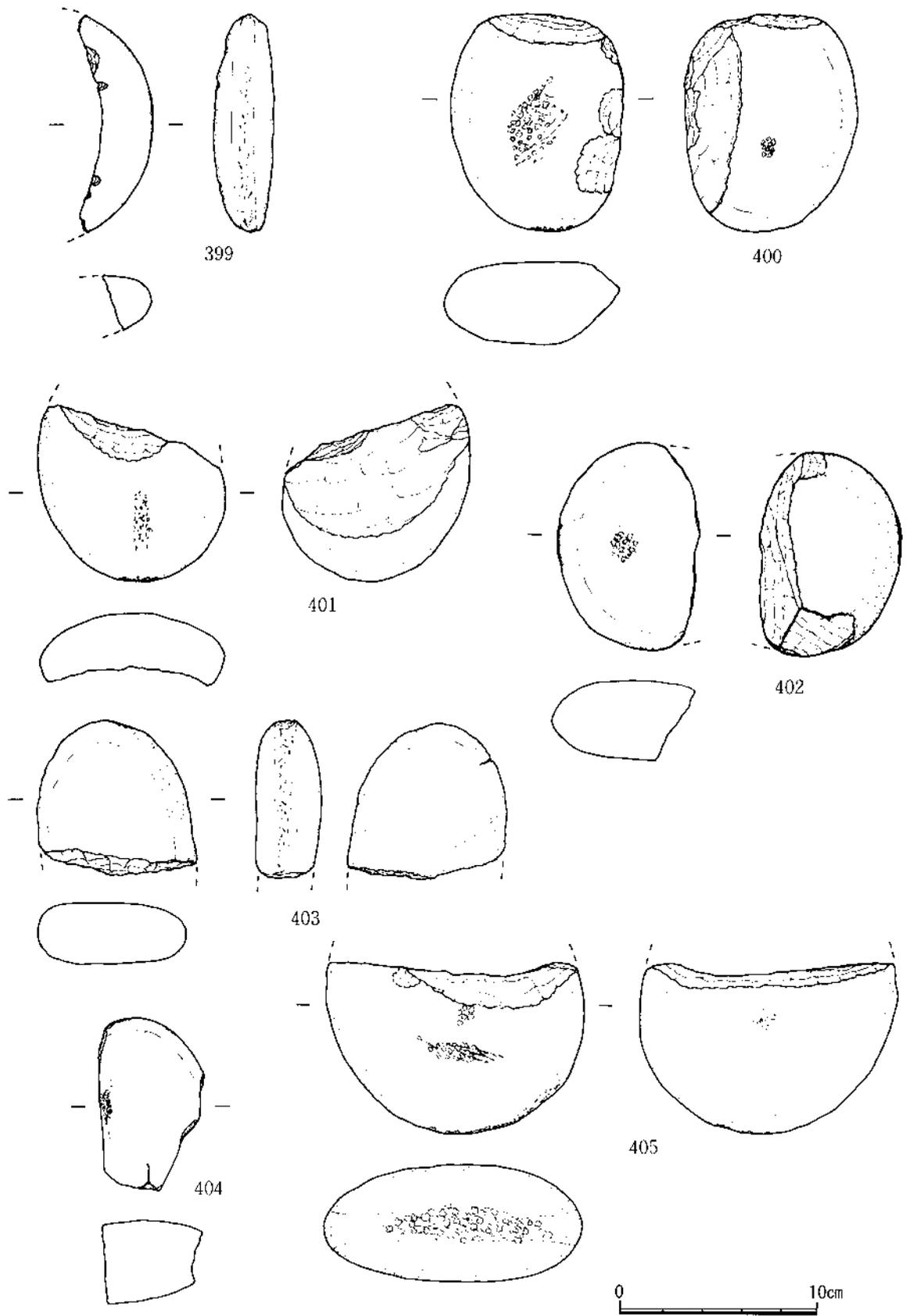


Fig. 56 出土遺物・石器（縄文）9

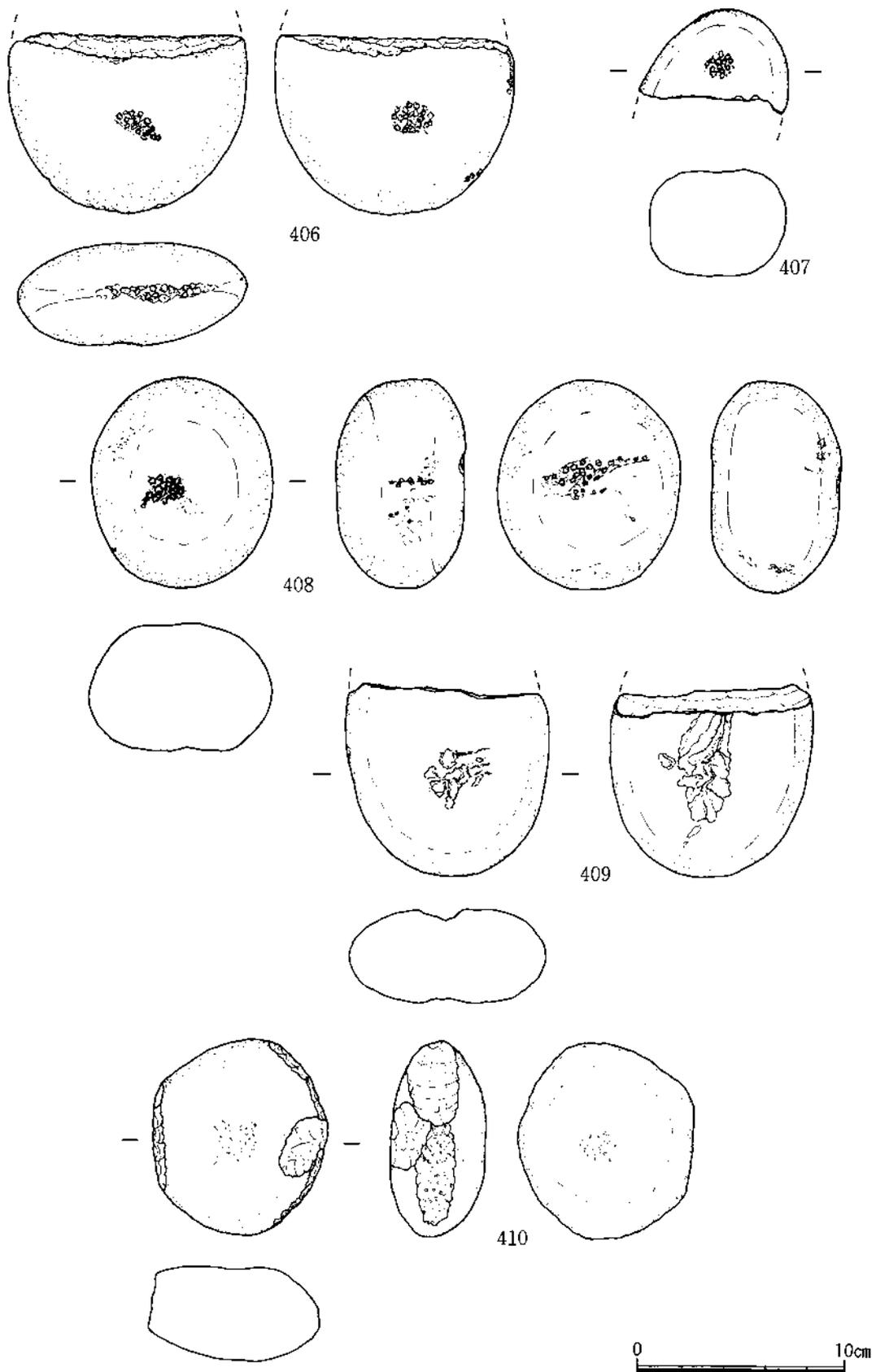


Fig. 57 出土遺物・石器（縄文）10

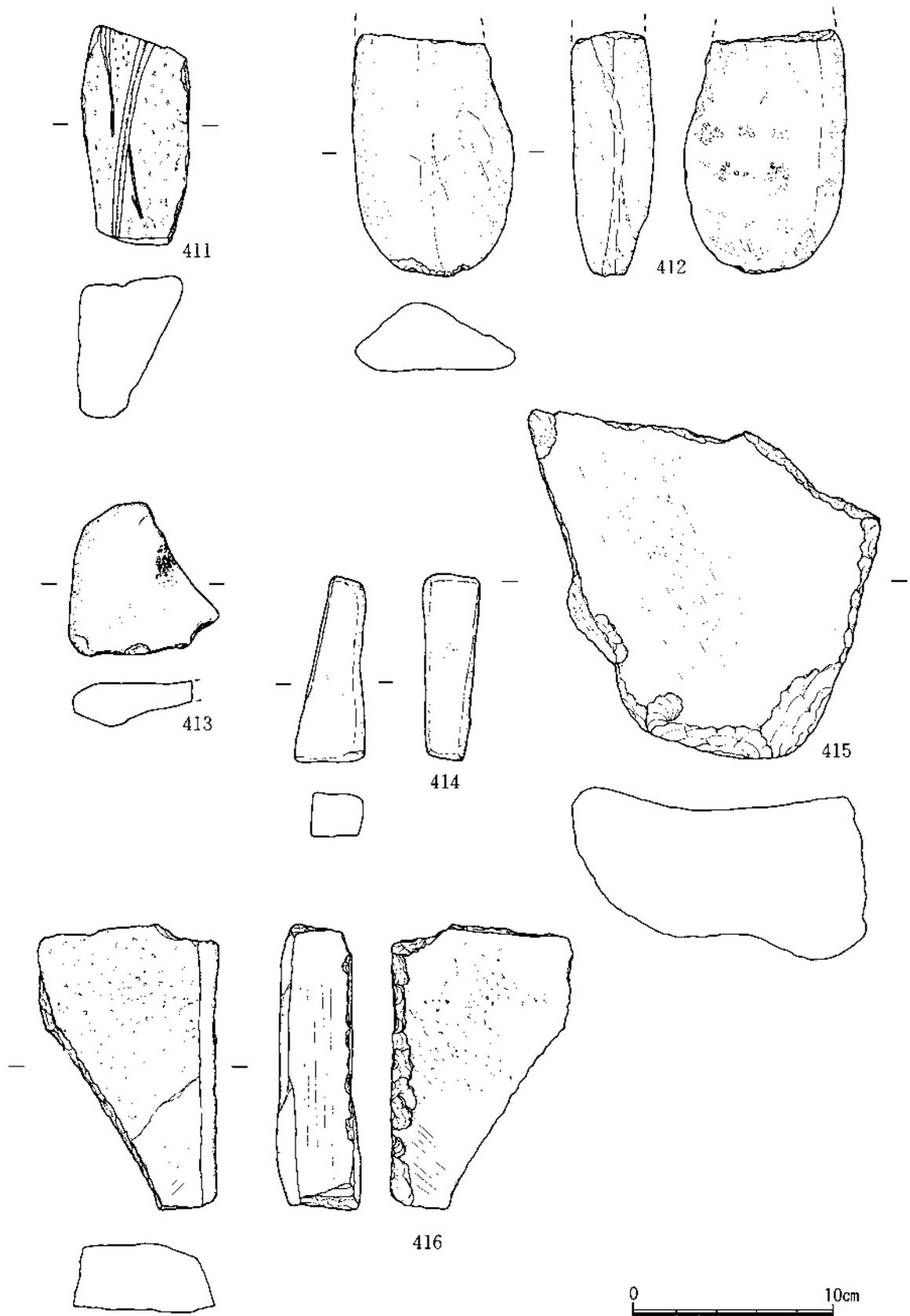


Fig. 58 出土遺物・石器（縄文）11

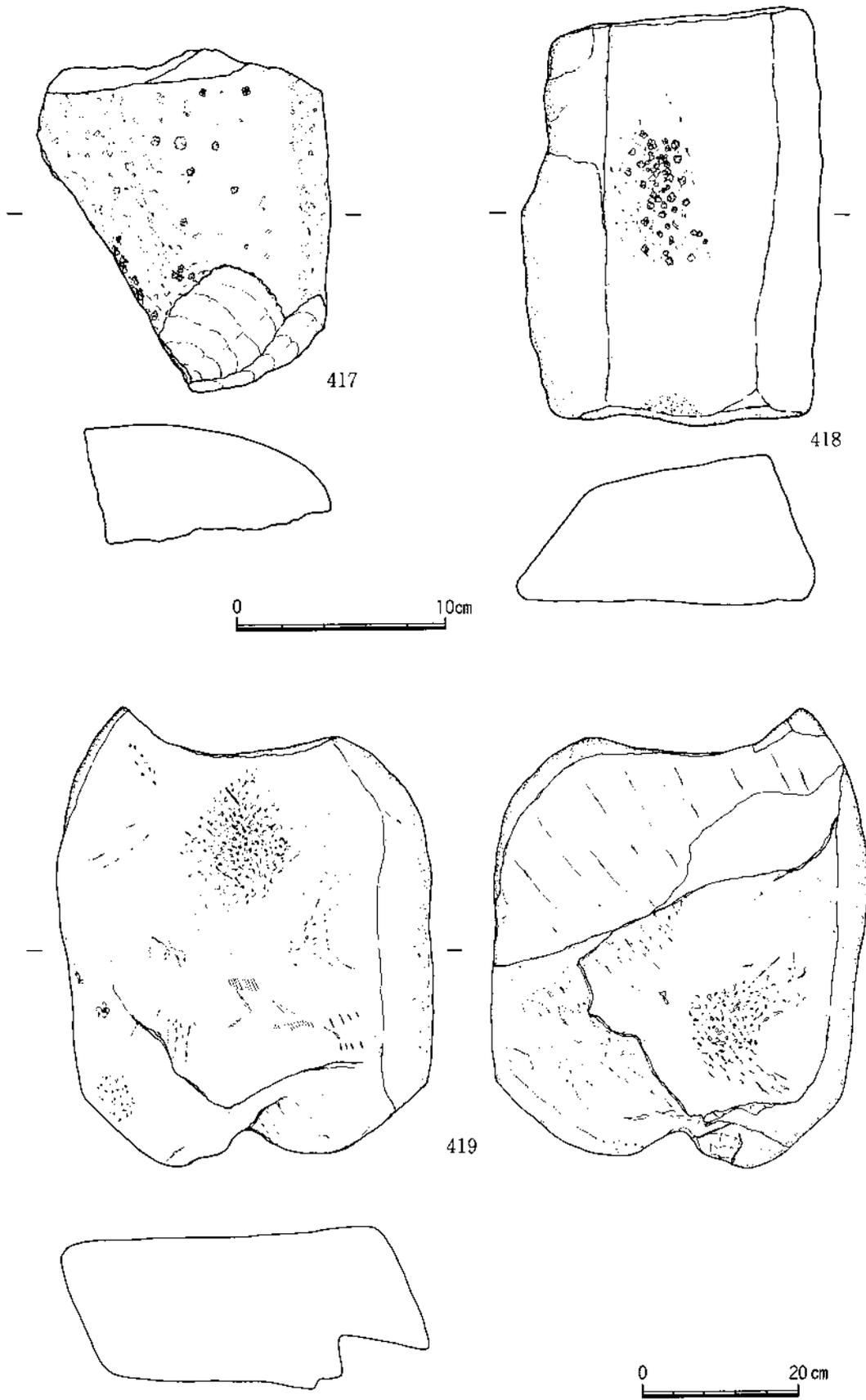


Fig. 59 出土遺物・石器（繩文）12

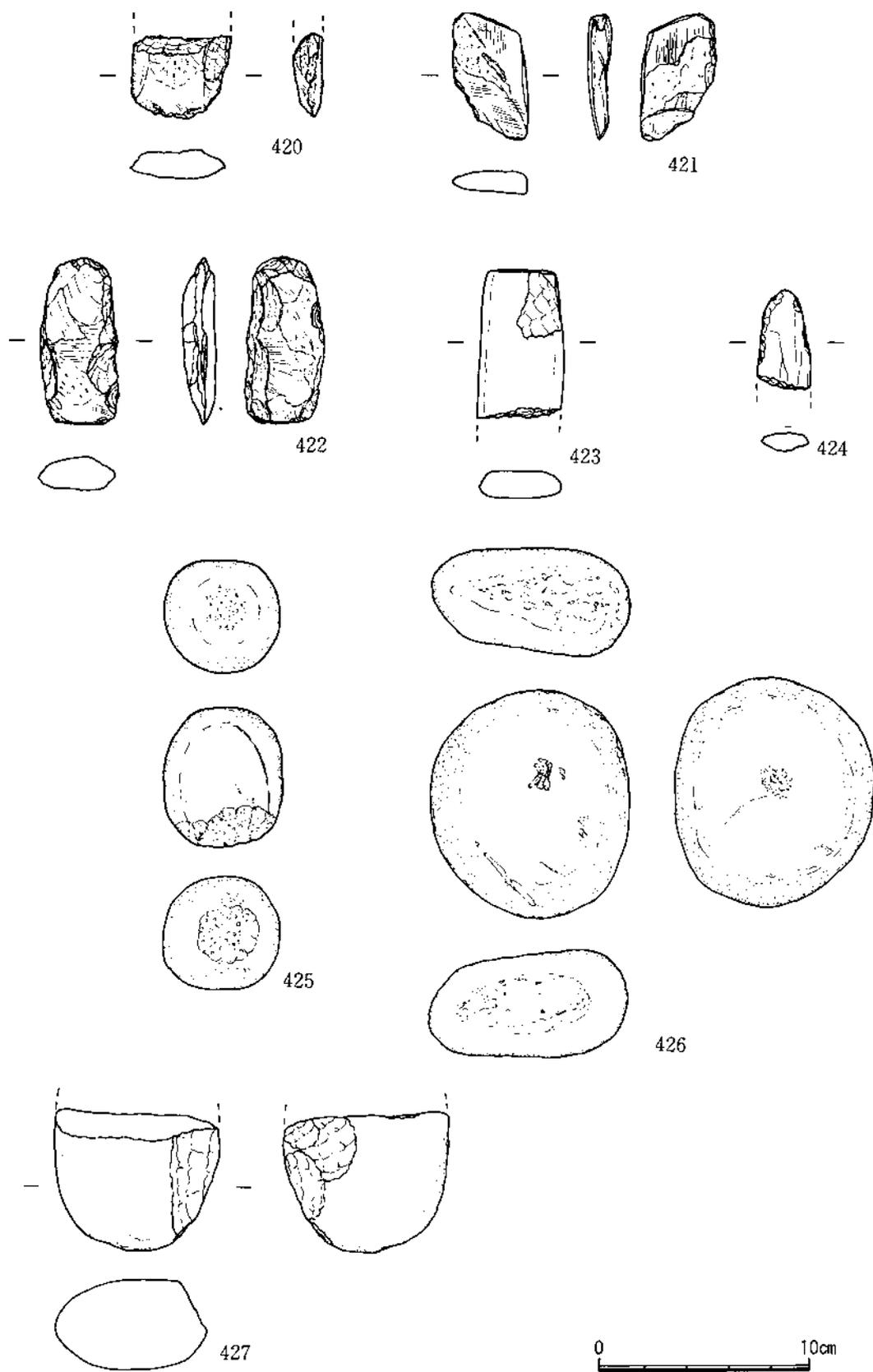


Fig. 60 出土遺物・石器（縄文）13（Ⅱ-4区420・421、Ⅲ-4区422~427）

Tab. 14 石器(縄文時代) 観察表(1)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層位	器種	全長 cm	全幅 cm	全厚 cm	重量 g	石質	調整・特徴
333	48	No.1	小玉	0.8	0.9	0.4	0.4	硬玉	包含層中の出土故に弥生時代の石器の可能性も残る。
334	〃	(C4)	石鏃	2.0	1.1	0.4	0.8	サヌカイト	刃縁が直線的で先端部が鋭い。基部は緩やかにくびれる。
335	〃	TRA 南	石鏃	1.7	1.0	2.0	0.4	サヌカイト	基部が弧状にくびれる。
336	〃	J-I 層	石鏃	2.0	0.8	0.2	0.5	サヌカイト	刃部鋭く、直線的。胸部欠損。
337	〃	J-I 層 No.10	石鏃	1.6	0.8	0.3	0.5	サヌカイト	先端部は鋭い。基部は緩やかにくびれる。
338	〃	D6南バンク	石鏃	1.8	0.9	0.3	0.4	サヌカイト	先端部は鋭い。胸部は欠損。
339	〃	J-III 層 S-74	石鏃	2.5	1.0	0.4	1.1	サヌカイト	二等辺三角形を呈する。胸部欠損のため基部形状不明。
340	〃	TR-A	石鏃	7.2	3.3	1.6	47	泥質片岩	長軸両端に敲打による抉入あり。
341	〃	No.192	石鏃	7.5	3.0	1.1	50	泥質片岩	長軸両端に敲打による抉入あり。
342	〃	J-III 層 No.62	石製品	12.1	1.7	0.8	25	蛇紋岩	全面を磨いて、裏面を平らに仕上げ表に稜を持つ。擦痕による面取りが見られ、両端を細く仕上げる。片方が厚みを持つ。
343	〃	J-I 層 No.11	抉入状石器	2.5	6.6	0.6	12	サヌカイト	横長剥片を素材とする。刃部は急角度で両側面から調整、基部にも調整を施す。
344	〃	No.120	楔形石器に伴う剥片	3.5	1.3	0.8	5	チャート	両側面によるもので上下両端部が線状打面となる。
345	〃	SR-1	スクレイパー	4.9	3.2	0.7	14	サヌカイト	全周に加工を施す。
346	〃	SD-1	2次加工のある剥片	3.5	7.7	0.9	29	サヌカイト	横長剥片素材。短側面に2次加工を施し急角度の刃部を作出する。
347	〃	NS バンク	2次加工のある剥片	5.8	3.3	1.0	22	サヌカイト	長側面に階段状の細かい剥離痕あり。
348	49	S-30	磨製石斧	9.7	2.8	1.0	50	蛇紋岩	転蹀を用いる。小型で刃部のみを研磨し作出する。
349	〃	J-III 層 TR-B	磨製石斧	5.8	2.8	0.7	23	蛇紋岩	転蹀を用いる。小型で刃部のみを研磨し作出する。
350	〃	J-I 層 S-71	磨製石斧	12.1	4.8	2.5	235	蛇紋岩	刃部欠損。表面は剥離するが、端部にわずかに研磨が観察される。
351	〃	J-III 層 TR-A	磨製石斧	5.6	4.9	2.0	68	蛇紋岩	基部欠損。全面研磨、刃部鋭い。
352	〃	S-49	磨製石斧	9.3	7.2	2.2	250	蛇紋岩	基部欠損。刃部は全体を研磨し作出する。
353	〃	J-III 層 TR-BS-18	磨製石斧	7.5	15.2	1.1	70	蛇紋岩	平行側縁。剥離のため研磨面をほとんど残さないが、全面研磨と推定される。
354	〃	TR-A 北	磨製石斧	5.8	6.4	1.3	52	蛇紋岩	側縁は平行。
355	〃	J-III 層 No.69	磨製石斧	8.9	7.4	2.0	210	蛇紋岩	基部欠損。使用により刃部がつぶれる。
356	50	TR-5	磨製石斧	5.7	5.3	1.3	70	蛇紋岩	側縁端部研磨により面をなす。全面研磨。側縁平行。
357	〃	J-V 層 S-41	磨製石斧	9.7	5.8	2.1	250	蛇紋岩	刃部がわずかに折損する。全面研磨。側縁平行。
358	〃	J-I 層 S-22	磨製石斧	12.5	7.3	5.1	500	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨で側縁は外湾する。
359	〃	J-III 層 S-75	磨製石斧	12.5	6.0	2.8	380	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨で側縁は平行。
360	〃	J-I 層 S-17	磨製石斧	12.5	5.5	3.0	367	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨。部分的に自然礫面を残す。
361	〃	J-V 層 S-47	磨製石斧	10.0	4.7	3.0	200	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨。端部など一部に自然礫面を残す。
362	〃	No.38	磨製石斧	11.4	5.7	2.7	335	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨。部分的に自然礫面を残す。
363	51	J-I 層 S-30	磨製石斧	11.3	5.5	3.0	265	蛇紋岩	刃部折損。両側縁を敲打により平行に作出。腹面に研磨面が認められないが使用時の剥離のためと考えられる。
364	〃	J-I 層 No.98	磨製石斧	10.0	4.2	2.2	145	蛇紋岩	刃部折損。両側縁を敲打により平行に作出。
365	〃	No.29	磨製石斧	12.1	5.6	2.0	275	蛇紋岩	刃部折損。全面研磨するが自然礫面多く残る。
366	〃	TR-4 J-I	磨製石斧	7.7	3.5	1.4	53	蛇紋岩	部分的に研磨が確認される。未製品あるいは製作・使用途上で生じた剥片。
367	〃	No.5	磨製石斧原材	6.5	4.0	1.9	80	蛇紋岩	石斧原材の蛇紋岩転石。
368	〃	J-IV 層 TRA 南	磨製石斧	12.0	4.7	2.0	160	蛇紋岩	磨製石斧の未製品。製作過程で刃部が欠けた可能性あり。
369	〃	J-II 層	磨製石斧	6.4	3.3	1.3	35	蛇紋岩	側面は敲打により直線的に成形する。腹面は全面を研磨。
370	〃	J-I 層 S-29	磨製石斧	8.8	5.2	4.1	310	蛇紋岩	基部の可能性あり。研磨面なし。
371	52	J-III 層 S-32	磨製石斧	6.2	6.1	1.2	120	蛇紋岩	扁平な磨製石斧の未製品。腹面に研磨面残る。
372	〃	J-V 層 (C4)	磨製石斧	10.2	7.3	1.0	115	蛇紋岩	扁平な磨製石斧の未製品。側面は敲打により直線的に成形。
373	〃	J-II 層 (B2)	磨製石斧剥片	8.4	3.2	0.8	25	蛇紋岩	蛇紋岩剥片。
374	〃	No.46	磨製石斧剥片	10.3	3.5	1.1	70	蛇紋岩	製作時の剥片か？
375	〃	No.3	磨製石斧	13.9	3.6	2.0	14	蛇紋岩	敲打により、刃部の開く形状の素材を準備。未製品。
376	〃	J-I 層 S-34	磨製石斧剥片	13.3	3.6	1.6	70	蛇紋岩	蛇紋岩剥片。
377	〃	J-IV 層 S-44	磨製石斧剥片	3.3	5.2	0.5	15	蛇紋岩	蛇紋岩剥片。
378	〃	J-I 層 S-16	磨製石斧剥片	3.5	4.5	0.7	15	蛇紋岩	蛇紋岩剥片。
379	〃	J-III 層 S-68	磨製石斧剥片	5.3	3.0	0.8	20	蛇紋岩	蛇紋岩剥片。

Tab. 15 石器（縄文時代）観察表(2)

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層位	器種	全長 cm	全幅 cm	全厚 cm	重量 g	石質	調整・特徴
380	52	J-IV層 TRA	打製石斧	12.9	5.5	1.5	125	泥質片岩	撥型を呈する打製石斧。表面は自然面を残し、側縁は左右から粗く加工を施す。裏面は両側縁から粗く加工し、自然面は認められない。基部は細くなる。刃部使用による刃割れあり。
381	53	J-I層 中央バンク(C4)	叩き石	21.5	4.7	4.7	890	緑色岩系の砂岩	棒状の叩き石で両端に敲打痕あり。側面の片側に擦痕が認められる。
382	〃	J-IV層 No.45	叩き石	14.3	7.0	2.7	470	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。
383	〃	J-V層 S-45	叩き石	15.5	11.8	5.5	1,120	砂岩	側縁に敲打痕。
384	〃	J-III層 TRA	叩き石	11.9	14.3	4.2	1,050	砂岩	側縁に敲打痕。
385	54	TR-D	叩き石	15.0	6.0	3.2	475	砂岩	側縁に敲打痕。
386	〃	J-I層 S-26	叩き石	12.4	7.0	2.9	330	砂岩	表面、側縁に敲打痕あり。
387	〃	J-I層 S-21	叩き石	9.3	7.6	1.9	230	砂岩	扁平礫を利用。側縁に敲打痕あり。
388	〃	TR-A 南	叩き石	9.9	10.8	4.6	800	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
389	〃	J-IV層 S-70	叩き石	5.5	12.0	3.3	310	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
390	〃	J-I層 S-49	叩き石	6.1	5.5	4.9	195	砂岩	径5～6cmの球形の小円礫を利用した叩き石。端部に敲打痕。
391	〃	S-46	叩き石	8.6	7.8	6.9	670	砂岩	目の粗い砂岩。表面、側縁に敲打痕あり。
392	〃	J-IV層 S-73	叩き石	11.9	8.3	8.2	1,250	砂岩	楕円形の円礫利用。端部に敲打痕あり。
393	55	J-III層 S-19	叩き石	8.8	8.5	5.5	680	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
394	〃	S-33(D7)	叩き石	6.3	9.3	4.7	470	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。中央部で折断。
395	〃	J-V層 S-40	叩き石	8.2	9.5	5.8	850	砂岩	表面、側縁に敲打痕あり。折損。
396	〃	J-V層 S-76	叩き石	10.8	10.3	5.5	1,040	砂岩	表裏面に敲打痕あり。折損。
397	〃	S-35	叩き石	10.1	6.0	5.5	360	砂岩	側縁に敲打痕あり。
398	〃	J-IV層 S-42	叩き石	7.3	9.0	5.3	500	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
399	56	J-I層 S-12	叩き石	17.0	2.6	2.7	100	砂岩	側縁に敲打痕あり。三日月状に残り、大半は失われる。
400	〃	No.164	叩き石	11.3	8.3	4.2	600	砂岩	表裏面に敲打痕あり。
401	〃	J-III層 No.1	叩き石	9.0	9.3	2.7	375	砂岩	表面に擦痕あり。折損。
402	〃	No.184	叩き石	10.5	7.2	4.0	435	砂岩	表面、側縁に敲打痕あり。
403	〃	J-V層	叩き石	7.9	7.6	3.1	285	砂岩	側縁遺構だ痕あり。
404	〃	J-III層 S-77	叩き石	8.8	5.2	4.1	310	砂岩	表面、側縁に敲打痕あり。
405	〃	J-IV層 S-43	叩き石	8.5	13.2	6.0	950	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
406	57	J-III層 S-61	叩き石	6.6	11.1	4.9	750	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。折損。
407	〃	SR-1	凹石	4.5	6.8	5.1	220	砂岩	表面、側縁に敲打痕あり。
408	〃	J-V層 S-66	凹石	10.2	8.8	6.1	830	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。
409	〃	TR-H.S-36	凹石	9.0	9.5	4.5	610	砂岩	表裏面に敲打痕あり。表裏面とも敲打により凹状に窪む。
410	〃	No.27	凹石	9.5	8.4	4.5	520	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。表面は敲打により凹状に窪む。
411	58	No.196	石溝砥石	11.0	7.1	5.3	520	砂岩	きめの粗い砂岩。台形状の角礫を使用。表面に2条の溝があり擦痕が認められる。
412	〃	J-V層 S-48	磨石	12.3	8.0	3.4	460	砂岩	断面三角形の砂岩礫を使用。背面に擦痕あり。腹面は敲打痕が認められ、叩き石として利用する。
413	〃	J-I層(B3)	磨石	7.0	9.7	2.7	14	砂岩	皿状の砂岩礫。表面に擦痕と敲打痕が認められる。
414	〃	J-IV層 TRA 南	磨石	6.3	2.7	2.2	110	砂岩	表面に擦痕が、側面に敲打痕が認められる。
415	〃	S-28(C6)	磨石	17.8	14.5	8.0	3,000	砂岩	表面は凹状に窪み、擦痕が観察される。
416	〃	S-63	磨石	14.4	7.0	3.3	650	砂岩	表裏面と側面に擦痕あり。
417	59	J-III層 TRA 南	台石	16.7	11.4	5.7	1,840	砂岩	表面に20箇所以上の敲打痕が認められる。
418	〃	TRA 南	台石	20.4	14.2	7.2	3,300	砂岩	断面台形の砂岩礫で、背面の端部と中央部に集中的に敲打痕が認められる。
419	〃	TR-B	台石	32.0	23.8	9.2		砂岩	表裏面に敲打痕が認められる。
420	60	II-4区	磨製石斧	3.8	4.4	1.4	35	蛇紋岩	全面を研磨して刃部を作出。基部欠損。側縁は平行。
421	〃	II-4区	磨製石斧	6.2	3.5	1.0	31	蛇紋岩	全面を研磨して刃部を作出。基部欠損。側縁は平行。
422	〃	III-4区 TR-3	磨製石斧	8.0	3.7	1.6	70	蛇紋岩	全面を研磨して刃部を作出。基部欠損。側縁は平行。
423	〃	III-4区 TR-3	磨製石斧	4.7	2.2	0.9	18	蛇紋岩	基部。側縁平行。刃部欠損。
424	〃	III-4区 TR-3	磨製石斧	7.2	4.0	1.4	83	蛇紋岩	基部。側縁平行。刃部欠損。
425	〃	III-4区 TR-3	叩き石	6.8	5.7	5.5	335	砂岩	円礫利用。端部に敲打痕あり。
426	〃	III-4区	叩き石	11.0	9.6	5.0	790	砂岩	扁平な円礫利用。表裏面、側縁に敲打痕あり。
427	〃	III-4区	叩き石	6.6	7.3	4.4	335	砂岩	扁平な円礫利用。側縁に敲打痕あり。折損。

第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

弥生時代以降の調査成果については調査小区ごとに取り扱うこととする。縄文時代の遺物がⅢ-2区を中心に一部の地点に集中して確認されるのに対し、弥生時代特に後期に至って、谷全域に活動域が広がる。遺構・遺物も全域から確認されるため、煩雑にはなるがⅠ区からⅢ区へと調査小区ごとに記載を進めていくことにする。

概要の項で記したように、調査小区としてⅠ区が1～5、Ⅱ区が1～5、Ⅲ区が1～4の14区を設定した。遺構・遺物の関係でⅠ-4・5区は一項にまとめて記し、Ⅲ-1・3区は遺構が確認されず、時期の特定できる遺物も出土していないため項を設定しない。

1. Ⅰ-1区

調査地南東端に位置する調査区である。南北方向の生活道に面した水田であり、調査区の東側に生活道と水路が走っている。その東側はビニールハウスとして利用されており、標高が1mほど高くなっている。このビニールハウスは、Ⅰ-1・2区に沿って広がっているのだが、この地点が昭和57年に発掘調査が行われ、高知平野で初めてまとまった縄文土器が出土、注目を集めた場所である。今回の調査ではⅠ-2区で1点縄文後期土器が出土したのみで、残念ながらこの地点の縄文時代に関する新知見は得られなかった。

(1) 遺構

いずれも東西方向に流れる溝5条と自然流路1条及び土坑2基を検出した。直径10cm前後の小ピットを含めて柱穴は100個ほど検出したが建物跡と確認できるものはなかった。

SD-1

調査区南端の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約60cm・深さ10cmで長さ約3mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。図示し得る遺物はないが、古代と見られる須恵器・土師器細片を含む。

SD-2

調査区南端の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約40cm・深さ10cmで長さ約

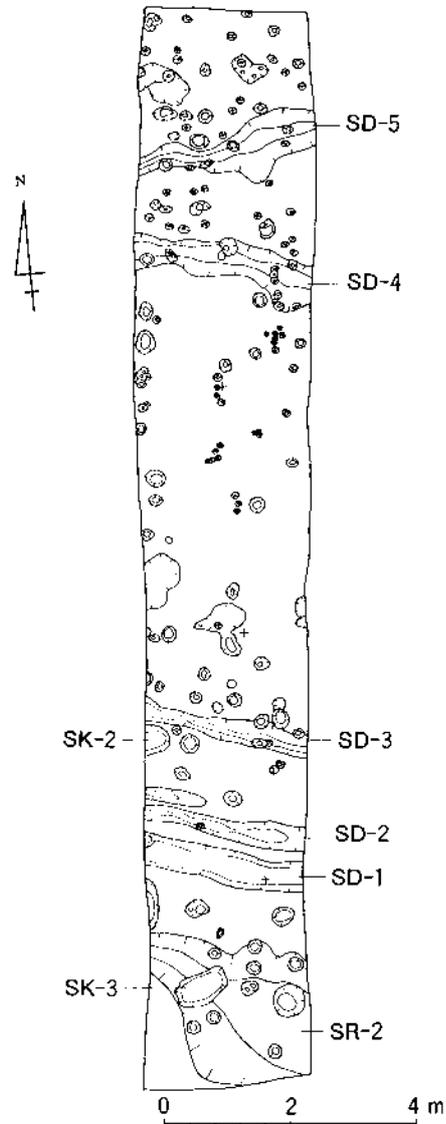


Fig. 61 Ⅰ-1区 遺構平面全体図
(S = 1/120)

3 mを検出した。舟底形の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。430～432の土師器・須恵器が出土している。430は11～12世紀、431は9世紀、432は10世紀の遺物で、432は胎土に雲母を含む搬入品で、摂津C型の羽釜である。古代と見られる須恵器・土師器小片を含む。

SD-3

調査区南端の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約30～50cm・深さ12cmで長さ約3 mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。8～9世紀の須恵器長頸壺(433)が出土している。

SD-4・5

ともに東西方向の溝で残存が悪く、遺物も含まない。深さ10cm足らずで本来の断面形は不明。埋土、暗褐色粘質土。

SR-2

調査区南端の東西方向に走る自然流路で、西側に向かって若干傾斜している。幅約100～250cm・深さ10～20cmで長さ約4 mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土(砂礫混)である。

428・429の土師器の小片が出土。中世にかけて埋積した自然流路である。

(2) 遺物

弥生中期から近世にかけての遺物が確認されている。I-1区の遺物で特筆すべきは、438のサヌカイト製石槍である。完形の石槍で弥生中期末～後期初頭にかけてのものとみられる。包含層(IV層)中からの出土で遺構は伴わない。

包含層中からは弥生～近世にわたる遺物が出土している。図示可能遺物は13点、小破片には弥生土器・土師器が確認されている。434は弥生前期末のしっかりした平底の壺底部で、これと先述の石槍以外は古代以降の遺物である。9・10世紀の遺物が多く含まれるが、13世紀後半の龍泉窯青磁(437)が試掘TR18包含層中より1点出土している。また同TRより見込に陰刻花を持つ瀬戸美濃系陶器・皿(436)も確認された。

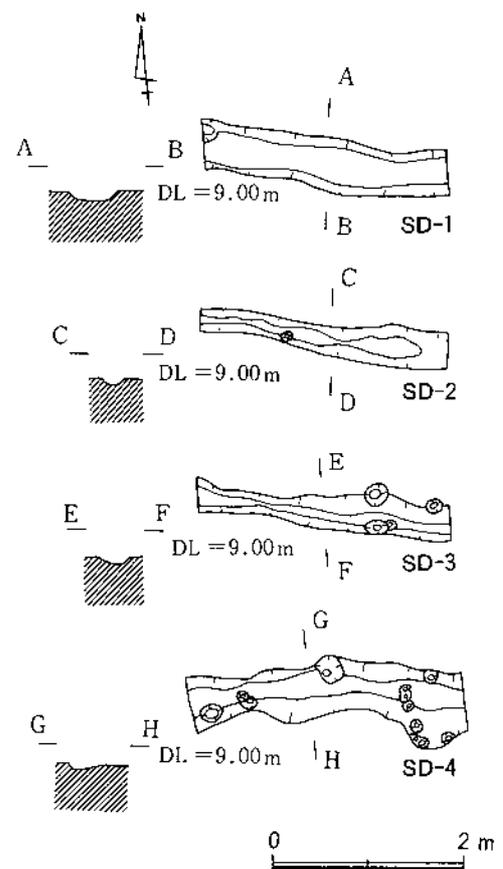


Fig. 62 I-1区 SD1～4平面図

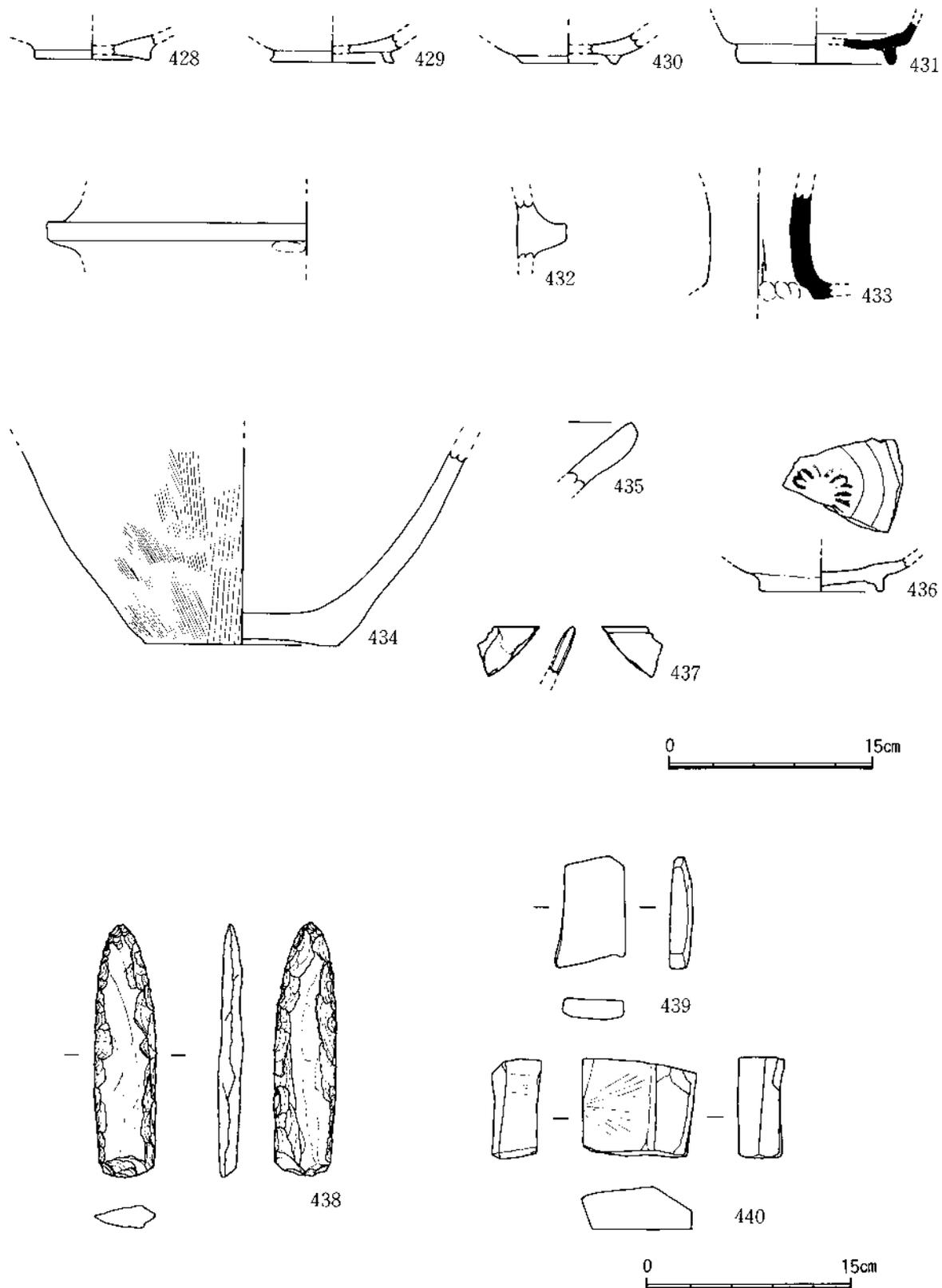


Fig. 63 I-1区 出土遺物 (SR-2 428・429・439・440、SD-2 430・432、SD-3 433、IV層 434・435・438、TR-18 436・437)

2. I-2区

調査地南東端、I-1区の北側に連続する調査区である。I-1区と同様、南北方向の生活道に面した水田であり、調査区の東側に生活道と水路・ビニールハウスという現況であった。この調査区は西側に向けて落ち込んでおり、弥生後期末を中心にした包含層を形成している。

(1) 遺構

ピットを約80基検出したが、調査区の幅あるいは立地条件等の制約上、性格の特定できた遺構はほとんどない。建物跡と断定できる遺構はなかった。

(2) 遺物

遺物はいずれも包含中（Ⅲ層及びⅤ層）からの出土である。Ⅲ層からは8世紀代の須恵器（470～472）が出土している。特筆すべきは、8世紀後半代とみられる円面硯（470）が出土していることである。高知県内の円面硯出土例は、野市町深淵遺跡、南国市比江廃寺、国分寺跡、土佐国衙など古代の寺院・官衙関連遺跡で知られているに過ぎず、量的にも僅少である。

Ⅴ層中からは弥生後期の土器がまとまって出土している。出土土器総破片約1,500点余り、その多くが弥生後期後半～古墳時代初頭のヒビノキⅡ～Ⅲ式土器の段階に相当する。同じ包含層中に弥生前期の土器も少ないながらも、混在して確認されている。441・442は弥生前期末の土器である。441はヘラ描沈線が20条に達するヘラ描沈線多条化の最終段階の土器で、442は逆し字口縁を呈する瀬戸内型甗である。当遺跡に弥生前期末には集落の存在した傍証として重要である。

455・456は弥生後期の小型土器（ミニチュア土器）であり、高坏脚部（455）・鉢（456）である。水辺の祭祀が行われていた可能性もある。

試掘 TR16もⅤ層と同じ様相であり、主体は弥生後期終末となっている。469は土製支脚で、他に1点計2点のC類土製支脚が確認された。

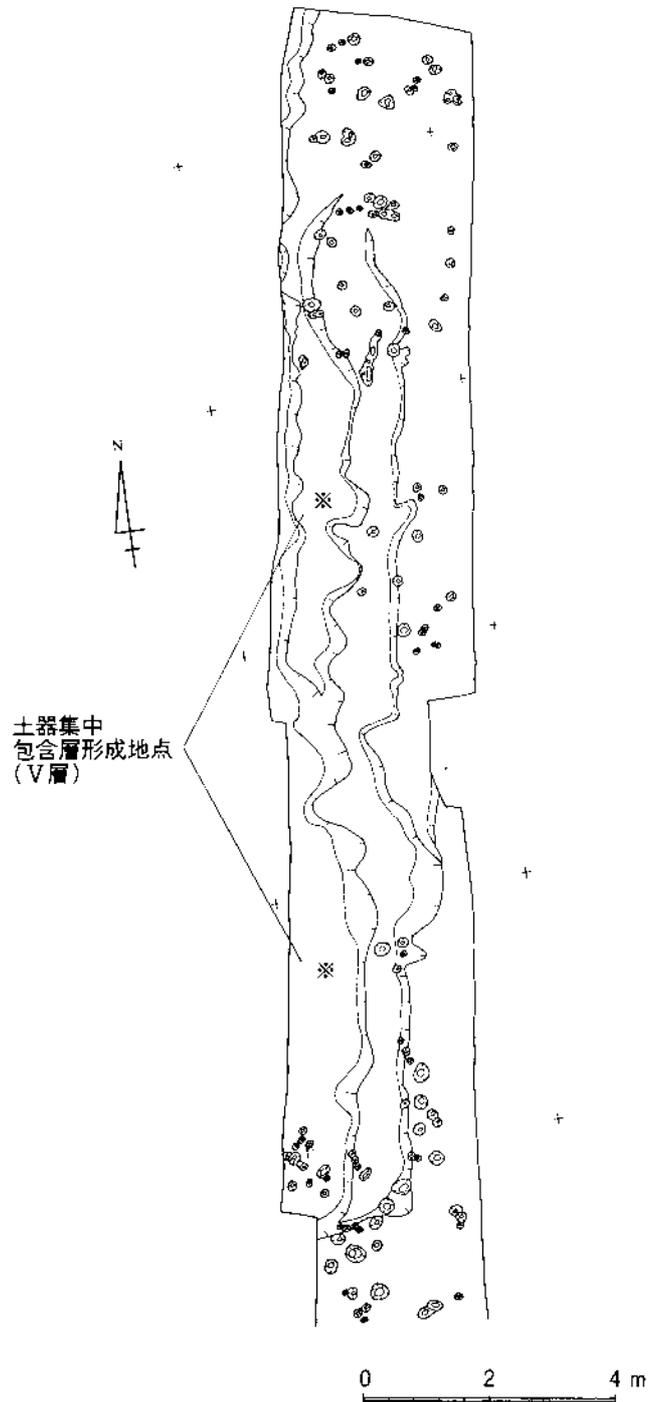


Fig. 64 I-2区 遺構平面全体図(S=1/120)

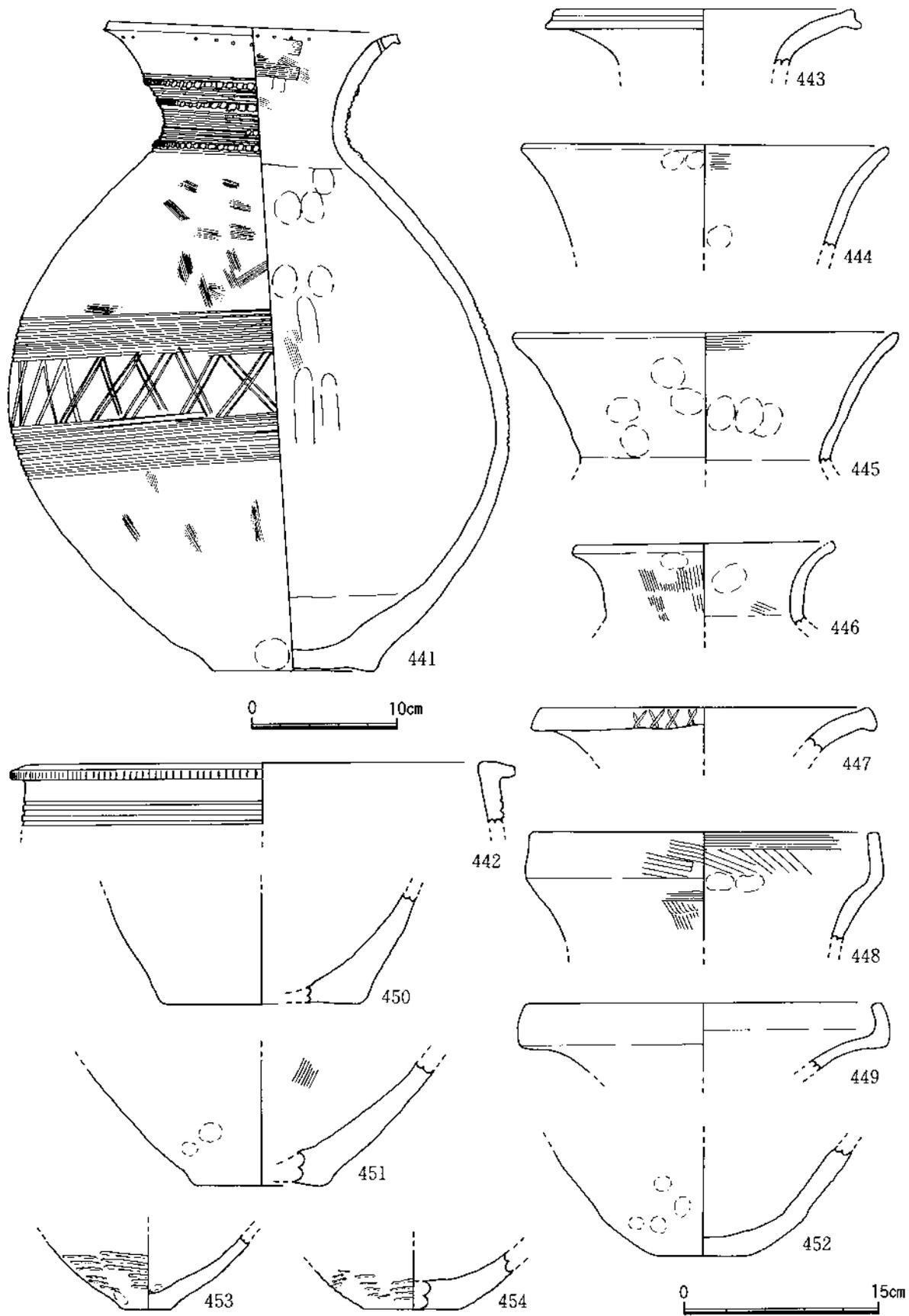


Fig. 65 I-2区 出土遺物 (V層)

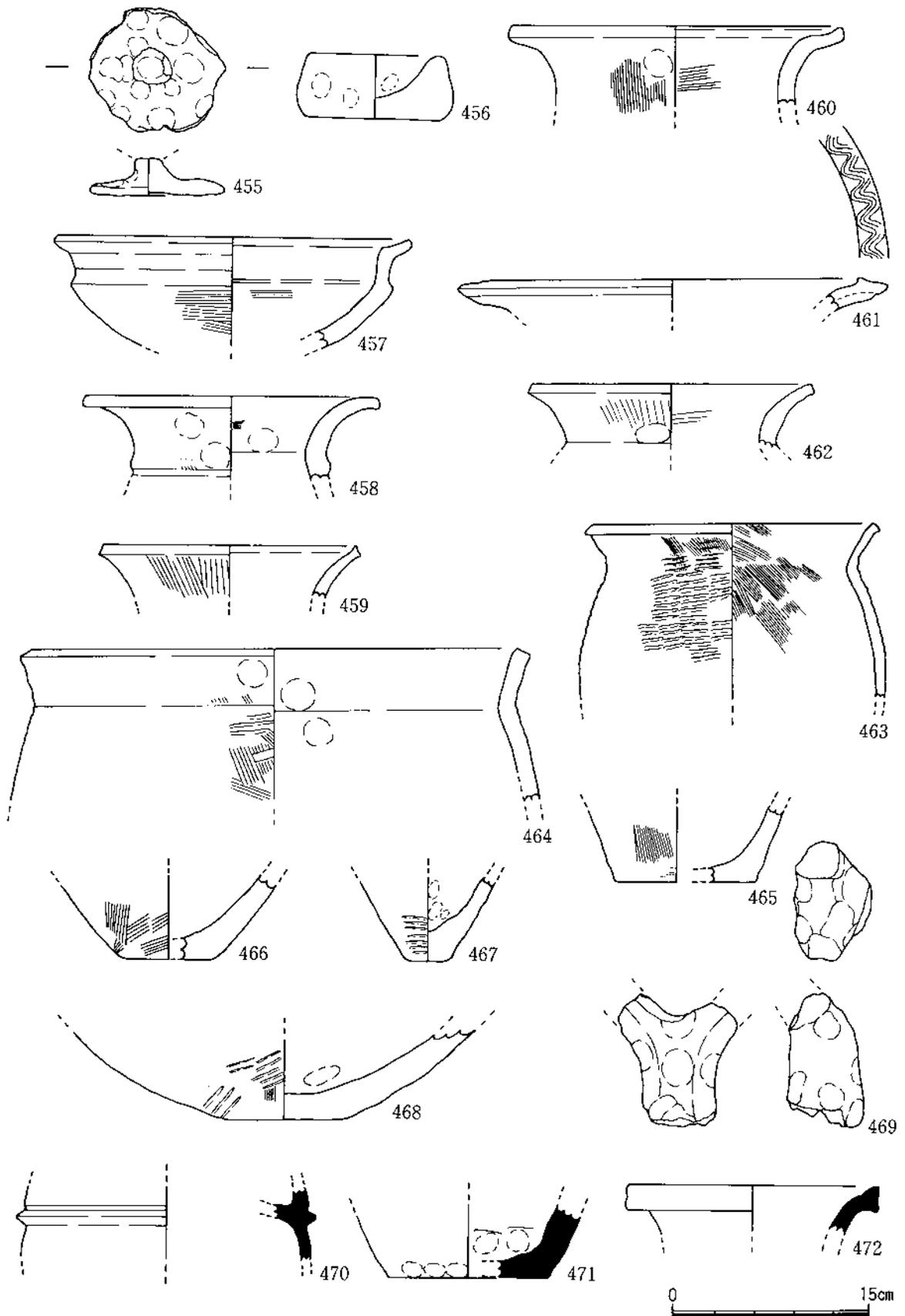


Fig. 66 I-2区 出土遺物 (V層 455・456、試掘 TR16-V層 457~469、III層 470~472)

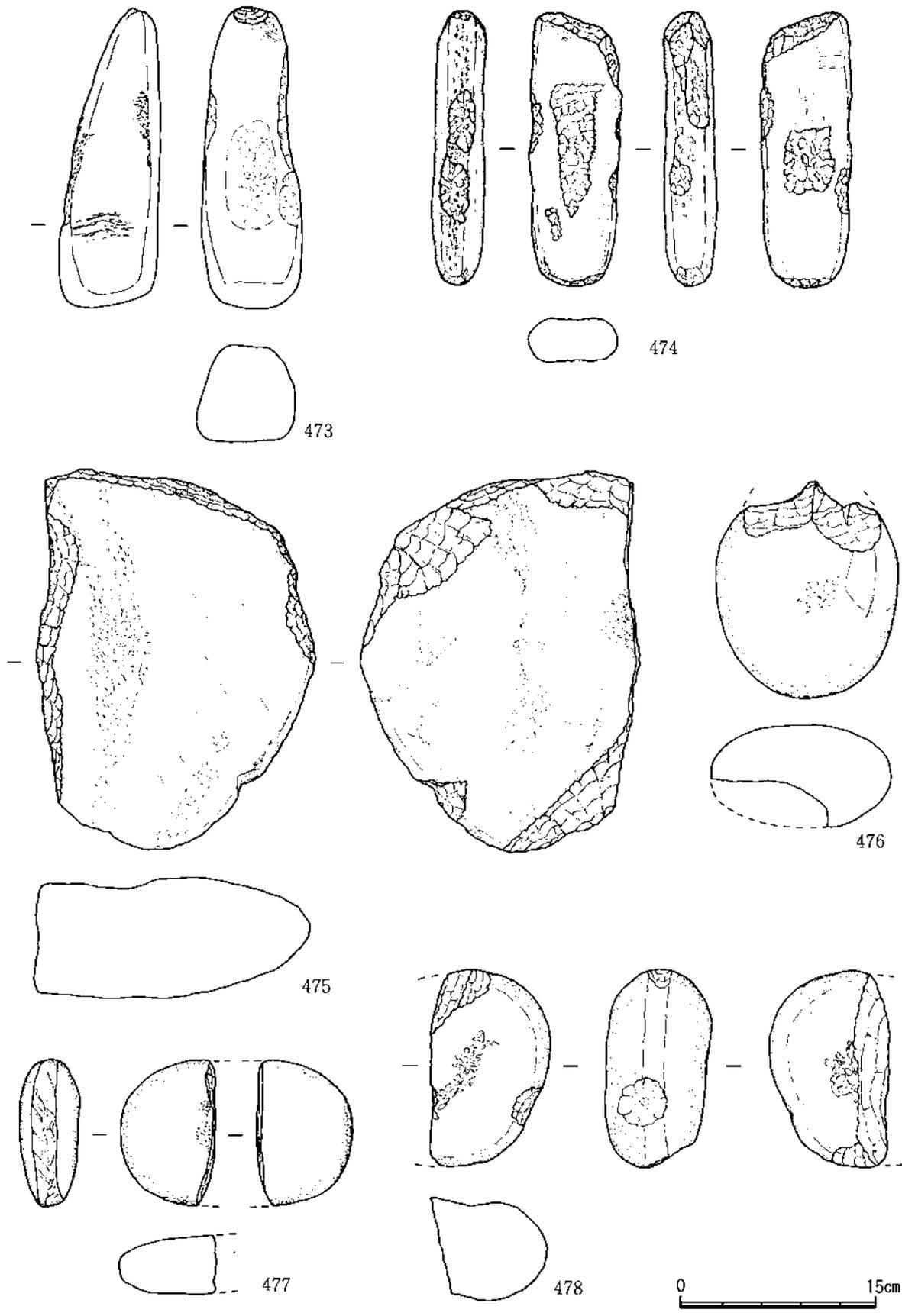


Fig. 67 I - 2区 出土遺物 (石器)

3. I-3区

I-2区の北側に続く南北方向約30mの調査区である。周辺の土地利用状況は西側に水田が広がる点はI-1・2区と同様の土地利用状況であるが、東側はビニールハウスではなく畑になっており、良好な遺構の残存が予想される。今回の調査対象区は水田として利用されていた。

(1) 遺構

溝3条と自然流路1条及び土坑2基を検出した。直径10cm前後の小ピットを含めて柱穴は120基ほど検出したが建物跡と断定可能なものはなかった。ピットは調査区南端に集中しており、溝を中心に建物跡があった可能性もあるが、今回の調査範囲では建物跡の性格を特定することはできなかった。溝は南北方向のもの東西方向のものいずれも西側に向かって傾斜している。

SD-6

調査区南端の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約80~120cm・深さ10~30cmで長さ約7mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。図示し得る遺物はないが、古代とみられる須恵器・土師器小片を含む。

SD-7

調査区北側を東西方向に走る溝で、西側に向かってわずかに傾斜している。幅約50cm・深さ15cmで長さ約3mを検出した。2段の段状になった逆台形状の溝で、埋土は灰色粘土である。遺物を含まず時期は特定できない。

SD-8

調査区北側を東西方向に走る溝で、西側に向かってわずかに傾斜している。幅約40cm・深さ30cmで長さ約3mを検出した。逆台形状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土と灰褐色砂礫の2層である。遺物は弥生土器（後期後半）及び古式土師器（Ⅱ期）である。

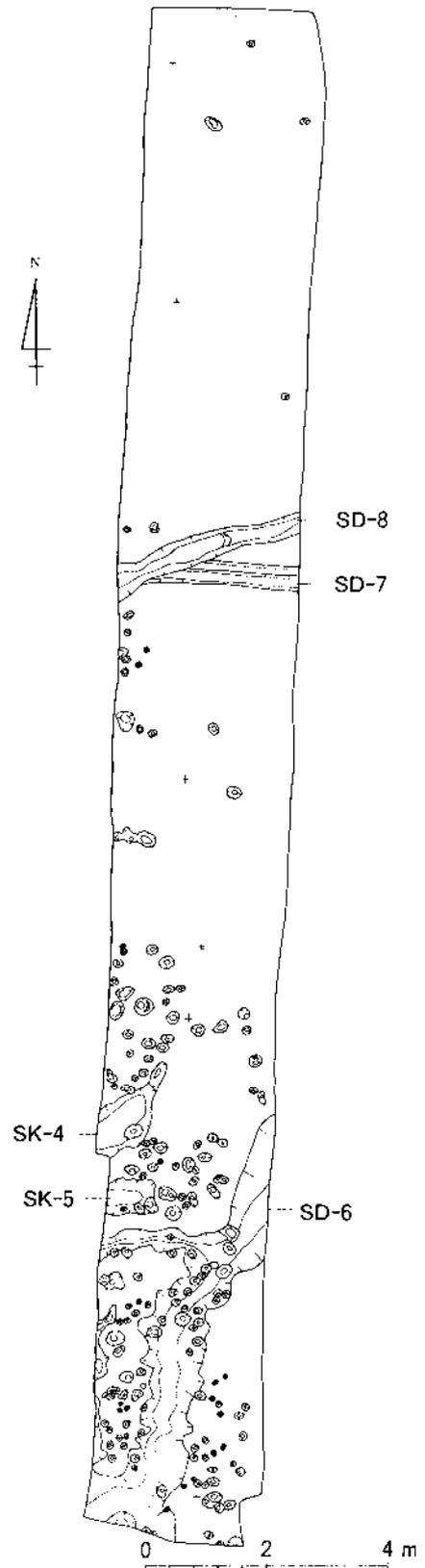


Fig. 68 I-3区 遺構平面全体図
(S = 1/120)

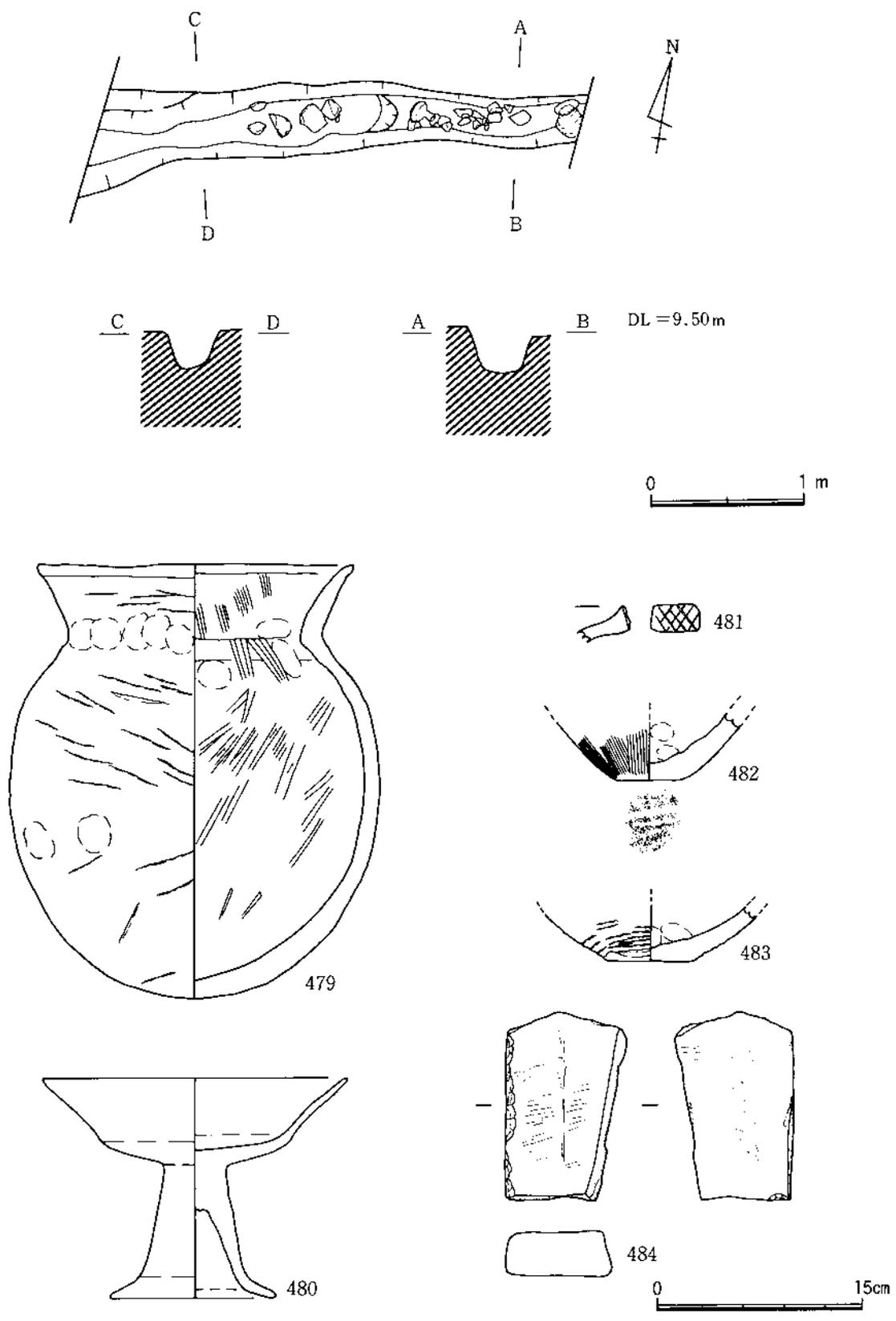


Fig. 69 SD-8 平面・断面図及び出土遺物

(2) 遺物

細片が多く時期特定不能の遺物もあったが、SD-8からは2時期の資料が確認されている。一つは弥生後期末～古墳初頭にかけての時期でもう一つは古墳時代前期、高知平野の編年で古式土師器Ⅱ期に相当する時期である。溝最下層から古式土師器Ⅱ期の甕(479)・高坏(480)が確認されたことで、この溝の機能した時期が古墳時代前期であることが判明した。

出土遺物が少なく断片的な資料だが、須恵器双耳壺(485-Ⅳ層)、壺底部(488-TR15)など8～9世紀の資料や13世紀の土師器鍋(487)も認められる。

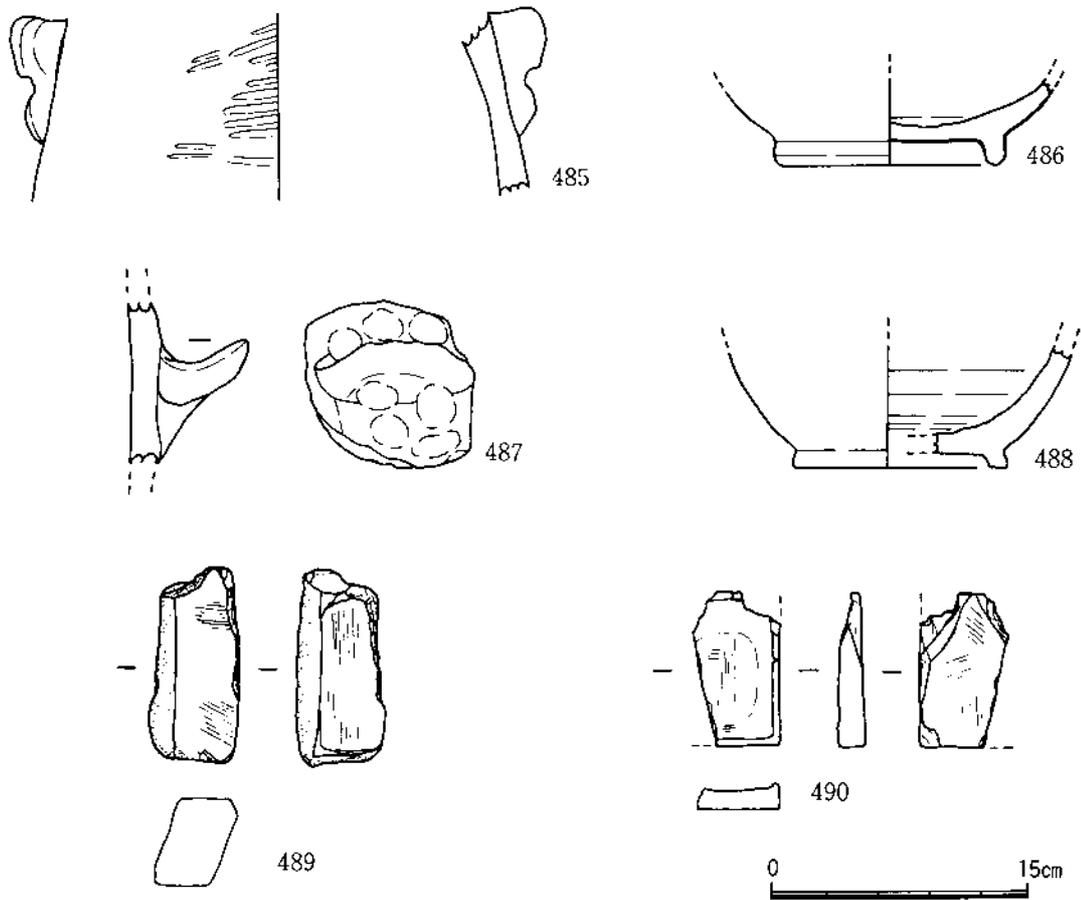


Fig. 70 I-3区 出土遺物(Ⅲ層 485～487・489・490、TR15 488)

4. I-4区・I-5区

I-3区の北側に続く調査区である。周辺の土地利用状況はI-3区と同様である。I-4区は南北方向約30mの調査区、I-5区はI-4区の北端に位置し、南北方向約20mの調査区である。I-4区は全域が後世の削平を受けており包含層の残存状況は良くない。特に北半部については、大きく攪乱を受けたり削り取られたりして、遺構の形成が認められなかった。

(1) 遺構

I-4区から溝4条と直径10cm前後の小ピットを含めて柱穴を30基ほど検出した。建物跡と断定可能なものはなかった。今回の調査範囲では建物の性格を特定することはできなかった。溝は南北方向のもの東西方向のものいずれも両側に向かって傾斜している。

I-5区からはピット16基・溝状遺構1条が検出された。

SD-9

調査区中央部の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約30cm・深さ10cmで長さ約2mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は含まず時期不明。

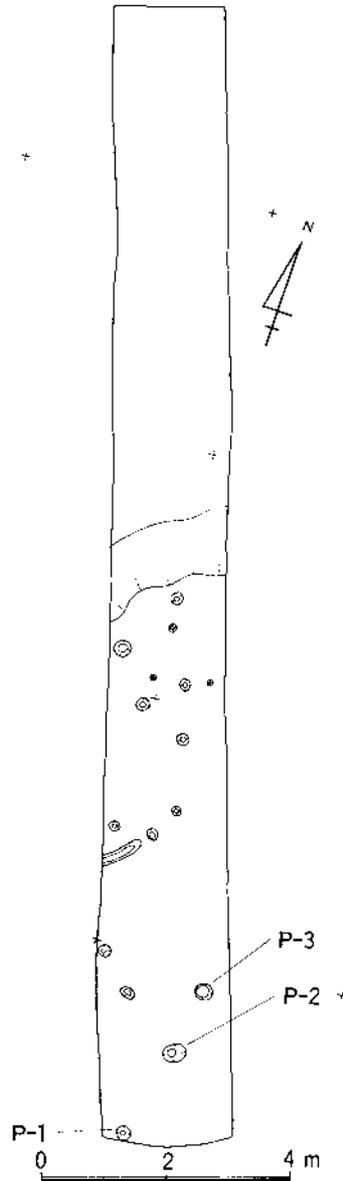


Fig. 72 I-5区 遺構平面全体図 (S=1/120)

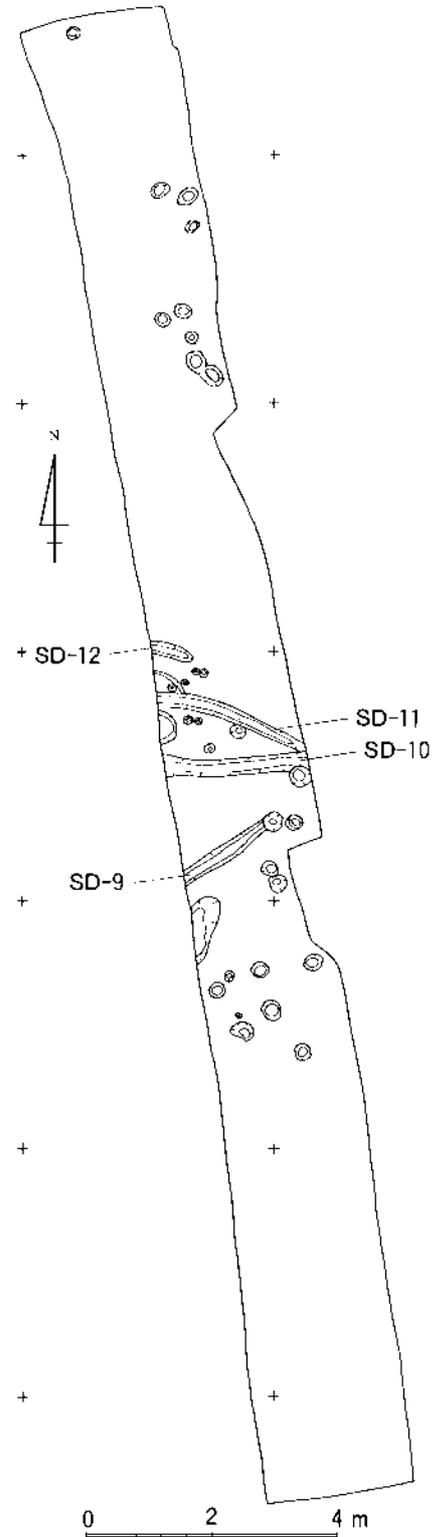


Fig. 71 I-4区 遺構平面全体図 (S=1/120)

SD-10

調査区中央部の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約40cm・深さ10cmで長さ約3mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は褐色粘土である。瓦片が出土しており、近世以降に形成された溝と考えられる。

SD-11

調査区中央部の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約40cm・深さ10~20cmで長さ約3mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は黒色粘土である。図示可能な遺物はないが、弥生後期とみられる土器小片が一点出土している。埋土とあわせて、この溝は弥生後期に機能したものと判断される。

SD-12

調査区中央部の東西方向に走る溝で、西側に向かって若干傾斜している。幅約30cm・深さ10cmで長さ約1mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。遺物は含まず時期不明。

P-1~5 (I-4区)

直径30cm前後、深さ28cm~34cmのピットで、埋土はいずれも黒色粘土である。図示可能な遺物はないが弥生後期土器の小片が出土しており、弥生後期後半のピットだと考えられる。P-1~3は一直線上に等間隔に並び、柵列あるいは堀立柱建物の可能性も考えられる。

(2) 遺物

出土した遺物総点数は、小片も含めて100点余り、図示可能なものはほとんどなかった。近世以降の瓦片・陶器片、古代の須恵器小破片なども出土しているが、今回時期が特定できた小片の多くが弥生後期後半に属するものである。当該期の柱穴も確認できたのだが調査区の範囲が狭く、建物跡の復元はできなかった。

この2つの小区で図示可能な遺物に、491 (I-4)、492 (I-5) の須恵器がある。いずれも包含層中出土で9世紀のものである。石器としては493の叩き石1点が出土している。

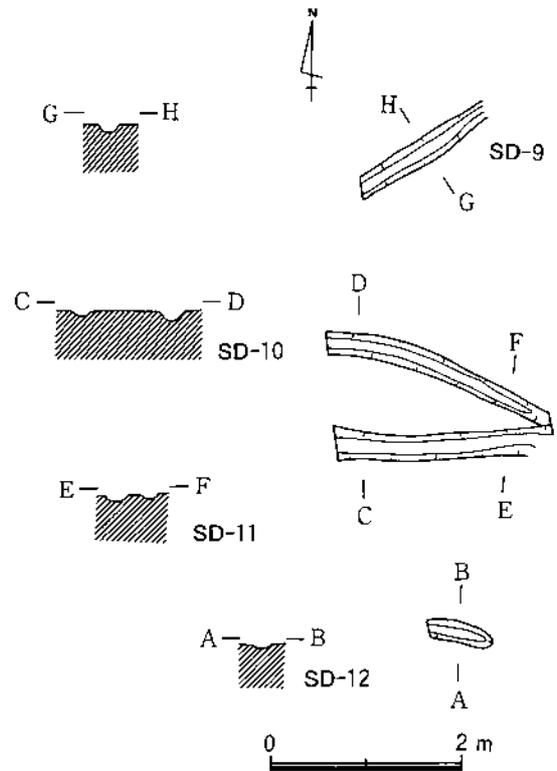


Fig. 73 SD-9~12 平面図

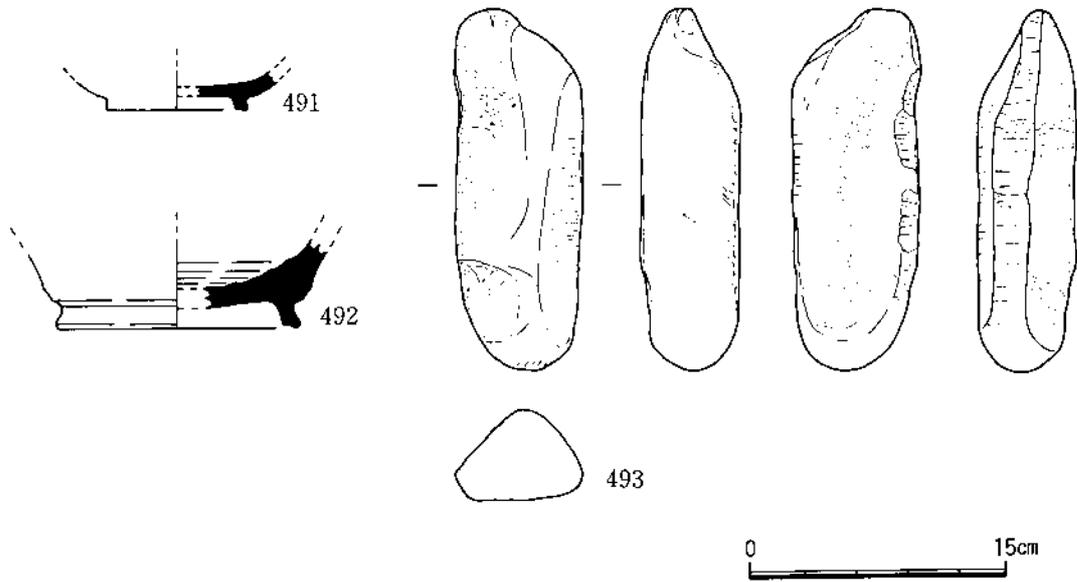


Fig. 74 I - 4 · 5区 出土遺物

5. II-1区

II区は調査対象地の谷部を東西方向に横断する調査区である。東側からII-1・2・3・4・5の調査小区を設定した上で、東から西方向へと調査を進めた。II区全域が水田として利用されており、北側と南側の水田面には50cm程度の段差があり地形に即した占地状況を示している。

II-1区はII区の東端に位置し、I区との境界を画する。現在の谷川として機能する水路に接した水田がII-1区であり、調査面積は200㎡である。

(1) 遺構

いずれも南北方向に流れる溝2条と自然流路1条を検出した。

SD-13

調査区を縦断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。最大幅約250cm・深さ24cmで長さ約10mを検出した。逆台形状の断面形を呈し、埋土は3層に分層できる。弥生後期初頭から後期後半までの遺物を含む。

SD-14

調査区を縦断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約160cm・深さ20～30cmで長さ約8mを検出した。U字形の断面形を呈し、埋土は2層に分層される。弥生後期初頭から後期後半までの遺物を含む。

SR-3

SD13・14の上層を覆う自然流路。8mの幅で調査区中央部を南北に流れる。弥生～古代にかけての遺物と近世の遺物を含み、流木も層中から出土した。

(2) 遺物

II-I区からは、弥生時代から近世にかけての遺物が出土している。弥

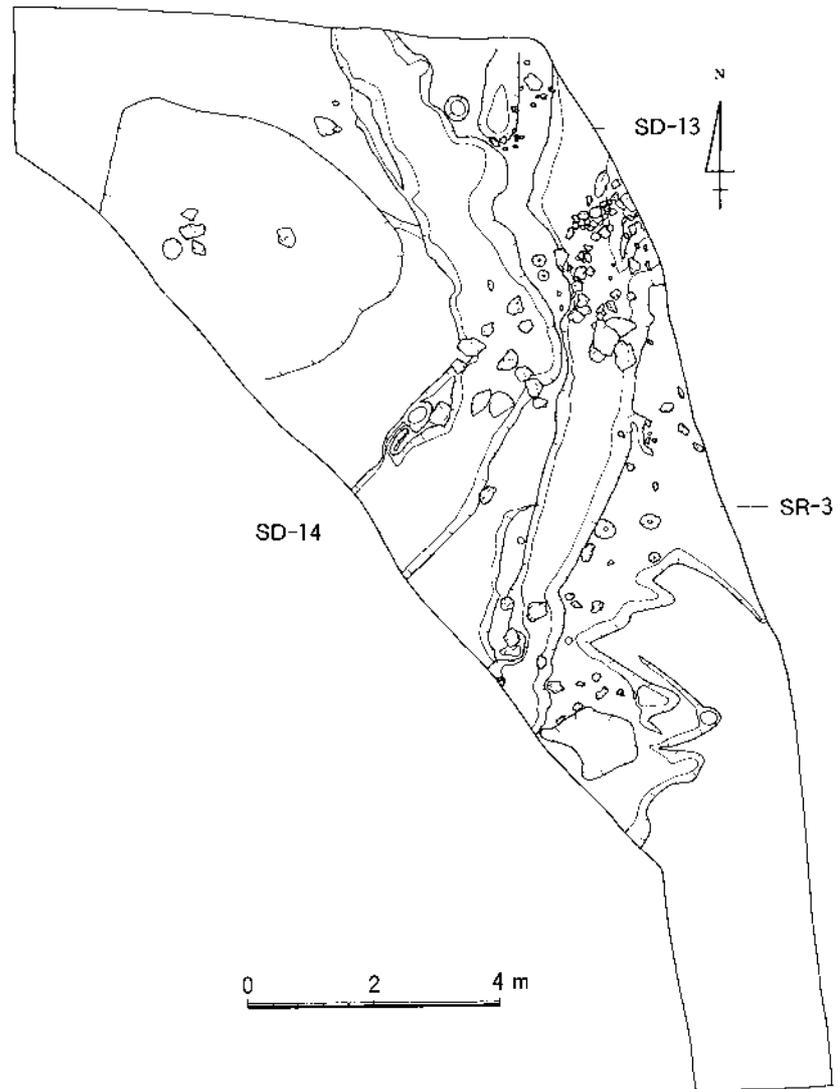


Fig. 75 II-1区 遺構平面全体図 (S=1/120)

生時代の溝の上層を覆う SR-3 からは弥生後期の遺物とともに古墳時代・古代の遺物も出土しているが量は少ない。506～507は6世紀代の須恵器、509は古代の壺頸部、511は8世紀と見られる須恵器コネ鉢底部である。

遺物がまとまって出土したのは SD13・14である。SD-13の中期末から期初頭にかけての遺物としては、513・514のように凹線文をもつ壺や525・526の平底の底部などが挙げられる。後期末の遺物は甕が多く、底部形状は尖底に近い平底や突出した平底の土器が多数を占め、完全な丸底になるものはほとんど見られない。SD-14も同様の出土状況を示す。中期末～後期初と後期末の2時期の遺物を含み、中期末は540の壺、554・555の甕、壺の口縁には朝顔状に大きく開くタイプ（547～549）と2重口縁のもの（550～553）がある。

石器としては叩き石が確認されている。

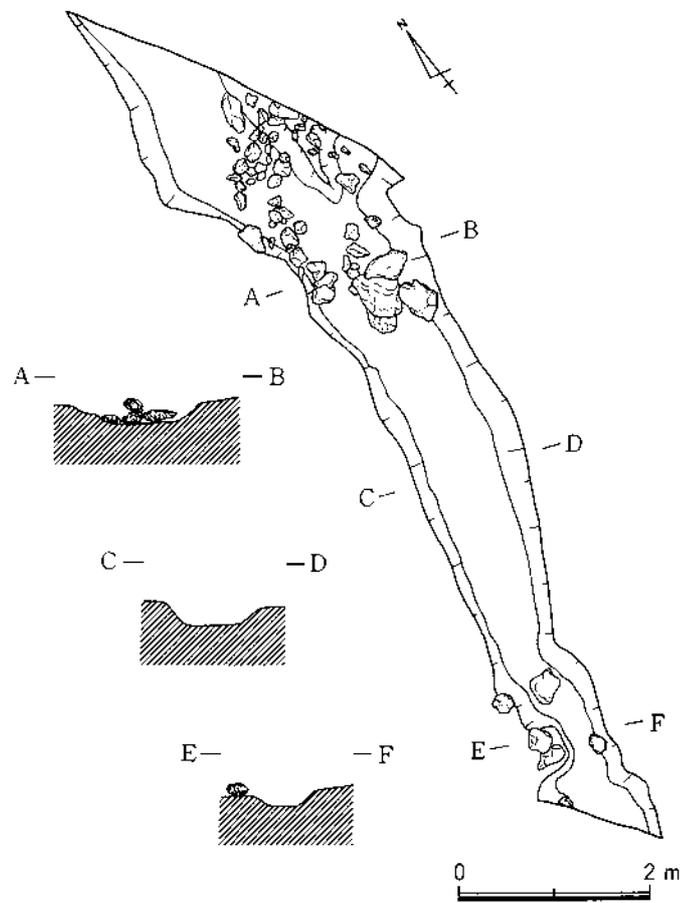


Fig. 76 SD-13 平面図 (S = 1 / 120)

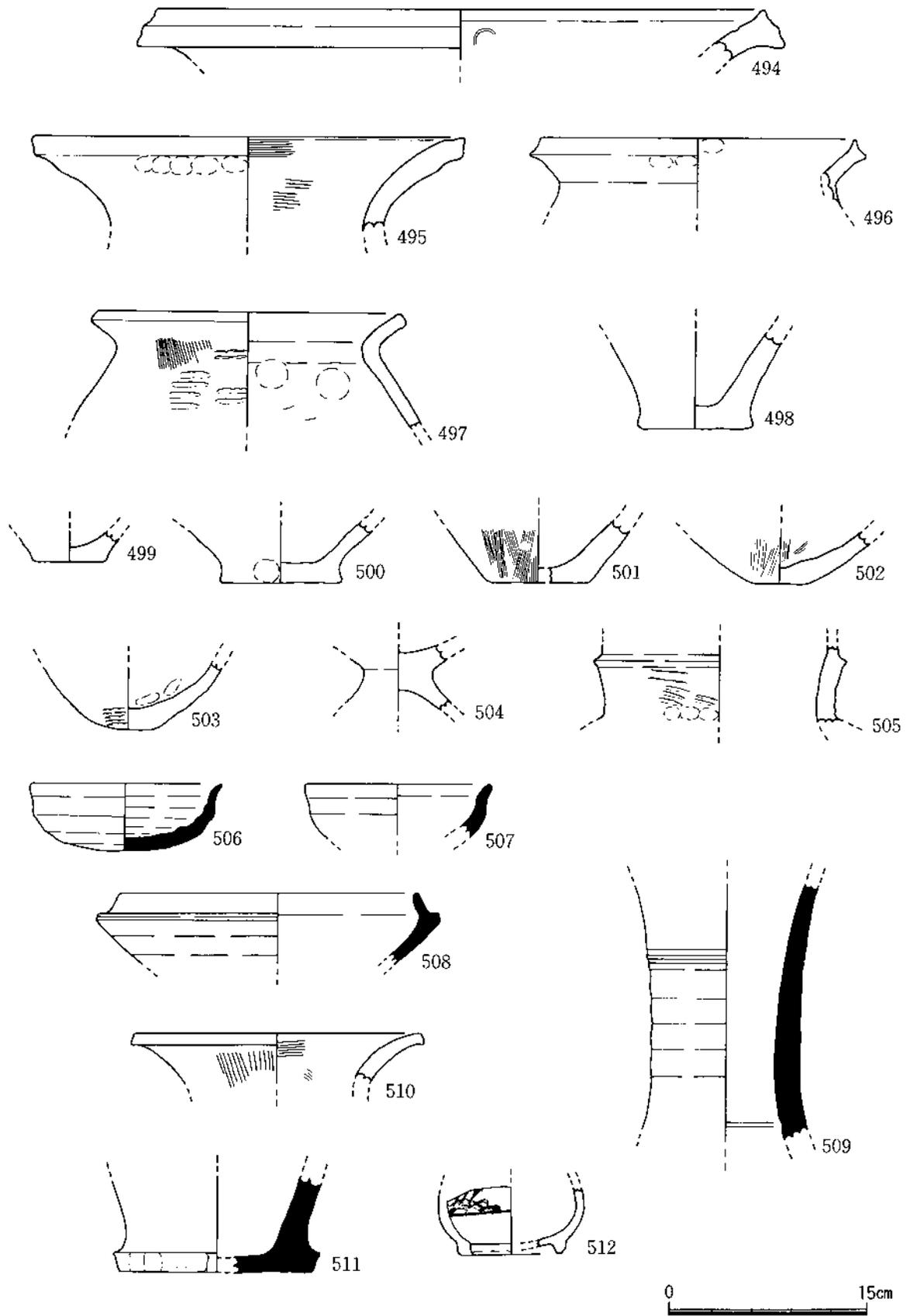


Fig. 77 II-1区 出土遺物1 (SR-3)

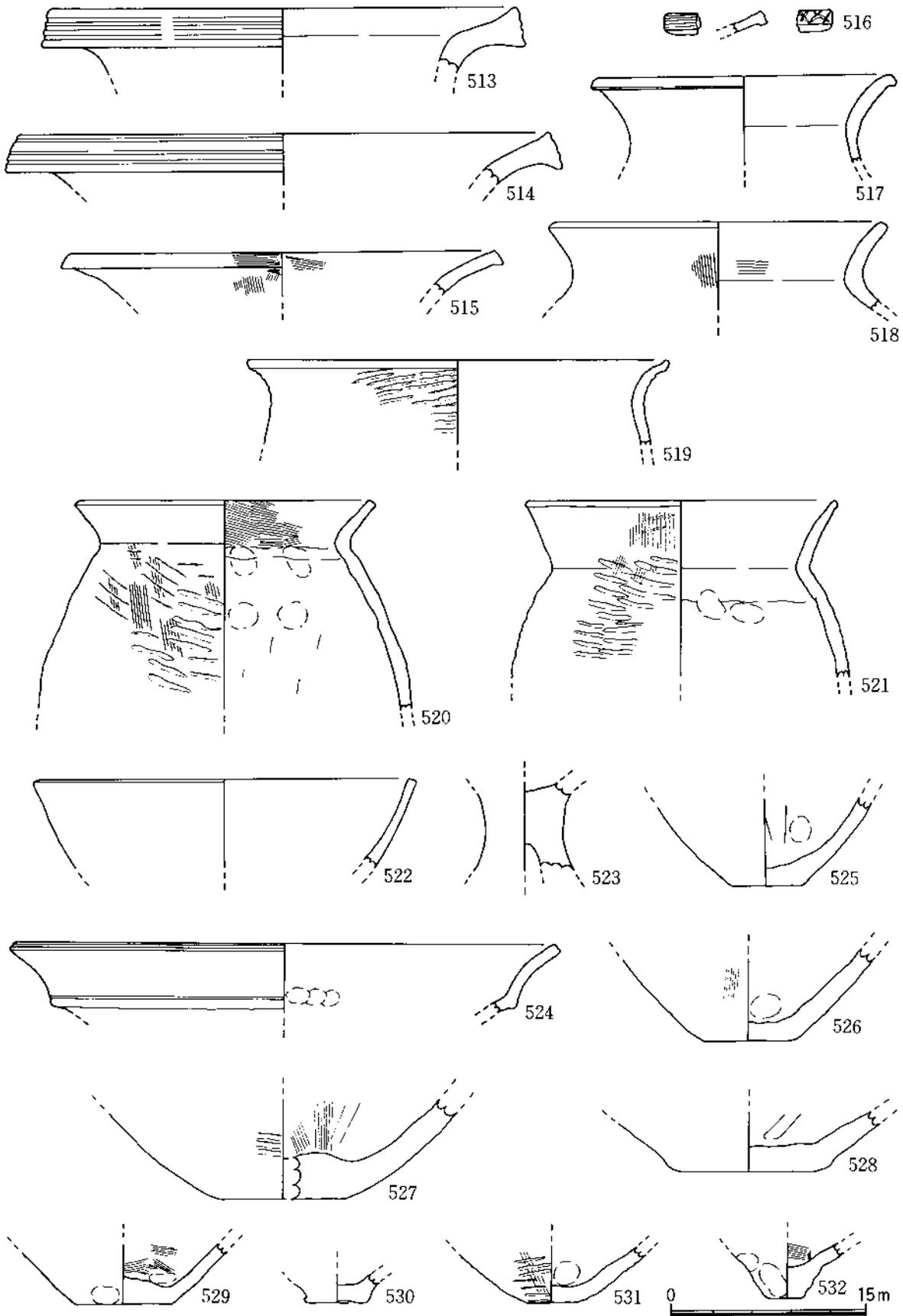


Fig. 78 II-1区 出土遺物2 (SD-13)

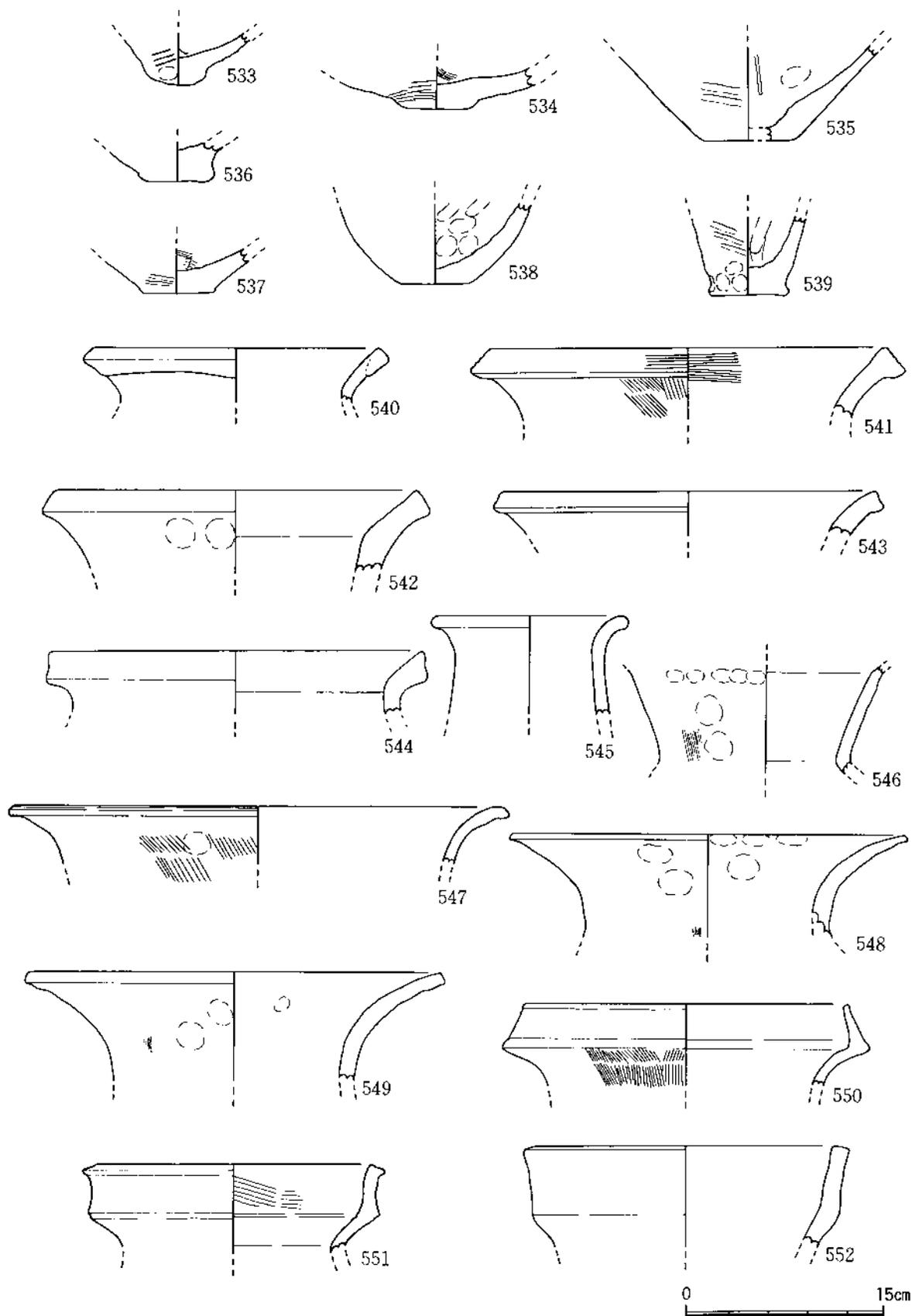


Fig. 79 II-1区 出土遺物3 (SD-13 533~539、SD-14 540~552)

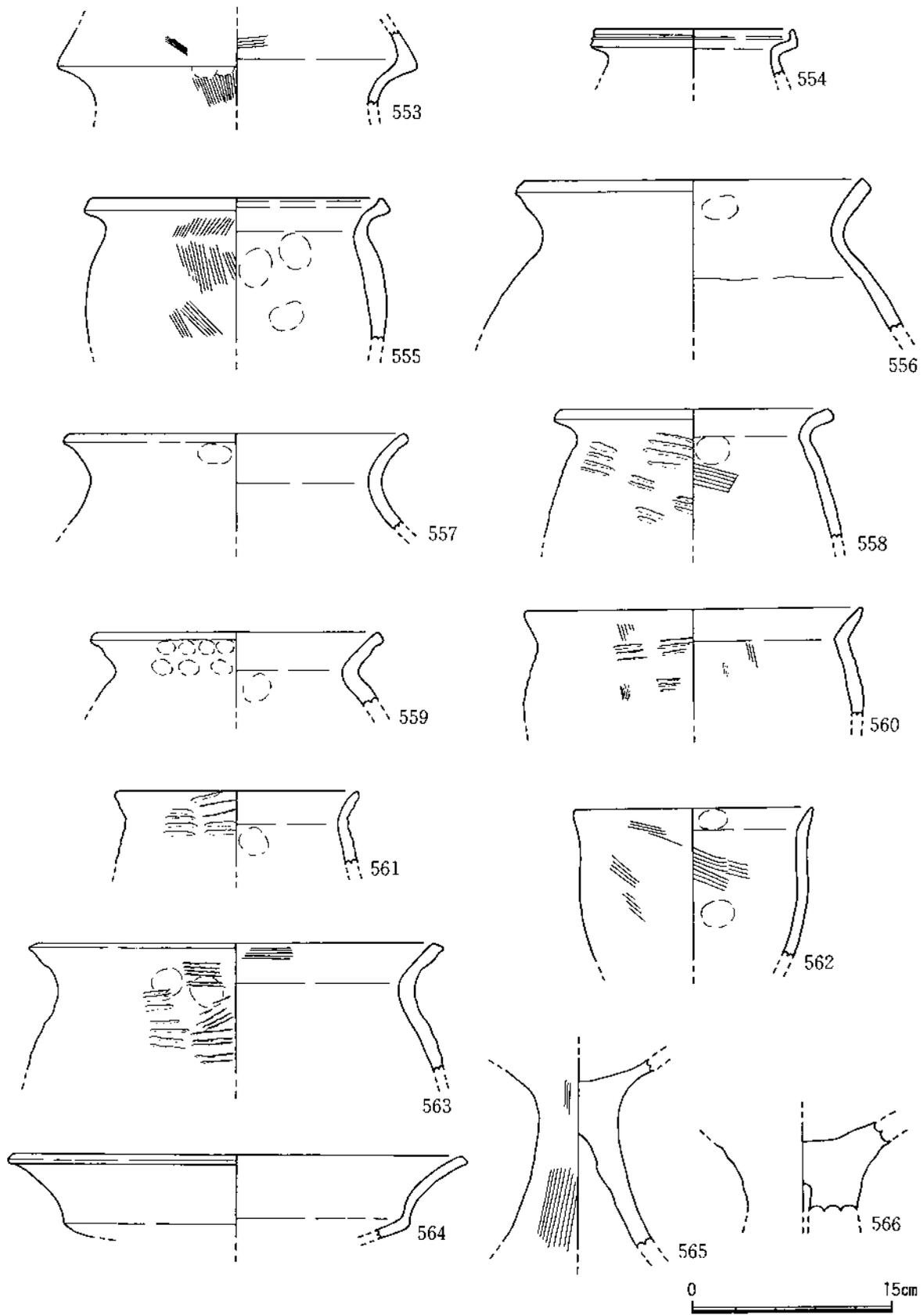


Fig. 80 II-1区 出土遺物4 (SD-14)

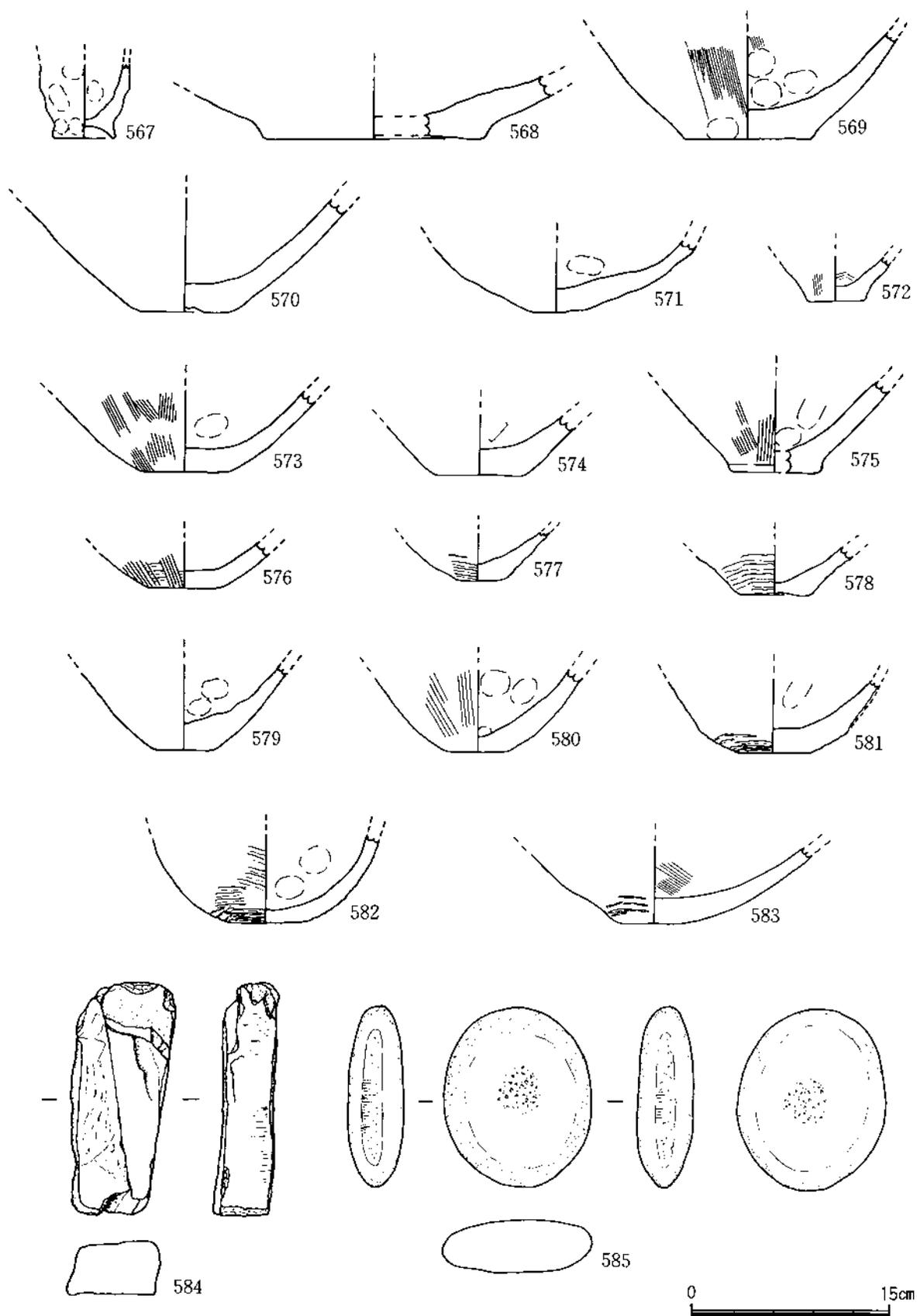


Fig. 81 II-1区 出土遺物5 (SD-14・SR-3 石器)

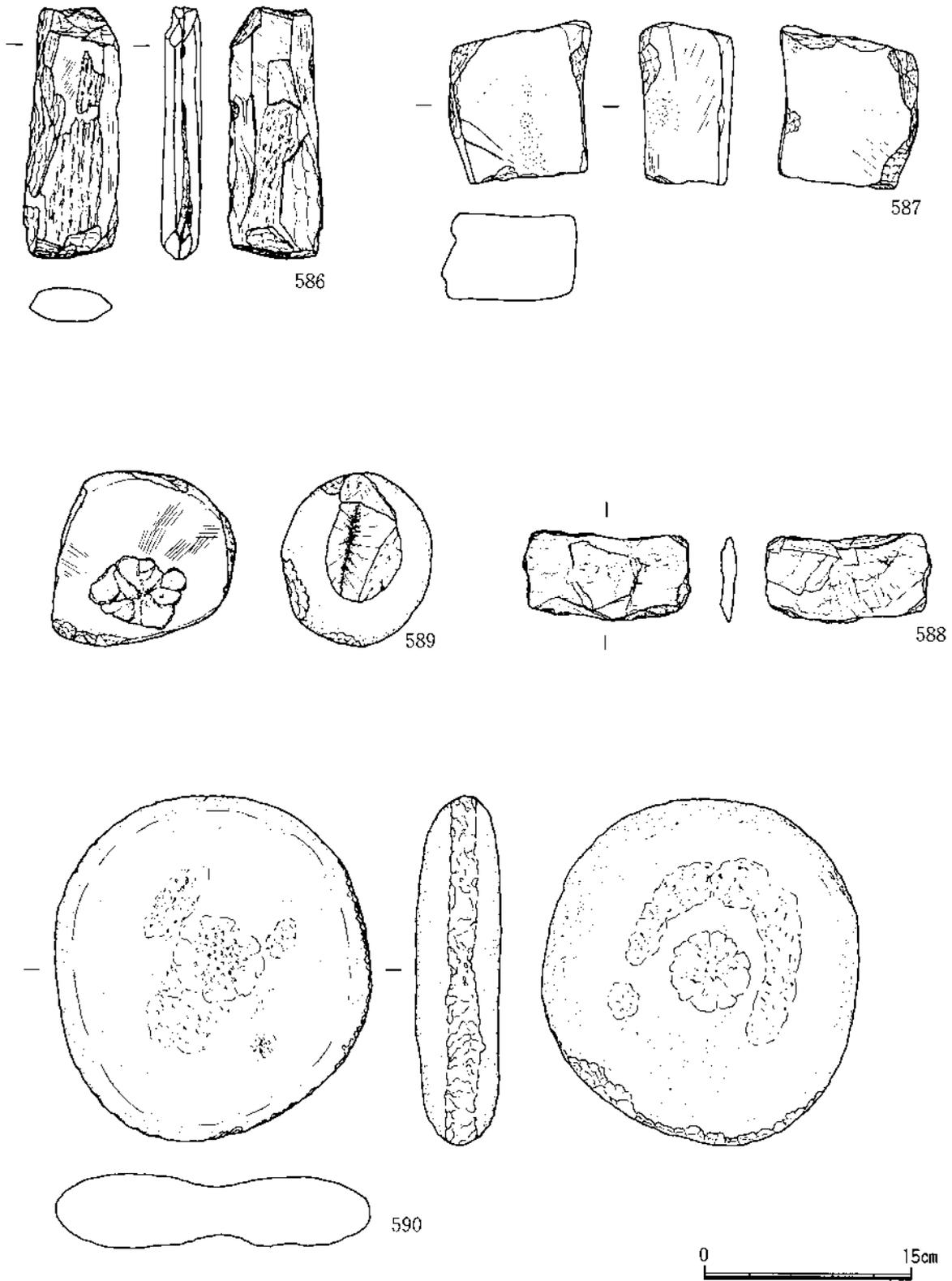


Fig. 82 II-1区 出土遺物6 (SR-3 石器)

6. II-2区

II-2区はII-1区と同様、谷の低い部分に占地する水田で、東側に落ち込み（自然流路-谷の岸で落ち口に当たる）をもち、包含層が形成されていた。西半部は水田化する時点で削平されたためか、遺構の残存状況は極めて悪い。弥生土器を中心に遺物も出土しているが、多くが東側落ち込み部からのものである。

(1) 遺構

溝2条を検出した。いずれも南北方向に走り、南側に向かって落ち込んでいる。後世の削平が著しく、包含層の形成も認められない。

SD-15

調査区を横断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約50cm・深さ5~10cmで長さ約4mを検出した。削平のため残存状況は極めて悪く、ほとんど遺物も出土していない。時期不明。

SD-16

調査区を横断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約50cm・深さ5~8cmで長さ約3.5mを検出した。弥生土器が出土しており、当該期の溝と考えられる。

(2) 出土遺物

601は包含層（II層）出土の須恵器甕口縁である。古代の甕だが正確な所属時期は特定できない。10~11隻の甕に類似するものが認められる。それ以外のII-2区出土の遺物はすべてSR-4出土の弥生土器の破片及び叩き石であり、弥生中期末~後期初頭にかけての遺物と後期末の遺物がある。591は貼付口縁で、594・595・596の底部などとともに中期末に属する遺物である。

タタキ目のある底部は突出した平底（598）あるいは丸底（597）を示しており、弥生後期末~古墳時代初頭にかけてのヒビノキII式土器からヒビノキIII式土器にかけての移行期の様相を示している。

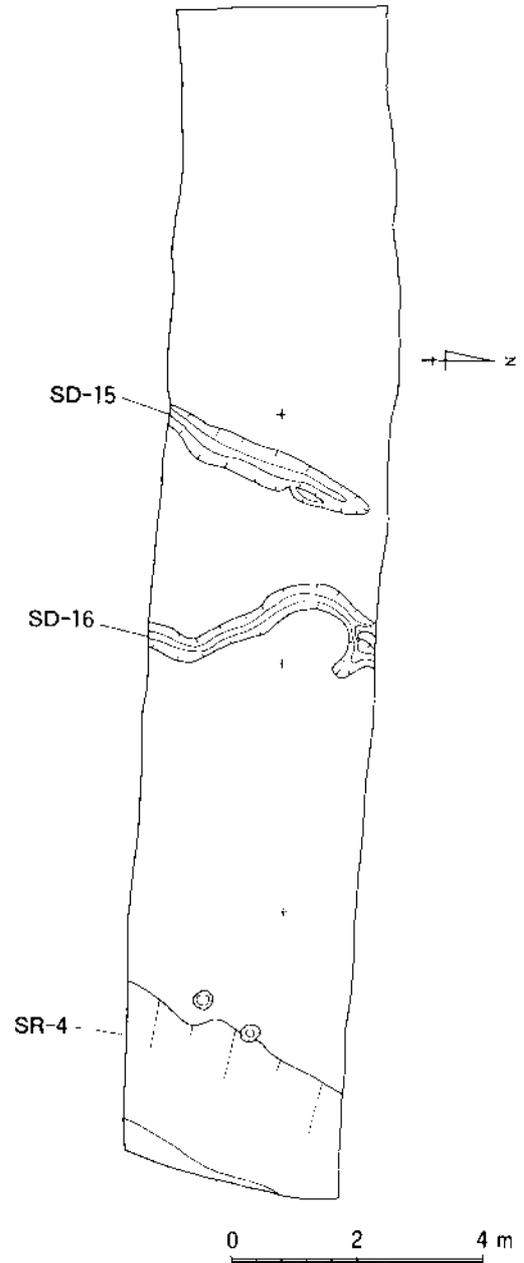


Fig. 83 II-2区 遺構平面全体図

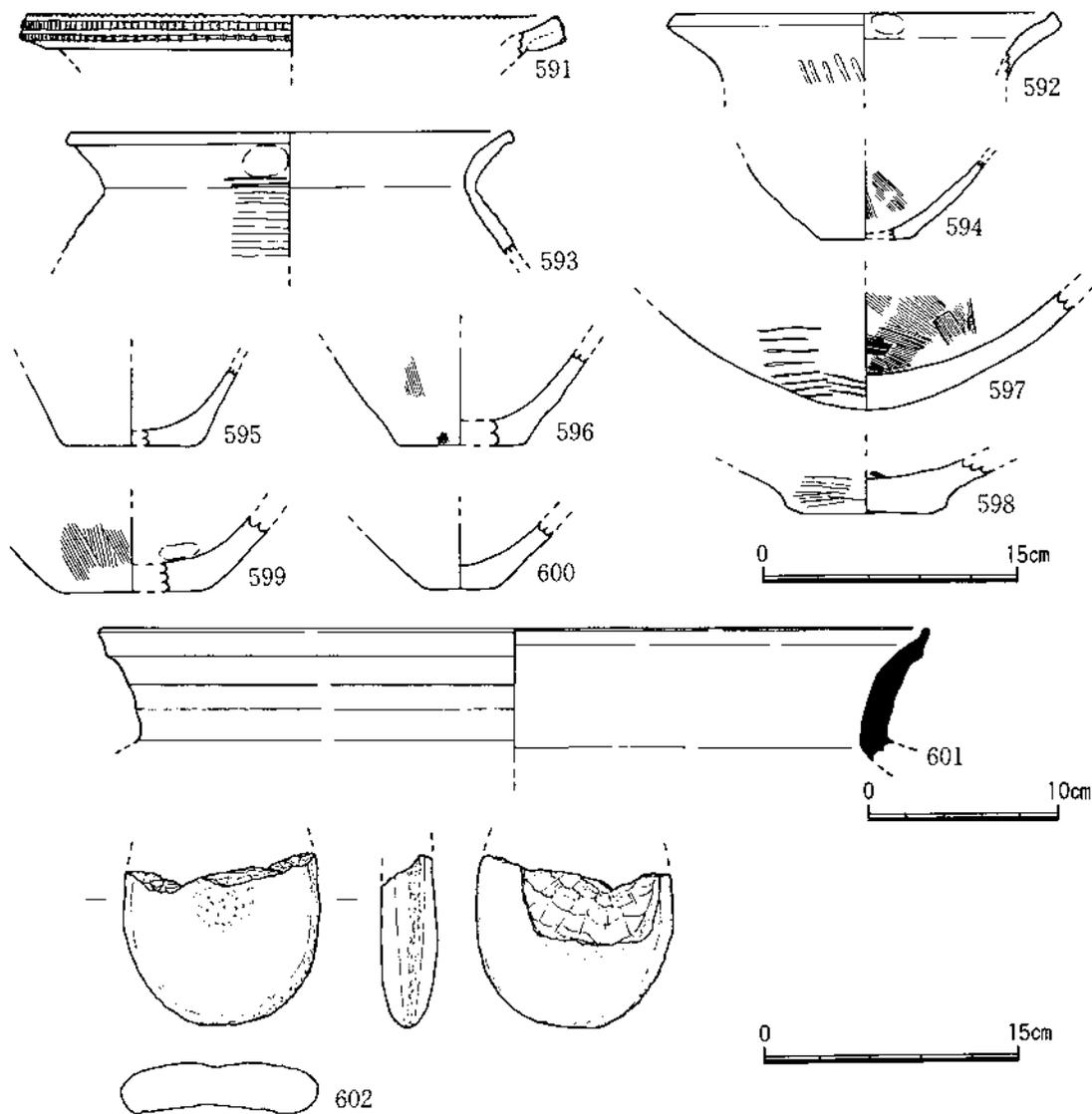


Fig. 84 II-2区 出土遺物

7. II-3区

II-3区はII区の中央部に位置する。I-1・2区と比べると1m近い比高差があり、一段高い水田面となっている。それ故、削平された部分が少なく、I-2区よりも遺構残存状況は良好である。II-3区で検出された遺構の中で弥生後期末～古墳初頭の3条の溝からは遺物が集中して出土している。その北側に集落の存在が予想される。

(1) 遺構

自然流路1条と溝4条を検出した。調査区の西側については北東から南西に緩やかに傾斜、東側については北西から南東にかけて傾斜する。中央部で検出した溝は東側の傾斜に沿って北→南に向かって流れており、遺物の出土状況から、一定規模を有する集落が調査区北側に営まれていたことが予測される。

西半部には流路の痕跡が認められたが、遺物は出土せず、遺構の形成は確認できなかった。

SD-17

調査区中央部を横断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約40cm・深さ40cmで長さ約6mを検出した。弥生後期末～古墳時代初頭にかけて機能した溝である。

SD-18

調査区中央部を横断して北西方向から南東方向にかけて走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅100cm・深さ60～80cmで長さ約8mを検出した。弥生後期末～古墳時代初頭にかけて機能した溝である。溝北端は水田化に伴う削平を受けて遺構が消滅しているが、それ以南は残存状況も良好で、水汲み場を利用したのではないかとみられる深掘部も残っていた。小形丸底土器(624・625・658)も出土している。溝が集落の祭祀空間として機能していた可能性が高い。

SD-19

調査区中央部を横断して北西方向から南東方向にかけて走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅40cm・深さ20～30cmで長さ10mを検出した。弥生後期末～古墳時代初頭にかけて機能した溝である。

SD-20

調査区東端を東西方向に走る溝で、西から東方向に緩やかに傾斜している。幅40cm・深さ16cmで長さ5mを

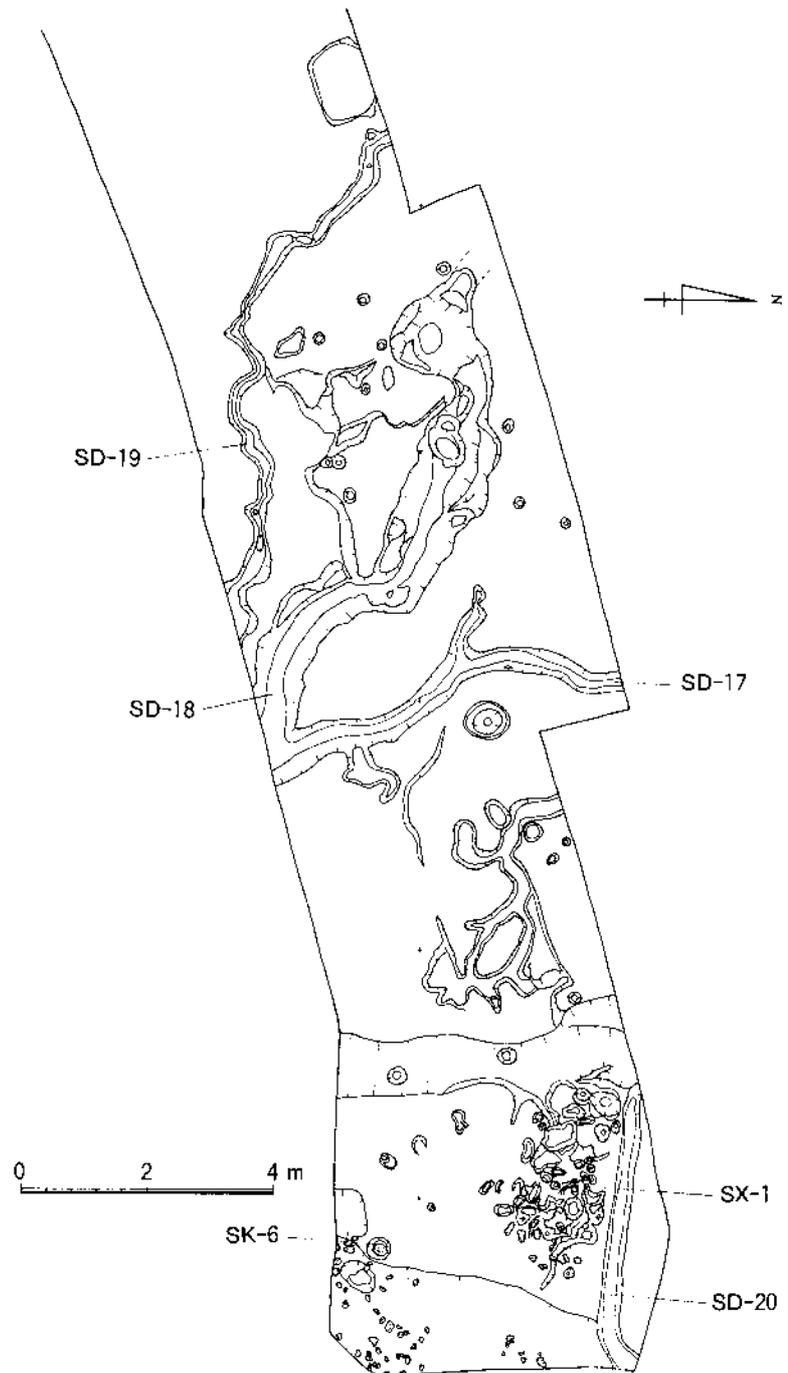


Fig. 85 II-3区 遺構平面全体図

検出した。埋土は灰褐色粘質土である。遺物が出土しておらず時期は不明。

SK-6

長軸南北方向で長軸方向幅50cm深さ30cmの楕円形の土坑である。弥生後期後半ヒビノキⅡ式段階の甕形土器（605）が出土している。

（2）出土遺物

Fig.89-603は瓦質土器鍋、604は備前播鉢で図示可能な中世遺物はこれだけである。また少量だが弥生前期末と後期初頭の遺物が出土している。それ以外は包含層・遺構のともに弥生前期末・後期初頭弥生後期末～古墳前期初頭の時期が中心で、特にSD18に遺物が集中していた。SD-18は古墳時代初頭、高知平野の古式土師器Ⅰ期の遺物が中心となっており、616・617のように明らかに丸底を指向、布留式土器の影響を受けたと考えられる甕も出土している。しかし形態上のみの模倣にとどまり、技術的には従前どおりの器壁の厚さを持つ伝統的Ⅴ様式土器の範疇で捉えられる土器であり、内面へら削りの観察できる個体は1点もなかった。Ⅱ-3区の土器は、SD18出土土器群の器種構成・鉢の形態からみて、その多くがヒビノキⅢ式土器の範疇で捉えられる土器である。

SK-6出土の甕（182）のようにヒビノキⅡ式土器（弥生終末）も出土しており、弥生終末の集落の存在も予想できる。

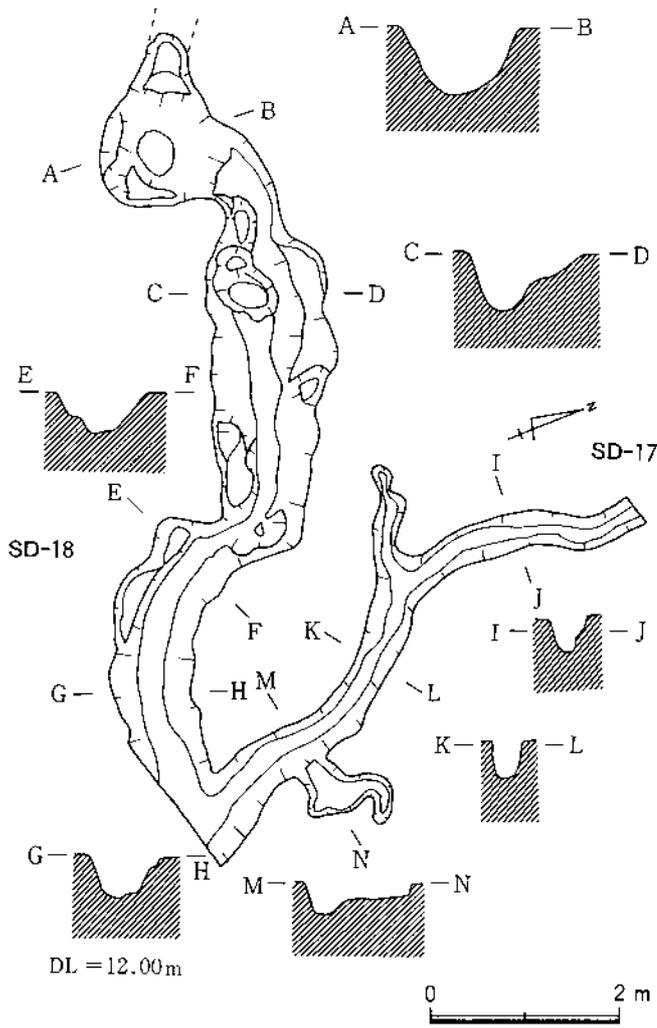


Fig. 86 SD-17 · 18 平面图

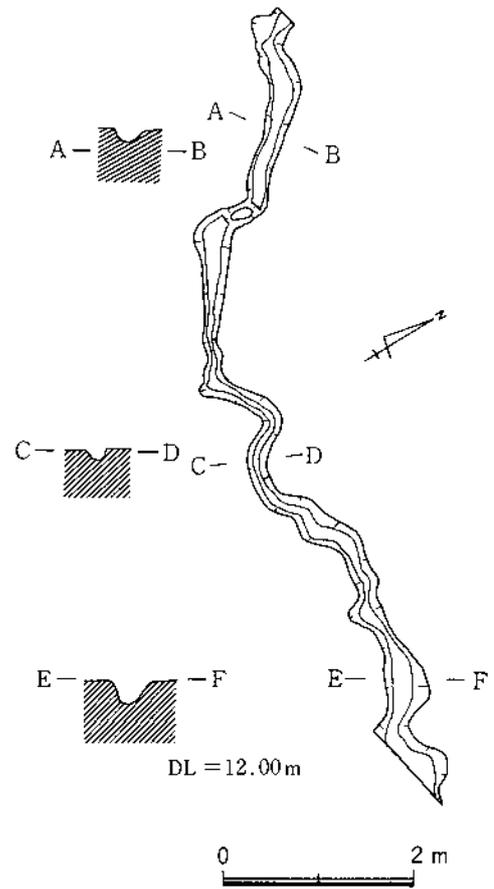


Fig. 87 SD-19 平面图

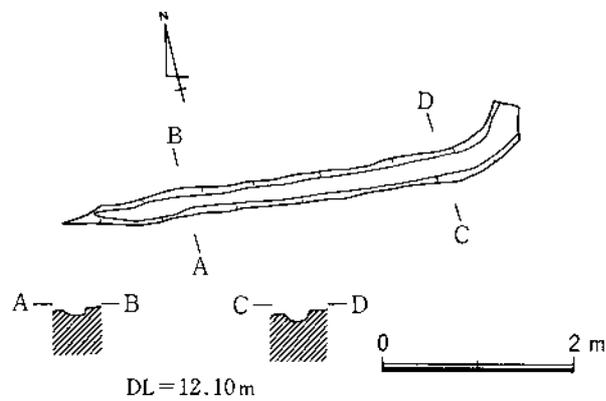


Fig. 88 SD-20 平面图

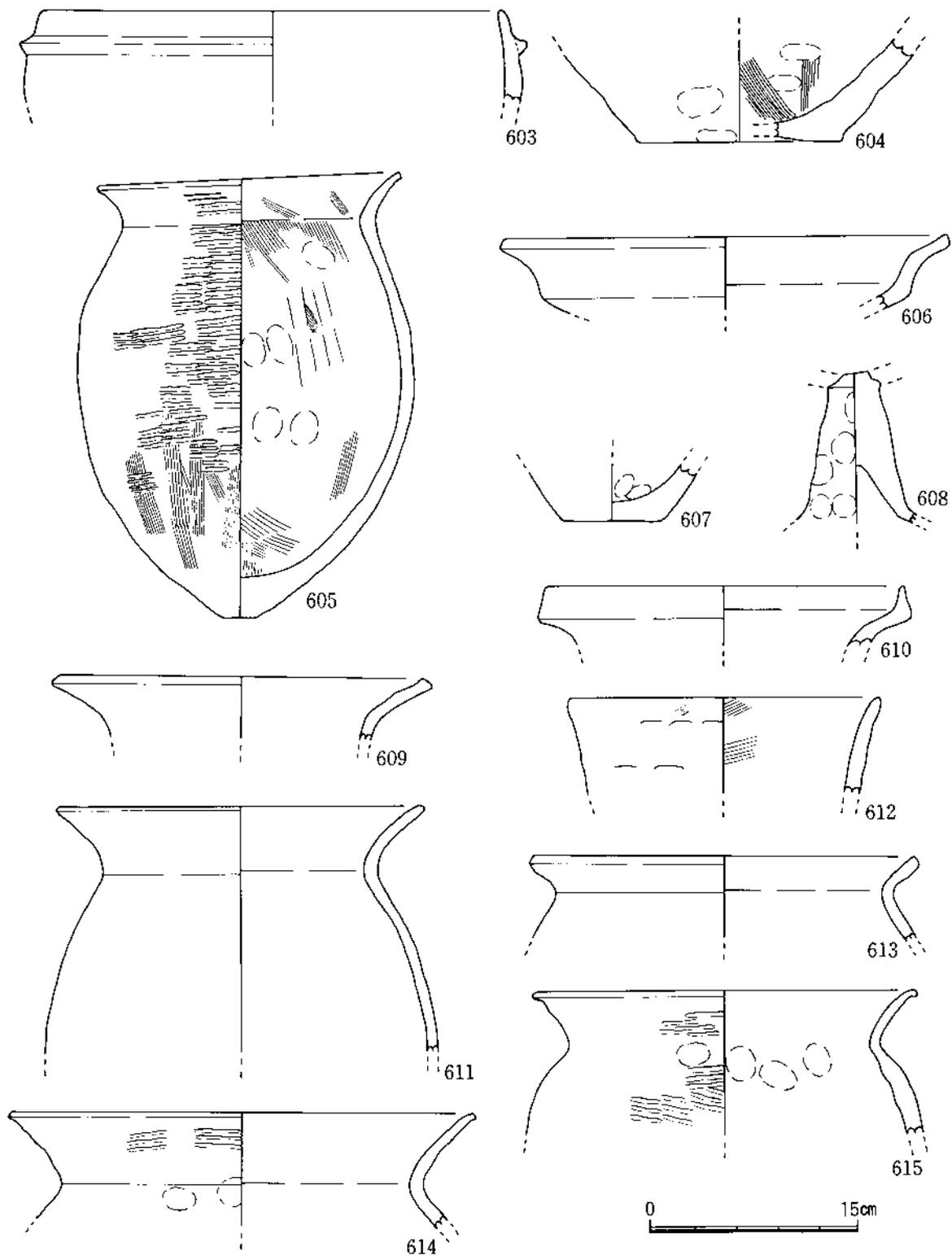


Fig. 89 II-3区 出土遺物 1

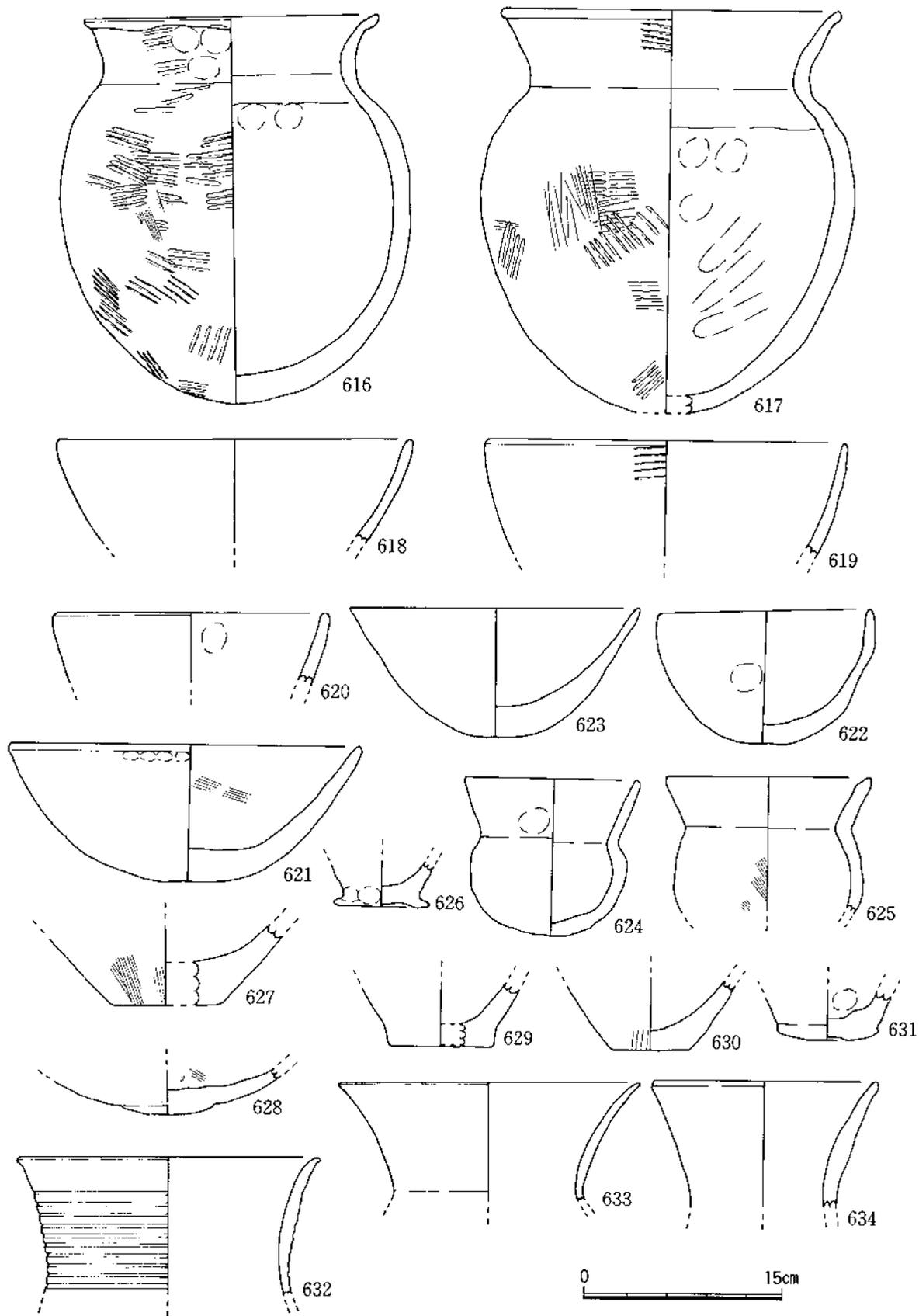


Fig. 90 II-3区 出土遺物 2

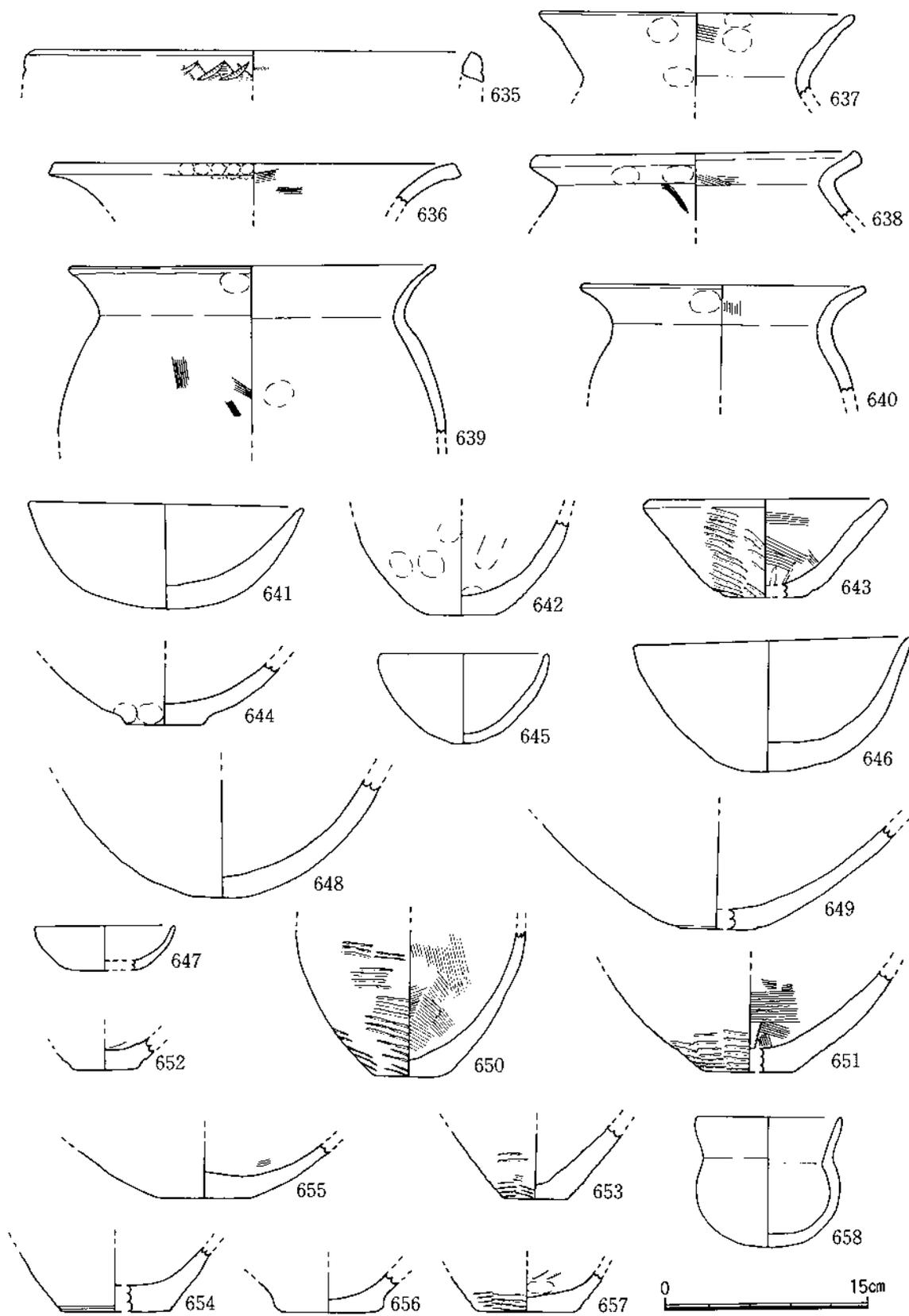


Fig. 91 II-3区 出土遺物3

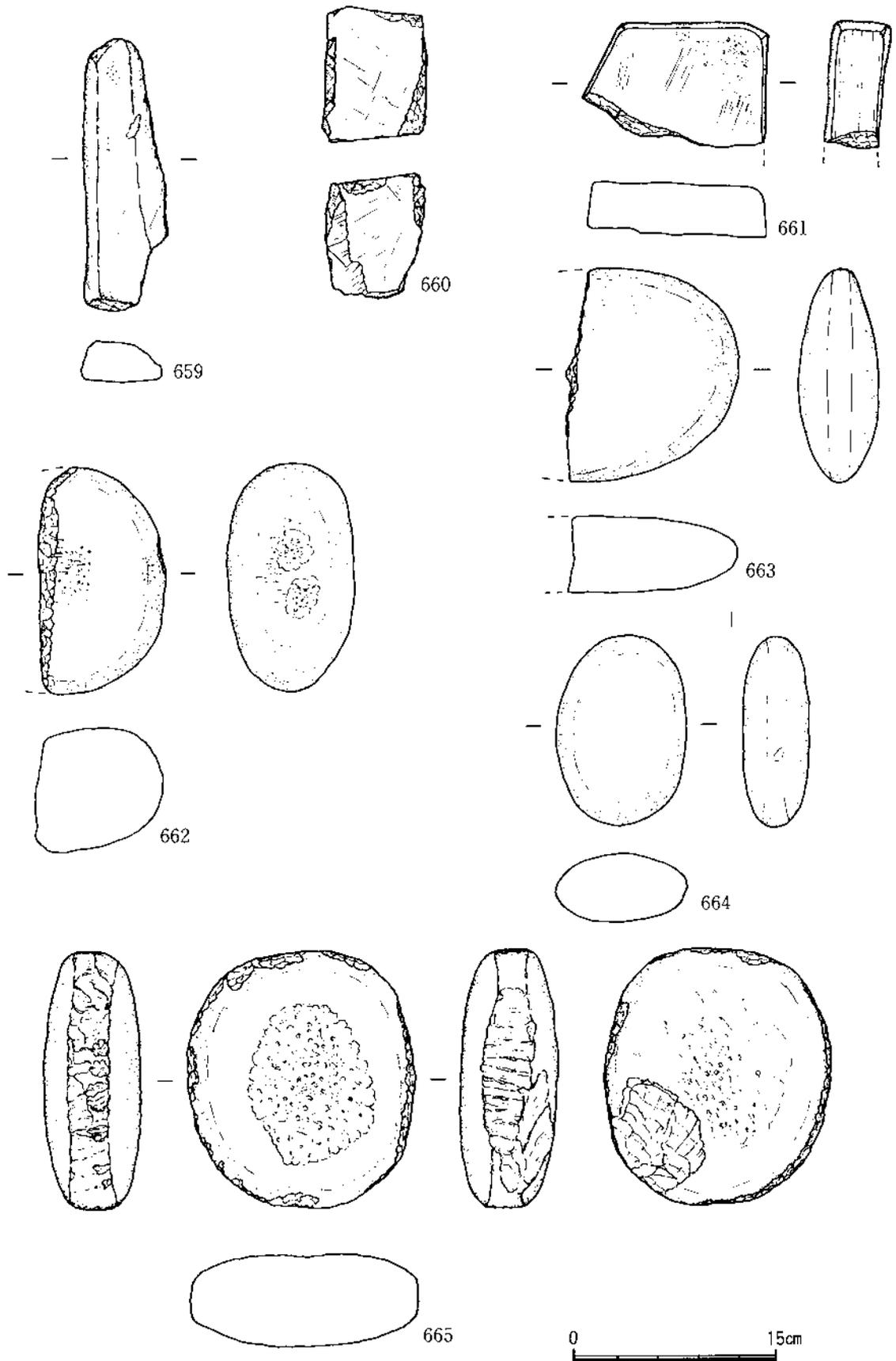


Fig. 92 II-3区 出土遺物4 (石器)

8. II-4区

II-4区はII-1～3区と比較すると1～2m高い標高を有する。西側に行くほど高くなる。調査区全域でも12～13m程度の標高であり、栄工田地区の東西に流れる谷状の地形の中央部舌状の微高地の東限を構成している。調査前までは、畦道に沿った水田として利用されていた。

弥生から近世にかけての遺物が確認されているが、II-1～3区で多く出土した弥生後期末の遺物は少ない。包含層中から弥生前期末の遺物がまとまって出土している。

(1) 遺構

全域で150基のピットと4条の溝、柵列1列・堀立柱建物跡1棟が検出された。中央から西半にかけては若干標高が高くなっており、東半部の低地部分に溝が集まっている。

SD-21

調査区中央部を横断して南北方向に走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約40cm・深さ40cmで長さ約6mを検出した。瓦器が出土しており中世の溝だと考えられる。

SD-22

調査区中央部を横断して北西方向から南東方向にかけて走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅100cm・深さ60～80cmで長さ約8mを検出した。出土遺物は極めて少ないが、弥生後期末～古墳時代初頭にかけて機能した溝だと思われる。

SD-23

調査区中央部を縦断して北西方向から南東方向にかけて走る溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅40cm・深さ20～30cmで長さ10mを検出した。古代以降に機能した溝だが遺物の出土量が少なく詳細な時期は分からない。

SD-24

調査区西半を南北方向に走る溝で、西から東方向に緩やかに傾

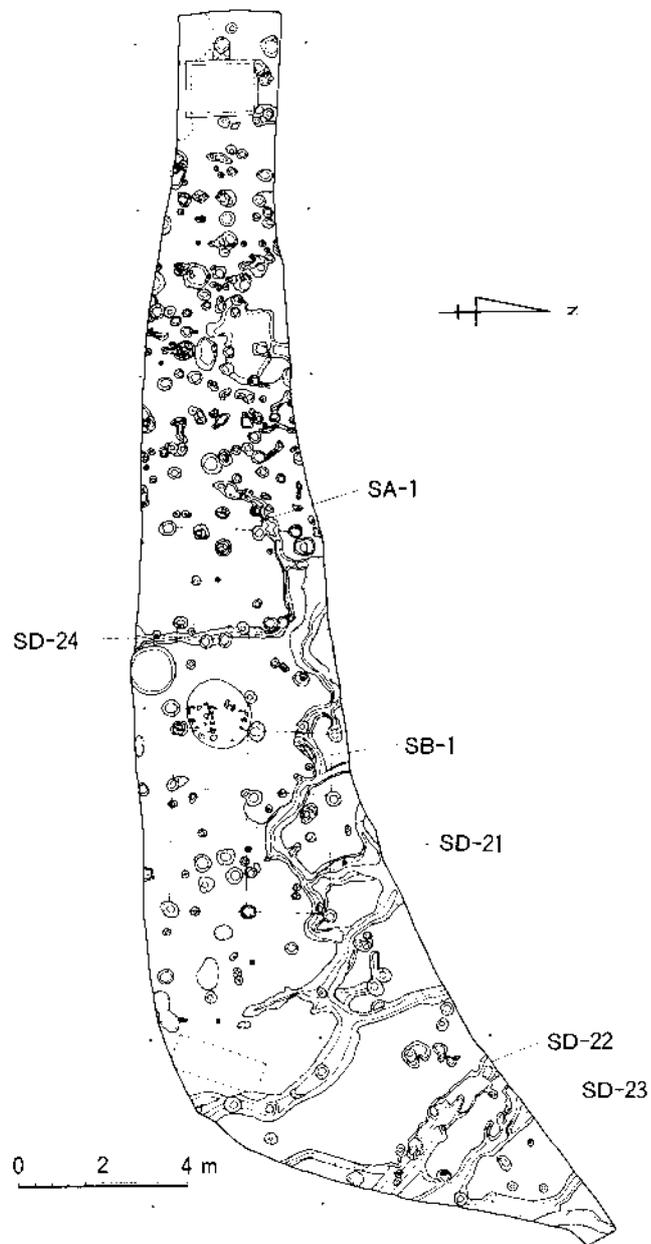


Fig. 93 II-4区 遺構平面全体図

斜している。幅40cm・深さ10cmで長さ5 mを検出した。埋土は灰褐色粘質土である。遺物が出土しておらず時期は不明。

SB-1

梁間3間、桁行4間の東西棟の総柱の堀立柱建物である。柱間寸法は梁間が1.7~2.2m、桁行が2.0~2.4m、柱穴は径30~40cmの円形である。

SA-1

SB-1の西側に平行に並ぶ柵列である。

(2) 遺物

弥生時代から近世に至る遺物が出土している。包含層中からの出土が多いが、遺構出土遺物も一定認められ、弥生時代、古代、11C~12C、13C、14C、18C~19Cの生活の痕跡が確認されている。

この調査区で特徴的なのは弥生前期末の遺物の出土である。他の調査区に多くみられる弥生後期末~古墳時代初頭の遺物はほとんどみられないが、調査区中央部の包含層中から前期末の遺物がまとまって出土している。いずれも弥生前期末に属する前期Vの段階（大篠式の後半）にあたるヘラ描沈線が最も多條化した段階で、後続する中期初頭の属性（櫛描沈線）を持つ土器は一点も確認できなかった。261・262のように逆L字状口縁を呈する土器や沈

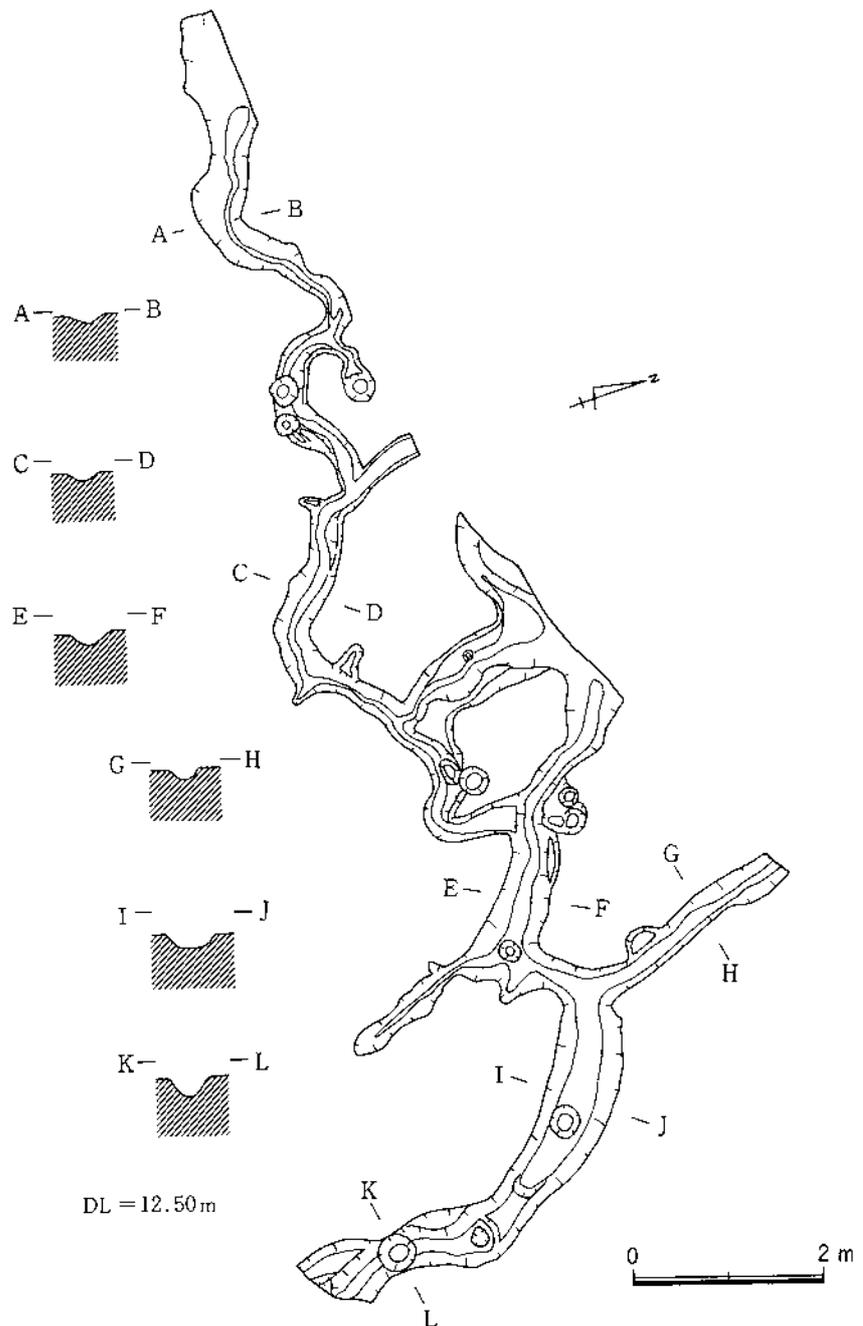


Fig. 94 SD-21 平面図

線下に列点文をもつもの (259・263) など、瀬戸内の土器あるいはその影響下に成立した土器も出土している。一点だけが蓋形土器 (270) も確認された。

古代の資料は断片的で683・711の須恵器が確認されているに過ぎない。11世紀後半～12世紀と見られる白磁V類が1点確認されている。12世紀までは少量の遺物だが、12世紀後半から13世紀になって量的にもまとまってくる。試掘TR包含層からの出土だが、龍泉窯青磁 (669・670)、同安窯青磁 (671)、677～678の土師器が出土する。13～14世紀にかけての資料として710の瓦質三足釜や712の瓦質鍋、726の瓦器椀など貿易陶磁、瓦器、瓦質土器などバラエティーにとんだ遺物が確認されている。近世の遺物は断片的で少量である。680は肥前系磁器 (18C)、675は肥前系陶器 (19C) 707肥前系陶胎染付 (18C) 708肥前系陶器 (17～18C前半) 716伊万里紅皿 (18C) などが近世遺物である。18世紀から19世紀にかけて生活の痕跡が認められた。

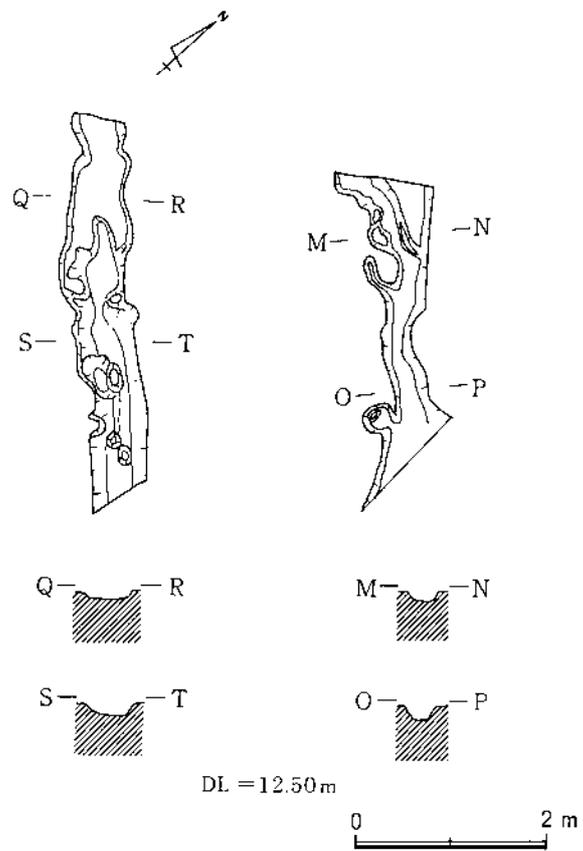


Fig. 95 SD-22・23 平面図

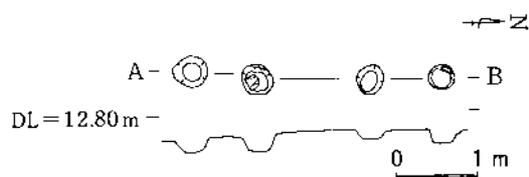


Fig. 96 SA-1 平面図

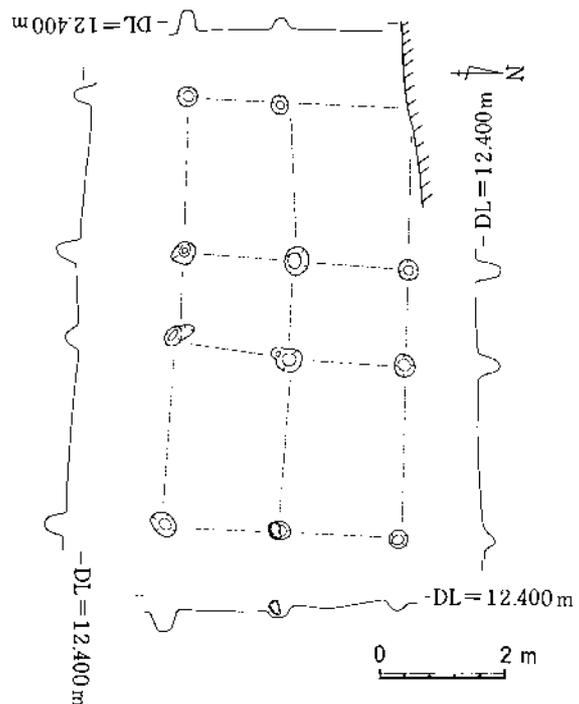


Fig. 97 SB-1 平面図

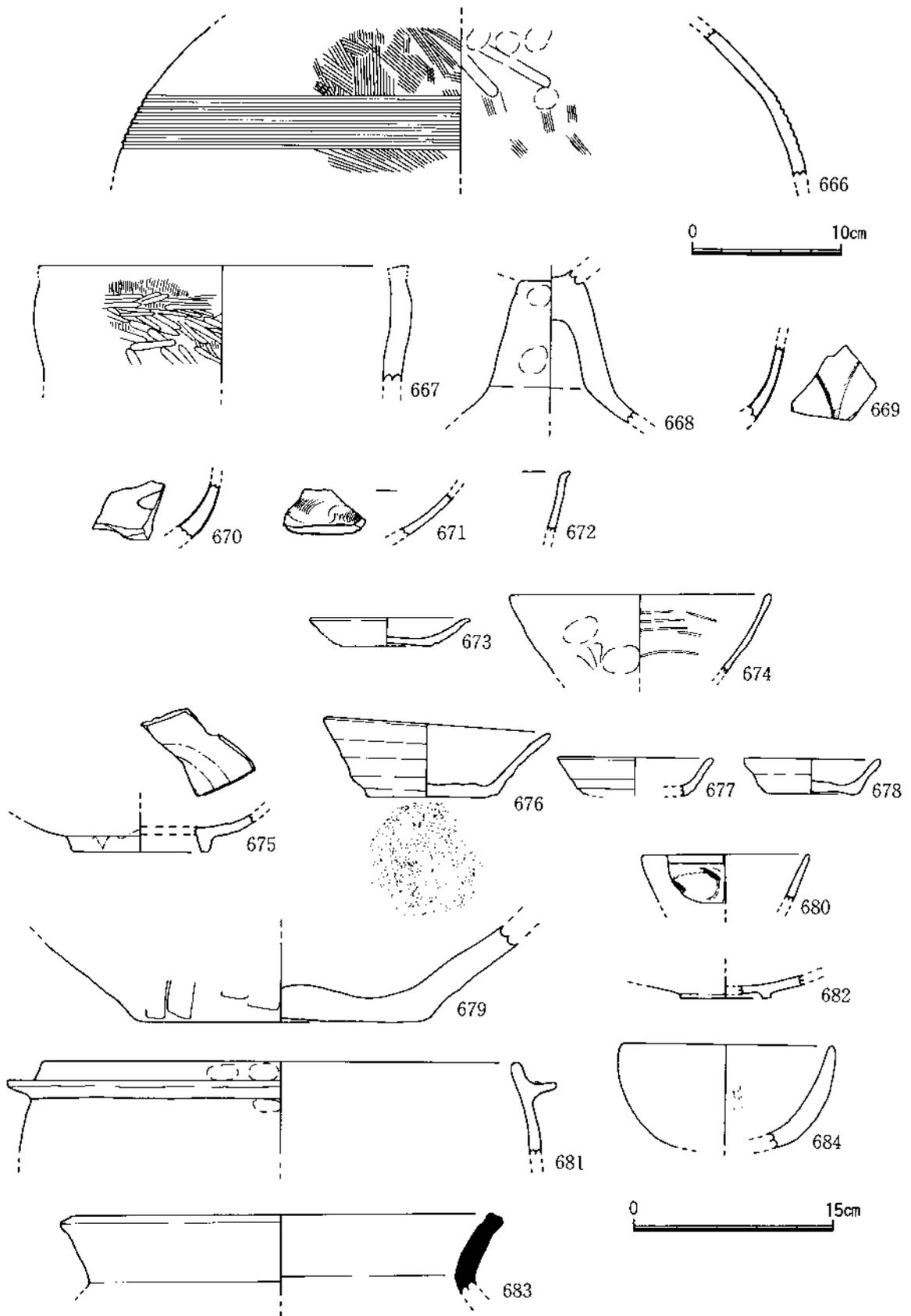


Fig. 98 II-4区 出土遺物1 (試掘TR-8・9、遺構)

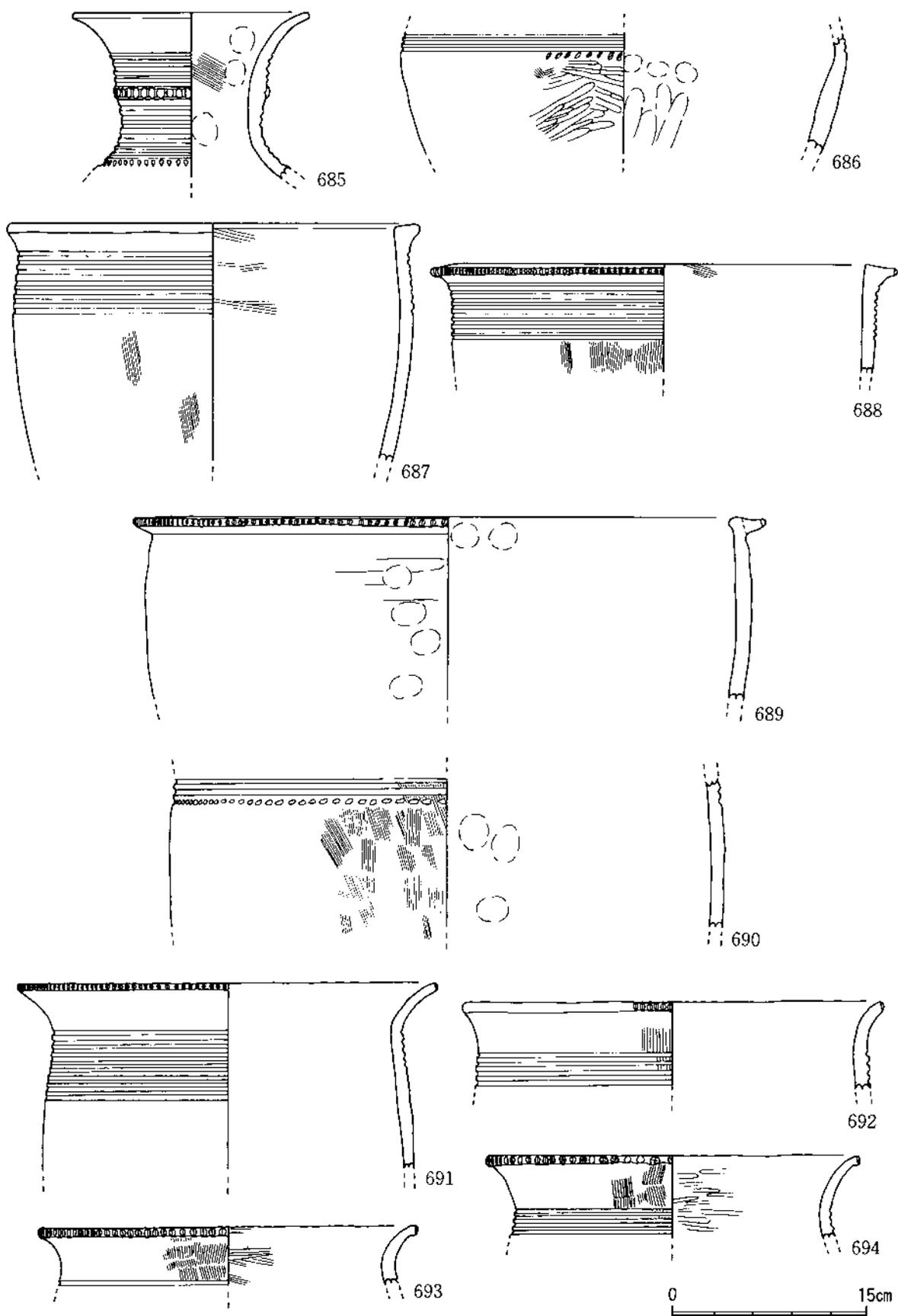


Fig. 99 II-4区 出土遺物2 (包含層)

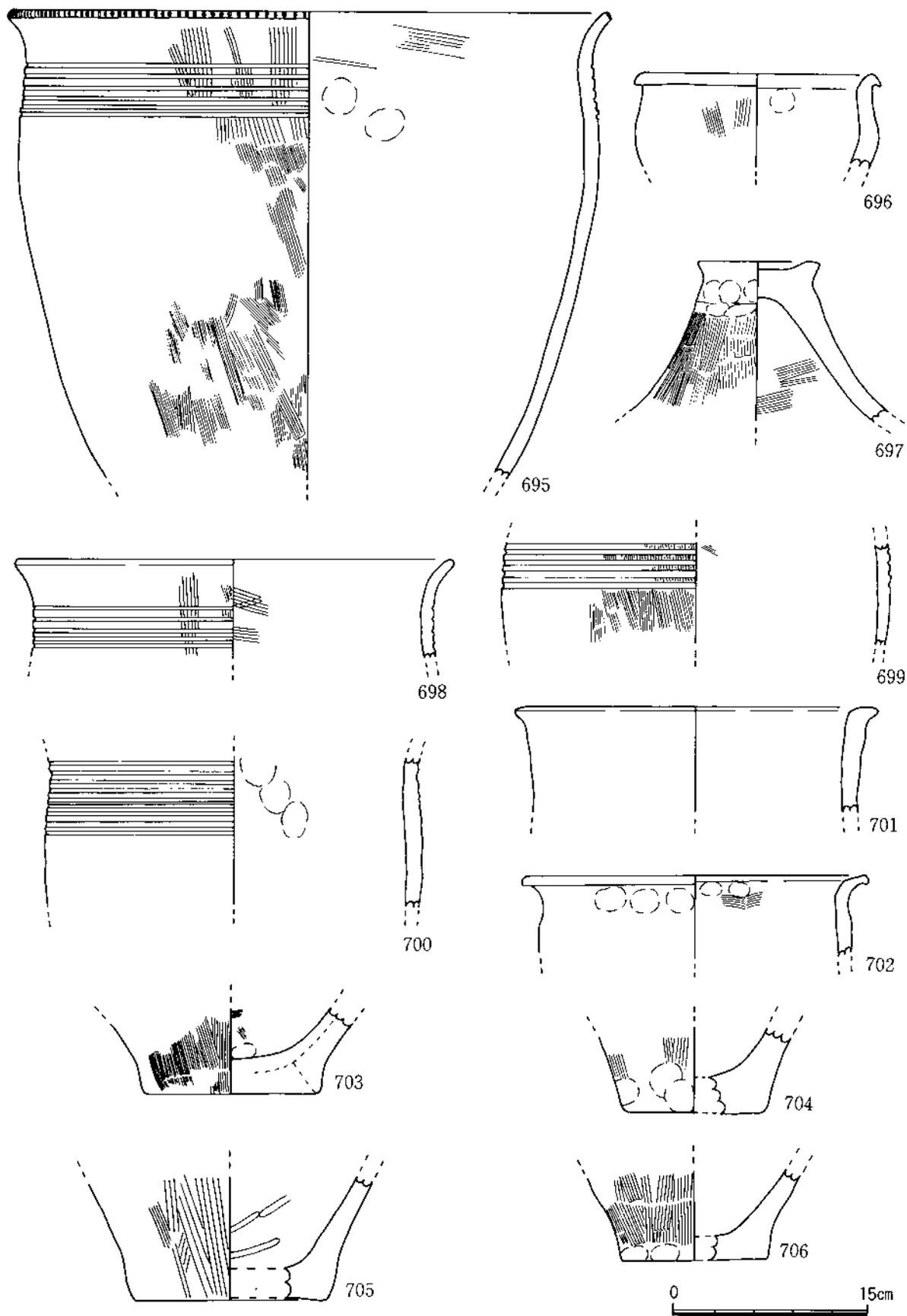


Fig. 100 II-4区 出土遺物3 (包含層)

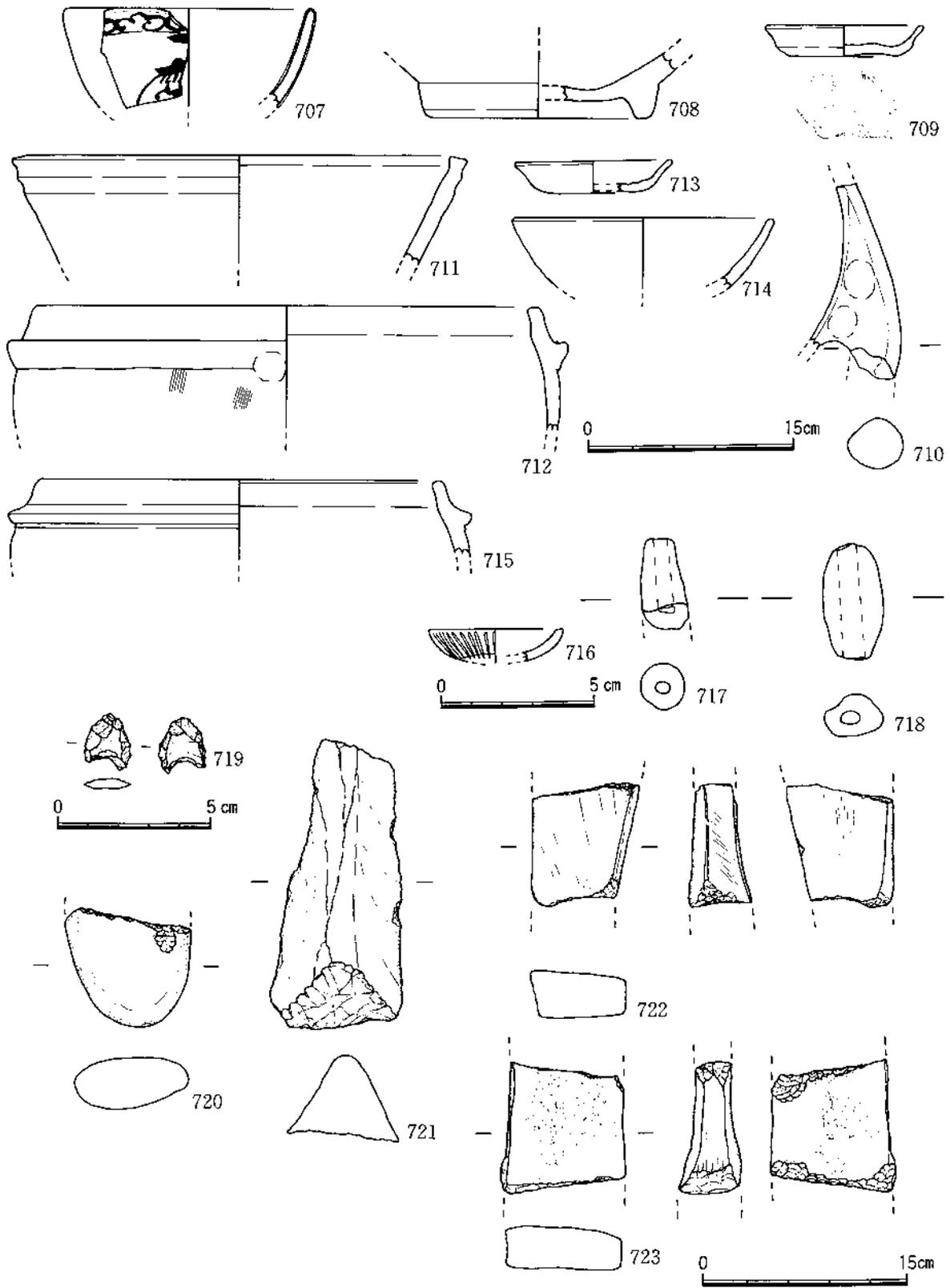


Fig. 101 II-4区 出土遺物4 (包含層・石器)

9. II-5区

II区の西端に位置する調査区である。調査前までは水田として利用されていた。終戦直後の一時期にII-5区周辺で数家族が住居を構え生活を営んでいたことが判っており、試掘調査の段階で遺物が検出されたとはいえ遺構の残存状況に一抹の不安は残っていた。実際に調査を始めてみると、予想外に遺構の残りが良く古代から中世へ移行する時期の貴重な資料を得ることができた。

(1) 遺構

調査区の中央部を東西方向に走る溝と70基のピットを検出した。西端部と東端部は現代の攪乱を受けている。特に東端は現代のゴミ捨て場として利用されていたのか、割れたガラスの破片等が廃棄されていた。

SD-25

調査区中央を東西方向に走る溝で、東側に向かって若干傾斜している。幅約50cm・深さ10~16cmで長さ約14mを検出した。U字状の断面形を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。13世紀の土師器(724)が出土している。

SK-7

直径1.84mの円形土坑で、深さ48cm、四周及び底面にハンダ状の橙色粘土が敷き詰められる。遺物を含まず、時期不明。

SK-8

直径1.6mの円形土坑で、深さ40cm、四周及び底面にハンダ状の橙色粘土が敷き詰められる。遺物を含まず、時期不明。

SK-9

1.2m×1.5mの楕円状の平面形を呈する土坑。土器細片を含むが、時期は不明である。

SK-10

直径72cm深さ20cmの円形土坑。弥生土器小片を含むが図示可能遺物なし。

SB-2

梁間1間以上(不明)桁行3間(4.0m)の東西棟の堀立柱建物である。調査区の制約上全貌は不明。遺物は出土していな

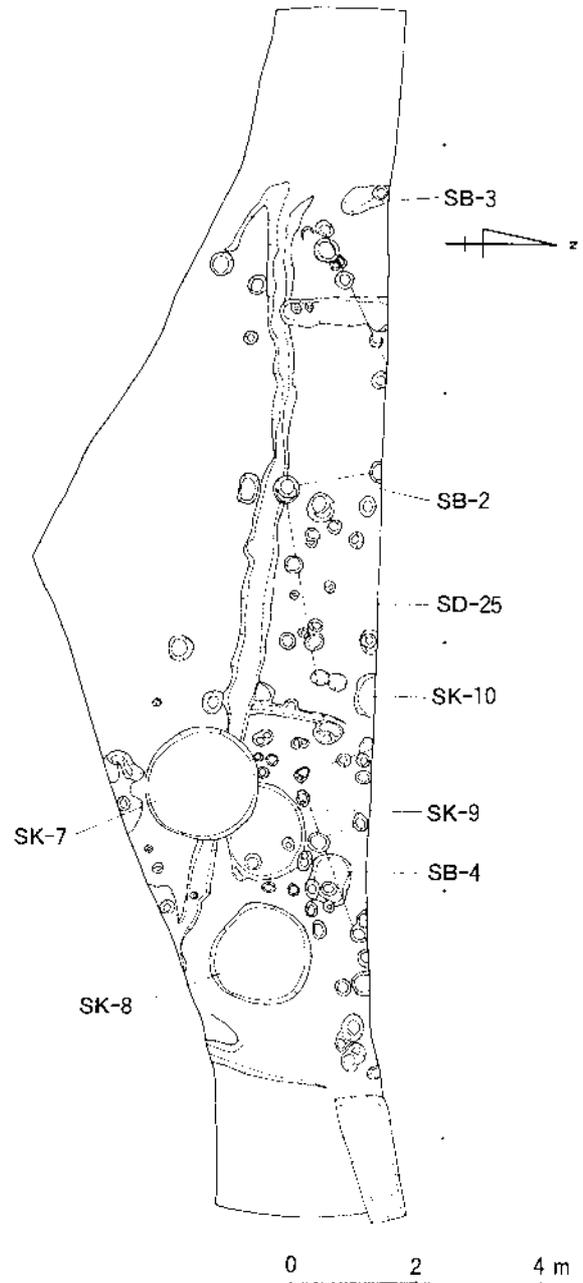


Fig. 102 II-5区 遺構平面全体図

い。

SB- 3

梁間1間以上(不明)桁行2間以上(不明)の東西棟の掘立柱建物である。調査区の制約上全貌は不明。遺物は出土していない。

SB- 4

梁間1間以上(不明)桁行2間以上(不明)の東西棟の掘立柱建物である。調査区の制約上全貌は不明。遺物は出土していない。

(2) 遺物

中世、特に13世紀を中心とした時期の遺物が、遺構及び周辺包含層から出土した。SD25からは724の土師器坏が出土している。13世紀の土師器であり、この溝は鎌倉時代に機能したものであることが判明した。728・731は東播系須恵器コネ鉢の口縁で、726は和泉型瓦器碗である。これらの遺物は13世紀の資料であり、II-5区からは13世紀の遺物がまとまって確認された。732は瓦質土器播鉢、包含層中よりの出土だが734の常滑甕口縁など14世紀の資料も確認されている。

耕作あるいは住居建設のため何度か削平されており、良好な包含層の形成は見られない。遺物の出土量は少なかったが、その割に良好な資料を得ることができた。

中世の遺構とともに近現代の遺構も検出された。SK-7・8から遺物は検出されず断定はできないが、遺構の形状から便所の可能性が高い。

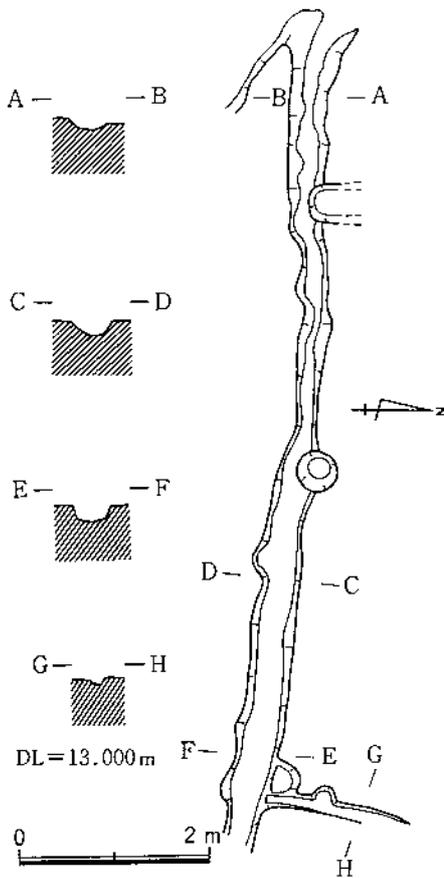


Fig. 103 SD-25 平面図

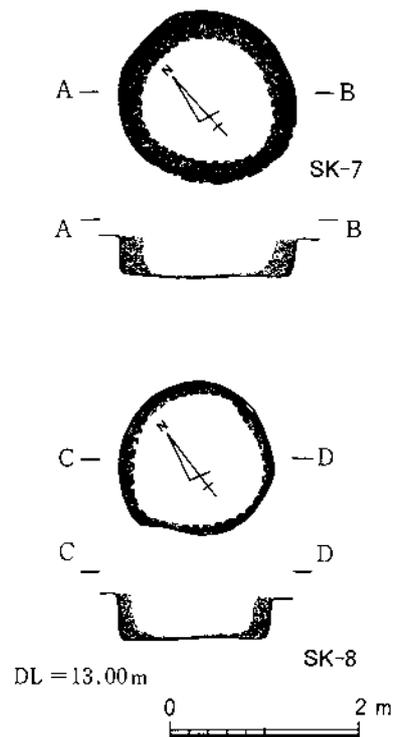


Fig. 104 SK-7・SK-8 平面図

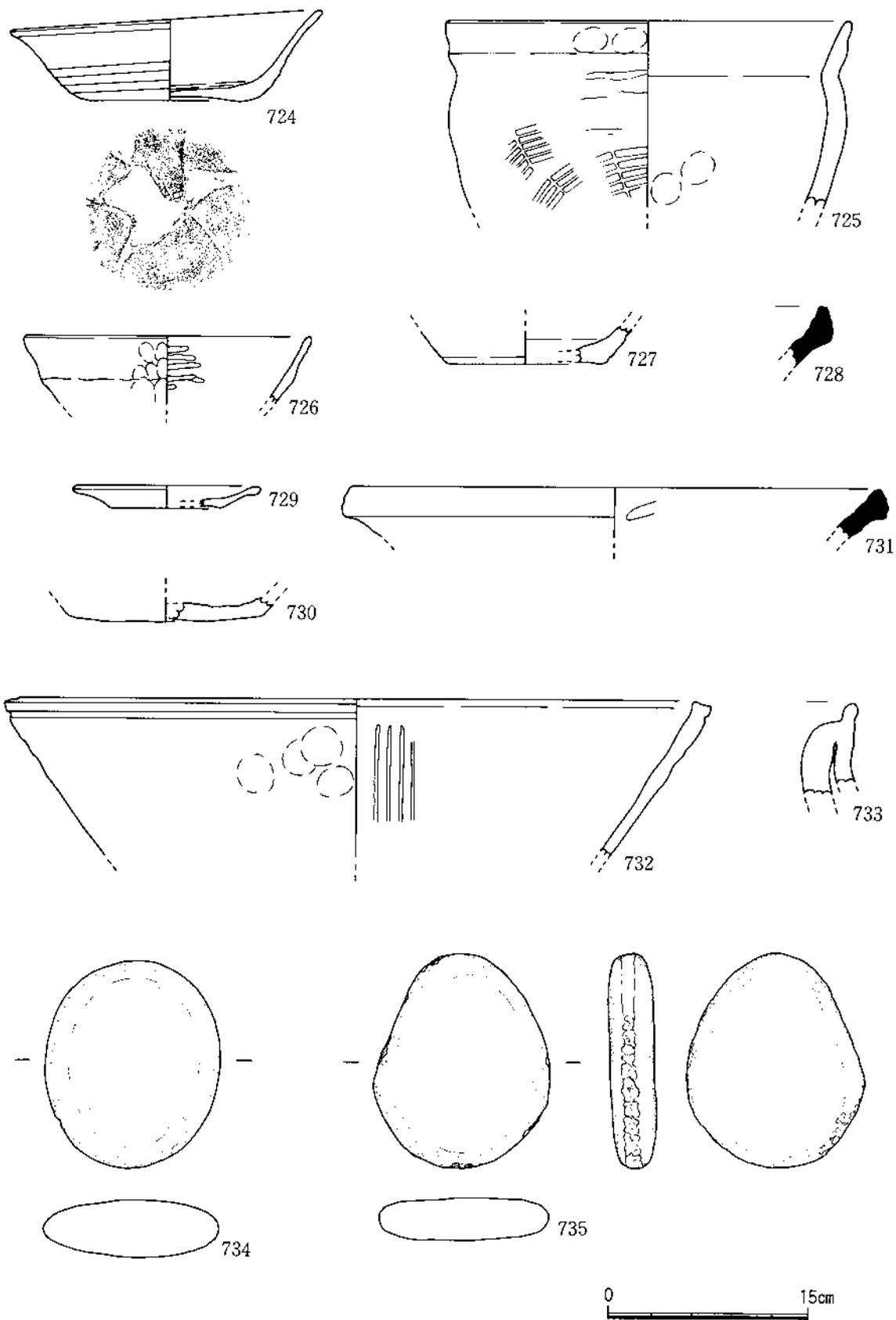


Fig. 105 II-5区 出土遺物

10. Ⅲ-2区

Ⅲ区は調査対象地及び栄エ田遺跡の北西端に位置する調査区である。Ⅲ-1・3区については試掘・本調査を通じて、出土遺物僅少で遺構も認められないため本報告書では取り扱わない。

Ⅲ-2区とⅢ-4区から自然流路Ⅲ-2区は調査前は生姜畑として利用されていた。

(1) 遺構

川岸を形成する自然流路2条と溝4条及び土壙を検出した。

SD-26

調査区を横断して東西方向に走る溝で、東から西に向けて緩やかに傾斜している。最大幅約80cm・深さ24cmで長さ約5mを検出した。2段になった逆台形状の断面形を呈す。小片ではあるが、縄文から古代に至るまでの遺物を含む。形成時期は不明。直線的な溝であり、現代に近い時期の可能性もある。

SD-27

調査区南側東西方向の溝で、北から南方向に緩やかに傾斜している。幅約60cm・深さ15cmで長さ約3mを検出した。U字形の断面形を呈し、埋土は2層に分層される。古代の遺物を含む。

SD-28

調査区北半を南北方向に流れる溝で幅約1.5m・深さ40cmで長さ約8mを検出した。U字形の断面形を呈し、弥生時代終末の遺物を含む。

SD-29

調査区南半を南北方向に流れる溝で幅約2.5m・深さ約60cmで長さ約12mを検出した。U字形の断面形を呈し、弥生末～古墳初頭にかけての遺物を含む。

SR-8埋積後の砂質土上に古代末11世紀の遺構面が形成されている。ピット、土壙が検出されている。遺構から瓦器、須恵器、土師器、布目瓦等が出土している。10世紀代の遺物も若干含まれているが、11世紀後半に属する楠葉型瓦器椀が出土し注目される。

SK-11

長径60cm短径35cmの楕円形の土坑で、底面は西側に向かってやや傾斜し、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色粘質土（砂混じり）で、砂質土の上面に形成された遺構である。土坑中から、749の摂津C型の羽釜が礫とともに出土している。

SK-12

直径40cmの円形の小土坑で、深さ15cmを測る。743・744の布目瓦、745の土師器椀（輪高台）、746の須恵器椀（円盤状高台）、747の須恵器足高高台皿、そして748の楠葉型瓦器椀が出土している。11世紀後半に位置付けられる資料である。高知県西部では12世紀代の楠葉型瓦器椀が出土しているものの、高知平野では初めての検出例であり、11世紀に遡る瓦器の出土は高知県で初例となる。

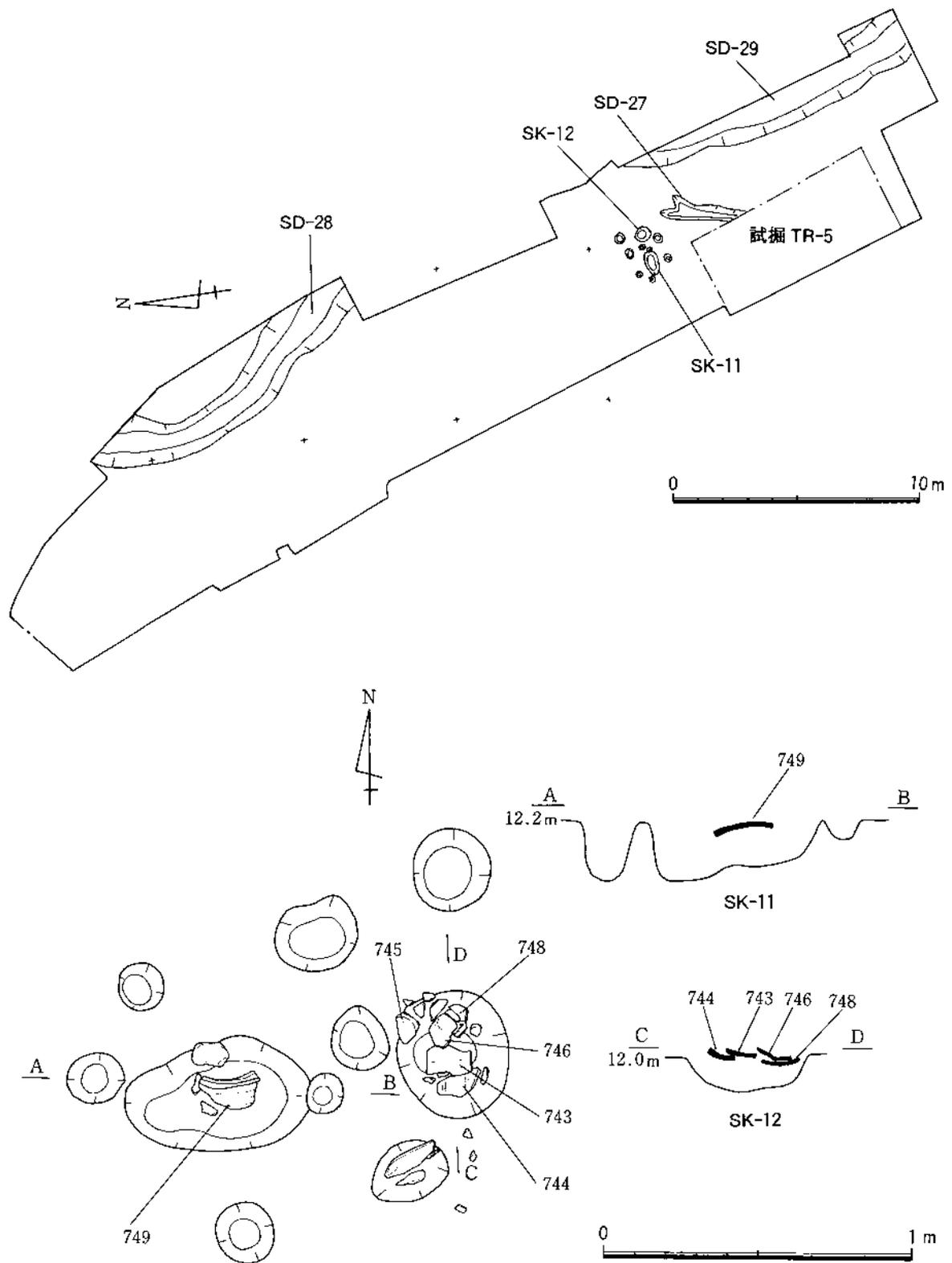


Fig. 106 III-2区 遺構平面全体図 (S=1/250) 及び SK-11・12遺物出土状況 (S=1/20)

(2) 遺物

弥生後期末の遺物が集中して確認された。調査区の東端で確認された溝（SD-28・29）からは、壺・甕・鉢・高坏のタタキ目を持つ土器群がまとまって検出されている。SD-28出土遺物は少なく、図示し得たものは764～767の甕と768の鉢のみである。769～839がSD-29出土遺物である。817・818の底部のように中期末から後期初頭に属する底部や、縄文後晩期土器小片も含んでいたが、それ以外は弥生後期末に属する一群の土器である。816の例など高坏も確認されたが少数で、壺・甕・鉢が2：6：1の割合を占める。壺形土器は直線的に開いて立ち上がる口縁を持つもの（769・771・775・778）と2重口縁のもの（772・773・774・777）に大別され、口縁部の櫛描波状文など加飾を施すものはほとんど認められなかった。胴部は長胴で卵形を呈するものが多く、丸底を指向するものの平底をわずかに残した底部が多い。甕形土器は口縁がくの字状に強く屈曲するタイプがほとんどで、底部は尖底のもの、わずかに平底を残すものが多い。鉢形土器は全体に占める割合は低いものの、812のような平底、813のような丸底気味の突出した平底、814・815のような丸底がある。当該期の壺・甕・鉢のすべてにタタキ目が観察される。タタキ目は水平方向あるいはわずかに右上がりのものが圧倒的に多く、それ以外の方向は例外でしかない。外面は775・778（壺）、786・805（甕）、812（鉢）などタタキ後刷毛で仕上げ、刷毛調整が顕著に認められるものと、777（壺）・800（甕）・815（鉢）など、胴部外面に刷毛調整がほとんど観察されないものがある。内面は刷毛目の後に指頭圧痕が観察されるものが多く、指頭圧痕のみが残る個体も多い。

これらの土器群は、器形からヒビノキⅡ式土器の最終段階（高知平野、出原編年後期7）に位置付けられる。丸底を指向していく底部や外面に刷毛調整が行われない個体が多くなることなど、ヒビノキⅡ式からⅢ式への移行期の印象もあるが、一定の割合で平底を残すことなど、ヒビノキⅡ式として捉えた方が妥当だと考える。古墳時代初頭のヒビノキⅢ式に比定されるSD-18（Ⅱ-3区）出土資料と比較すると、616・617の甕や621～623の鉢など、明らかな時期差を確認することができる。

弥生終末～古墳初頭にかけての時期は、土器の移動の盛んな時期で、春野町西分増井遺跡・南国市東崎遺跡・春野町仁ノ遺跡などから当該期の搬入品（畿内・阿波など）が確認されているが、今回の調査では確認できなかった。

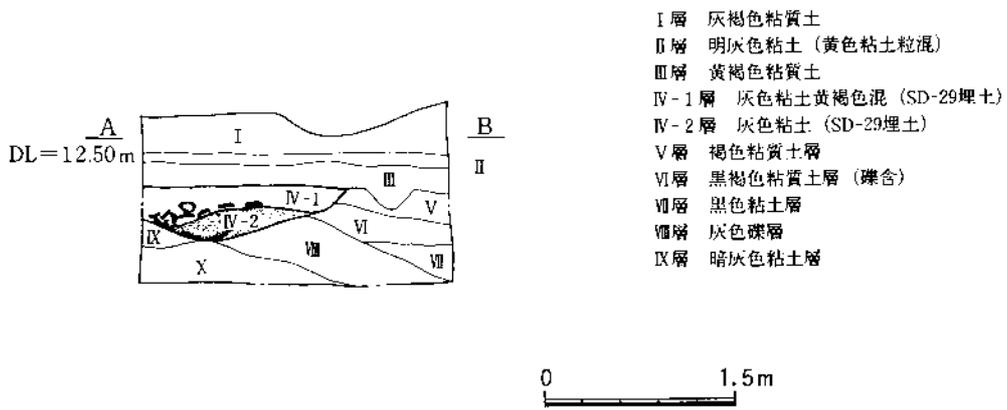
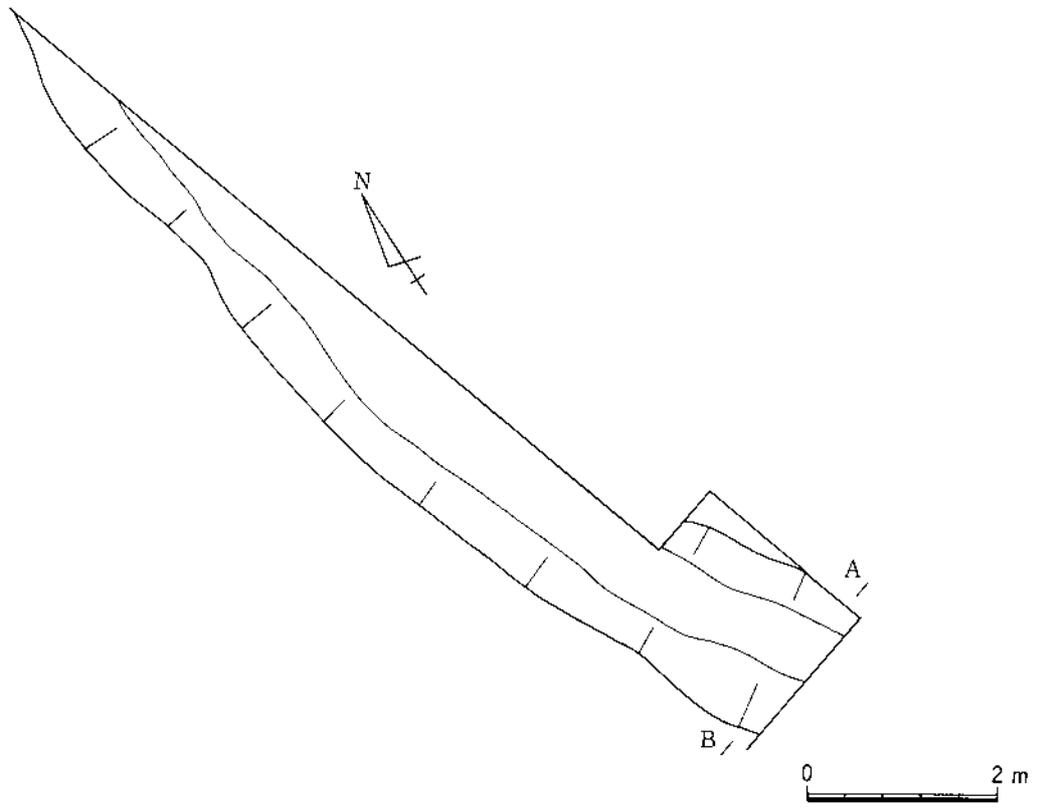


Fig. 107 SD-29平面図・セクション図

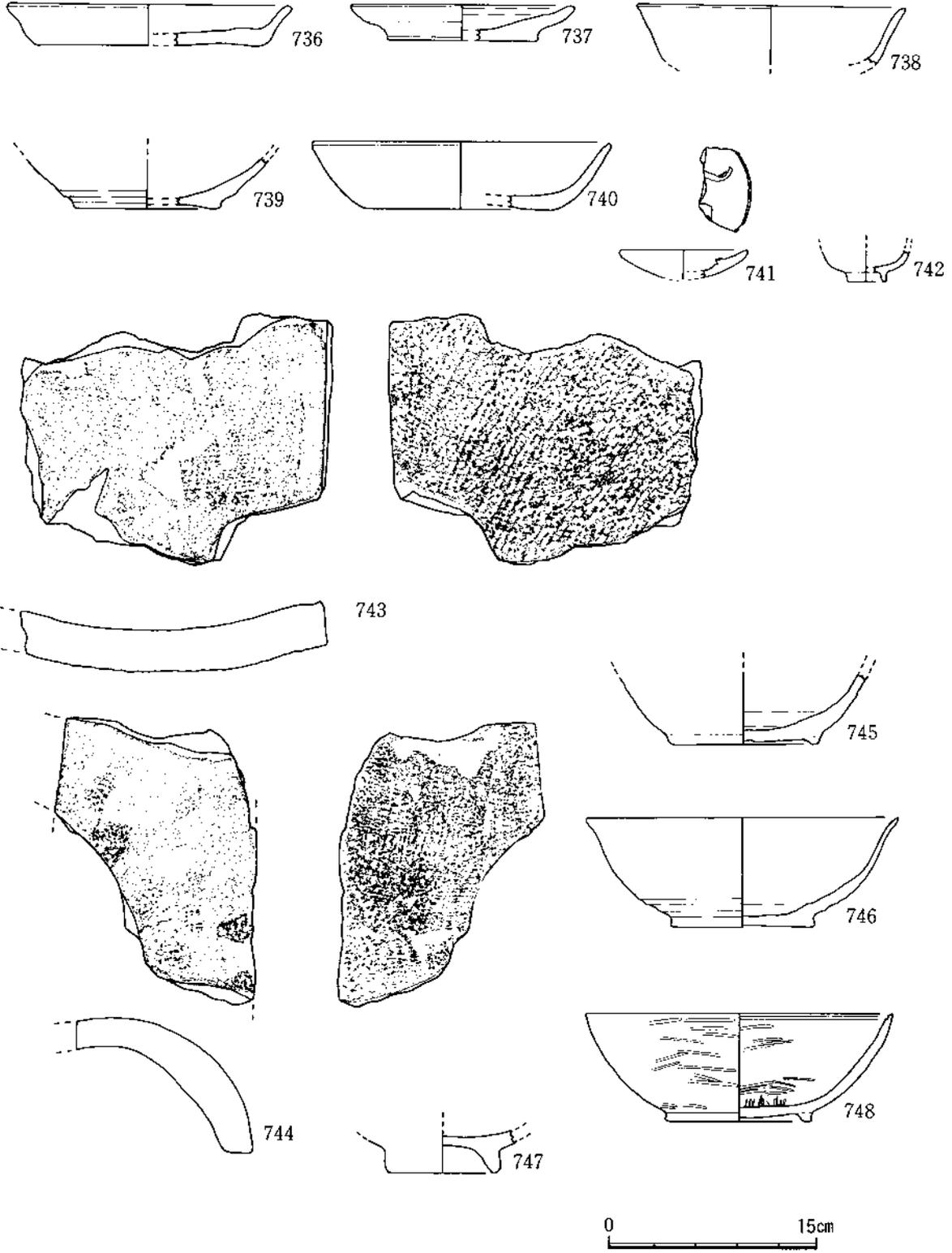


Fig. 108 Ⅲ-2区 出土遺物1 (試掘TR-3・包含層SK-12)

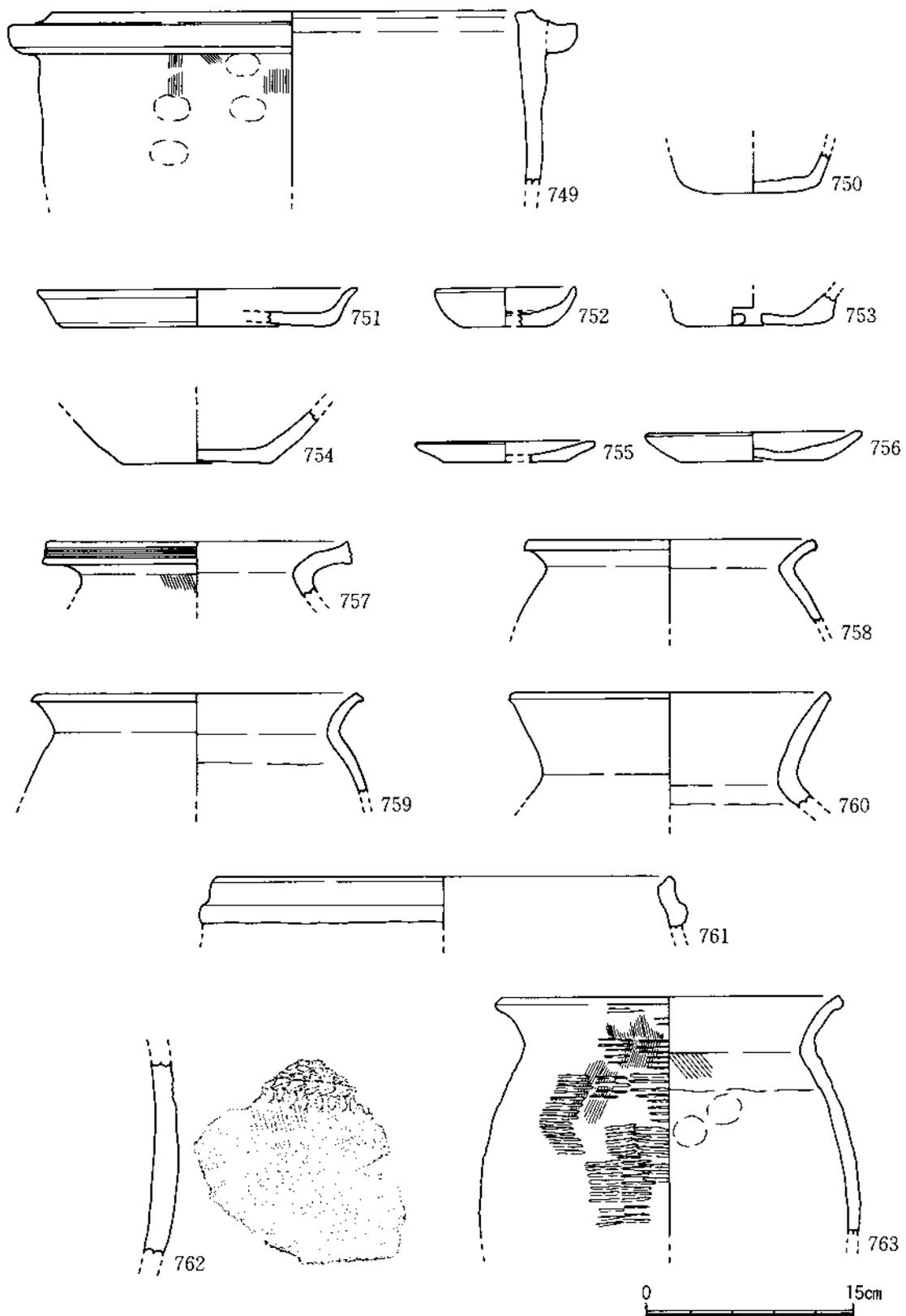


Fig. 109 Ⅲ-2区 出土遺物2 (遺構-P・SK)

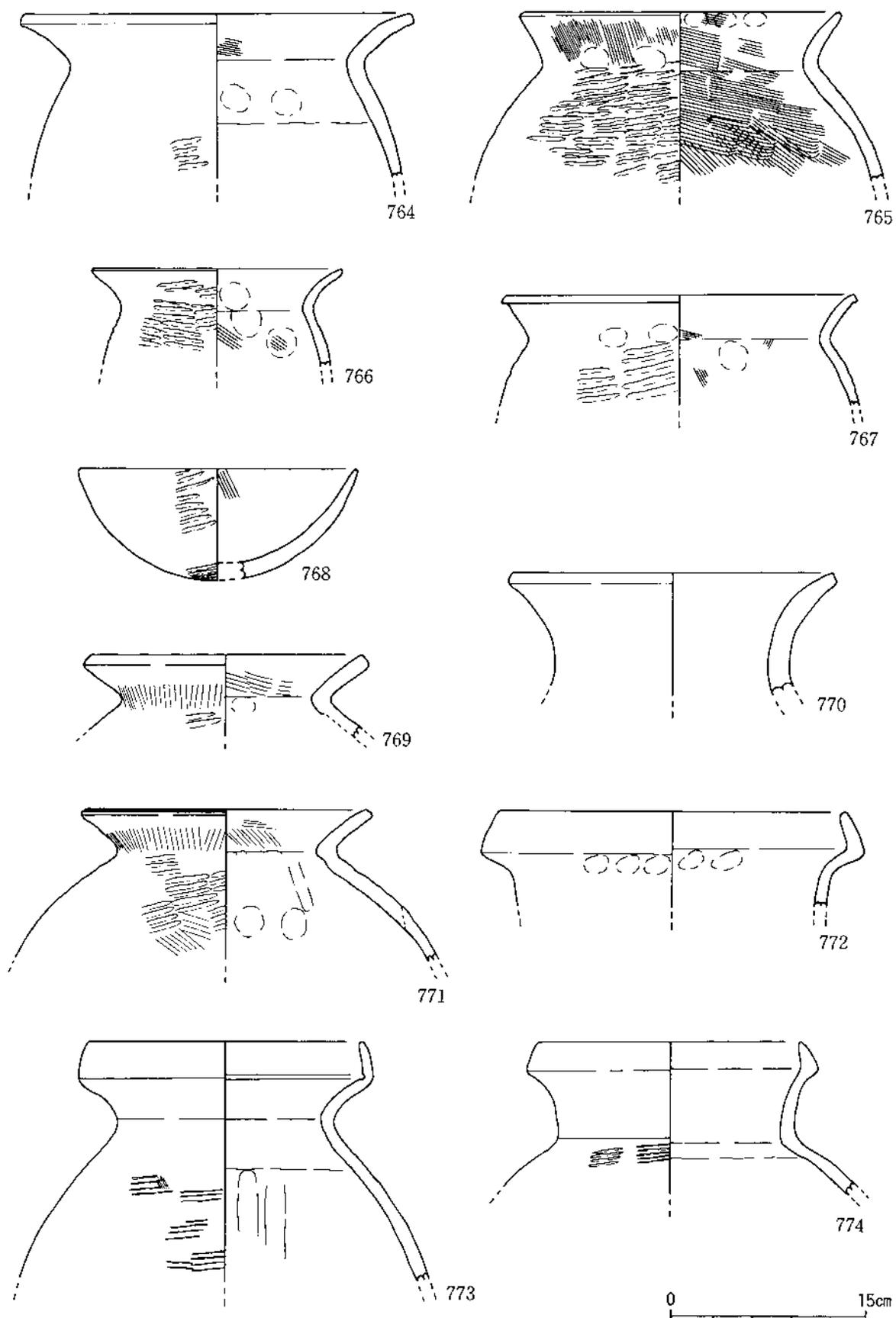


Fig. 110 Ⅲ-2区 出土遺物3 (SD-28・29)

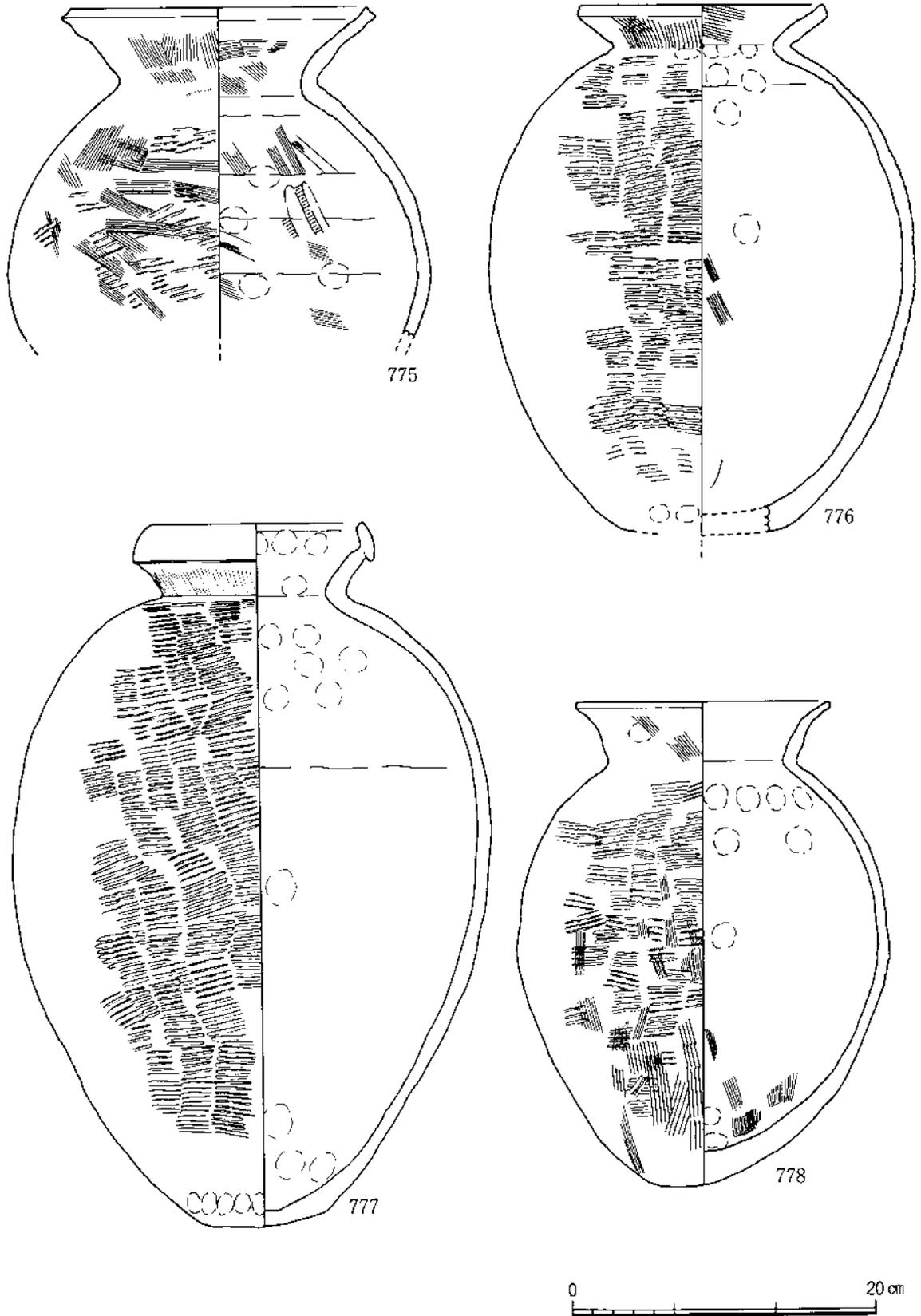


Fig. 111 Ⅲ-2区 出土遺物 4 (SD-29)

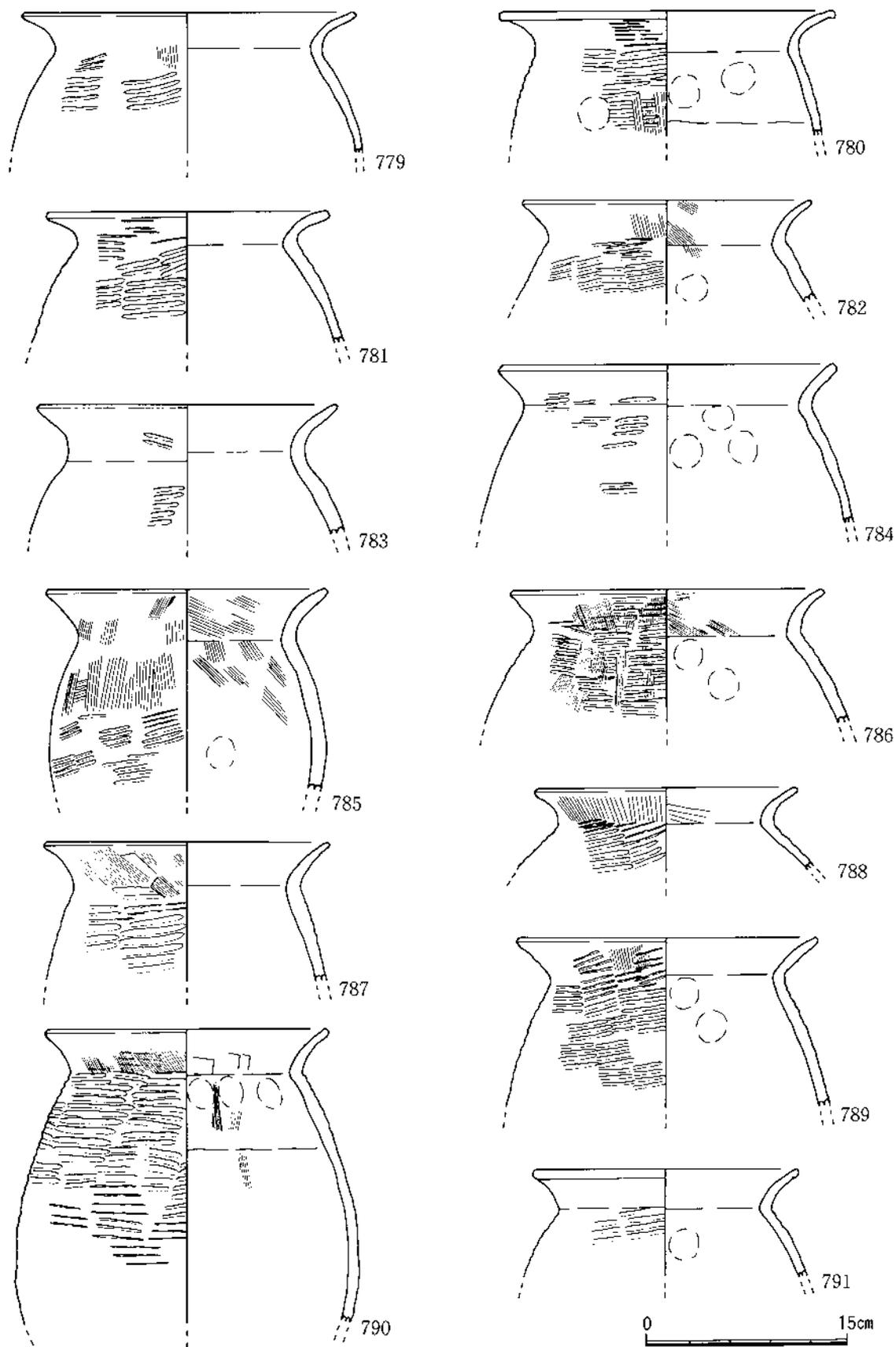


Fig. 112 Ⅲ-2区 出土遺物5 (SD-29)

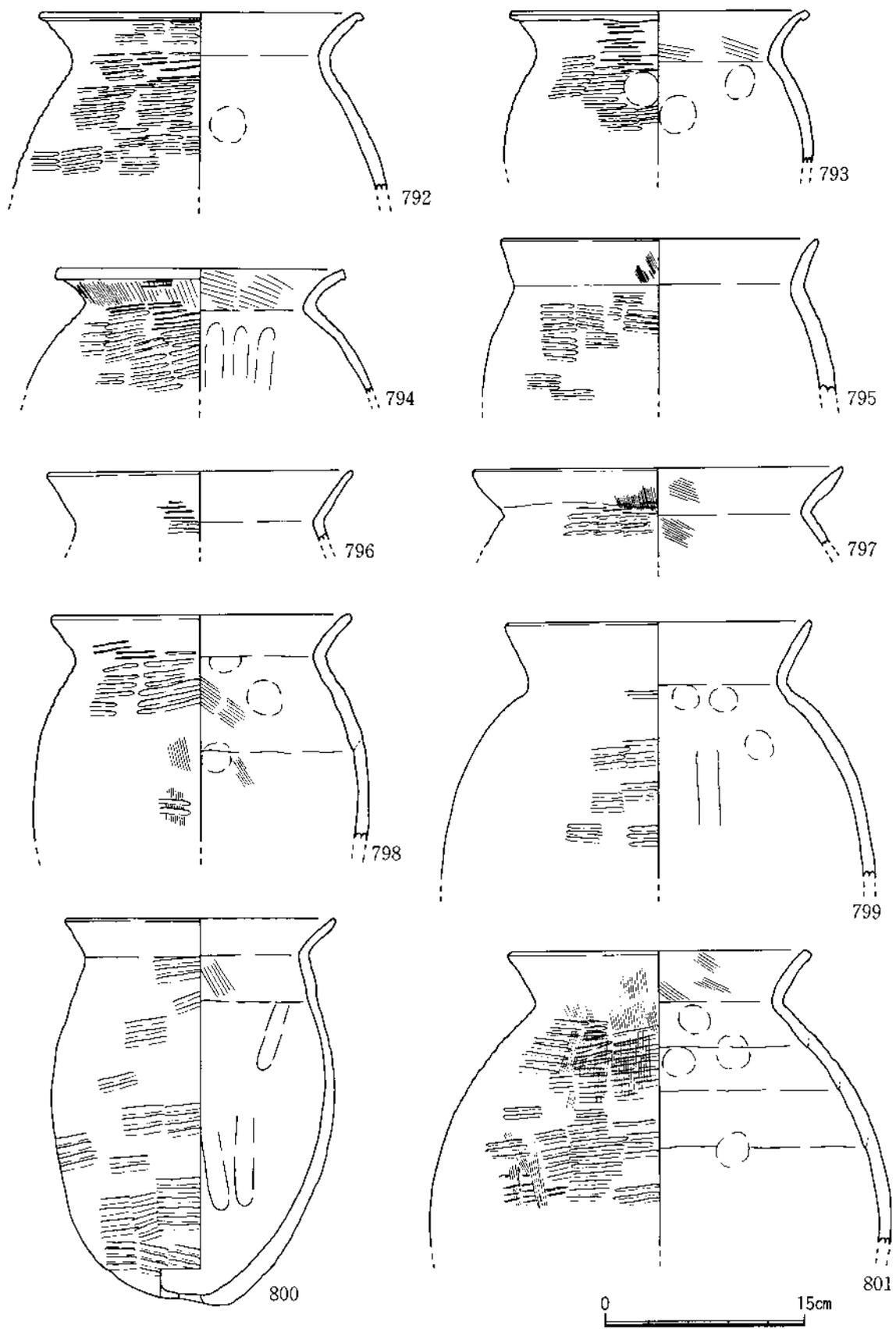


Fig. 113 Ⅲ-2区 出土遺物6 (SD-29)

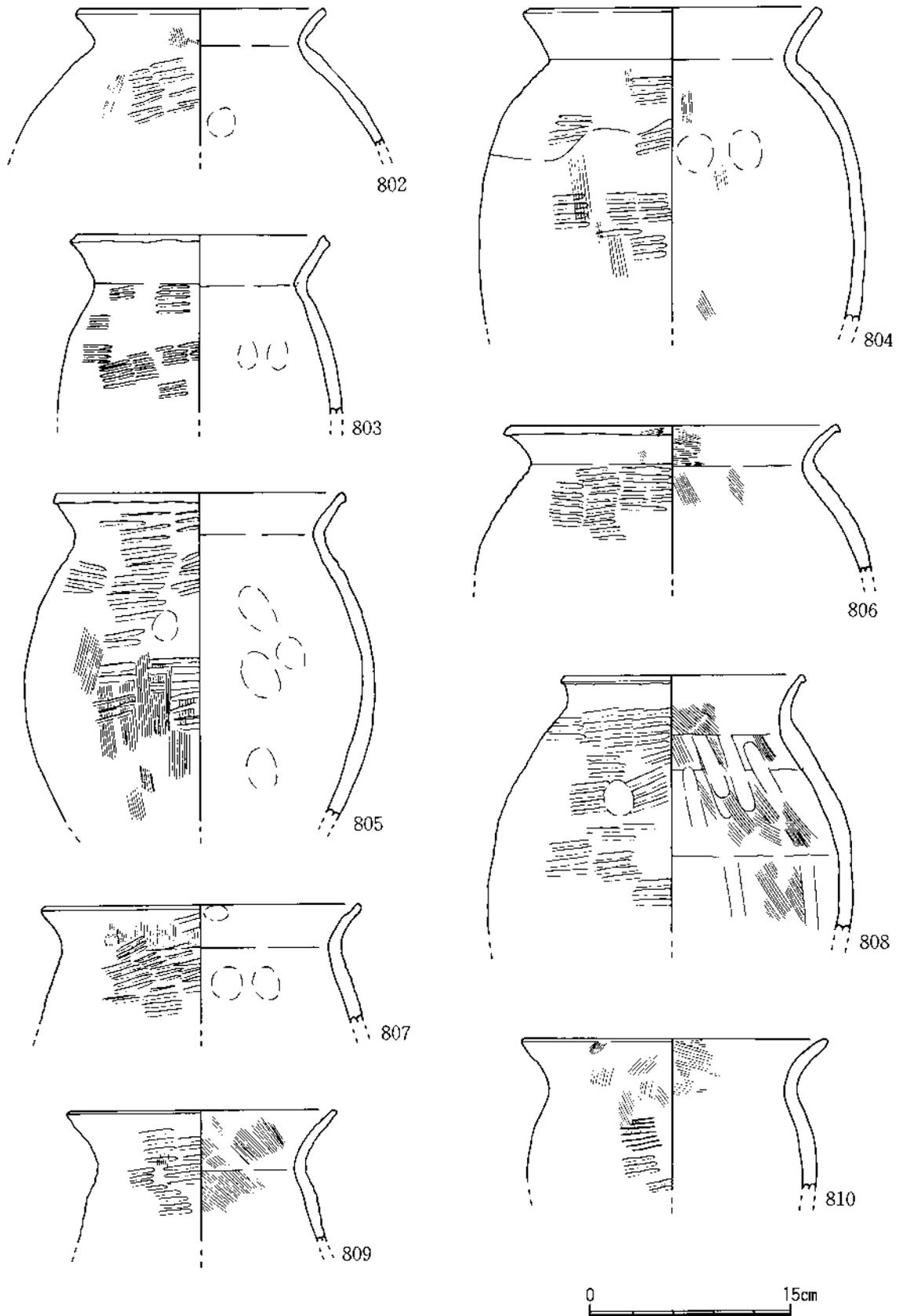


Fig. 114 III-2区 出土遺物7 (SD-29)

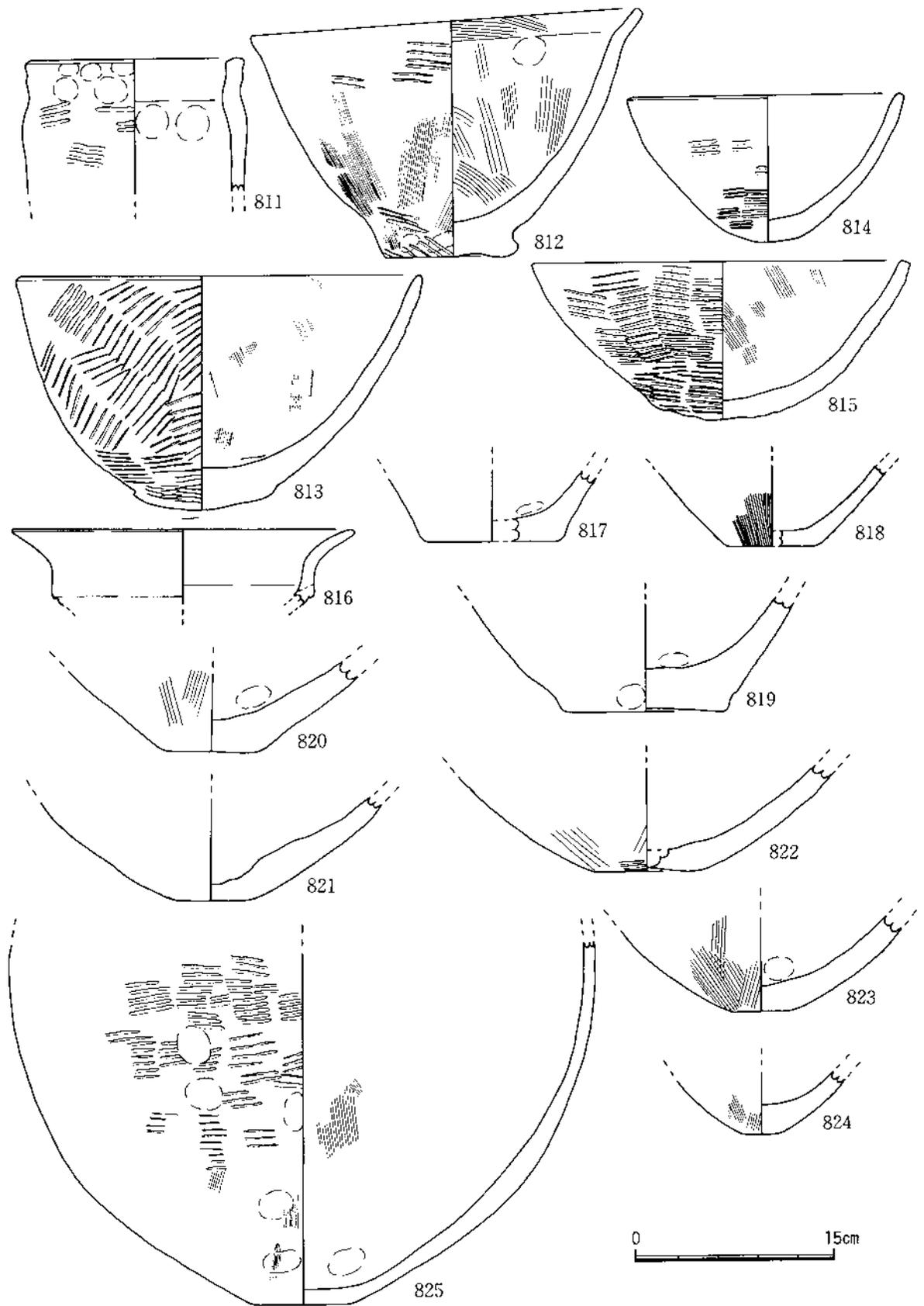


Fig. 115 Ⅲ-2区 出土遺物 8 (SD-29)

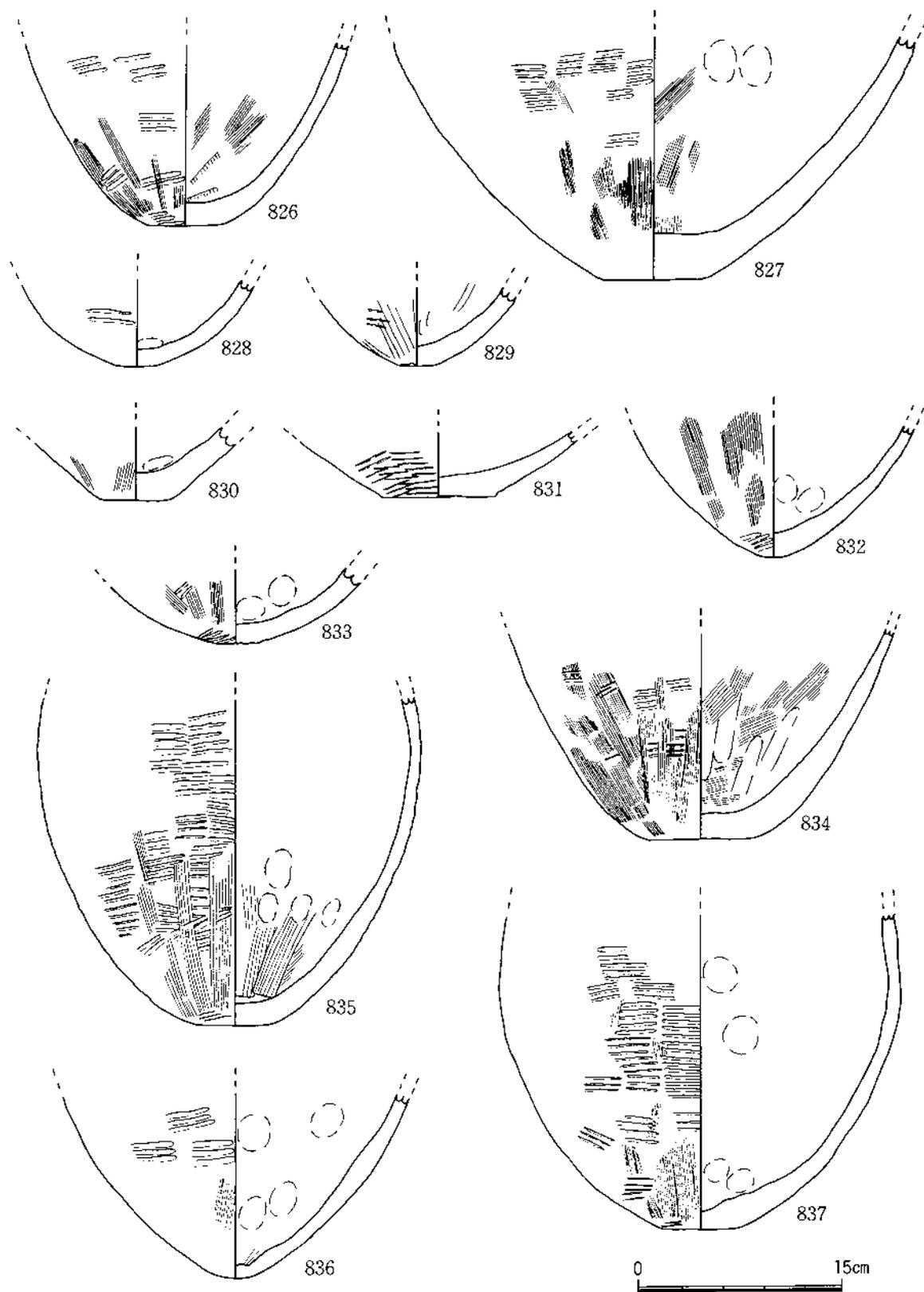


Fig.116 Ⅲ-2区 出土遺物9 (SD-29)

11. III-4区

遺跡地北端に位置する調査区である。水田として利用されていた。III-2区より1mほど高い位置に水田面を形成する。

(1) 遺構

調査区の南端に自然流路を検出した。それ以外は遺構の形成は認められない。

SR-9

調査区の南を南北方向に横断する流路で、幅3.2m、深さ0.6m、長さ4mを検出した。古代・弥生後期末～古墳初頭の遺物が出土している。

(2) 遺物

840・841は9世紀の土師器皿で859は台付皿である。弥生後期末～古墳時代初頭の遺物は846・849のように丸底になってくるものと852・855のように明らかに平底が残るもの、856などわずかに平底を残すものなどヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式への移行期の様相を呈している。

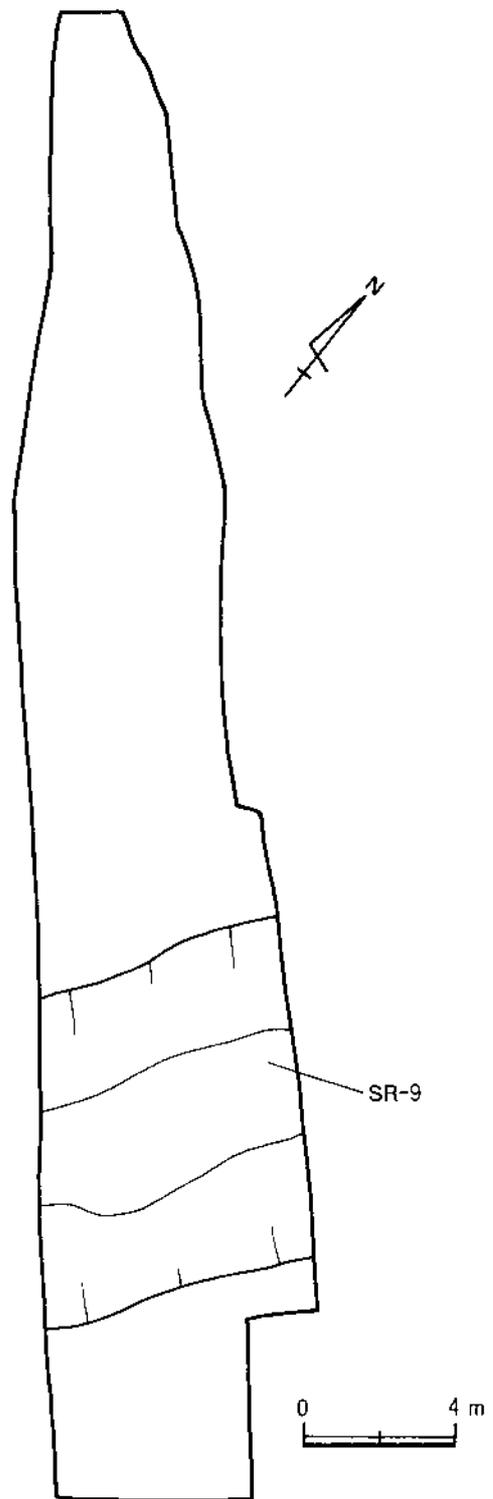


Fig. 117 III-4区 遺構平面全体図

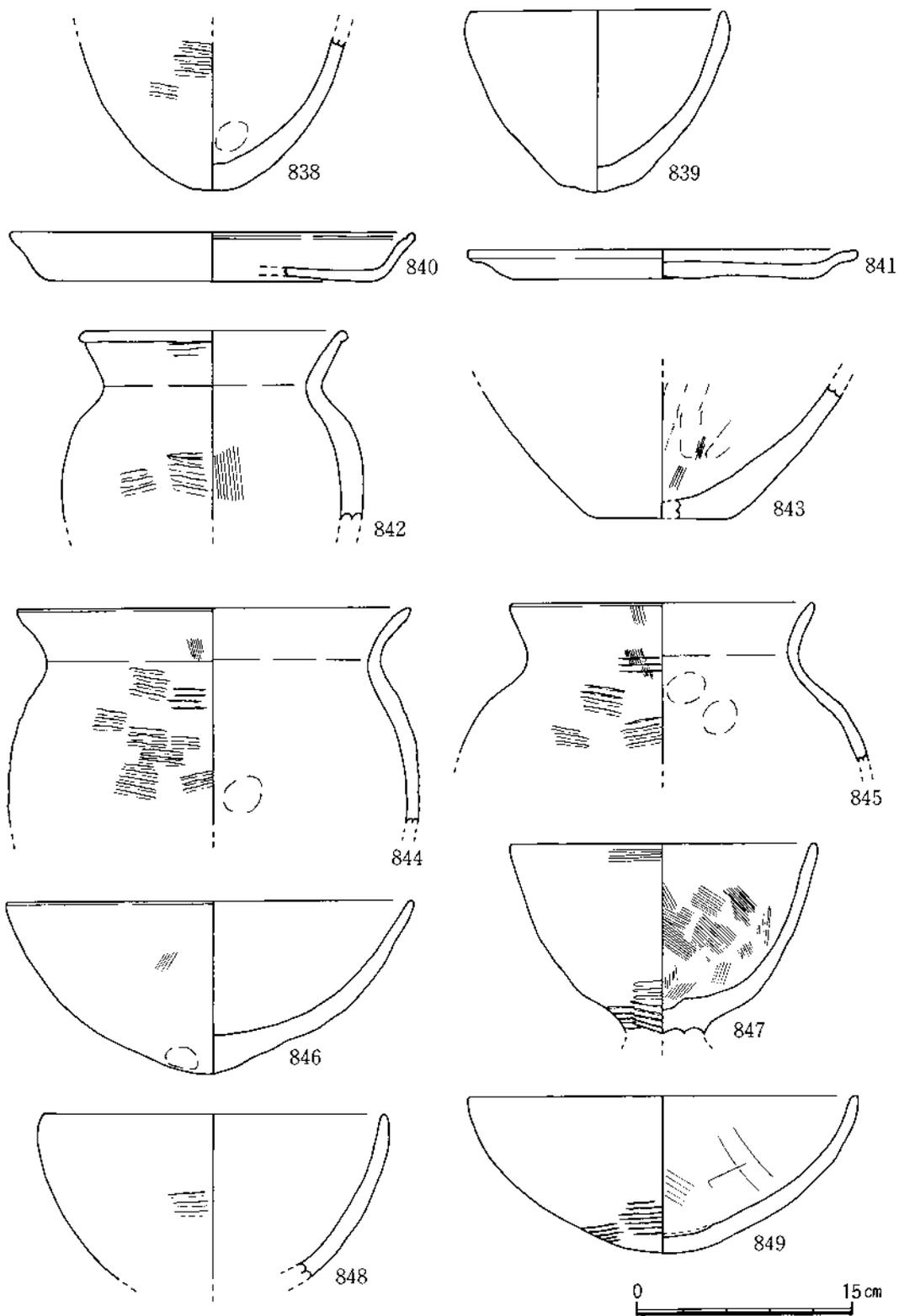


Fig. 118 III-4区 出土遺物1

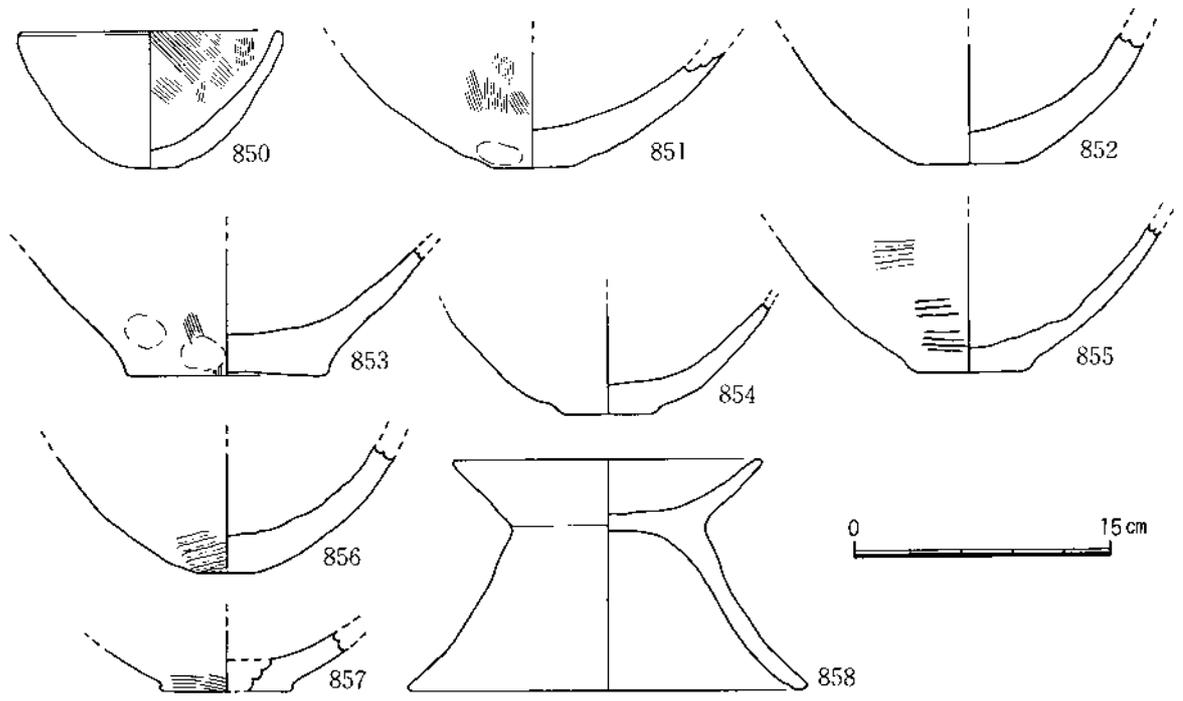


Fig. 119 Ⅲ-4区 出土遺物 2

Tab. 16 遺物観察表（弥生時代以降）(1)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
428	63	I-1区 SR-2	土師器	杯				5.8	底部回転糸切り痕	精選された胎土	にぶい 橙色	にぶい 橙色	
429	〃	I-1区 SR-2	土師器	碗				6.2	輪高台。高台はわずかにハの字状に開く。	精選された胎土	黄橙色	黄褐色	9世紀
430	〃	I-1区 SD-2	土師器	碗				4.8	高台は断面逆台形状。摩耗顕著。	精選された胎土	灰白色	灰白色	11~12世紀
431	〃	I-1区 SD-2	須恵器	杯				7.6	断面三角形の高台貼付。ヨコナデ。	精選された胎土、断面暗赤褐色	灰色	暗緑灰色	9世紀
432	〃	I-1区 SD-2	土師器	羽釜					楕円C型の羽釜。口径は欠損。強いヨコナデで鑄貼付。	雲母・長石・角閃石を含む	にぶい 黄橙色	にぶい 橙色	10世紀、 輸入品
433	〃	I-1区 SD-3	須恵器	長頸壺					頸部。内面に指頭圧痕。胴部と頸部の間の接合痕が確認できる。外面に絞り目あり。ヨコナデで仕上げる。	精選された胎土	灰色	灰色	8~9世紀
434	〃	I-1区 IV層	弥生土器	壺					わずかに上げ底気味の底部。内面刷毛後ナデ、外面縦方向の刷毛調整。	チャート砂粒を多く含む	にぶい 橙色	にぶい 褐色	前期末?
435	〃	I-1区 IV層	土師器	甕				9.6	長胴の雙口縁部小片。外方へ大きく開く。	チャート砂粒を多く含む	にぶい 黄橙色	にぶい 黄褐色	10世紀
436	〃	TR18 I層	瀬戸美濃系陶器	皿				6.2	削り出し高台。見込は幅1cmの環状に露胎、外面は高台外面まで施釉、高台と底面は露胎。見込に彫刻花。	胎土は黄灰色で粗い	灰白色	灰白色	
437	〃	TR18 II層	青磁	碗					龍泉窯青磁口縁部小片。口縁外面に1条の沈線。	灰白色	オリブ 灰色	オリブ 灰色	13世紀後半
441	65	I-2区 V層	弥生土器	壺	20.0	45.2	34.6	11.2	口縁は外反気味に立ち上がり、4個一組の小孔を穿つ。頸部に16条のヘラ描沈線を施し、沈線の上に4条の扁平な刻目突帯を貼付する。胴部中に半截竹管による格子目文を施し、その上下に8-9条のヘラ描沈線を巡らす。内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい 黄橙色	浅黄 褐色	前期末
442	〃	I-2区 V層	弥生土器	甕	24.0				口縁は逆し字状を呈す。外面にヘラ描沈線（残3条）。口唇に刻目を施す。	チャート砂粒を多く含む。	にぶい 橙色	にぶい 褐色	前期末
443	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	15.4				口縁は大きく外反する。強い横方向のナデにより、口縁部下端は拡張し口縁は凹状を呈す。	精選された胎土	浅黄 褐色	灰色	後期初
444	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	18.8				ラップ状に大きく開く口縁。内外面とも刷毛後ナデ。	精選された胎土	浅黄 褐色	浅黄 褐色	後期末
445	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	19.8				ラップ状に大きく開く口縁。内外面とも刷毛後ナデ。	精選された胎土	淡黄色	淡黄色	後期末
446	〃	I-2区 V層	弥生土器	甕	13.4				口縁は大きく外反、内傾面をなす口唇に至る。内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒を多く含む。	浅黄 褐色	褐色	後期末
447	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	17.0				大きく開く口縁。口唇は内傾面をなし、斜格子文を施す。	精選された胎土	にぶい 橙色	にぶい 褐色	後期末
448	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	18.0				2重口縁の壺口縁。内外面刷毛。内面に指頭圧痕。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	浅黄 褐色	後期末
449	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺	18.4				2重口縁の壺口縁。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	褐色	後期末
450	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺				10.4	平底の底部。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
451	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺				7.0	平底。内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	浅黄 褐色	
452	〃	I-2区 V層	弥生土器	壺				5.0	平底。ナデで仕上げ、指頭圧痕が残る。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	
453	〃	I-2区 V層	弥生土器	甕				2.6	わずかに平底が残る底部。内面指頭圧痕。外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐色	褐色	後期末
454	〃	I-2区 V層	弥生土器	甕				5.0	平底。内面指頭圧痕。外面タタキ。	チャート砂粒をやや多く含む。	褐灰色	褐色	後期末
455	66	I-2区 V層	弥生土器	小型土器				5.8	ミニチュア土器で高杯の脚部に相当する。てづくねで全面に指頭圧痕。杯部は欠ける。	チャート砂粒を少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	後期末?
456	〃	I-2区 V層	弥生土器	小型土器		2.3		7.0	ミニチュア土器。鉢か?内外面指頭圧痕。外底は磨かれている。	チャート砂粒を少量含む。	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	後期末?
457	〃	TR16	弥生土器	高杯	18.0					チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい 褐色	浅黄 褐色	
458	〃	TR16	弥生土器	壺	16.0				口縁は大きく外反し、面をなす口縁に至る。頸部にヘラ描沈線が1条残る。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	にぶい 褐色	前期末
459	〃	TR16	弥生土器	甕	13.0				口縁は横方向の強いナデで仕上げる。外面に縦方向のハケ目。	チャート砂粒をやや多く含む。	淡褐色	淡黄色	後期初
460	〃	TR16	弥生土器	甕	17.0				内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	褐色	後期
461	〃	TR16	弥生土器	壺	19.2				口縁は大きく開く。口唇に楕円波状文。	チャート砂粒をやや多く含む。	黄灰色	にぶい 黄褐色	後期末
462	〃	TR16	弥生土器	甕	14.4				口縁は横方向のナデによって仕上げ、口径はわずかに凹状を呈する面をなす。外面に刷毛目。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄 褐色	淡黄色	後期末

Tab. 17 遺物観察表（弥生時代以降）(2)

図版番号	博覧番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
463	66	TR16	弥生土器	甕	14.4				くの字状に屈曲する口縁。口唇は内傾面をなす。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
464	〃	TR16	弥生土器	甕	25.0				口縁は緩やかに屈曲、口唇はわずかに内傾した面をなす。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
465	〃	TR16	弥生土器	甕				6.2	平底。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
466	〃	TR16	弥生土器	甕				4.6	平底。外面刷毛。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	中期末～後期初
467	〃	TR16	弥生土器	甕				2.2	わずかに平底の遺る底部。内面指頭圧痕、外面タタキ目。	チャート砂粒をやや多く含む。	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
468	〃	TR16	弥生土器	壺				6.0	平底。タタキ後刷毛。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄橙色	橙色	後期末
469	〃	TR16	弥生土器	土製支脚					筒状の脚部に2本の角の付いた角形の土製支脚。脚部と角先端が欠ける。指頭圧痕。	チャート砂粒をやや多く含む。	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
470	〃	I-2区Ⅲ層	須恵器	内面硯		15.4			脚台の透かしの形状と内堤の有無、形状は不明。海部はえぐりが比較的浅く、陸部への傾斜は緩やかである。脚台はわずかに内湾しながら下方へ延びている。	細砂粒を含む	灰色	灰色	8世紀後半
471	〃	I-2区Ⅲ層	須恵器	壺				8.2	ナデ、指頭圧痕。	細砂粒を含む	灰色	灰色	8末～9世紀
472	〃	I-2区Ⅲ層	須恵器	壺	13.0				ヨコナデ。	細砂粒を含む	灰色	灰色	8末～9世紀
479	69	I-3区SD-8	土師器	甕	15.4	21.4		2.0	丸底で球形の胴部から口縁は強く屈曲して外面が肥厚する口唇に至る。内面口縁から頸部にかけて刷毛後ナデ、上胴部以下にヘラ削り。外面全面にタタキ目、頸部に指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	古墳初、古式土師器Ⅱ期
480	〃	I-3区SD-8	土師器	高杯	15.0	10.9		幅部8.0	杯部は内湾気味に大きく開いた後緩やかに屈曲、弱い稜をなして外反する口縁に至る。柱状部は1/3が充実、杯部は内面に稜をなして短く屈曲。	チャート砂粒少量	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	古墳初、古式土師器Ⅱ期
481	〃	I-3区SD-8	弥生土器	壺					口縁部小片。口縁は大きく開き、面をなす口唇にヘラ状原体による格子目文を施す。	チャート砂粒少量	灰白色	灰白色	後期末
482	〃	I-3区SD-8	弥生土器	甕				3.0	平底。内面指頭圧痕、外面刷毛目、底面にタタキ目残る。	チャート砂粒やや多し	灰白色	淡橙色	中期末～後期初
483	〃	I-3区SD-8	弥生土器	甕				4.2	突出した平底。内面指頭圧痕、外面刷毛目。	チャート砂粒やや多し	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
485	70	I-3区Ⅳ層	須恵器	双耳壺					肩部。内面ヨコナデ、外面タタキ。		灰色	灰色	古代
486	〃	I-3区Ⅳ層	陶器	碗				8.4	疊付露胎。内面透明釉、外面鉄釉。高台は削り出す。	灰色で粗い	黒褐色	にぶい黄色	
487	〃	I-3区Ⅳ層	土師器	羽蓋					肩部破片。上方に湾曲して延びる罫が貼付される。	精選された胎土	橙色	橙色	13世紀
488	〃	I-3区TR15	須恵器	壺				8.4	ハの字状に開く高台を貼付する。外面は自然釉。ヨコナデで仕上げられる。	精選されており細砂粒を含む	灰色	灰色	8世紀
491	74	I-4区TR13	須恵器	碗				5.6	ヨコナデ。内面が極めて平滑であり、転用現の可能性もあるが断定はできない。	精選されており細砂粒を含む	灰色	灰色	9世紀
492	〃	I-5区検面	須恵器	壺				9.4	ハの字状に開く高台を貼付する。ヨコナデで仕上げられる。	精選されており細砂粒を含む	灰色	オリーブ黒色	8世紀
494	78	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	壺	31.0				口唇に2条の内線。内面に竹管文。	チャート砂粒を含む	黒色	浅黄橙色	後期初
495	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	壺	22.0				外反し大きく開く口縁。口唇は横方向の強いナデで仕上げられる。内面刷毛後ナデ。外面ナデ。	チャート砂粒を含む	淡黄色	浅黄橙色	後期初
496	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕	16.0				口唇は強いナデのため上下に拡張し、凹状を呈する。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	淡黄色	後期初
497	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕	15.4				くの字状に屈曲する口縁。口唇は内傾面をなす。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
498	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕				5.0	平底。	チャート砂粒を含む	灰褐色	浅黄橙色	中期末～後期初
499	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕				3.4	平底。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	中期末～後期初
500	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕				6.0	平底。底面は外側に拡張し、一旦くびれた後立ち上がる。指頭圧痕。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	中期末～後期初
501	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕				5.0	平底。内面ナデ。外面刷毛目。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	中期末～後期初
502	〃	Ⅱ-1区SR3	弥生土器	甕				2.8	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。内外面刷毛目。	チャート砂粒を含む	浅黄橙色	浅黄橙色	中期末～後期初

Tab. 18 遺物観察表（弥生時代以降）(3)

図版・挿図 番号・番号	出土地 点層位	種別	器種	法量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色調		備考
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
503	78	Ⅱ-1区 SR3	弥生土器 甕				1.7	わずかに平底を残す。内面指頭圧痕、外面タタキ目。	チャート砂粒を含む	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
504	〃	Ⅱ-1区 SR3	弥生土器 高杯					高杯の脚部一杯部。摩耗顕著、調整不明。	砂粒少量。石英	淡黄色	淡黄色	後期末
505	〃	Ⅱ-1区 SR3	弥生土器 甕					外面タタキ後ナデ。	細砂粒を含む。	淡赤橙色	淡赤橙色	後期末
506	〃	Ⅱ-1区 SR3	須恵器 杯身	9.8	3.4		6.0	体部外面の1/2以上にヘラ削り。口縁は強いヨコナデで仕上げる。超小型の杯。7世紀初頭からの土器様相変革期の中で生まれる器種。	チャート細砂粒を含む	灰色	灰色	7世紀
507	〃	Ⅱ-1区 SR3	須恵器 杯身	9.6				口縁は非常に強いヨコナデで仕上げる。砂粒動く。(右回り)	チャート細砂粒を含む	灰色	灰色	7世紀
508	〃	Ⅱ-1区 SR3	須恵器 杯身	15.2				ヨコナデ。受部が短い。TK10-43併行。	チャート細砂粒を含む	灰色	灰色	6世紀後半
509	〃	Ⅱ-1区 SR3	須恵器 壺					ヨコナデ。内面に刷毛目残る。外面に2条の凹線。	チャート細砂粒を含む	灰色	灰色	8世紀
510	〃	TR12	弥生土器 壺	14.6				大きく開く口縁。内外面刷毛調整。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期
511	〃	TR12	須恵器 鉢				9.8	ヨコナデ。	チャート細砂粒を含む	灰色	灰色	8世紀
512	〃	TR12	肥前系磁器 瓶		3.4		5.2	断面逆台形の高台。胴部はラッキョウ形。神仏具。外面に岩に植物の文様。	白色で精緻			18C後半-19C初
513	79	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺	24.0				口縁は大きく開いて上下に拡張する口唇に至る。口唇に3条の凹線を施す。	チャート砂粒	淡黄色	淡黄色	中期末-後期初頭
514	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺	27.4				口縁は大きく開いて上下に拡張する口唇に至る。口唇に3条の凹線を施す。	チャート砂粒	にぶい黄橙色	浅黄橙色	中期末-後期初頭
515	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺	22.0				口縁は大きく開いて内傾面をなす口唇に至る。内外面口唇ともに刷毛調整。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期初頭
516	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺					口唇は面をなし斜格子文を施す。	細砂粒	浅黄色	浅黄色	後期末
517	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺	15.0				緩やかに屈曲し、外反する口縁。口唇部は面をなし外面が肥厚する。頸部無文。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期
518	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕	16.8				口縁はくの字状に屈曲、口唇は内傾面をなす。内外面刷毛調整。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期
519	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕	21.6				口縁は緩やかに外反する。内面ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒を少量	浅黄橙色	灰白色	後期末
520	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕	15.0				口縁はくの字状に屈曲する。口縁部内面横方向の刷毛、上胴部指頭圧痕。外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
521	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕	15.8				口縁はくの字状に屈曲、口唇は丸く収める。内面刷毛、指頭圧痕。外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
522	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 鉢	19.0				口縁は内湾気味に立ち上がり口唇は内傾面をなす。内外面ナデ。	チャート砂粒	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
523	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 高杯					柱状部の破片。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
524	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 高杯	28.0				杯部は一旦屈曲した後外反して口唇に至る。口唇は凹状を呈する。	チャート砂粒	赤褐色	黒色	後期初頭
525	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				3.8	平底。内面指頭圧痕。	チャート砂粒	褐色	浅黄橙色	後期初頭
526	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				4.6	平底。内面指頭圧痕。	チャート砂粒	黒色	にぶい褐色	後期初頭
527	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺				6.4	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。内面刷毛、外面タタキ。	チャート砂粒	浅黄橙色	黄灰色	後期末
528	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 壺				7.0	平底。内面にナデ。	チャート砂粒多し	黄灰色	淡黄色	後期
529	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				5.0	平底。内面刷毛後指頭圧痕。外面指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期
530	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				3.0	突出した平底の底部。外面にタタキ目の痕跡。	チャート砂粒やや多く含む	灰白色	にぶい褐色	後期末
531	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				2.6	平底。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。底面にタタキ目あり。	チャート砂粒	褐灰色	灰白色	後期末
532	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				1.6	底部は突出する。内面刷毛目、外面指頭圧痕。	チャート砂粒	淡黄色	淡黄色	後期末
533	80	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				1.3	突出した平底の底部。内面刷毛後ナデ、外面にタタキ目。	チャート砂粒	黄灰色	黄灰色	後期末
534	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				3.2	突出した平底の底部。内面刷毛、外面にタタキ目。	チャート砂粒	黄灰色	黄灰色	後期末
535	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				4.6	平底の底部。内面指頭圧痕、外面にタタキ目。	チャート砂粒	黄灰色	浅黄橙色	後期末
536	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器 甕				3.2	突出した平底の底部。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末

Tab. 19 遺物観察表（弥生時代以降）(4)

図版 番号	挿図 番号	出土地 点層位	種別	器種	法 量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色 調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
537	80	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器	甕				3.4	平底の底部。内面刷毛、外面にタタキ目。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
538	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器	甕				3.6	平底の底部から体部は内湾して立ち上がる。内面指頭圧痕、外面にタタキ目。	チャート砂粒	黒色	黄橙色	後期末
539	〃	Ⅱ-1区 SD13	弥生土器					3.8	平底の底部から円筒形の体部が開き気味ではあるがほぼ上方に立ち上がる。土製支脚あるいは製塩土器に類例が求められる。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
540	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	14.6				貼付口縁。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 黄橙色	中期末
541	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	20.2				斜め上方に開いた口縁。口唇は外傾面をなし、外側に拡張する。内外面刷毛調整、口唇にも刷毛目が残る。	チャート砂粒	にぶい 橙色	浅黄橙 色	中期末～ 後期初頭
542	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	18.4				斜め上方に開いた口縁。口唇は外傾面をなす。内面指頭圧痕。	チャート砂粒	にぶい 橙色	浅黄橙 色	中期末～ 後期初頭
543	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	19.0				口唇は外面が肥厚し、凹状を呈する。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期初頭
544	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	19.0				口唇は外面が肥厚し、凹状を呈する。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期初頭
545	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	9.6				頸部は直立し、口縁は外反して口唇は丸く収める。無文の長頸壺。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期
546	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺					壺の頸部。頸部で稜をなして強く屈曲、口縁は大きく開く。外面刷毛後指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙 色	淡橙色	後期
547	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	25.0				口縁は大きく外反する。口唇はわずかに凹部を有する。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期
548	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	20.0				ラック状に大きく開いた口縁。口唇はわずかに丸味を帯びた面をなす。内外面に指頭圧痕。	チャート砂粒少量	浅黄橙 色	橙色	後期
549	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	21.0				ラック状に大きく開いた口縁。口唇はわずかに丸味を帯びた面をなす。内外面に指頭圧痕。	チャート砂粒少量	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期
550	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	16.6				2重口縁の壺口縁。口縁は大きく外反した後強く屈曲し内傾しながら立ち上がって口唇に至る。外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい 橙色	橙色	後期末
551	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	14.0				2重口縁の壺口縁。口縁は大きく外反した後強く屈曲し上方に立ち上がって面をなす口唇に至る。内面刷毛調整。	チャート砂粒	淡黄色	淡黄色	後期末
552	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺	15.0				2重口縁の壺口縁。口縁は大きく外反した後強く屈曲し上方に立ち上がって面をなす口唇に至る。内面刷毛調整。	チャート砂粒	灰白色	灰白色	後期末
553	81	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺					2重口縁の壺口縁。口縁は大きく外反した後強く屈曲し内傾しながら立ち上がる。口唇欠損。内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒	淡黄色	にぶい 橙色	後期末
554	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	10.0				口縁はくの字状に強く屈曲した後内傾気味に立ち上がる。口縁部外面に2本の凹線。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期初頭
555	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	14.6				丸味を帯びて直立する胴部から頸部で緩やかに屈曲、口縁は外反する。口唇は上下に拡張内傾し凹状を呈する面をなす。外面に煤付着。内面指頭圧痕、外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期初頭
556	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	17.0				くの字状に緩やかに屈曲する口縁。外面タタキ目がわずかに残る。内面指頭圧痕。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
557	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	17.0				くの字状に緩やかに屈曲する口縁。摩耗のため明瞭ではないが、外面にタタキ目がわずかに観察される。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
558	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	13.6				口縁はくの字状に屈曲し大きく外反する。内面刷毛後ナデ。外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期末
559	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	14.2				口縁はくの字状に屈曲し内傾面をなす口唇に至る。内外面指頭圧痕。	チャート砂粒	橙色	灰白色	後期末
560	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	17.0				口縁はくの字状に屈曲し丸く収める口唇に至る。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
561	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	12.0				口縁はゆるやかに屈曲し丸く収める口唇に至る。内面指頭圧痕、外面タタキ目。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
562	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	鉢	12.0				胴部は丸味を帯びて立ち上がり、口縁は稜をなしてわずかに外反する。	チャート砂粒	橙色	浅黄橙 色	後期末
563	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕	20.0				口縁はくの字状に屈曲し口唇は面をなす。内面刷毛、外面タタキ後刷毛後ナデ。指頭圧痕が残る。	チャート砂粒	淡黄色	浅黄橙 色	後期末

Tab. 20 遺物観察表 (弥生時代以降) (5)

図版 番号	挿図 番号	出土地 点層位	種別	器種	法 量 cm				特徴 (形態・手法等)	胎土	色 調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
564	81	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	高杯	22.8				杯部は一日屈曲した後外反して口唇に至る。口唇は面をなす。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期
565	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	高杯					柱状部から脚部に欠けて、外面は縦方向の刷毛調整、内面ナデ、指頭圧痕残る。	チャート砂粒	にぶい 赤橙色	淡赤橙 色	後期
566	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	高杯					摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	浅黄橙 色	後期
567	82	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	小型 土器				3.0	短い脚がついた底部。胴部は内湾気味に上方に立ち上がる。てづくねで指頭圧痕残る。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期
568	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺				11.2	平底。体部は大きく開いて立ち上がる。	チャート砂粒	灰色	淡黄色	
569	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺				6.6	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。内外面とも刷毛後ナデ。指頭圧痕。	チャート砂粒	黒色	浅黄橙 色	後期末
570	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺				4.2	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙 色	後期末
571	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	壺				2.7	わずかに平坦面を残した丸底気味の底部。内面に指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
572	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				2.8	平底。内外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
573	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				4.4	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。内面指頭圧痕、外面刷毛目。	チャート砂粒	灰黄褐 色	浅黄橙 色	後期末
574	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				4.4	平底。内面刷毛後ナデ。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	明褐色 色	後期末
575	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				4.2	平底。内面ナデ、外面刷毛目。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
576	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.8	平底。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	灰白色	後期末
577	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				2.0	平底。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	淡黄色	後期末
578	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.4	平底。外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
579	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.0	平底。摩耗顕著、内面に指頭圧痕。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	褐色	後期末
580	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.0	平底。内面ナデ、外面指頭圧痕。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
581	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.6	平底。内面ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒	淡黄色	灰黄色	後期末
582	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.8	平底。内面ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
583	〃	Ⅱ-1区 SD14	弥生土器	甕				3.2	わずかに突出した平底の底部。	チャート砂粒	褐色	褐色	後期末
591	84	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	壺	21.0				貼付口縁。口唇上端と口唇面の3箇所刻目を施す。	チャート砂粒	灰色	にぶい 黄橙色	後期初
592	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	壺	15.0				口縁は大きく外反し、口唇はわずかに上方へ拡張する。口縁部外面にヘラミガキが観察される。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
593	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	甕	17.4				口縁はくの字状に屈曲、口唇は面をなす。外面タタキ目、指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
594	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	甕				3.6	平底の底部。内面刷毛調整。	チャート砂粒	浅黄橙 色	にぶい 褐色	中期末～ 後期初頭
595	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	甕				5.2	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒少量。 精選された 胎土	黒色	にぶい 黄橙色	中期末～ 後期初頭
596	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	甕				5.0	平底。外面刷毛目。	チャート砂粒	にぶい 褐色	にぶい 褐色	中期末～ 後期初頭
597	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	壺				1.8	丸底。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 褐色	にぶい 褐色	後期末
598	〃	Ⅱ-2区 SR4	弥生土器	壺				5.0	突出した平底。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	浅黄橙 色	浅黄橙 色	後期末
599	〃	Ⅱ-2区 SD15	弥生土器	甕				5.6	平底。内面指頭圧痕、外面刷毛目。	チャート砂粒	黒色	にぶい 褐色	中期末～ 後期初頭
600	〃	Ⅱ-2区 SD15	弥生土器	甕				2.8	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	褐色	褐色	中期末～ 後期初頭
601	〃	Ⅱ-2区 Ⅱ層	須恵器		42.0				頸部で稜をなして強く屈曲した後、口縁部は外反気味に立ち上がり端部を肥厚させ上方につまみあげる。口縁は横方向のナデによって仕上げる。		灰色	灰色	10～11世紀
603	89	Ⅱ-3区 Ⅱ層	瓦質土器	鍋	22.0				断面三角形の鈎貼付。				13世紀
604	〃	Ⅱ-3区 Ⅱ層	備前	摺鉢				10.0	内面に6条一単位の条線あり。				中世

Tab. 21 遺物観察表（弥生時代以降）(6)

図版・挿図 番号・番号	出土地 点・種別	種別	器種	法 量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色 調		備考		
				口径	器高	胴径	底径			内面	外面			
605	89	Ⅱ-3区 SK 6	弥生土器	甕	14.6	21.3	16.4	1.8	平底わずかに残り、フットボール型の胴部から口縁は稜をなしてくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。外面の刷毛調整は下半に集中。				後期末	
606	〃	Ⅱ-3区 SD17	弥生土器	高杯	21.6				杯部は一旦屈曲した後、大きく外反して面をなす口唇部に至る。	チャート砂粒	灰白色	灰白色		後期初
607	〃	Ⅱ-3区 SD17	弥生土器	甕				4.8	平底。内面ナデ、外面刷毛調整。	チャート砂粒				中期末
608	〃	Ⅱ-3区 SD17	弥生土器	高杯					柱状部は上位3分の2が充実。杯部との接合部から剝離欠損。柱状部は直線的に下降し裾は強く屈曲する。外面に指頭圧痕残る。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末
609	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	壺	17.6				大きく開く口縁。口唇は上方に拡張、内傾する面をなす。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
610	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	壺	17.4				口縁は大きく開いた後屈曲し、上方に立ち上がる。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
611	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕	17.8		19.2		口縁はくの字状に屈曲丸く収める口唇に至る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒多く含む	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
612	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	壺	15.0				口縁は直線的に立ち上がり丸く収める口唇に至る。内外面刷毛調整。	チャート砂粒多く含む	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
613	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕	18.6				口縁はくの字状に屈曲、口唇は内傾面をなす。内面ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
614	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕	22.6				口縁はくの字状に屈曲、口唇は内傾面をなす。内面ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色		後期末～ 古墳初
615	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕	18.4				口縁はくの字状に屈曲、口唇はわずかに肥厚する。内面ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	灰白色	灰白色		後期末～ 古墳初
616	90	Ⅱ-3区 SD18	土師器	甕	15.0	19.8	18.0	1.6	底部は丸底で、胴部は球形に近い。頸部でくの字状に緩やかに屈曲して口縁は外反する。口唇は丸く収め、外面を肥厚させる。内面に指頭圧痕がのこる。外面は全面にタタキ目が残る。一部に刷毛目、指頭圧痕が観察される。外面に煤付着。	チャート砂粒やや多く含む。	灰白色	灰白色		古墳初
617	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	甕	17.0	20.6	19.0	2.5	底部は丸底で、胴部は球形に近い。頸部でくの字状に緩やかに屈曲して口縁は外反する。口唇は丸く収め、外面を肥厚させる。内面に指頭圧痕がのこり、口縁胴部ともナデで仕上げられる。外面はタタキ後部分的に刷毛。外面に煤付着。	チャート砂粒やや多く含む。	浅黄橙色	淡赤橙色		古墳初
618	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	18.0				口唇は丸く収める。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	橙色		古墳初
619	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	18.2				口唇は丸く収める。内面ナデ、外面タタキ。	チャート砂粒	にぶい 橙色	灰色		古墳初
620	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	13.6				口唇は丸く収める。ナデ仕上げ。	チャート砂粒	橙色	橙色		古墳初
621	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	17.8	7.1		3.4	丸みを帯びた平底から内湾気味に立ち上がり、丸く収めた口唇に至る。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒やや多し	橙色	橙色		古墳初
622	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	10.7	6.8		2.0	丸底。口唇は丸く収める。内外面に指頭圧痕残り、ナデで仕上げられる。	チャート砂粒やや多し	灰白色	灰白色		古墳初
623	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	鉢	14.8	6.6		2.0	丸底。口唇は丸く収める。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒多し	橙色	橙色		古墳初
624	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	小型丸底壺	8.8	8.0		7.4	球形の体部から屈曲して、口縁は外上方へ開いて直線的に立ち上がる。が摩耗顕著で調整は不明瞭だが、外面にわずかに刷毛目、指頭圧痕が確認できる。	精選された胎土	灰白色	灰白色		古墳初
625	〃	Ⅱ-3区 SD18	土師器	小型丸底壺	10.4			9.6	球形の体部から頭部で屈曲した後、口縁は外上方へ開いて直線的に立ち上がり、細く仕上げられる口唇に至る。摩耗顕著で調整は不明瞭だが、外面に刷毛目が確認できる。	精選された胎土	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色		古墳初
626	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	鉢				4.4	底部外縁をつまみだし、短い脚状に成形する。外面に指頭圧痕。圧痕が観察できる以外は調整不明。	チャート砂粒	淡黄色	浅黄橙色		後期
627	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	壺				5.6	平底の底部。内面ナデ、外面刷毛目。	チャート砂粒	灰白色	灰白色		中期末～ 後期初
628	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	壺				2.0	突出した平底の底部。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	浅黄橙色		後期末
629	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕				5.2	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい 橙色	浅黄橙色		中期末～ 後期初
630	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕				4.0	平底。外面刷毛調整。	チャート砂粒	淡黄色	淡橙色		中期末～ 後期初
631	〃	Ⅱ-3区 SD18	弥生土器	甕				2.0	平底。摩耗著しいが、外面意わずかにタタキ目が観察できる。	チャート砂粒	黒色	浅黄橙色		中期末～ 後期初

Tab. 22 遺物観察表（弥生時代以降）(7)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
632	90	TR11	弥生土器	壺	15.2				広口蓋。口縁は若干反気味に立ち上がり、内傾面をなす口唇に至る。頸部下が欠けるが残存部で10条のヘラ描沈線を巡らせる。前期末。	チャート砂粒をやや多く含む	にぶい 橙色	にぶい 橙色	前期末
633	〃	TR11	弥生土器	壺	15.2				ラップ状に大きく開く口縁。口唇は細く仕上げる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒をやや多く含む	灰色	灰色	後期初
634	〃	TR11	弥生土器	壺	11.2				開き気味に立ち上がる口縁。口唇は細く仕上げる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒をやや多く含む	灰色	灰色	後期初
635	91	TR11	弥生土器	壺	21.6				口縁部小片。外面に刷毛状原体による斜格子文を施文。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
636	〃	TR11	弥生土器	壺	20.0				口縁は大きく開き、面をなす口唇に至る。口唇はわずかに凹状を呈す。内面刷毛後ナデ、外面ナデ。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期初
637	〃	TR11	弥生土器	壺	15.6				ラップ状に大きく開く口縁。口唇は細く仕上げる。内外面ナデで仕上げる。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期初
638	〃	TR11	弥生土器	甕	15.8				口縁はくの字状に屈曲し、口唇は強い横方向のナデにより上方に肥厚する。内外面とも刷毛後ナデ。	チャート砂粒	灰白色	灰白色	後期初
639	〃	TR11	弥生土器	甕	18.0				口縁はくの字状に屈曲し、口唇外面がわずかに肥厚する。内外面とも刷毛後ナデ。外面に煤付着。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期末～ 古墳初
640	〃	TR11	弥生土器	甕	14.0				口縁は緩やかに屈曲し、大きく外反して丸く収めた口唇に至る。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～ 古墳初
641	〃	TR11	弥生土器	鉢	13.0	5.0		2.6	丸底の底部から、内湾気味に体部は立ち上がり、丸く収めた口唇に至る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末～ 古墳初
642	〃	TR11	弥生土器	鉢				3.4	丸みを帯びた平底。体部は内湾して立ち上がる。内外面指頭圧痕。	チャート砂粒	灰白色	にぶい 橙色	後期末
643	〃	TR11	弥生土器	鉢	11.6	4.9		4.0	平底の底部から体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	にぶい 赤橙色	にぶい 赤橙色	後期末
644	〃	TR11	土師器	鉢				4.0	平底。体部は内湾して立ち上がる。外面指頭圧痕。摩耗顕著で、それ以外の調整不明。	チャート砂粒	橙色	淡黄色	古墳初
645	〃	TR11	土師器	鉢	8.2	4.5		1.0	丸底の底部から、内湾気味に体部は立ち上がり、丸く収めた口唇に至る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	古墳初
646	〃	TR11	土師器	鉢	13.8	6.5		2.0	丸底の底部から、内湾気味に体部は立ち上がり、丸く収めた口唇に至る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	古墳初
647	〃	TR11	土師器	鉢	7.0	2.2		3.2	器高2cm前後の皿状の小型の鉢。古墳時代初頭。	精選された胎土	橙色	橙色	古墳初
648	〃	TR11	土師器	壺				3.0	丸底の底部から、内湾気味に体部は立ち上がる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい 橙色	古墳初
649	〃	TR11	弥生土器	壺				4.0	突出した平底の底部から、内湾気味に体部は立ち上がる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	浅黄橙色	後期末
650	〃	TR11	弥生土器	甕				3.4	平底。体部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がる。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	灰色	浅黄橙色	後期末
651	〃	TR11	弥生土器	甕				4.4	平底。体部は内湾気味に斜め上方へ立ち上がる。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	にぶい 黄褐色	灰色	後期末
652	〃	TR11	弥生土器	甕				3.0	平底。外面にタタキ目が残る。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期末
653	〃	TR11	弥生土器	甕				3.0	平底。内面に指頭圧痕、外面にタタキ目が残る。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期末
654	〃	TR11	弥生土器	甕				5.2	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	浅黄橙色	後期末
655	〃	TR11	弥生土器	甕				5.0	平底。	チャート砂粒	灰色	浅黄橙色	後期末
656	〃	TR11	弥生土器	甕				5.0	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	灰色	橙色	後期末
657	〃	TR11	弥生土器	甕				4.6	平底。内面に指頭圧痕、外面にタタキ目が残る。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
658	〃	TR11	土師器	小型丸底壺	7.4	6.4		2.4	球形の体部から頸部で屈曲した後、口縁は外上方へ開いて直線的に立ち上がり、細く仕上げる口唇に至る。摩耗顕著で調整不明。	精選された胎土	橙色	褐色	古墳初
666	98	Ⅱ-4区 TR-9	弥生土器	壺					上胴部に8条のヘラ描沈線を巡らせる。内面刷毛後ナデ、外面刷毛調整の後ヘラ磨きで仕上げる。	チャート砂粒少量	浅黄橙色	浅黄橙色	前期末
667	〃	Ⅱ-4区 TR-9	弥生土器	鉢	18.6				口縁は直立し、口唇は水平面をなす。内面ナデ、外面刷毛後磨き。	チャート砂粒少量	淡黄色	黒色	
668	〃	Ⅱ-4区 TR-9	土師器	高杯					高杯の脚部（柱状部-裾部）柱状部は1/3が尤実。裾部は一且屈曲した後外方へ開く。外面に指頭圧痕残る。	チャート砂粒	浅黄橙色	褐色	古墳初

Tab. 23 遺物観察表 (弥生時代以降) (8)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴 (形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
669	98	II-4区 TR-9	青磁	碗					龍泉窯青磁Ⅰ-5 b 類。片切掘りによる竈蓮弁。13世紀後半。		オリブ灰色	オリブ灰色	13世紀後半
670	〃	II-4区 TR-9	青磁	碗					龍泉窯青磁。		オリブ灰色	オリブ灰色	13世紀後半
671	〃	II-4区 TR-9	青磁	碗					同安窯青磁。		灰オリブ色	灰オリブ色	12世紀後半
672	〃	II-4区 TR-9	白磁	碗					口縁は稜をなして短く外反する。釉厚が薄く1mm以下。白磁V類		灰白色	灰白色	11世紀後半～12世紀
673	〃	II-4区 TR-8	土師器	小皿	7.9	1.4		4.6	底部上げ底気味。口縁若干外反。摩耗顕著、調整不明。		赤褐色	赤褐色	中世
674	〃	II-4区 TR-8	瓦器	碗	13.0				内面ヘラ磨きによる暗文。外面指頭圧痕。口唇は丸く収める。		灰色	灰色	13世紀
675	〃	II-4区 P-2	肥前陶器					6.8	高台は断面逆台形。見込に蛇の目状軸はぎ。内面と外面豊付け付近まで施釉。		暗褐色	暗褐色	19世紀
676	〃	II-4区 P-1	土師器	杯	11.4	3.8		6.0	口唇は丸く収める。口クロ目。底部回転糸切り痕。		浅黄褐色	浅黄褐色	13世紀
677	〃	II-4区 P-1	土師器	小皿	7.8	1.9		5.0	口唇は丸く収める。口クロ目。		淡黄色	淡黄色	13世紀
678	〃	II-4区 P-29	土師器	小皿	6.8	1.8		4.8	口唇は丸く収める。底部回転糸切り痕。		浅黄褐色	浅黄褐色	13世紀
679	〃	II-4区 P-22	常滑	甕				15.0	外面ヘラナデ。平底。				中世
680	〃	II-4区 SK-7	磁器染付	碗	8.4				外面に唐草文。		灰白色	灰白色	18世紀
681	〃	II-4区 P-44	瓦質土器	羽釜	24.0				外面指頭圧痕。鈷は外方へ大きく延びる。		灰色	灰色	中世
682	〃	II-4区 SD21	瓦器	椀				4.6	断面四角形の高台。見込にヘラミガキ。		灰色	灰色	中世
683	〃	II-4区 P-64	須恵器	甕	21.2				頸部で屈曲し、口縁は開いて内傾面をなす口唇に至る。ヨコナデ。	チャート細砂粒を含む	黄灰	灰オリブ色	古代
684	〃	II-4区 SD22	土師器	鉢	10.6				体部は内湾して、直立する口唇に至る。	チャート砂粒	褐色	浅黄褐色	古墳初
685	99	II-4区 VI層 D3	弥生土器	奈	12.0				頸部に12条のヘラ描沈線を巡らせ、1条の断面四角形の扁平な刻目突帯を貼付する。沈線下、頸部に刺突文。内面、刷毛後ナデ、指頭圧痕残る。	チャート砂粒少量	浅黄褐色	浅黄褐色	前期末
686	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕				23.2	甕上胴部。ヘラ描沈線下に刺突列点文。内面ナデ、外面刷毛後磨き。	チャート砂粒少量	にぶい黄褐色	褐色	前期末
687	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	21.0			20.8	口縁は逆し字状を呈す。口縁下に7条のヘラ描沈線を施す。刷毛目が観察できるが摩耗顕著で、調整不明瞭。	チャート砂粒	灰色	灰黄褐色	前期末
688	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	24.2				口縁は逆し字状を呈し、口唇に刻目あり。沈線下に8条のヘラ描沈線を施す。刷毛目が残り、ナデで仕上げ。	チャート砂粒	褐色	浅黄褐色	前期末
689	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	32.8			31.6	口縁は逆し字状を呈し、口唇に刻目あり。沈線無し。内外面指頭圧痕のこり、ナデで仕上げ。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
690	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕				29.0	上胴部にヘラ描沈線があり、沈線下に刺突列を持つ。内面指頭圧痕、外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
691	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	21.6			19.4	口縁は如意状を呈し、口唇に刻目を施す。口縁下に9条のヘラ描沈線。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	褐色	褐色	前期末
692	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	21.6				頸部にヘラ描沈線。口縁は如意状を呈し、口唇に刻目を施す。外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
693	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	19.6				如意状口縁で口縁下にヘラ描沈線 (残1条)。口唇に刻目あり。内外面とも刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
694	〃	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	19.2				頸部にヘラ描沈線。口縁は如意状を呈し、口唇に刻目を施す。外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
695	100	II-4区 VI層 D3	弥生土器	甕	31.0			30.0	口縁は如意状を呈し、口唇に刻目を施す。口縁下に6条のヘラ描沈線。内面刷毛後ナデ、外面縦方向の刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	前期末
696	〃	II-4区	弥生土器	鉢	12.0			13.0	内面指頭圧痕、外面刷毛	チャート砂粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	出土地点不明
697	〃	II-4区 V層 D3	弥生土器	蓋					頂部は外方へつまみ出す。上面も含め頂部付近は指頭圧痕が残り、ナデで仕上げ。胴部内外面刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい褐色	浅黄褐色	前期末
698	〃	II-4区 V層 D3	弥生土器	甕	22.4				口縁は外反する。口縁下に多条 (残5条) のヘラ描沈線。内外面とも刷毛目がわずかに残り。摩耗顕著。	チャート砂粒	浅黄褐色	灰白色	前期末
699	〃	II-4区 V層 D3	弥生土器	甕				20.2	胴部破片。多条 (残5条) のヘラ描沈線が残る。内面ナデ、外面刷毛調整。	チャート砂粒	褐色	褐色	前期末

Tab. 24 遺物観察表（弥生時代以降）(9)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
700	100	II-4区 V層D3	弥生土器	甕				19.6	胴部破片。多条(残9条)のヘラ指沈線が残る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	にぶい黄橙色	前期末
701	〃	II-4区 V層D3	弥生土器	甕	18.0				口縁は無文の甕。口唇は外方へ拡張。(逆L字状)	チャート砂粒			前期末
702	〃	II-4区 表探?	弥生土器	甕	17.6				口縁は強く屈曲して大きく外反する。	チャート砂粒			出土地点不明
703	〃	II-4区 V層D3	弥生土器	壺				9.0	平底。内面刷毛後指頭圧痕。外面縦方向の刷毛調整。	チャート砂粒	赤橙色	にぶい橙色	前期末
704	〃	II-4区 V層D3	弥生土器	甕				7.0	平底。内面ナデ、外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒	にぶい橙色	にぶい橙色	前期末
705	〃	II-4区 V層D3	弥生土器	甕				10.0	平底。内面刷毛後指頭圧痕。外面縦方向の刷毛調整。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい橙色	前期末
706	〃	II-4区 V層D3	弥生土器	甕				7.6	平底。外面刷毛後ナデ。底面付近に指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい橙色	前期末
707	101	II-4区 II層	陶胎染付肥前系		12.0				外面に九文に草花文。見込に刷毛目で施文。	やや粗い	明緑灰色	灰色	18世紀
708	〃	II-4区 II層	肥前陶器	鉢				10.3	高台は断面逆台形で削り出し高台。		にぶい橙色	にぶい橙色	17~18世紀前半
709	〃	II-4区 IV層	土師器	小皿	7.6	1.5		5.6	口唇は丸く収める。ロクロ目。底部回転糸切り痕。	精選された胎土	浅黄橙色	浅黄橙色	中世
710	〃	II-4区 IV層	瓦質土器	三足釜					三足釜の脚部。全面に指頭圧痕。		灰色	灰色	13世紀
711	〃	II-4区 IV層	須恵器	鉢	20.8				口唇内面肥厚。横方向のナデで仕上げる。	細砂粒を含む	灰色	灰色	
712	〃	II-4区 IV層	瓦質土器	鍋	30.0				外面刷毛後ナデ。		灰色	灰色	13~14世紀
713	〃	II-4区 IV層	土師器	小皿					口縁はわずかに外反、丸く収める。底部回転糸切り痕。	細砂粒を含む	赤橙色	赤橙色	中世
714	〃	II-4区 IV層	須恵器	杯					ヨコナデ。	細砂粒を含む	灰色	灰色	
715	〃	II-4区 IV層	土師器	羽釜					口縁は若干内傾。断面三角形の鋤貼付。		灰色	灰色	中世
716	〃	II-4区 IV層	伊万里	紅皿					内面全面施釉。外面下半露胎。	白色で精緻	白色	白色	近世
717	〃	II-4区 IV層	土鍾						土師質の上鍾で円筒形をなす。口径5mm。約3分の1が欠損。		赤褐色	赤褐色	中世?
718	〃	II-4区 IV層	土鍾						土師質の上鍾で紡錘形をなす。口径7mm。		橙色	橙色	中世?
724	105	II-5区 SD25	土師器	杯	15.5	4.1		8.0	体部は直線的に立ち上がり、丸く収める口唇にいたる。ロクロ目。		浅黄橙色	浅黄橙色	13世紀
725	〃	II-5区 P-26	土師器	鍋	20.0				外面にタタキ目、内外面に指頭圧痕残る。口縁下頸部で一旦屈曲する。	チャート砂粒多し	浅黄橙色	浅黄橙色	中世
726	〃	II-5区 P-8	瓦器	碗					内面ヘラミガキ、外面指頭圧痕。口唇丸く収める。和泉型瓦器碗。	やや粗い	褐灰色	褐灰色	13世紀
727	〃	II-5区 P-8	土師器	杯					摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒少量	浅黄橙色	浅黄橙色	
728	〃	II-5区 P-5	東播系須恵器	コネ鉢					口縁端部が上方に拡張される。口縁下縁は肥厚する。内外面ヨコナデ。	細砂粒	灰色	灰色	12C末~13C初
729	〃	II-5区 P-15	土師器	小皿					口唇は丸みを帯びて肥厚。底部回転糸切り痕。ナデで仕上げる。	精選された胎土	灰白色	灰白色	
730	〃	II-5区 SK-9	土師器	杯					平底。	チャート砂粒やや多し	浅黄色	黒褐色	
731	〃	II-5区 SX-1	東播系須恵器	コネ鉢					口縁は肥厚して平縁状を呈す。口唇は強いヨコナデにより弱い凹状を呈す。	細砂粒	灰色	灰色	12C末~13C初
732	〃	II-5区 SX-1	瓦質土器	溜鉢					口唇は強いヨコナデによりわずかに凹状を呈する面をなす。外面口縁下に1条の沈線を巡らせ、内面に4条一単位の子線を有する。内外面ナデで仕上げ、外面に指頭圧痕が残る。		灰色	灰色	14世紀
733	〃	TR-7	常滑	甕					口縁は強いヨコナデにより、N字状を呈する。		灰色	にぶい褐色	14世紀
736	108	III-2区 TR4	土師器	皿					底部へら切り。ヨコナデ。		浅黄橙色	浅黄橙色	古代
737	〃	TR5	土師器	皿					ヨコナデ。底部へら切り。		淡橙色	灰色	古代
738	〃	TR5	須恵器	杯					ヨコナデ。		灰色	灰色	
739	〃	TR5	土師器	杯				6.8	わずかに上げ底気味。ロクロ目。底部回転糸切り痕。	チャート砂粒少量	浅黄橙色	浅黄橙色	
740	〃	TR5	土師器	杯					口唇は丸く収める。強いヨコナデで仕上げる。	精選された胎土	橙色	橙色	
741	〃	TR5	陶器	受付灯明皿					外面のみ施釉。	やや粗い	浅黄橙色	灰白色	

Tab. 25 遺物観察表（弥生時代以降）(10)

図版番号	挿図番号	出土地点	種別	器種	法 量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色 調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
742	108	TR5	陶器	小碗							淡黄色	淡黄色	
743	〃	Ⅲ-2区 SK12	瓦	平瓦				高台、畳付も含めて全面に施軸する。表面に細かい貫入が入る。	精選されている	灰白色	灰白色	古代	
744	〃	Ⅲ-2区 SK12	瓦	丸瓦				凹面には布目圧痕が残るが、磨滅し残りは少ない。凸面には全面に縄タタキが観察される。	精選されている	灰白色	灰白色	古代	
745	〃	Ⅲ-2区 SK12	土師器	碗				凹面には布目圧痕が全面にはっきりと残る。凸面は磨滅しており、縄タタキの痕跡がわずかに観察されるのみ。	精選されている	灰白色	灰白色	11世紀後半-12世紀?	
746	〃	Ⅲ-2区 SK12	須恵器	碗	15.2	5.4	7.0	輪高台の碗で、回転糸切り底。焼成軟質。	精選されている	灰白色	灰白色	11世紀後半	
747	〃	Ⅲ-2区 SK12	須恵器				5.2	摩耗顕著、調整不明。軟質。	精選されている	灰白色	灰白色	11世紀後半	
748	〃	Ⅲ-2区 SK12	橋梁型瓦器	碗	15.0	5.3	7.0	橋梁型瓦器Ⅰ期。口縁部内面に一条の沈線を巡らせる。内外面ヘラミガキ。	精選されており、雲母を含む。	黒色	黒色	高知県では初めての確認例。	
749	109	Ⅲ-2区 SK11	土師器	羽釜	23.4			根津C型の羽釜で、口縁下に断面方形の鈎がつく。外面刷毛目、指頭圧痕。11号は強いヨコナデで仕上げ、水平面をなす。	チャート砂粒を多く含む。雲母角閃石含有。	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	10-11世紀	
750	〃	Ⅲ-2区 TR-1	土師器	杯			6.8	ヨコナデ。底部ヘラ切り。	細砂粒含む	淡黄色	浅黄褐色	古代	
751	〃	Ⅲ-2区 C6No.2	須恵器	皿	15.6	1.8	13.2	口縁はわずかに端反、ナデで仕上げる。	細砂粒含む	灰色	灰色	古代	
752	〃	Ⅲ-2区 SR-1	土師器	小皿	6.8	1.9	4.4	ロク口目。	細砂粒含む	灰白色	橙色		
753	〃	Ⅲ-2区 TR-1	土師器	杯			7.8	底面中央に10mmの穿孔あり。摩耗顕著、調整不明。	細砂粒含む	橙色	橙色		
754	〃	Ⅲ-2区 SR-1	弥生土器	甕			7.4	平底の底部。摩耗顕著。外面にわずかに刷毛目が残る。	細砂粒含む	浅黄褐色	浅黄褐色		
755	〃	Ⅲ-2区 D-6	土師器	小皿	8.6		6.0	摩耗顕著、調整不明。	細砂粒含む	灰白色	灰白色		
756	〃	Ⅲ-2区 TR-1	土師器	小皿	10.2		7.0	摩耗顕著、調整不明。	細砂粒含む	浅黄褐色	浅黄褐色		
757	〃	Ⅲ-2区	弥生土器	甕	14.6			口縁はくの字状に強く屈曲し大きく外反、口唇は横方向の強いナデにより上下に拡張し3条の凹線を施す。外面刷毛後ナデ。	チャート砂粒	浅黄褐色	浅黄褐色	後期初頭。出土地点不明	
758	〃	Ⅲ-2区	弥生土器	甕	14.0			口縁はくの字状に強く屈曲。横方向の強いナデにより仕上げる。	チャート砂粒	淡赤褐色	淡赤褐色	後期初頭。出土地点不明	
759	〃	Ⅲ-2区	弥生土器	甕	15.6			口縁はくの字状に強く屈曲。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	にぶい赤褐色	浅黄褐色	後期初頭。出土地点不明	
760	〃	Ⅲ-2区	弥生土器	壺	15.2			口縁は大きく開く。	チャート砂粒やや多し	浅黄褐色	浅黄褐色	後期初頭。出土地点不明	
761	〃	Ⅲ-2区	土師器	鍋	22.0			肩部に鐮状の突起を有する。口縁は内傾し、口唇は強いヨコナデによりわずかに凹状を呈する。		浅黄褐色	にぶい褐色	出土地点不明	
762	〃	Ⅲ-2区 D-6	弥生土器	甕				ヘラ描線の下に羽状に刺突による列点文を施す。刷毛調整。	チャート砂粒	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	後期末。	
763	〃	Ⅲ-2区 D-6	弥生土器	甕	16.4			口縁はくの字状に屈曲する。口縁下端若上肥厚。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	後期末	
764	110	Ⅲ-2区 SD28	弥生土器	甕	20.0			口縁はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	後期末	
765	〃	Ⅲ-2区 SD28	弥生土器	甕	16.2			口縁はくの字状に屈曲。内面刷毛調整、外面タタキ後刷毛。口縁内外面に指頭圧痕。	チャート砂粒	灰白色	灰白色	後期末	
766	〃	Ⅲ-2区 SD28	弥生土器	甕	12.8			口縁はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒	浅黄褐色	褐色	後期末	
767	〃	Ⅲ-2区 SD28	弥生土器	甕	18.0			口縁はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄褐色	浅黄褐色	後期末	
768	〃	Ⅲ-2区 SD28	弥生土器	鉢	14.4			丸底の底部から体部は内湾して立ち上がり、口唇は丸く収める。内面刷毛目、外面タタキ目。	チャート砂粒	浅黄褐色	淡黄色	後期末	
769	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	14.0			口縁はくの字状に屈曲し内傾面をなす口唇に至る。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	にぶい褐色	にぶい褐色	後期末	
770	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	16.6			ラッパ状に大きく開く口縁。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	褐色	褐色	後期末	

Tab. 26 遺物観察表（弥生時代以降）(1)

図版 番号	挿図 番号	出土地 点層位	種別	器種	法 量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色 調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
771	110	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	14.4				球形の胴部から、口縁はくの字状に強く屈曲し内傾面をなす口唇に至る。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
772	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	18.0				2重口縁の壺。摩耗顕著だが、内外面に指頭圧痕観察される。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期末
773	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	14.2				2重口縁の壺。摩耗顕著。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	橙色	後期末
774	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	13.1				2重口縁の壺。上胴部から鋭く立ち上がり、口縁が逆くの字状に内傾する。外面に水平方向のタタキ。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒やや多し	にぶい褐色	にぶい褐色	後期末
775	111	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	19.2		27.6		球形の胴部から口縁はくの字状に屈曲し、強いヨコナデによりわずかに凹状を呈する口唇に至る。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒やや多し	黄灰色	浅黄橙色	後期末
776	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	16.0	35.0	28.0	9.0	卵形の胴部から口縁はくの字状に強く屈曲し短く立ち上がり内傾面をなす口唇に至る。	チャート砂粒やや多し	浅黄橙色	淡橙色	後期末
777	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	13.6	47.5	31.4	8.5	2重口縁の壺。卵形の胴部から口縁はくの字状に強く屈曲した後逆くの字状に屈曲し内傾して立ち上がる。丸底。内面に指頭圧痕。外面は口縁に縦方向の刷毛目、底部付近に指頭圧痕が残る以外は、全面に水平方向及び右上がりのタタキが観察される。	チャート砂粒やや多し	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
778	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	壺	16.4	32.5	24.4	4.0	卵形の胴部からくの字状に後をなして強く屈曲、大きく開いて内傾面をなす口唇に至る。内面指頭圧痕が全面に残り、刷毛目は胴部下半に集中。外面水平方向のタタキの後刷毛調整。	チャート砂粒やや多し	灰白色	橙色	後期末
779	112	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	16.4				口縁部はくの字状に屈曲。摩耗顕著、調整不明瞭。外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄色	浅黄橙色	後期末
780	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	16.8				口縁部はくの字状に屈曲した後大きく外反。口縁下端肥厚。内面指頭圧痕、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
781	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.0				口縁部はくの字状に屈曲した後大きく外反。摩耗顕著、内面調整不明。外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
782	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.4				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
783	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	15.0				口縁部はくの字状に屈曲。摩耗顕著、調整不明瞭。	チャート砂粒	にぶい 橙色	にぶい 橙色	後期末
784	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	16.6				口縁部はくの字状に屈曲。内面指頭圧痕、外面タタキ。摩耗顕著、調整不明瞭。	チャート砂粒	浅黄橙色	橙色	後期末
785	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.0				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
786	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	15.4				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
787	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.0				口縁部はくの字状に屈曲。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	橙色	灰白色	後期末
788	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	13.0				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	橙色	後期末
789	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	15.0				口縁部はくの字状に屈曲。内面摩耗顕著、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい 黄橙色	にぶい 黄橙色	後期末
790	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.0		17.2		口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	淡橙色	後期末
791	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	13.2				口縁部はくの字状に屈曲。摩耗顕著で外面にタタキが観察されるのみ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
792	113	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	16.0				口縁部はくの字状に屈曲。口唇外面若干肥厚。内面摩耗顕著、外面タタキ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
793	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.8				口縁部はくの字状に屈曲。口唇外面若干肥厚。内面刷毛後ナデ、外面タタキ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
794	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	14.4				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい 橙色	淡橙色	後期末
795	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	16.0				口縁部は緩やかにくの字状に屈曲。内面摩耗顕著、調整不明。外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	にぶい 褐色	にぶい 褐色	後期末
796	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	15.2				口縁部はくの字状に屈曲。摩耗顕著。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい 褐色	後期末
797	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	18.6				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	橙色	後期末
798	〃	Ⅲ-2区 SD29	弥生土器	甕	15.0				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	褐色	後期末

Tab. 27 遺物観察表（弥生時代以降）(12)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴（形態・手法等）	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
799	113	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	15.6				卵形の胴部から、口縁は屈曲して外方へ開いて立ち上がる。	チャート砂粒	淡黄色	橙色	後期末
800	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	13.4	19.9	14.1	6.0	口縁部叩き出し成形により、くの字状を呈す。内面頸部下に刷毛目が残るが縦方向のユビナデにより刷毛の痕跡を消し仕上げる。外面底面付近は右下がり、それより上は水平～右上がりのタタキ。底面中央に半径8mmの半円形の穿孔が認められる。	チャート砂粒	浅黄橙色	橙色	後期末
801	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	14.2				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	淡黄色	浅黄橙色	後期末
802	114	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	12.2				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄色	橙色	後期末
803	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	12.4				口縁部はくの字状に屈曲。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
804	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	14.4		19.4		口縁部はくの字状に屈曲する。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	にぶい橙色	にぶい橙色	後期末
805	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	14.4		23.4		口縁部はくの字状に屈曲する。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	橙色	後期末
806	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	16.4				口縁部はくの字状に屈曲する。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	にぶい橙色	後期末
807	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	15.8				口縁部はくの字状に屈曲する。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰色	浅黄橙色	後期末
808	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	11.9				口縁部は緩やかに外反。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	黄橙色	後期末
809	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	13.2				口縁部は緩やかにくの字状に屈曲する。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	淡黄色	淡黄色	後期末
810	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕	15.2				口縁部は緩やかにくの字状に屈曲する。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
811	115	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	鉢	10.8				口縁は直立し、外面にタタキ、内外面に指頭圧痕。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
812	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	鉢	19.7	12.1		6.4	口縁は稜をなしてわずかに外反する。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。内面稜の下と外面底面付近に指頭圧痕が残る。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
813	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	鉢	20.3	12.5		3.2	底部は丸みを帯びて突出する。内面刷毛、外面タタキ。	チャート砂粒	淡橙色	淡橙色	後期末
814	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	鉢	13.7	7.5		3.5	丸底の底部から内湾気味に立ち上がる。内面ナデ、外面タタキ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
815	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	鉢	18.7	8.1		3.6	丸底の底部から内湾気味に立ち上がる。内面ナデ、外面タタキ。	チャート砂粒	淡橙色	淡橙色	後期末
816	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	高杯	17.2				高杯の杯部。一旦屈曲した後、大きく開いて口唇に至る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	褐色	後期初頭
817	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				6.6	内面に指頭圧痕がわずかに残る。平底。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期初頭
818	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				4.6	平底。内面ナデ、外面刷毛。	チャート砂粒	にぶい橙色	黒褐色	後期初頭
819	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				8.0	平底。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期初頭
820	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				5.0	底面にタタキ目が残る。内面刷毛後ナデ、外面刷毛。	チャート砂粒	灰色	灰白色	後期末
821	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				3.8	わずかに平底が残る。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	灰色	橙色	後期末
822	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				5.0	平底。内面ナデ、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	灰色	灰白色	後期末
823	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				3.0	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面ナデ、外面刷毛。	チャート砂粒	灰白色	浅黄橙色	後期末
824	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				2.0	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面調整不明、外面タタキ後刷毛、底面にタタキ目残る。	チャート砂粒	灰色	にぶい黄褐色	後期末
825	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺			29.8	5.0	わずかに平底が残る。球形の胴部に続く。内面摩耗顕著だが刷毛観察される。外面タタキ後刷毛、指頭圧痕残る。	チャート砂粒やや多し	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
826	116	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				3.6	平底。内面刷毛、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒やや多し	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
827	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	壺				5.0	平底。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	灰白色	浅黄橙色	後期末
828	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				2.0	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面調整不明、外面にタタキ目残る。	チャート砂粒やや多し	灰白色	淡橙色	後期末
829	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				1.8	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面刷毛調整、外面タタキ後刷毛、底面にタタキ目残る。	チャート砂粒やや多し	灰白色	淡橙色	後期末

Tab. 28 遺物観察表（弥生時代以降）(13)

図版番号	挿図番号	出土地点層位	種別	器種	法量 cm				特徴(形態・手法等)	胎土	色調		備考
					口径	器高	胴径	底径			内面	外面	
830	116	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				3.4	平底。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒やや多し	灰色	浅黄橙色	後期末
831	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				5.6	平底。内面ナデ、外面タタキ。	チャート砂粒やや多し	灰白色	黄灰色	後期末
832	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				1.4	尖底。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒やや多し	黒色	浅黄橙色	後期末
833	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				2.4	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	灰色	浅黄橙色	後期末
834	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				6.0	平底。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	灰白色	浅黄橙色	後期末
835	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				3.6	平底の底部から卵形の胴部へ続く。内面刷毛後ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	後期末
836	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				1.0	丸みを帯びた尖底。内面指頭圧痕、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒少量	にぶい黄橙色	浅黄橙色	後期末
837	〃	Ⅲ-2区SD29	弥生土器	甕				3.8	丸みを帯びた平底。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。底面にタタキ目あり。	チャート砂粒少量	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末
838	118	Ⅲ-4区TR-3	弥生土器	甕				2.0	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面に指頭圧痕、外面にタタキ目残る。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
839	〃	Ⅲ-4区TR-3	弥生土器	鉢	12.0	8.6		2.4	丸底から内湾して立ち上がる。口径は丸く収める。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期末～古墳初頭
840	〃	Ⅲ-4区TR-2	土師器	皿	19.0	2.3		15.4	口縁部内面に一条の沈線。内外面ナデ。	精選された胎土	橙色	橙色	9世紀中葉か
841	〃	Ⅲ-4区TR-2	土師器	皿	18.2	1.4		14.0	口縁は雄反で、内面に一条の沈線を巡らせる。	精選された胎土	浅黄橙色	浅黄橙色	9世紀前半
842	〃	Ⅲ-4区表探	弥生土器	甕	12.0		14.0		卵形の胴部から、口縁はくの字状に屈曲し口唇に至る。口径は外面が肥厚する。内面刷毛、外面タタキ後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
843	〃	Ⅲ-4区表探	弥生土器	壺				6.0	平底。内面刷毛後ナデ。	チャート砂粒やや多し	灰色	黄灰色	後期末
844	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕	18.4				口縁は緩やかにくの字状に屈曲し、口径は丸く収める。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期末～古墳初頭
845	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕	14.0				口縁は緩やかにくの字状に屈曲し、口径は丸く収める。内面ナデ、外面タタキ後刷毛。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
846	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	鉢	18.8	8.2		1.0	丸底。体部は内湾して立ち上がり、内面をなす口径に至る。	チャート砂粒	淡橙色	灰白色	後期末～古墳初頭
847	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	台付鉢	14.2				脚部は欠ける。杯部は内湾して立ち上がり、丸く収める口径に至る。内面刷毛、外面タタキ後刷毛後ナデ。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
848	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	鉢	16.0				体部は内湾して立ち上がる。摩耗顕著、調整不明。外面にわずかにタタキ残る。	チャート砂粒	橙色	橙色	後期末～古墳初頭
849	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	鉢	18.2	7.4		3.0	丸底。体部は内湾して立ち上がり口径は丸く収める。内面刷毛後ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒	灰色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
850	119	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	鉢	10.0	5.4		2.0	丸底。体部は内湾して立ち上がり口径は丸く収める。内面刷毛、外面タタキ目をナデで消す。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
851	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	壺				3.2	丸みを帯びた平底。体部は内湾して立ち上がる。外面に刷毛、指頭圧痕残るが、摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	淡橙色	淡橙色	後期末～古墳初頭
852	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	壺				4.0	平底。体部は内湾して立ち上がる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	淡黄色	橙色	後期末～古墳初頭
853	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	壺				8.0	平底。体部はわずかにくびれた後外上方へ直線的に立ち上がる。外面刷毛、指頭圧痕。	チャート砂粒	灰色	淡黄色	後期
854	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕・鉢				3.6	突出した平底。内湾して立ち上がる。摩耗顕著、調整不明。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
855	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕・鉢				4.0	平底。内湾して立ち上がる。内面ナデ、外面タタキ目。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
856	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕・鉢				2.6	わずかに平底が残る。体部は内湾気味に立ち上がる。内面に指頭圧痕、外面にタタキ目残る。	チャート砂粒	灰色	淡赤橙色	後期末～古墳初頭
857	〃	Ⅲ-4区SR-9	弥生土器	甕・鉢				5.0	突出した平底。タタキ目。	チャート砂粒	浅黄橙色	浅黄橙色	後期末～古墳初頭
858	〃	Ⅲ-4区IV層	土師器	台付皿	9.1	9.2		15.6	裾部は反外気味に下方へ大きく開く。ヨコナデ。	精選された胎土	浅黄橙色	浅黄橙色	古代

Tab. 29 遺物観察表(弥生時代以降)石器

図版 番号	挿図 番号	出土地点・層位	器種	全長 cm	全幅 cm	全厚 cm	重量 g	石質	調整・特徴
438	63	I-1区 IV層	石槍	12.6	3.0	1.0	50	サヌカイト	弥生時代の石槍。中期末-後期初頭。全周にわたって、表裏両面を加工し、両側縁から先端部にかけて刃部を作出する。
439	〃	I-1区 SR-2	砥石	4.5	3.0	1.0	35	砂岩	背面と側面に擦痕あり。
440	〃	I-1区 SR-2	砥石	5.0	5.4	2.1	90	砂岩	背面と側面に擦痕あり。
473	67	TR-16	叩き石	15.5	5.2	5.0	530	砂岩	棒状の叩き石。表裏面側面稜端部に敲打痕あり。
474	〃	TR-16	叩き石	14.2	4.7	2.5	325	砂岩	扁平な棒状の叩き石。表裏面側面稜端部に敲打痕あり。
475	〃	TR-16	台石	19.2	14.4	6.1	2200	砂岩	表裏面に敲打痕あり。凹状に窪む。
476	〃	TR-16	叩き石	11.2	9.3	5.3	630	砂岩	表面と側縁端部に敲打痕。端部は片方が欠損。
477	〃	TR-16	叩き石	7.6	4.9	3.1	150	砂岩	表面と側縁端部に敲打痕。端部は片方が欠損。裏面に擦痕。
478	〃	TR-16	叩き石	10.2	6.1	5.3	435	砂岩	表裏面と側縁端部に敲打痕。端部は片方が欠損。
484	69	I-3区 SD-8	砥石	9.3	5.3	2.2	218	砂岩	表裏面に擦痕あり。
489	70	I-3区 III層	砥石	7.8	3.8	3.5	900	砂岩	表裏面に擦痕あり。
490	〃	I-3区 III層	硯	6.1	3.2	0.8	32	粘板岩	硯面の中央部は凹状に窪む。
493	74	I-4区 P-3	叩き石	14.3	5.0	3.5	530	砂岩	やや扁平な棒状叩き石。側縁と両端部に敲打痕あり。
584	81	II-1区 SR3	叩き石	11.8	4.7	2.7	278	砂岩	角礫利用の棒状叩き石。端部と側縁に敲打痕。
585	〃	II-1区 SR3	叩き石	6.2	7.5	2.7	280	砂岩	表裏面と側縁端部に敲打痕。
586	82	II-1区 SR3	石槍	12.3	4.2	1.6	145		両側縁を鋭く研ぎ出し、表裏面ともに中央に2本の稜をなす。先端部は折損。弥生時代の磨製石槍の基部。
587	〃	II-1区 SR3	砥石	7.5	6.5	4.1	385	砂岩	表裏面、側縁に擦痕あり。
588	〃	II-1区 SR3	石包丁	8.0	4.3	0.6	35	緑泥片岩	両側縁は左右から粗く加工し刃部を作出する。
589	〃	II-1区 SR3	叩き石	8.7	8.4	7.2	720	砂岩	楕円形の叩き石。端部、表面に敲打痕あり。
590	〃	II-1区 SR3	凹石	15.3	17.0	3.6	1525	砂岩	表裏面、側縁に敲打痕あり。
602	84	II-2区 SD15	叩き石	6.0	7.8	1.7	163	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。表面側縁に敲打痕。
659	92	II-3区 SD18	叩き石	13.5	3.8	2.0	165	砂岩	側縁に敲打痕あり。
660	〃	II-3区 SD18	砥石	6.2	5.0	5.8	320	砂岩	表面側縁に擦痕あり。
661	〃	II-3区 SD18	砥石	9.0	7.8	2.8	285	砂岩	表面側縁に擦痕あり。
662	〃	II-3区 SD18	叩き石	11.3	6.3	6.0	630	砂岩	円礫を利用した叩き石。端部に敲打痕あり。
663	〃	II-3区 SD18	叩き石	10.6	8.6	3.8	500	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。表面に擦痕、側縁に敲打痕。
664	〃	II-3区 IV層	叩き石	9.5	6.5	3.4	300	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。側縁に敲打痕。
665	〃	TR-11 (SD18)	叩き石	13.0	11.3	4.5	1440	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。表面側縁に敲打痕。
719	101	II-4区	石鏃	1.9	1.5	0.3	1	サヌカイト	凹基で刃部はわずかに弧状を呈する。
720	〃	II-4区 SD22	叩き石	5.8	5.7	2.5	94	砂岩	側縁に敲打痕あり。
721	〃	II-4区	叩き石	14.3	5.5	3.9	430	砂岩	側縁に敲打痕あり。
722	〃	II-4区 III層	砥石	6.1	4.6	2.3	130	砂岩	表裏面側縁に擦痕あり。
723	〃	II-4区 III層	砥石	6.5	5.7	2.0	148	砂岩	表裏面側縁に擦痕あり。
734	105	II-5区 P-29	叩き石	10.4	8.8	2.8	378	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。側縁に敲打痕。
735	〃	II-5区 P-14	叩き石	10.8	8.7	2.1	325	砂岩	扁平な円礫を利用した叩き石。側縁に敲打痕。

第V章 考 察

第1節 栄工田遺跡出土の縄文後期土器について

出土層位による分類は、困難であったため形態・施文技法など土器自体の持つ特徴から有文土器を1～8類に分類した。また、多くの後期土器が晩期土器と混在する状況で出土したこともあり、粗製深鉢については、後晩期を通しての形態上の分類とし、明らかに後期と認定できるJ-V層出土の「丁寧なナデあるいは磨きにより仕上げる」深鉢についてのみ縄文後期に属する深鉢としたが、後期の中における正確な所属時期は特定できない。縄文後期に属する土器で時期の特定可能なもの(1～8類)は、後期初頭の中津式土器の段階に相当するものから、後期後半の伊吹町式に至るまで存在することが確認された。

分類基準については遺物の項に示したとおりである。

1類土器は、後期初頭に位置付けられる土器で、遺物出土最下層であるJ-VIII層出土土器(1類e)については、中津式土器の古段階として把握できる。^{1), 2), 3)}20～27などJ-VIII層出土遺物には条痕地に、中期末以来の伝統である幅広で裏面も若干盛り上がるほどの深い沈線を持ち、沈線脇の土手を残すものが多い。22・23など明らかに中津式土器の特徴を持ち合わせており、20・21のような条痕地に沈線による山形文(波状文)を施すという中津式土器の中には見られないモチーフを持つものもあるが、22・23との胎土の類似・出土層位・条痕地に沈線という施文方法などからも、同じ中津式土器の範疇で捉えることができよう。

なお、1類として分類した中には、8・11など中津式というよりも、後続する後期前半の特徴を持つと考えられる土器群も含まれているが、これらの土器が後期初頭の特徴を有する(中津式併行)という指摘もあった。筆者の力量では正確な判断を下すことができず、ここではあえて1類として、後期初頭の土器群としてまとめて提示することにする。(1類とした中に後期前半に属する土器が含まれる場合、1類は後期初頭から前半の土器群となる。)

2類土器は磨消縄文を持つ土器の中で、後期前半に属するものをまとめた。いずれも小片であるが、中津式から宿毛式⁴⁾への移行期、宿毛式の古相に相当すると考えられる。

3類土器は後期前半彦崎K-1式土器に相当する。南四国中央部では彦崎K-1式土器の出土は、ほとんど知られていない。栄工田遺跡の1982年度調査時に、彦崎K-1式土器の出土が報告されているが、⁵⁾実測図による報告はなく、図示された資料が確認可能なものは松ノ木遺跡2次調査時の1点のみである。⁶⁾内面を肥厚させ、内面に施文する3類a・bと内外面に縄文施文のみられる3類cがある。

4類土器は、後期中葉の九州系土器として分類した。鐘ヶ崎系の土器で、磨消縄文の確認できる小片(4類a)と沈線文をもつ鉢(4類b)、口縁が屈曲する鉢(4類c)が確認されている。

5類土器は、後期中葉の彦崎K-2式土器である。⁷⁾口唇を肥厚させ縄文帯を持つ5類aと内面に沈線を持つ5類bが確認された。

6類土器は、後期中葉の片粕式土器⁸⁾に相当する。口縁外面に縄文帯を持ち、頸部無文で胴部に縄文を施文する6類aと弱い波状口縁を呈する口縁部を肥厚させ縄文を施文する6類b1と平縁で

口縁部を肥厚させ縄文を施文する6類b2、数は少ないが磨消縄文を持つ6類c・d、沈線文のある6類e・f、縄文地に沈線で施文する6類hなど縄文後期と特定できる実測遺物138点中片粕式土器(6類)は64点と半分近くを占める。片粕式の縄文原体について木村剛朗氏は、後期初頭以来一貫してRLであった縄文の撚りが、片粕式の段階に至りLRが出現、西分増井遺跡ではRL:LR=5:4、西部ではLR優勢になると述べている。⁹⁾ 栄エ田遺跡の片粕式土器もLRが一定量を占め、同様の傾向が認められるが、その割合はRL:LR=3:1と西分増井遺跡や県西部の例と較べるとLRの占める割合が低い。6類bの中で101はRLとLRが同一個体の中に共在し(外面RL・内面LR)、西分増井遺跡出土の縄文地土器深鉢I類(91・93他)に酷似している。¹⁰⁾

7類土器は、後期中葉の元住吉山I式土器に相当する。凹線を持ち、凹線間の段部にヘラ状原体による刻目を有する。南四国では、西分増井遺跡に出土例が報告されている。

8類土器は、後期後半の伊吹町式土器に相当する。伊吹町式土器は愛媛県宇和島市伊吹町遺跡出土遺物により型式設定された土器だが、最近(1993年)、高知県西部の中村市船戸遺跡の調査でまとまって出土、同遺跡は伊吹町式土器を最も多く出土する遺跡となった。¹¹⁾ 従来伊吹町式は県西部を東限とし、特に高知平野周辺では、後期後半の土器は出土例がなく、空白となっていた。確認できた土器は1点だけだが、伊吹町式土器の東限となった。

以上の1～8類土器の分類により、当遺跡の縄文後期は後期初頭の中津式土器の段階から後半の伊吹町式土器の段階まで存在することが判明した。高知平野の縄文後期については、出原恵三によって現段階での全体像がまとめられている。¹²⁾ その中で、高知平野周辺の縄文後期遺跡は、資料の多少はあるものの前半の宿毛式の段階から中葉の元住吉山I式の段階までの土器が確認されており、後期初頭と後期後半の資料は未確認であること。後期前葉の宿毛式が高知平野にも広がっており、その広がりを受けた形で成立した松ノ木式土器の段階こそが生業の変化を含めた後期土器の一大画期であること。中葉になって九州系の土器が多くなり、瀬戸内よりも九州の影響が強まるものの、片粕式土器の段階になると瀬戸内の要素が土器に認められるようになり、東と西の要素が混在する状況が生み出されること。そして中葉から後半にかけて元住吉山I式以降、九州など西部の影響は弱まり瀬戸内の影響が卓越してくることなど、南四国中央部の縄文後期の全体像が論じられている。

今回の調査の縄文後期資料は、後期中葉の九州系の土器の存在、片粕式土器の比較的まとまった出土など出原論を補完する資料となった。

従来、高知平野で確認されていなかった土器型式(初頭・中津式、後半・伊吹町式)が確認されたことと、松ノ木式などいくつかの時期に空白はあるものの、後期初頭から後半に至る長期の土器型式が200m²足らずの調査地点から検出されたことが、栄エ田遺跡の今回の調査の成果である。

後期初頭の中津式は、高知平野中央部の後期の空白を埋める資料となった。少量ながら、九州の西平式土器に対応する伊吹町式土器が出土したことで、出原論とは異なるが後期後半にも四国西部・九州の影響が一定量残ることが予想される。ただし、当然のことながら出土したわずかな資料のみで全体を推し測ることはできない。今後の資料の増加を待ちたい。

何型式にもわたる土器が検出され、片粕式土器の出土割合が高い状況は、春野町西分増井遺跡と

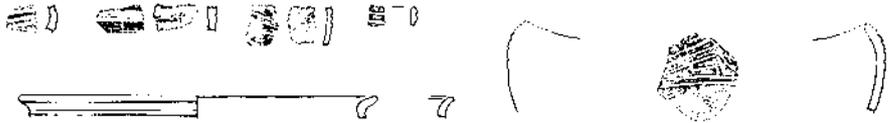
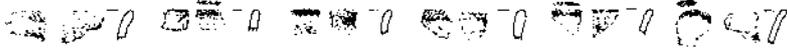
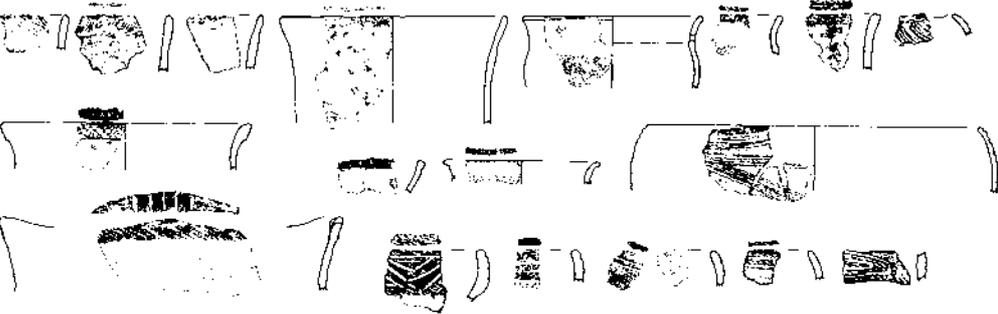
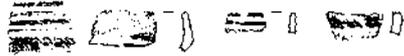
分類	深鉢・鉢
1類	
2類	
3類	
4類	
5類	
6類	
7類	
8類	

Fig. 120 栄工田遺跡出土の縄文後期土器 (1~8類)(S=1/8)

類似している。遺物は尾根先端の舌状に延びる微高地に接する自然流路（SR-1）の河岸に形成された包含層・流路からの出土で、長期にわたる継続的な生活は、続く縄文晩期にも認められる。

なお、今次調査で確認された中津式土器は従来高知平野では未検出だったが、1992年、物部川河岸段丘上の香美郡土佐山田町林田シタノヂ遺跡から土壙出土の良好な一括資料として平式併行あるいは中津式の古段階に相当する深鉢が確認されている。また同年の調査として、高知市柳田遺跡からは低湿地の包含層中から、中津式新段階の磨消縄文を持つ深鉢が出土しており、栄工田遺跡J-VIII層出土土器は、これらの遺跡に次ぐ資料となった。中津式古段階の資料としては、高知平野で初めての検出例となる。

第2節 栄工田遺跡出土の縄文晩期土器について

縄文晩期の時期の特定できた実測遺物は浅鉢59点、深鉢20点、さらに時期は特定できないものの口唇に貝殻腹縁による刻目を持つ土器21点も縄文晩期に属する遺物だと考えられる。実測遺物の比率から、小片も含めた出土晩期土器は約2,000点のと推定される。包含層中から後期土器と混在した状態で出土した土器を所属時期を基準に浅鉢1～5類、深鉢1・2類に分類した。今次調査において出土した晩期土器は、I～Vの5つの時期に分けることができた。高知平野周辺においては、晩期土器の出土が極めて少なく、類例を求めることができなかつたため、瀬戸内・畿内など編年の確立した地域と比較することで、時期の特定作業を行った。¹⁵⁾

I期（晩期前半）……浅鉢1類がI期に相当する。晩期前半新段階で、黒土BI・滋賀里III a併行期である。大きく開いた体部から、強く屈曲して上方へ立ち上がる口縁に至る浅鉢で、外面に沈線を持つ浅鉢1類a・bと内面に沈線を持つ浅鉢1類cがある。この時期の土器は高知平野では未検出である。

II期（晩期中葉古）……浅鉢2類がII期に相当する。晩期中葉古段階の篠原古段階・南溝手土器溜り1・舟津原古段階併行期である。浅鉢1類が口縁が強く屈曲し上方に立ち上がる形態を持ち、沈線を施すのに対し、浅鉢2類になると、2類cのように内面あるいは外面の沈線のみを残すが、口縁は大きく開いたままで口唇に至り、1類の「強い屈曲・上方への立ち上がり」が認められなくなる。また口縁下で屈曲するものも、2類a・bのような屈曲後さらに大きく開いて口唇に至るタイプも確認された。

III期（晩期中葉中）……浅鉢3類がIII期に相当する。晩期中葉中段階の篠原中段階・南溝手河道2・舟津原新段階併行期である。3類aは2段に屈曲した後大きく開いて口縁に至る浅鉢だが、II期の2類aと較べ、屈曲が強くなり、口径も大きくなる。161のように口唇内面がわずかに肥厚するものもあるが、口縁が大きく開くタイプの浅鉢（3類a・b）には口縁内面が肥厚するものは、ほとんど認められない。胴部がくの字状に屈曲し、短く立ち上がって肥厚する口縁に至る3類d、屈曲部上に沈線をめぐらせる3類eがある。

IV期（晩期中葉新）……浅鉢4類がIV期に相当する。晩期中葉新段階の篠原新段階・谷尻併行期である。浅鉢4類は、丸みを帯びた胴部から、強く屈曲して短く立ち上がり肥厚する口縁に至る4類aと大きく開く口縁を持つ4類b、2段に強く短く屈曲する4類c、口縁部外面に段部、内面

	浅鉢・壺	深鉢
晩期前半 (新)	<p>浅鉢1類</p>	(不明)
晩期中葉 (古)	<p>浅鉢2類</p>	
晩期中葉 (中)	<p>浅鉢3類</p>	
晩期中葉 (新)	<p>浅鉢4類</p>	<p>深鉢1類</p>
晩期後半 I・II	+	+
晩期後半 III・IV	<p>浅鉢5類</p>	<p>深鉢2類</p>

Fig. 121 栄工田遺跡出土の縄文晩期土器 (S=1/8)

	南四国 (栄エ田)	瀬戸内	近畿	北九州	南四国の主な遺跡
前半 (古)	+				
前半 (新)	I	黒土B1	滋賀里Ⅲa	御領	八反坪遺跡
中葉 (古)	Ⅱ	舟津原古・南溝手 土器溜り1	篠原古	黒川	美良布遺跡 中村貝塚
中葉 (中)	Ⅲ	舟津原新・南溝手 河道2	篠原中	黒川	
中葉 (新)	Ⅳ	谷尻	篠原新	黒川	
後半 (Ⅰ)	+	阿津走出 前池	鬼塚H下層 檀原	春日台 長行	中村貝塚
後半 (Ⅱ)	+	広江浜 南溝手河道1	口酒井	山の寺	
後半 (Ⅲ)	V	津島岡大	福満	夜白Ⅰ	倉岡遺跡・入田遺 跡・柳田遺跡・具 同中山遺跡群・新 土居遺跡・松ノ木 遺跡・林田シタノ ヂ遺跡
後半 (Ⅳ)		百間川沢田	船橋	夜白Ⅱ	

に突帯、口唇に刻目を持つ4類dがある。Ⅲ期の口縁が大きく開く浅鉢（3類a・b）に口縁が肥厚するものはほとんどなかったのに対し、Ⅳ期の4類bは程度の差はあれ、いずれも口縁部内面が肥厚する。

Ⅱ～Ⅳ期（晩期中葉）……また、口縁部に突起部を持つ深鉢を深鉢1類とした。多くが平縁の土器だが、207の波状口縁や204の口唇に刻目を持つ土器も確認された。これらの深鉢は、中葉新段階のⅣ期に多く認められるが、Ⅱ期・Ⅲ期に相当する中葉古・中段階にも認められ、深鉢1類とした突起部のある深鉢は細分せず、晩期中葉に属するものとする。

V期（晩期後半）……浅鉢5類・深鉢2類が相当する。晩期後半の船橋・津島岡大・百間川沢田併行期である。資料が少なく、津島岡大の段階と百間川沢田の段階の細分はできなかった。逆くの字状口縁の浅鉢（5類a）や逆くの字状に段を成して強く屈曲する胴部（5類c・d）、内湾気味に立ち上がるボウル状の浅鉢（5類e）などが確認された。

深鉢2類は刻目突帯を有する深鉢であるが、いずれも小片であり、全体のプロポーシヨンのわかる資料はなかった。2条突帯を持つ資料は確認できず、深鉢2類は1条突帯の深鉢だと考えている。

南四国の縄文晩期土器については、従来出土資料の僅少さゆえに、細かい編年は確立していない。土佐町八反坪遺跡¹⁶⁾（晩期前半）、香北町美良布遺跡¹⁷⁾（晩期中葉）、土佐市倉岡遺跡¹⁸⁾（晩期後半）、本山町松ノ木遺跡¹⁹⁾（後半）、中村市入田遺跡²⁰⁾（後半）、中村市中村貝塚（後半）、土佐山田町林田シタノヂ遺跡²¹⁾（後半）、高知市柳田遺跡²²⁾（後半）、中村市具同中山遺跡群²³⁾（後半）、中村市

有岡遺跡²⁴⁾ (後半)、田村見当遺跡²⁵⁾ (後半) などが縄文晩期の遺跡として挙げられるが、資料の数が少なく細分することは困難であった。高知平野周辺では刻目突帯文土器の有無をメルクマールとして晩期前半・後半といった程度で時期を比定できるのみであった。少ない資料の中でも高知県西部には、中村貝塚・入田遺跡など良好な遺跡が確認されており、中村Ⅰ式→中村Ⅱ式→入田Ⅱ式という深鉢を基準にした晩期後半期の編年が確立されている。2条突帯を持つ西部の入田Ⅱ式土器に対し、高知平野では2条突帯をもつ土器が確認されておらず、現段階で各遺跡から出土するのは1条突帯の刻目突帯文土器のみである。

こういう状況下で、量的に少ないながらも晩期の5時期にわたる土器型式が確認されたことは、高知平野の縄文晩期を考える上で重要である。

栄エ田遺跡では晩期前半 (Ⅰ期)、中葉 (Ⅱ期～Ⅳ期)、後半 (Ⅴ期) に継続して生活が営まれていた。晩期初頭の資料と晩期後半の刻目突帯文土器出現期の資料は欠けるものの、前節で述べた同じ包含層及び流路出土の後期初頭から後半に至る時期の土器ともつながってくる。調査区 (Ⅲ-2区) の北側には遺跡北側の山地から続く丘陵の先端が迫っており、丘陵先端からは微高地が舌状に延びている。この微高地上に何時期かの土器型式の空白は認められるものの後期・晩期を通して縄文集落が展開していたものと考えられる。今後、高知平野の山地と平野の変換点に位置する、このような立地の遺跡から、栄エ田遺跡と同様の縄文時代の長期にわたって継続する集落が検出される可能性がある。

晩期を通じて近畿・瀬戸内の土器、中でも岡山平野など瀬戸内の土器に類似した土器型式が認められた。九州と類似する土器は認められるものの、土器相は異なっており、高知平野の晩期は九州とは異なる土器型式が展開している。遺跡の南東約8kmの地点に、全国でも類を見ないほど弥生前期初頭の村がまとまって調査された田村遺跡群がある。前期初頭に「弥生の村」が忽然と姿を現すはずもなく、当然高知平野の縄文晩期の文化伝統の上に成立した「弥生の村」なのであろうが、従来、それを考えるための手がかりが少なすぎた。栄エ田遺跡の土器により高知平野の晩期縄文人の後ろ姿が、おぼろげながらではあるが見え始めた。

今回の調査で晩期の5時期にわたる土器が出土したことで、今後、高知平野周辺の「小河川に接して、北に丘陵のある微高地」という立地の遺跡から、「晩期前半～後半の栄エ田遺跡Ⅰ期～Ⅴ期に対応する時期」の土器が出土することも予想される。

晩期Ⅰ期～Ⅴ期に分類した土器は包含層資料の型式に頼っての分類である。今回試みたような流路・包含層出土の量的に少ない資料による細かい時期の細分が、どれだけ有効で意味があるかについては十分に考えておかなければならない。少量の資料のため、土器の位置付けに若干の誤りが生じた可能性もある。しかし、土器の分類を通じて、高知平野の晩期の状況の一端を、一定示せたのではないかと考えている。

近い将来、良好な一括資料の出土によって検証されることを期待したい。

第3節 栄工田遺跡の位置付け～調査のまとめ～

今回の調査は、約2万㎡の広さを有する栄工田遺跡の北半を縦断する4m幅のトレンチを開ける形の調査となった。縄文前期にはじまり近世に至るまで、住む地点をかえながら生き抜いてきた先人たちの姿がかいま見える。時代ごとに概観し、調査のまとめとしたい。

1. 縄文時代～長期継続集落と磨製石斧～

第1・2節と縄文土器についての簡単なまとめをしたので、縄文時代については主に石器について述べることにする。先述のように、栄工田遺跡の最古の人類の足跡は縄文前期に遡る。2点だけが、前期初頭の羽鳥下層式が出土している。継続的な集落が形成されたのは、縄文後期初頭の中津式併行期に至ってからであり、それ以後晩期の終わりに至るまで約1,500年もの間この集落は継続する。土器型式の上から欠如する型式がいくつかあるが、後期初頭・前半・中葉・後半・晩期前半・中葉・後半とこれほど長期にわたる土器がほんの200㎡程の空間から検出されるという理由として、2つのケースが想定される。一つは、近くに目印があり縄文人が繰り返し立ち寄るポイントとなっていた可能性、もう一つは、近くで継続的な集落が営まれていた可能性の2点である。栄工田遺跡の場合は後者の集落説が妥当だと考えられる。それを補強するのが今回出土した石器類である。

縄文時代の石器については、松ノ木遺跡1次調査時に他遺跡との石器組成の比較の形でまとめられている。²⁶⁾石器組成が極めて端的に集落の性格を示している。石錘の占める割合が60%以上の松ノ木遺跡(66.7%)、片粕遺跡(77.8%)、三里遺跡(92.3%)、石鏃が72.5%の西分増井遺跡、打製石斧が62.1%を占める田村遺跡とはっきりとした各々の集落の生業の違いを示している。データ比較のため栄工田遺跡の石器組成もこれらの遺跡のデータと器種を同じにして取り出してみると、石鏃6点(17%)、打製石斧1点(3%)、磨製石斧27点(75%)、石皿0点、石錘2点(5%)、打製石包丁0点、となる。36点中27点が磨製石斧で70%を超える高率である。しかも27点中加工用の小型の縦斧は2点のみ、残りの25点が伐採用と見られる蛇紋岩製の横斧である。完形品は1点もなく、その多くが使い込まれて磨滅し、刃部基部のいずれかが欠けている。この磨製石斧の多さこそが上述の5つの後期遺跡との大きな違いであり、栄工田遺跡の特徴を際立たせる。

蛇紋岩製の磨製石斧については、富山県境A遺跡で未製品を含めて1万点を越える磨製石斧が出土し注目を集めた。²⁷⁾北陸では、磨製石斧を出土する遺跡間の性格の違いについて、資料の蓄積を背景に研究が進んでいる。石斧生産をつかさどる集落と消費地との関係が交易圏として把握されつつある。²⁸⁾栄工田遺跡が石斧生産に関わりの薄い遺跡だとは今回の調査だけでは断定できない。剥片類も出土しているし、南東1kmには蛇紋岩の露頭がある岡豊山がそびえている。²⁹⁾生産については将来の調査に判断をゆだねるが、少なくとも消費については確実に証拠が残されている。当時の人々は、最大限有効に石斧を使い、再利用が不可能になった時点で一定の場所に廃棄した。石斧・土器の検出された地点からは同時に哺乳類の骨片³⁰⁾も検出されており、ある種のゴミ捨て場だった可能性が高い。

これら栄工田遺跡の磨製石斧の存在が、なぜ集落の存在を示すかという点については、伐採斧と

しての磨斧の用途からも自明である。栄エ田遺跡の小河川沿いに延びる舌状の微高地を縄文人は伐り開き、家を建て、集落を形成した。当地でも縄文カレンダー³¹⁾に沿った豊かな生活が繰り広げられていたと考えたい。松ノ木遺跡や田村遺跡や西分増井遺跡と比較した場合、栄エ田遺跡の主たる生業は何だったのか。ここでもやはり石器に注目してみたい。栄エ田遺跡で最も多かった石器、それは実測遺物以外も合せ合計70点以上出土した叩き石・凹石・磨石類だ。流路から見つかった叩き石はやはり多くが破損品であった。検出された叩き石は植物食を示す。石器の割合から見ても、少なくともこの集落に本拠をおく間は狩猟・漁労を副次的なものとし、主たる生業は採集による植物食であったのではないか。舌状の微高地の後には四国山地に連なる豊かな森が控えている。大きく南東に開いた谷といい、縄文人にとって絶好の居住環境であったことは想像に難くない。

2. 弥生時代から古墳時代へ～弥生前期末と後期末・集落展開の画期～

弥生時代の研究は高知県考古学において最も進んでいる分野の一つである。他地方よりも早くから進んだ弥生土器編年を基礎に、高知空港拡張に伴う田村遺跡群の調査による資料の蓄積もあり、精力的な研究が進められた。³²⁾高知県（多くが高知平野の事例であり、それ以外は調査例が少ない。）の弥生時代の画期が他地方と同様、前期末と後期末にあるのは周知のこととなってきた。それは遺跡数の急増によって端的に現れ、土器の様相に投影する。

ところで栄エ田遺跡では、縄文晩期まで連続していた人々の足跡が、弥生前期になると全く認められなくなる。前期前半を示す資料は1点も出土していない。栄エ田縄文人はどこへ行ってしまったのか？

彼らは季節により食料源により一定期間ごとの季節的な移動を常としていたはずで、当然直線距離にして10km足らずの物部川河口も移動範囲にはいていたと考えられる。物部川河口付近、すなわち、田村遺跡の前期初頭の村を形成する一翼を栄エ田の縄文人も担っていた可能性はないだろうか。何らかの契機で稲作に手を染めた彼らは、弥生時代前期前半に再び栄エ田の地を踏むことはなかった。

当地に再び人々の生活が登場するのは前期末になってからである。稲作が定着、生産力の増大に伴って人口も増加、田村遺跡から周辺に分村が行われた時期で、I-2区、II-4区で沈線多条化最終段階の田村編年前期Vの時期の土器が出土している。同時期の下分遠崎遺跡の例のように、³³⁾薄手式土器と称される県西部の土器³⁴⁾は全く認められず、他遺跡で10%前後を示す逆L字状口縁甕の割合が約30%（14個体中4個体）と高い。この一時期のみ遺物がまとまって出土し、中期になると遺物が少なくなる（または皆無となる）という高知平野の他遺跡と同じ状況が当遺跡でも認められる。

中期末～後期初頭の高知平野は激動の時代である。尾根一つへだてて東の奥谷南遺跡には標高50～60mの急斜面に集落（高地性集落）が形成される。³⁵⁾この時期栄エ田にも人が戻ってきた。遺物はI-2・II-3・III-2から少量とII-1からまとまって出土している。ほとんどが後期初頭に属する。対人兵器と目される石槍も2点出土した。438の打製石槍と586の磨製石槍である。438は完形で、586は先端が折れている。当地の人々も何らかの形で激動に巻き込まれたようである。

後期中葉の空白期を経て再び活動が認められるのは後期末、ヒビノキⅡ式土器（後期-6・7）の段階である。ヒビノキⅡ式からⅢ式（古式土師器Ⅰ期・古墳時代初頭）への移行期にあたる土器も多い。長岡台地のヒビノキ遺跡³⁶⁾や金地遺跡、東崎遺跡、林田遺跡³⁷⁾など弥生時代終末から古墳時代にかけては遺跡の急増期に相当するが、栄田遺跡も例外ではない。この時期の遺物出土量が全時代を通じて最も多く、従来から資料が充実している古式土師器Ⅰ期（ヒビノキⅢ式土器）については、ほぼ全調査区で検出されこの時期の人口の急増を裏づける結果となった。ただ、細片に至るまでの遺物のチェックにもかかわらず、当該期の高知平野の遺跡から確認されることの多い搬入土器については確認できなかった。東崎遺跡、西分増井遺跡など搬入土器の認められる遺跡とは異なる性格の遺跡として注意する必要がある。今後、さらなる調査例の増加とともに遺跡の性格・位置付けもはっきりしてくるものと思われる。

弥生末～古墳初以降の人口急減を示すかのように、SD 8 出土資料³⁸⁾を唯一の例外として6世紀後半に至るまで人の足跡はほとんど途絶える。6世紀後半～7世紀の資料も少なく、Ⅱ区で数点確認されるのみである。

3. 古代から中近世へ～楠葉型瓦器椀（11世紀後半の一括資料）

古代から近世に至る時期の遺物は量的に少なく、集落の中心が今回の調査範囲外に移ったことを示している。にもかかわらず、少ない遺物の中から、遺跡の性格についての重要な知見が得られた。

調査区東端のⅠ区から8世紀後半の円面硯が出土している。土佐国衙跡などから出土例はあるものの高知県内でも円面硯の例は少ない。いかなる施設あるいは住居があったのかは定かではないが、栄エ田遺跡に円面硯を使用し得る人物が存在した事は確かである。8世紀から9世紀にかけての須恵器は10点足らずだが、ほとんどがⅠ区包含層中からの出土である。なおⅠ区には、式内社である小野神社³⁹⁾が隣接している。

古代から中世にかけての資料の中で特筆されるのは、楠葉型瓦器椀の出土である。瓦器椀の出土したのは、Ⅲ-2区の直径40cmほどの小土坑SK-12であり、出土遺物は当地の11世紀後半代の状況の一端を示すものとして注目される。

出土した遺物は743・744の布目瓦、745の土師器、746・747の須恵器そして748の瓦器椀である。748は楠葉型瓦器椀でⅠ期に相当し、11世紀後半という年代観が与えられる。⁴⁰⁾調整は摩耗のため明瞭でない部位もあるが外面は分割して磨かれ、内底面には平行なヘラミガキが施される。口唇内面に一条の沈線が巡らされ、楠葉の特徴を示している。高台は断面逆台形状で、わずかに開いている。

瓦器は「1. 在地土器の実年代の比較研究と2. 中世土器流通の実態さらには3. 出土遺跡の性格」を知るために重要な資料となるといわれる。⁴¹⁾第1の点、在地土器の実年代という点においては、相伴する円盤状高台糸切り底の須恵器椀（746）、足高高台の須恵器皿（747）そして輪高台の土師器椀（745）の実年代を考える上で重要である。同時に布目瓦も相伴するが、布目瓦が同時期の所産だと断定はできない。拓本で観察可能なように、平瓦（743）、丸瓦（744）ともに、葺かれて風雨にさらされた面（平瓦では凹面、丸瓦では凸面と異なっている。）の風化・磨滅が著しく進

んでいるのに対し、逆の面は非常に残りが良い。例えば丸瓦では、凹面の布目圧痕が明瞭に観察できるし、平瓦の凸面には縄蓆叩きがはっきりと残る。一定期間の使用を示しており、瓦の製作時期は11世紀以前で遡っても古代の範囲に収まると推定できる程度である。

しかし瓦器と須恵器と土師器については事情が異なってくる。先述のように、出土した楠葉型瓦器碗にはI期11世紀後半という年代が与えられており、円盤状高台の碗の編年とも合致する。一方、輪高台の土師器碗は12世紀に主流になってくる器種で、松田直則によって、糸切り底の円盤状高台→糸切り底の輪高台土師器碗という編年観が示されている。⁴²⁾松田は円盤状高台の碗が11世紀後半で消滅し、同時期にそれに替わって防長系の土師器碗が出現するという。栄エ田遺跡SK-12は、11世紀後半の円盤状高台→輪高台という土佐における土師器碗移行期の様相を示す良好な遺構であるといえる。輪高台土師器碗が11世紀後半から確実に存在することが追認された。共伴する足高高台の皿も同時期のものであり、これら遺物の共時性を示している。

11世紀後半は黒色土器から瓦器への移行期であり、畿内においては黒色土器と瓦器が共伴する例も見られる。748についても、かつて黒色土器であると指摘していただいたことがある。年代は同じ11世紀後半である。当該期の楠葉型瓦器と黒色土器A類は極めて類似性が高いということであり、ここでは瓦器として取り扱うが黒色土器A類の可能性もあることを付記しておく。⁴³⁾

楠葉型瓦器碗（I期）の出土は県内では初めてであるが、⁴⁴⁾西日本に視点を広げても「古代官衙やそれに類する遺跡」以外からはほとんど出土していない。⁴⁵⁾11世紀後半の栄エ田遺跡の性格の一端を示している。また、瓦器出土地点南東には「シンプクジ」という地名がのこっている。長宗我部地検帳の段階ではすでに「中ヤシキ」となっており、「寺」ではなくなっていた。布目瓦の存在など寺院との関連も考慮しておかなければならない。

12世紀以降も断片的ではあるが、19世紀そして現代に至るまで連続して遺物が出土する。東播系須恵器や常滑など中世の流通を示す遺物も確認されている。

山麓を旧街道が縫うように通り、南側を遍路道が走り、遍路道の北を国道32号線が東西に貫く。縄文後期以来「居住好適地」であり続けた定林寺栄エ田遺跡。今、遺跡の北側をハイウェイが駆け抜けようとしている。

註

- 1) 『岡山県史』第十八巻 考古資料編
- 2) 小都隆編『洗谷貝塚』洗谷貝塚発掘調査団 福山市教育委員会 1976年
- 3) 間壁忠彦・明子「建行田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第3号 1967年 中津式土器のまとまった資料は少なく、中津貝塚・洗谷貝塚・建行田遺跡等に類例を見ることができる。
- 4) 前田光雄「宿毛式、その特質」『研究紀要 第1号』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 5) 岡本健児「栄エ田遺跡」『日本の古代遺跡 39 高知』保育社 1989年
- 6) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅱ』本山町教育委員会 1992年
- 7) 平井勝「縄文後期・四元式の提唱—彦崎K2式に先行する土器群について」『古代古備第15集』1993年 平井氏により従来の彦崎K2式土器が細分され、四元式が提唱されている。ここでは従来の編年観に基づいた彦崎K2式土器として扱った。
- 8) 岡本健児・廣田典夫・木村剛朗『高知県片粕遺跡』高知県教育委員会 1975年
- 9) 木村剛朗「土佐における後期縄文文化について」『高知の研究1』清文堂 1983年
- 10) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会 1990年

- 11) 松田直則・曾我貴行『中村宿毛道路埋蔵文化財調査概報Ⅰ 船戸遺跡』1994年
 - 12) 出原恵三「南四国中央部における縄文後期土器」『遺跡34号』1993年
 - 13) 山崎正明『林田シタノヂ遺跡Ⅱ』土佐山田町教育委員会 1993年 深鉢2個体が焼礫を伴ってピットから出土しており、山崎により中津式古段階であると報告されている。一方、平井勝氏らにより「中期末の平式併行の可能性もある」という指摘もある。
 - 14) 森田尚宏・藤方正治・吉成承三『柳田遺跡記者発表資料』高知県埋蔵文化財センター 1992年
 - 15) 晩期編年全般については『中四国縄文研究会資料・晩期』1995年を参考にした。実際のカテゴリについては、坂口隆氏（国学院大学博士過程）の御教示を受けた。
 なお、平井勝・家根翔多・中村健二の各氏から栄エ田遺跡の突帯文土器の中に出現期の突帯文が混じるという御指摘をいただいた。栄エ田遺跡の場合、晩期を通しての継続した集落が展開していた可能性が高い。
 - 16) 岡本健児『高知県史考古編』1968年
 - 17) 出原恵三「高知県美良布遺跡発掘調査報告書」香北町教育委員会 1991年
 - 18) 岡本健児「土佐市倉岡出土の土器群」『土佐史談152号』1980年
 - 19) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町教育委員会 1992年
 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅱ』本山町教育委員会 1992年
 前田光雄・吉成承三『松ノ木遺跡Ⅲ』本山町教育委員会 1993年
 - 20) 岡本健児「土佐入田遺跡調査概報」（『考古学雑誌第38巻一第5・6号』）
 岡本健児「高知県入田遺跡」（『日本農耕文化の生成』）
 - 21) 註13に同じ
 - 22) 註14に同じ
 - 23) 山崎正明「第四章 第Ⅱ調査区の調査」『中村宿毛道路埋蔵文化財調査概報Ⅱ 具同中山遺跡群Ⅰ』1995年
 - 24) 岡本健児「縄文時代」『南国市史上巻』1983年
 - 25) 註24に同じ
 - 26) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅰ』本山町教育委員会 1992年
 - 27) 『北陸自動車道遺跡調査報告 一朝日町編5 一境A遺跡石器編』富山県教育委員会 1990年
 - 28) 山本正敏「蛇紋岩製磨製石斧の製作と流通」『季刊考古学 第35号』雄山閣 1991年
 - 29) 『四国地方 一日本の地質8』共立出版 1991年
 - 30) 奈良文化財研究所 松井幸氏、高知大学地学科修士課程菊地直樹氏の御教示による。
 - 31) 小林達雄「縄文世界の社会と文化」『日本原始美術体系』1 講談社 1977年
 - 32) 『田村遺跡群』第1～15分冊 高知県教育委員会 19886年
 - 33) 出原恵三『下分遠崎遺跡(1)』香我美町教育委員会 1989年
 - 34) 出原恵三「薄手土器について」『南国史談』1989年
 - 35) 松村信博『奥谷南遺跡試掘調査概要報告書』1994年
 - 36) 岡本健児・廣田典夫『ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977年
 - 37) 森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会 1985年
 - 38) 高知県の古式土師器編年については、岡本健児の業績を継承・批判しながら出原恵三、廣田佳久によって精力的な編年が進められている。出原は西分増井遺跡出土土器の分析を通じて古式土師器を土器型式のヒアタスを予測した上でⅠ～Ⅳ期に分類し、拝原遺跡では、ST-5・6出土資料を空白であったⅢ期を埋める資料と認定した上で、前期古墳が存在しない状況下での高知平野の土師器生産の特質に至るまでを論じている。これに対し廣田は「周辺地域における土師器の様相 1. 南四国の古式土師器」（『研究紀要 第1号』（財）高知県文化財埋蔵文化財センター）において、研究史をまとめた上で、南四国の古式土師器をⅠ型式からⅣ型式までに編年する県西部から中央部までを網羅する編年試案を打ち立てた。出原のⅠ期～Ⅳ期と廣田のⅠ型式～Ⅳ型式は概ね一致し、高知県の古式土師器については今後資料の増加により細部が補強されることはあっても、この4期区分は揺らがないだろう。
- SD-8出土遺物であるが、479の甕は外面タタキ目の残存とナデによる仕上げ、内面ヘラ削りという技法上の特徴を持ち、器形は球形がわずかに長胴化する段階である。479の外面は、「叩きは残存する」という表現がぴったりくるほど、ナデによりタタキは潰れたような状況でわずかに確認されるのみである。Ⅰ期には全面に叩き目があり（タタキ目の盛行）、器形は球形に近いものも現れ「形は布留を指向するが技術は旧来のまま」と言われるように内面ヘラ削りは全く見られない。またⅢ期にはタタキ目は全く認められなくなり、内面ヘラ削りはあるものとなないものが混在する。このⅠ・Ⅲ期をつなぐ位置にあるⅡ期は甕においてはまさに479の様相そのもので、「タタキ残存、内面ヘラ削り」がメルクマールであり、器形もⅠ・Ⅲ期の中間に位置しており、Ⅱ期を示している。拝原遺跡において出原は、甕をA類とB類に分類、内面ヘラ削りが認められず「在地の伝統的技法の延長線上に位置付けられる要素」を持つものをA類、内面ヘラ削りを採用し「伝統的技法を払拭した新しい製作技法の産物として位置付けられる」ものをB類としている。B類に対しては伝統的技法を払拭する部分を認めつつも古式土師器の象徴布留式土器との明らかな

差異により、その出自を求めることが課題だとする。

479はB類につながる様相を示すⅡ期の甕である。Ⅱ期の甕としては、廣田が示す柳田遺跡出土資料がある。Ⅱ型式にはほとんどタタキ目は残らないとしており、479はⅡ期の中でも古相の様相を示している。いかなる要因により、内面ヘラ削りが採用されるに至ったかは明らかではないが、Ⅰ期からⅢ期への過渡的状況を示すⅡ期の資料として重要であろう。なお、共伴する高杯（480）は摩耗のため調整不明であるが、形態から見るとまさにⅠ期とⅢ期の間を埋める資料である。

39) 『高知県の地名』平凡社 1983年

40) 橋本久和『中世土器研究序論』真陽社 1992年

41) 川越俊一「中四国地方の瓦器」『芸備』第11集 1981年

42) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1989年

43) 瓦器だというご教示は橋本久和氏より、黒色土器A類だというご教示は森島康生氏よりそれぞれ受けた。

1994年3月の完了報告『栄エ田遺跡概要報告書』においては、高知県初出土の楠葉産黒色土器A類として報告している。

44) 高知県の楠葉型瓦器碗の出土遺跡としては、中村市アゾノ遺跡の例（Ⅲ期）がある。

松田直則「アゾノ遺跡」『後川・中筋川発掘調査報告書』Ⅱ 高知県教育委員会 1989年

45) 註40に同じ

第Ⅵ章 付編 栄エ田遺跡の動物遺存体について

菊地直樹

動物遺存体が検出された発掘区はⅢ-2区であり、検出層準はJ-Ⅳ層を除くJ-Ⅰ層～J-Ⅷ層である。これらの層は炭化物に含む暗灰色～黒色の含礫粘質土からなり、縄文土器を多く含む遺物包含層である。動物遺存体は縄文後期～晩期のものであるとおもわれる。動物遺存体のほとんどはこのような包含層より検出されているが、SK-2のように炭化物に富んだ土坑の埋土からも検出されている。出土した動物遺存体は大半が哺乳類のものと思われ、細片化した骨片とほぼ原形を残した歯である。これらのほとんどすべてが焼けて白色灰化し、細片化している。包含層に炭化物が多く見られることから、焼かれて後に炭化物と共に廃棄されたものと考えられる。また、これらの遺存体の中には下顎の歯列が残されているにもかかわらず、エナメル歯冠だけで歯根、下顎骨が見られないものがある。これは腐食に強いエナメル歯冠を残して腐朽したためであろう。よって歯牙（エナメル歯冠）や白色灰化して無機質化したもの以外は土中において消失してしまったものと思われる。遺存体のほとんどすべては白色灰化、細片化しているため同定できたものは少数に留まった。また同定できていない骨片が少数あるが今までに同定できたものとしてはシカ、イノシシがある。魚類遺存体がないかと注意してみたがそれらしきものは検出していない。

1) 遺存体の概略と出土した包含層、遺構

各包含層、遺構ごとに出土した動物遺存体の概略を以下に示す。

包含層

J-Ⅰ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片

J-Ⅱ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片

J-Ⅲ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片

J-Ⅴ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片、シカ（臼歯3本）、イノシシ（右上顎第三大臼歯、下顎門歯3本、前臼歯1本）

J-Ⅶ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片

J-Ⅷ：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片、イノシシ（右下顎第三大臼歯）

土坑

SK-2：哺乳類のものと思われる白色灰化、細片化した骨片、シカ（上腕骨片）

2) 出土遺存体

ニホンジカ

J-Ⅴ層から下顎臼歯が3本出土している。

イノシシ

J-V層、J-VII層からいくつかの歯が見ついている。J-V層の右上顎第三臼歯は全く咬耗しておらず、1.5歳ぐらいの個体であると思われる。また同層出土の下顎門歯、前臼歯はまとまって見つかり、1個体分のものであると思われる。歯だけが残存し、下顎骨は腐朽したものであろう。J-VII層出土の右下顎第三大臼歯は前から2つめの咬頭までしか咬耗しておらず、2.5歳の個体のものであると思われる。前臼歯は全く咬耗しておらず、門歯もそれほど咬耗していない。若い個体のものであろう。数例ではあるが若い個体の歯ばかりである。

ま と め

栄エ田遺跡のⅢ-2区から出土した動物遺存体について報告した。それらはシカ、イノシシと言った縄文時代において重要な狩猟動物の遺存体である。今回検出されたイノシシは若い個体が多い。遺存体の量は少ないため断定はできないが、本遺跡においては若いイノシシが主に利用されていたと言える。

魚類遺存体の欠如は本遺跡が内陸部に位置するためであろうか。内陸部でもアユやフナといった河川の魚類を利用することは可能である。また本山町の松ノ木遺跡においては内陸の山中にも関わらず、土坑埋土中より焼けて白色灰化したタイ類の椎体を得られている。当然、栄エ田遺跡においても見られて不思議ではないはずであるが灰化、細片化したかなり小さな遺存体を多く検出したにもかかわらず、魚類遺存体は検出することができなかった。土中で消失してしまったというよりは魚類があまり利用されていなかったと考える方がよいのではないだろうか。

遺存体は炭化物を含む暗灰色～黒色の礫質粘質土からなる遺物包含層や土坑の埋土から出土したものであり、焼けて白色灰化している上に細片化したものが多かった。このことから焼かれた後に炭化物と共に廃棄されたものと思われる。

写 真 图 版



調査前の栄工田遺跡（Ⅰ区からⅡ区方向をのぞむ）



Ⅰ-1区 完掘状況

PL 2



I-2区 完掘状況



I-2区 遺物出土状況 (弥生前期末)



I-3区 完掘状況

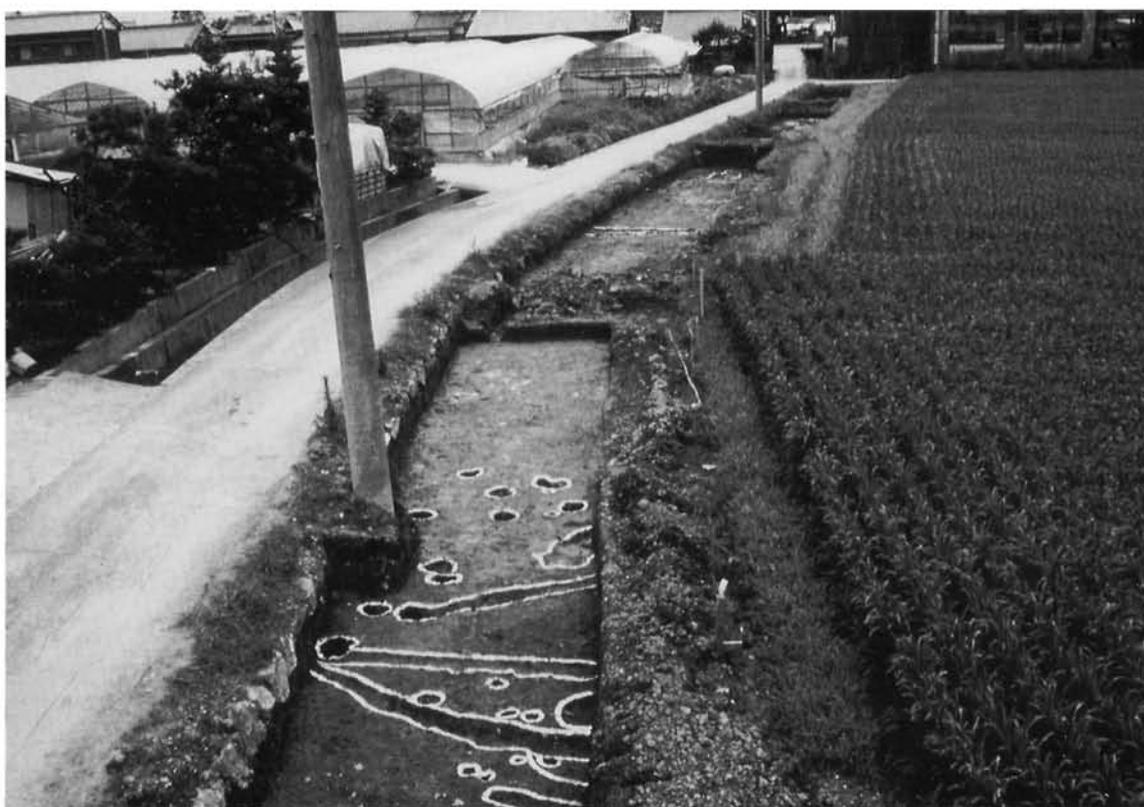


I-3区 南端堆積状況

PL 4



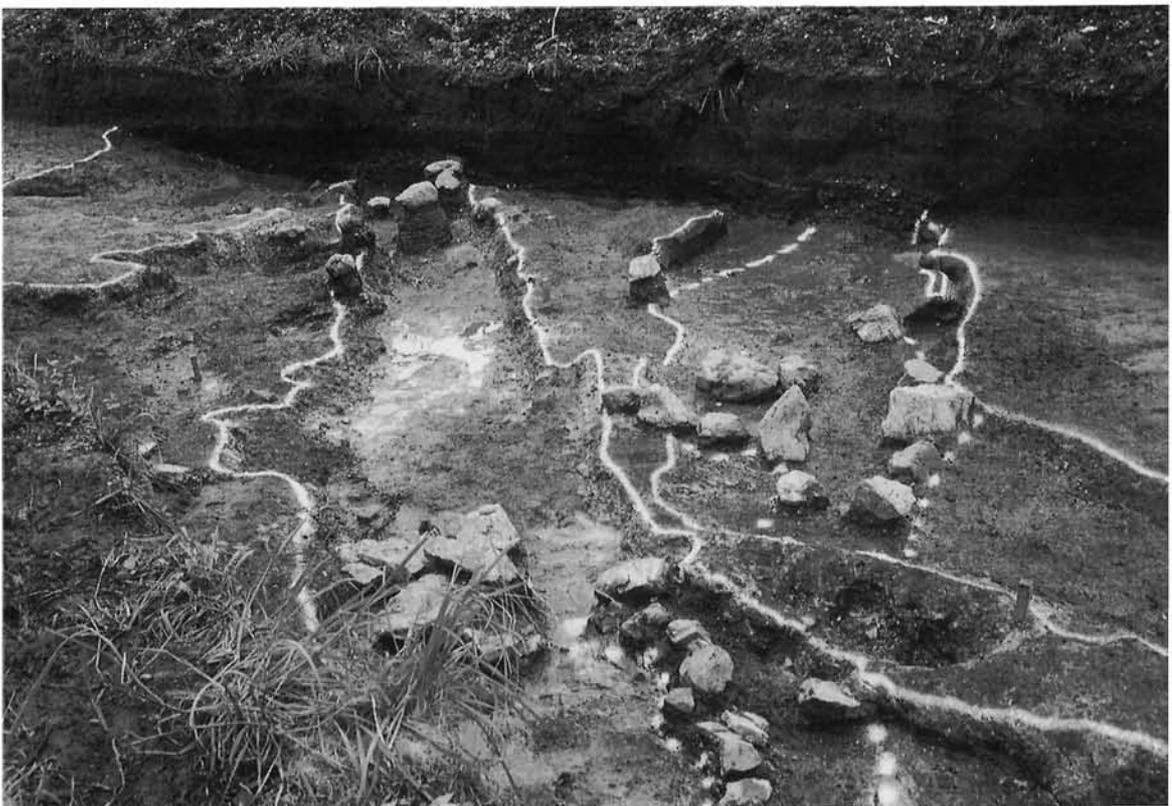
I-3区 SD-8 遺物出土状況



I区 全景



Ⅱ-1区 完掘状況



Ⅱ-1区 SD-13・14

PL 6



II-2区 全景



II-3区 遺構検出状況



II-3区 遺構完掘状況 (SD-17・18)



II-3区より、西方Ⅲ区方向をのぞむ



Ⅱ-4区 遺構検出状況



Ⅱ-4区 SA-1, SB-1



Ⅱ-4区 遺構完掘状況（西から）



Ⅱ-4区 遺構完掘状況（東から）



II-5区 遺構完掘状況（西から）



II-5区 遺構完掘状況（東から）



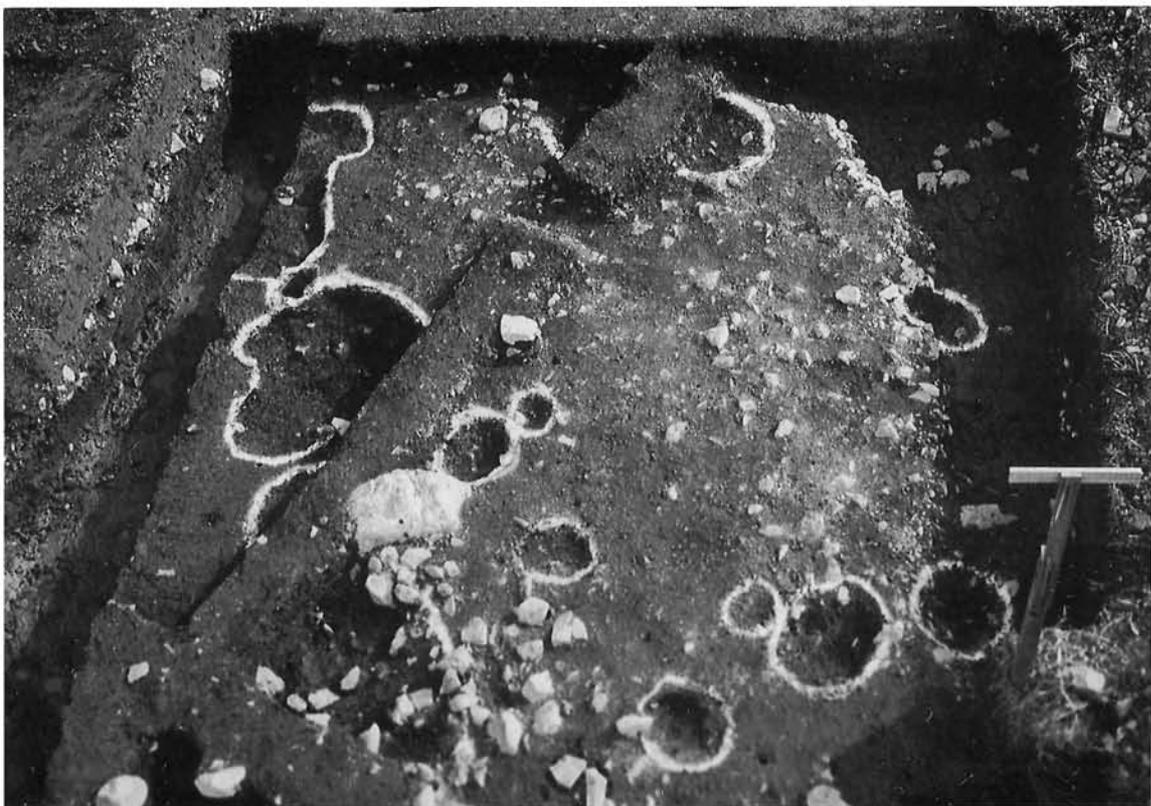
Ⅲ-2区 調査前風景



Ⅲ-2区 表土除去後，調査区全景



Ⅲ-2区 中央バンク南壁，推積状況



Ⅲ-2区 縄文時代遺構（J-II層上面）



Ⅲ-2区 J-I層遺物出土状況



Ⅲ-2区 SR-1 (J-V層) 礫出土状況

PL 14



Ⅲ-2区 SR-1



Ⅲ-4区 調査区北西方向をのぞむ



調査に参加した人々（Ⅲ区）

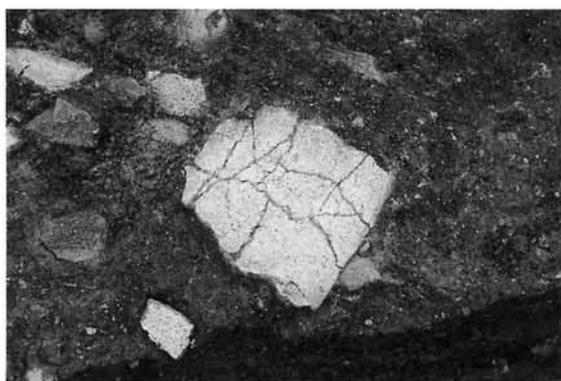


調査に参加した人々（Ⅰ区）

PL 16

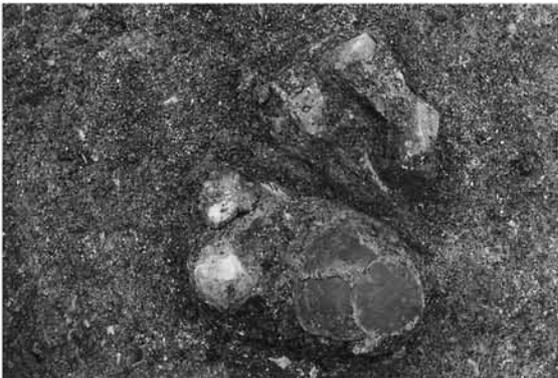
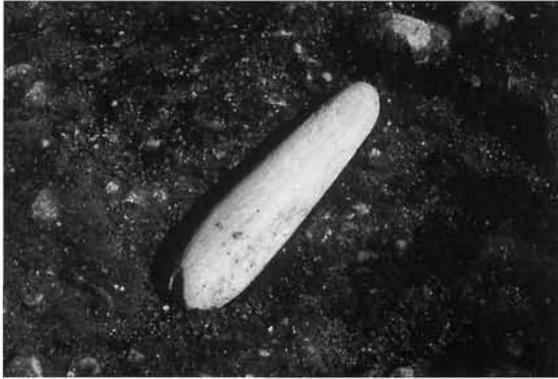


I ~ II区 遺物出土状況



Ⅲ-2区 遺物出土状況（縄文土器）

PL 18



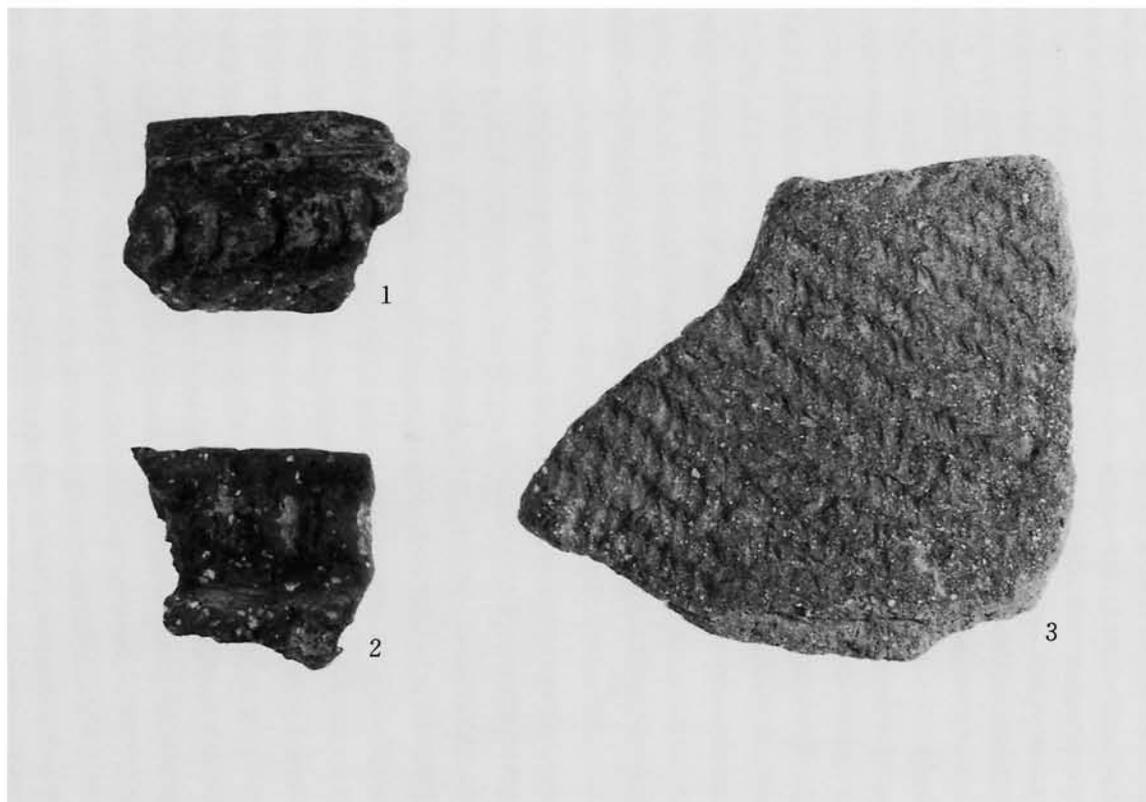
(SK-12)

(SK-12)

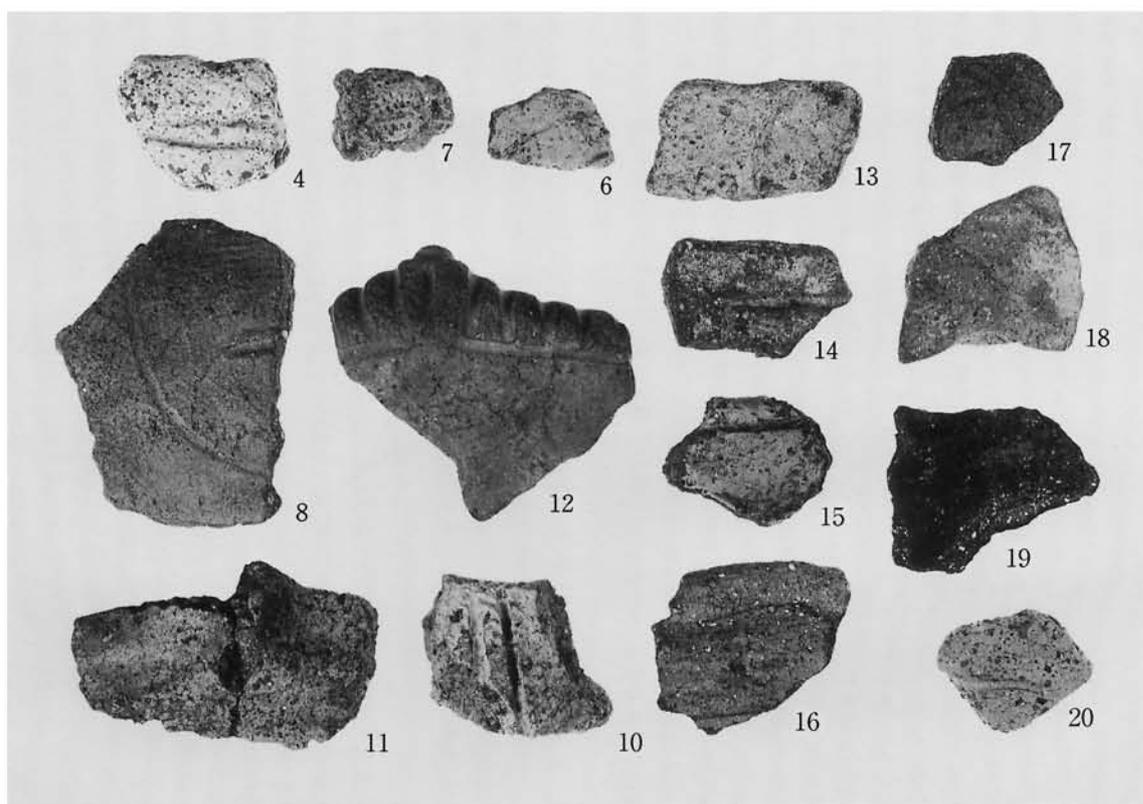
Ⅲ-2区 遺物出土状況 (石器及び SK-12)



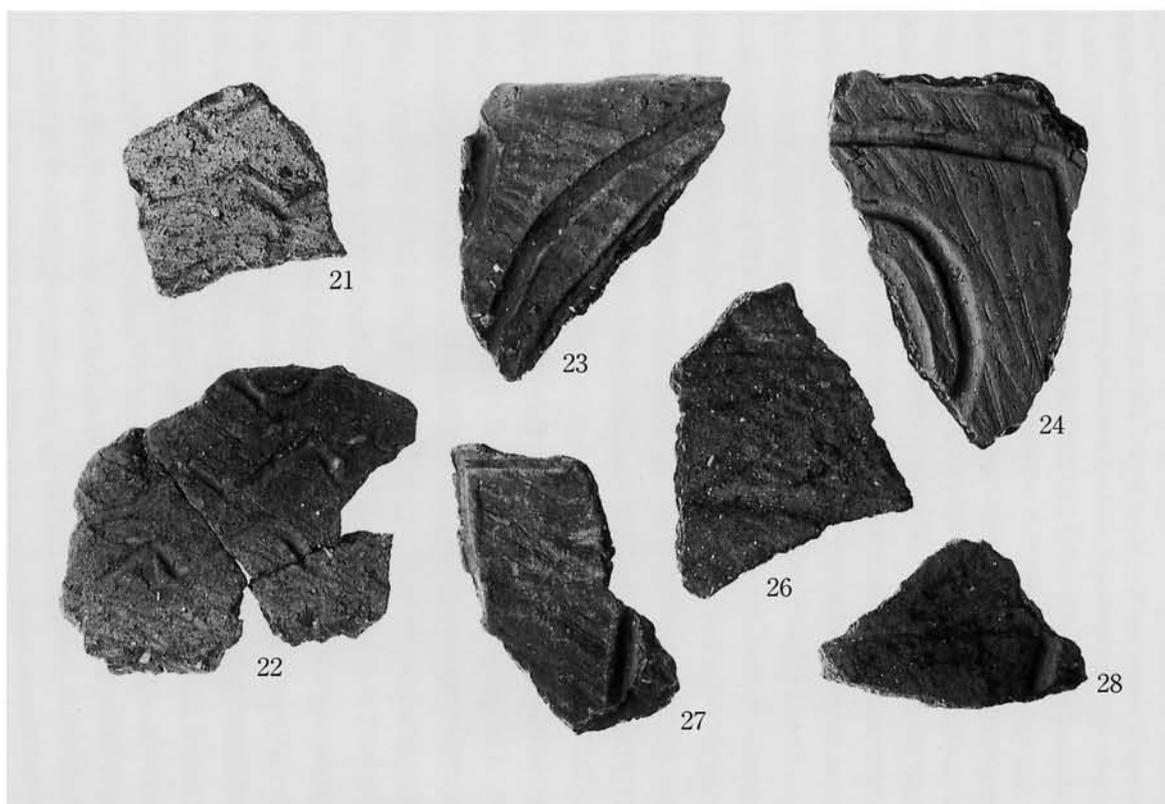
作業風景



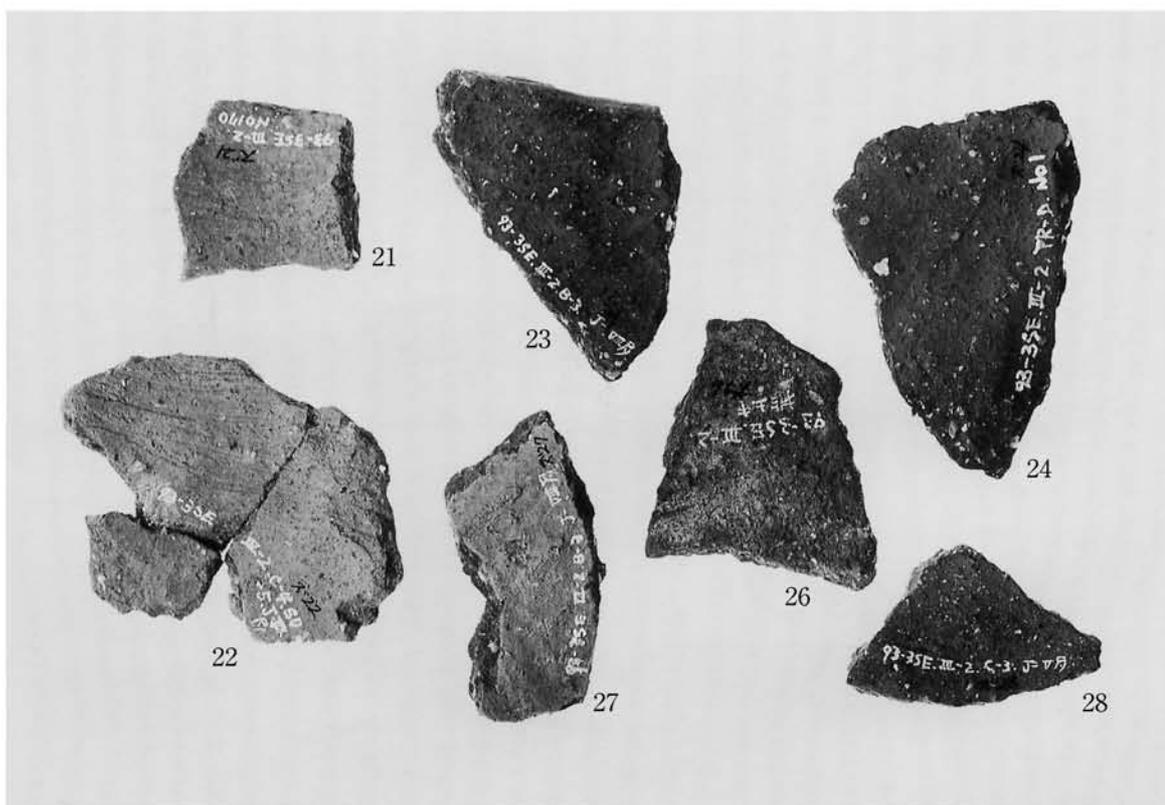
縄文前期・中期土器



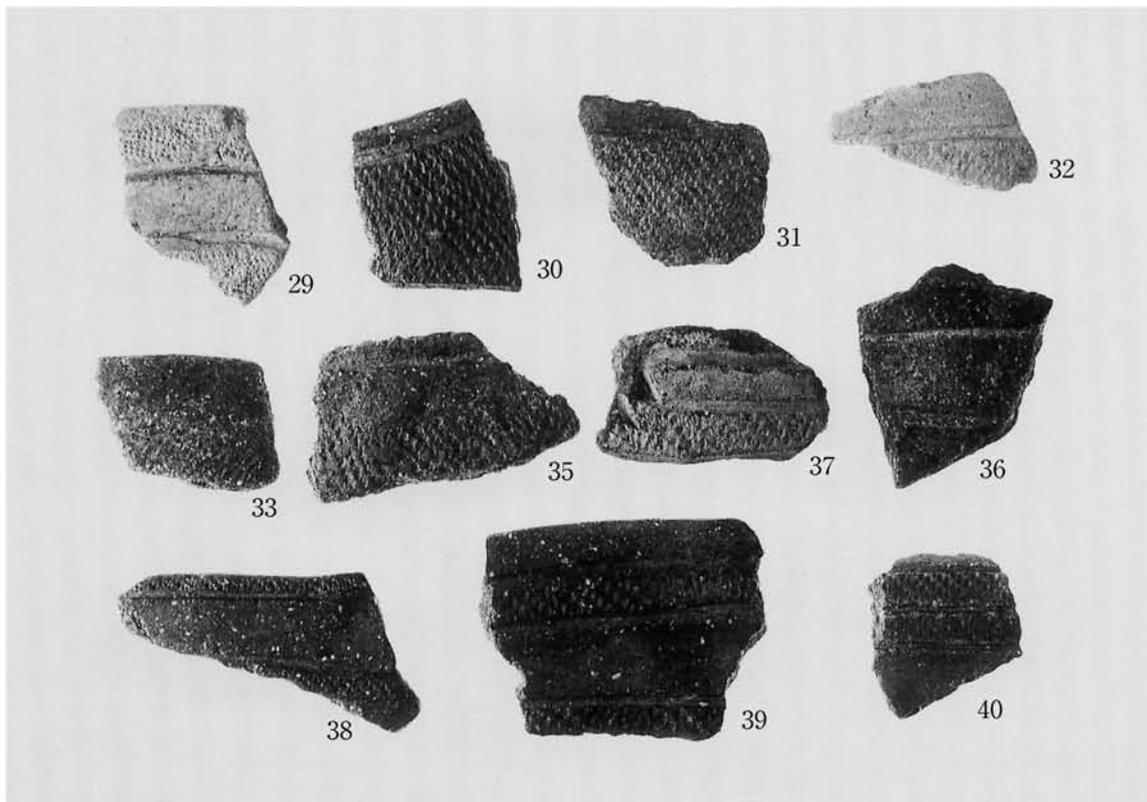
縄文後期土器（後期1類）



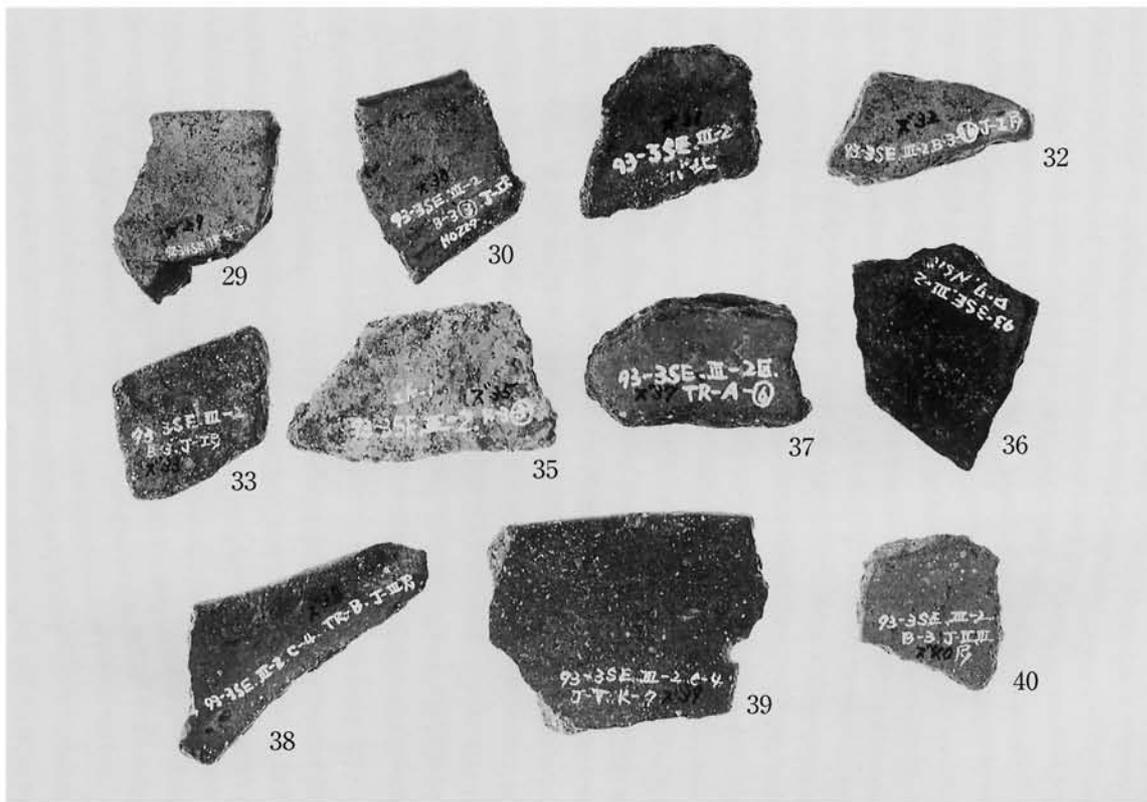
縄文後期土器（後期1類）外面



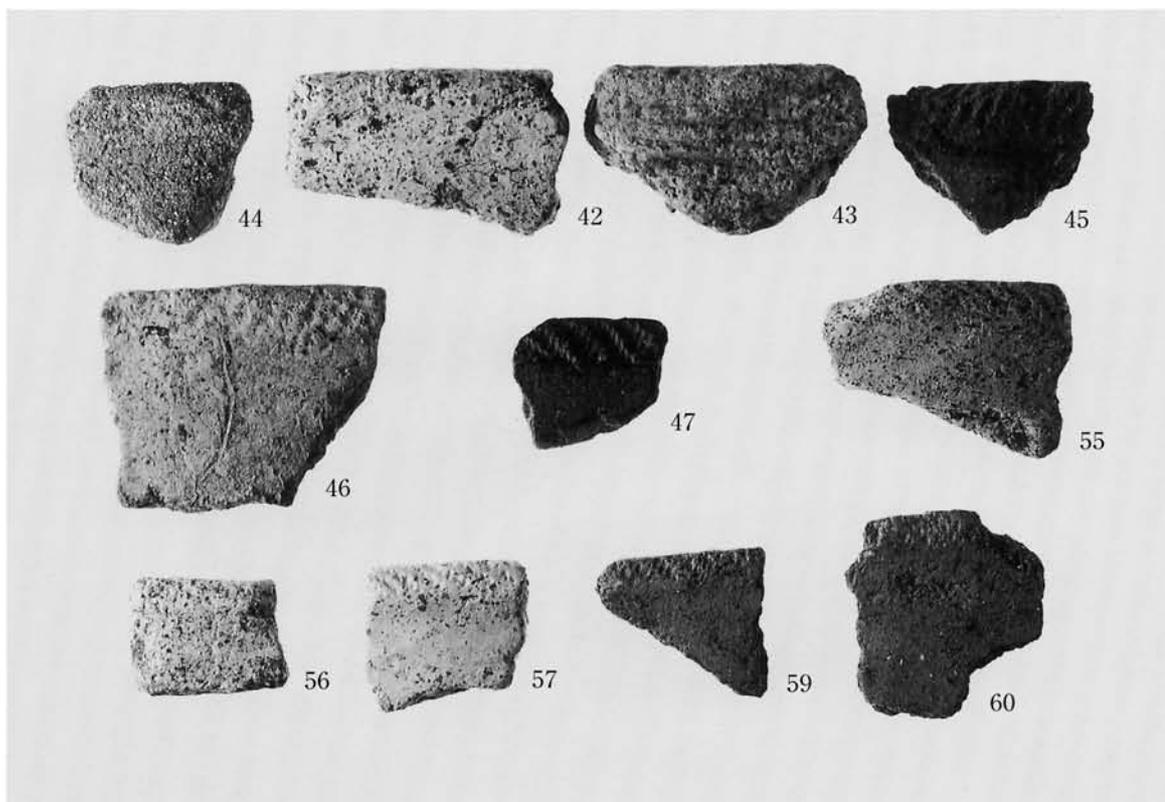
縄文後期土器（後期1類）内面



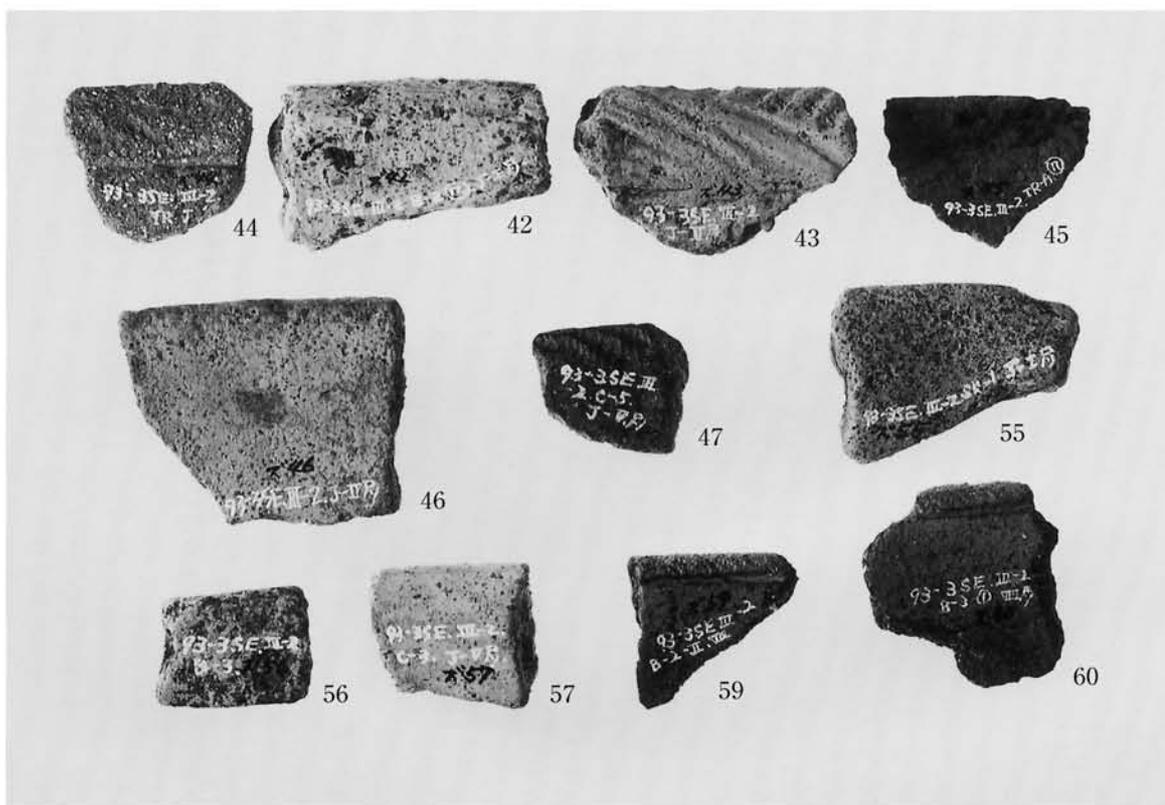
縄文後期土器（後期2類）外面



縄文後期土器（後期2類）内面

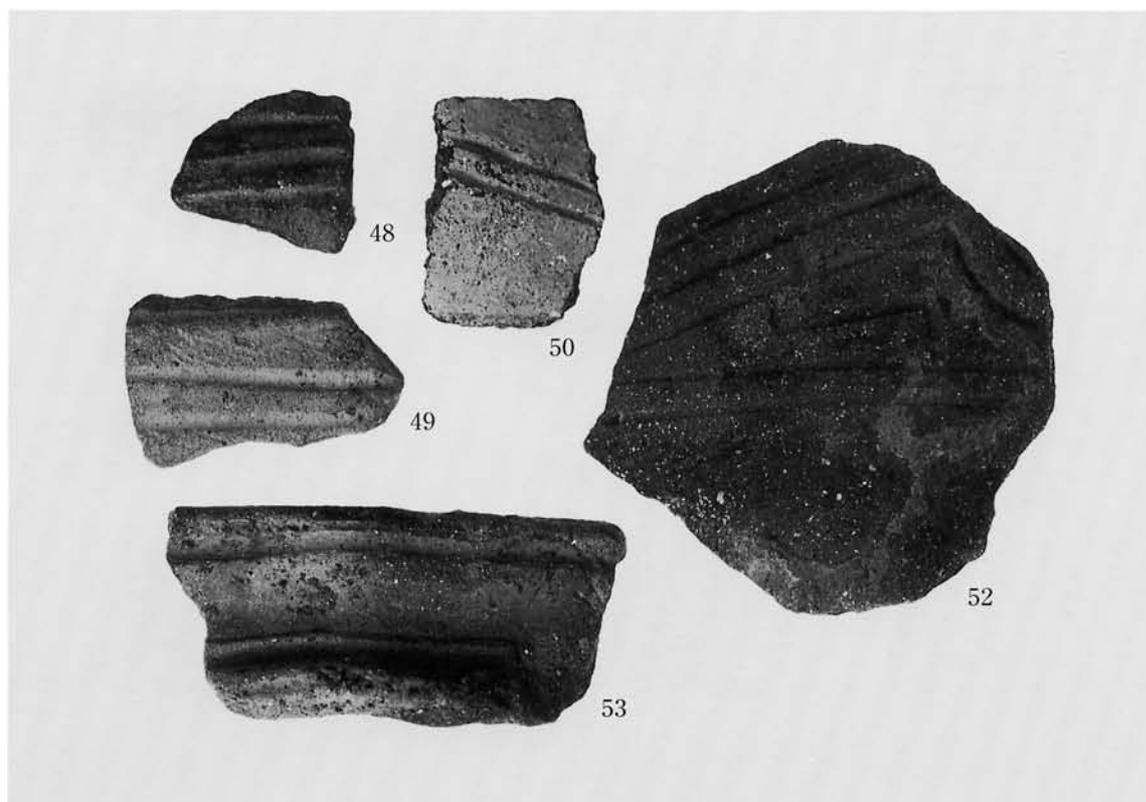


縄文後期土器（後期3・5類）外面

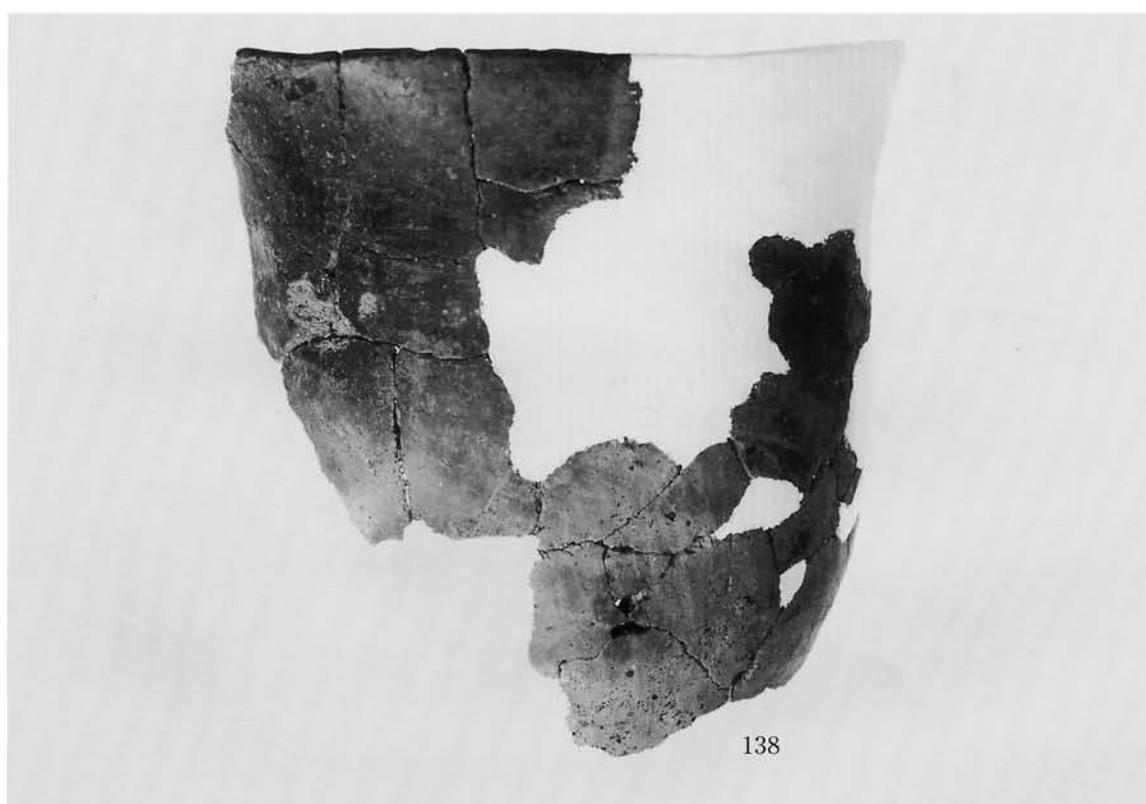


縄文後期土器（後期3・5類）内面

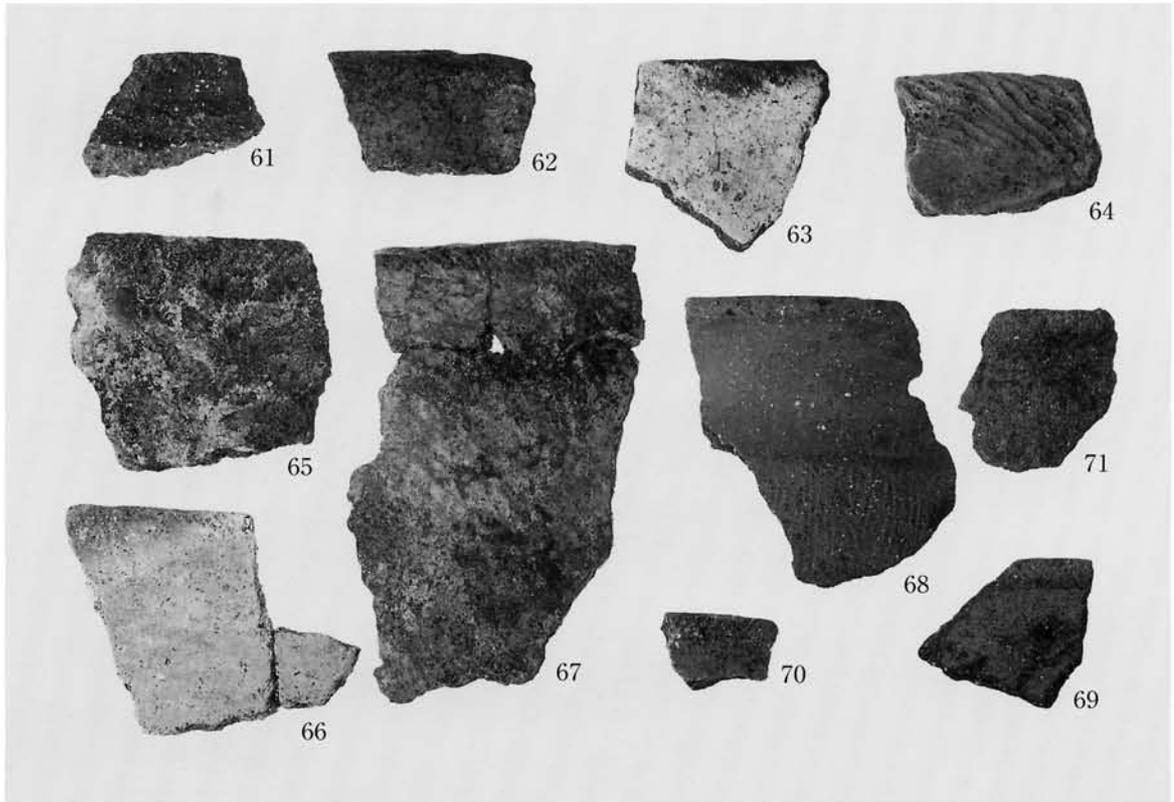
PL 24



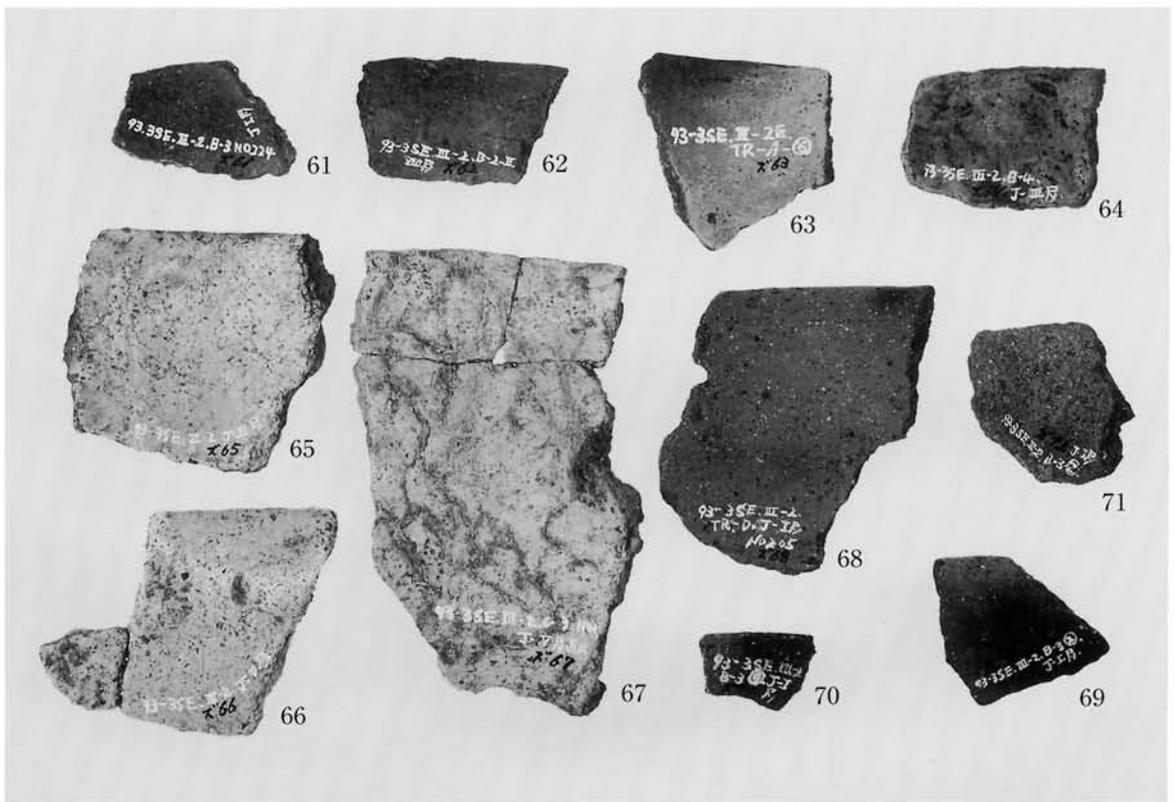
縄文後期土器（後期4類）



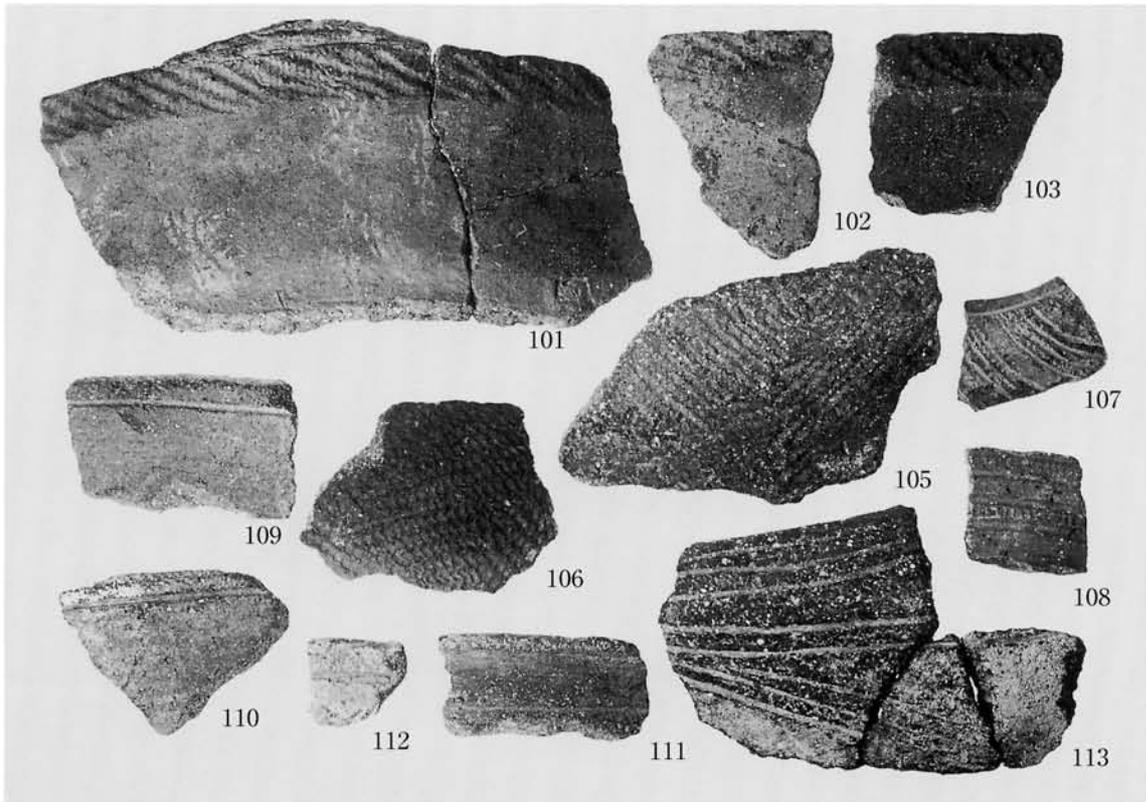
縄文後期土器（深鉢）



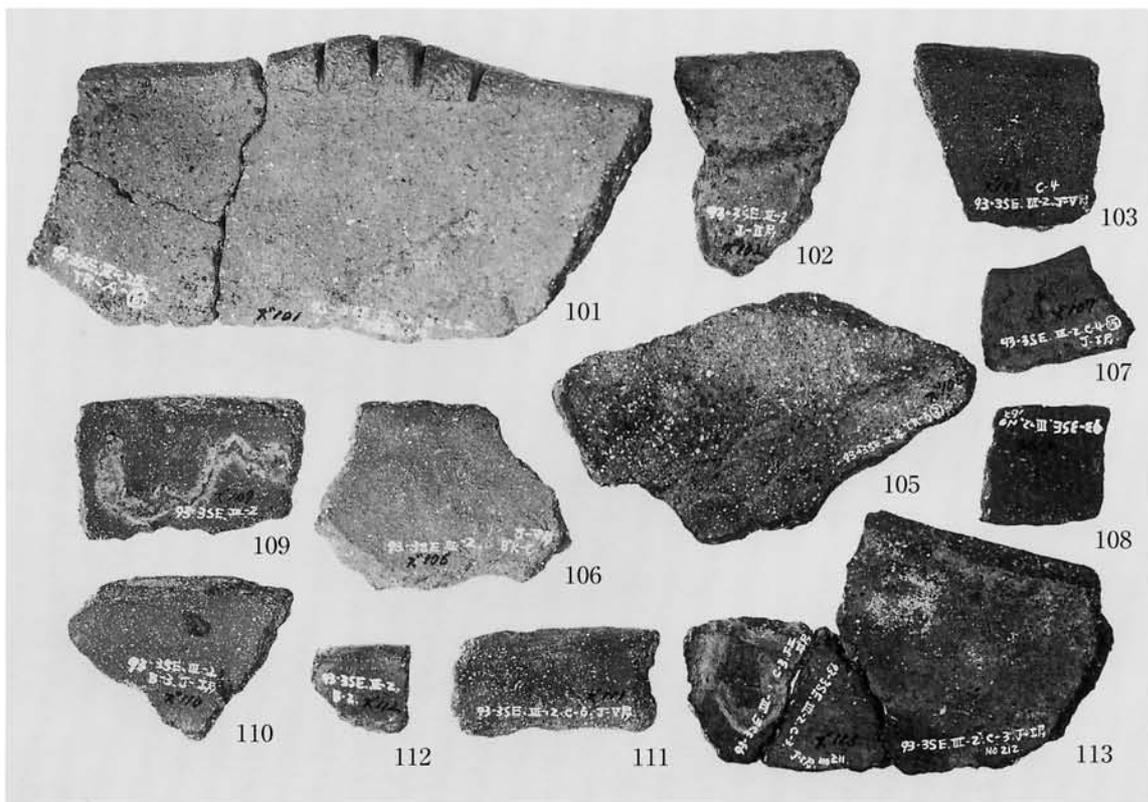
縄文後期土器（後期6類）① 外面



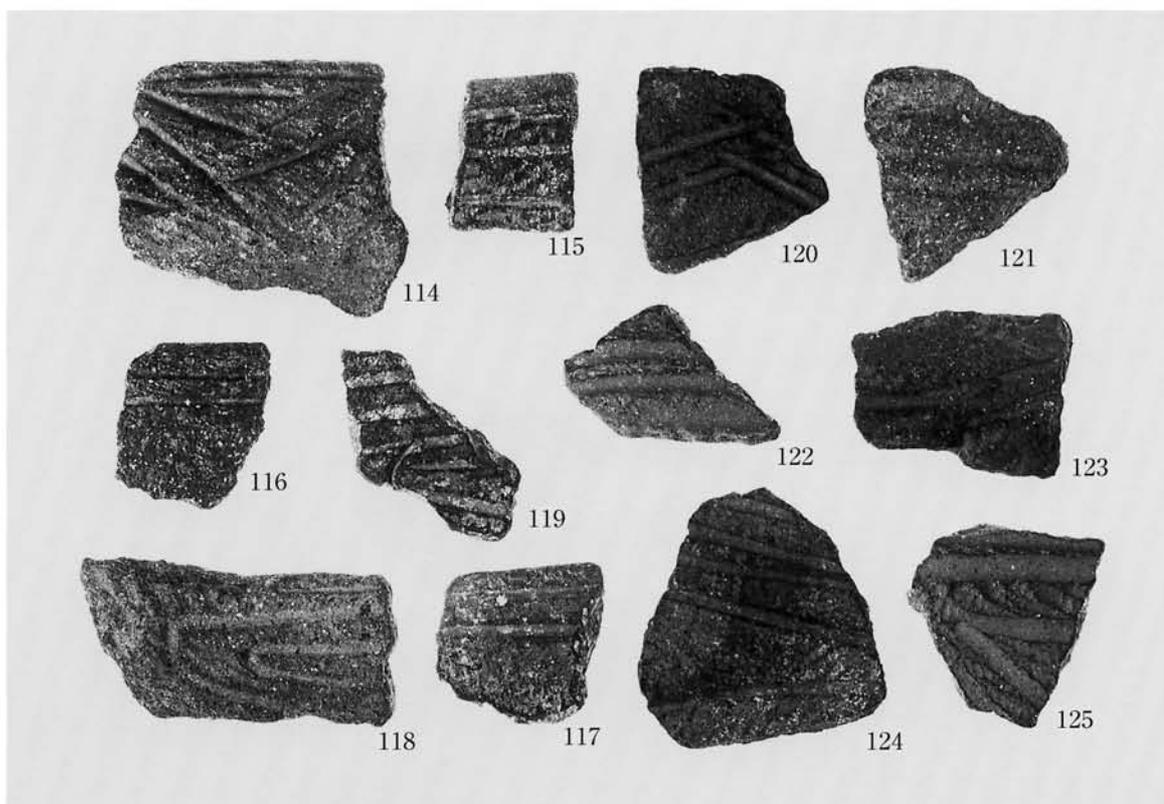
縄文後期土器（後期6類）① 内面



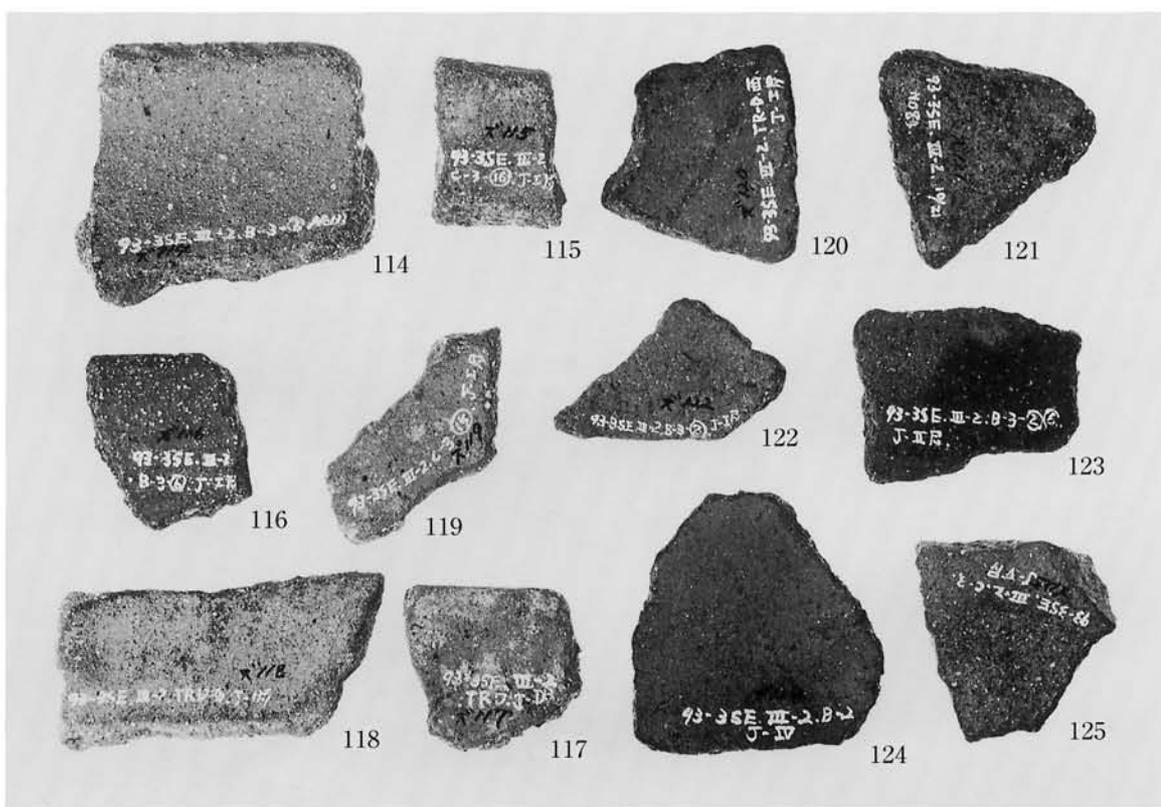
縄文後期土器（後期6類）② 外面



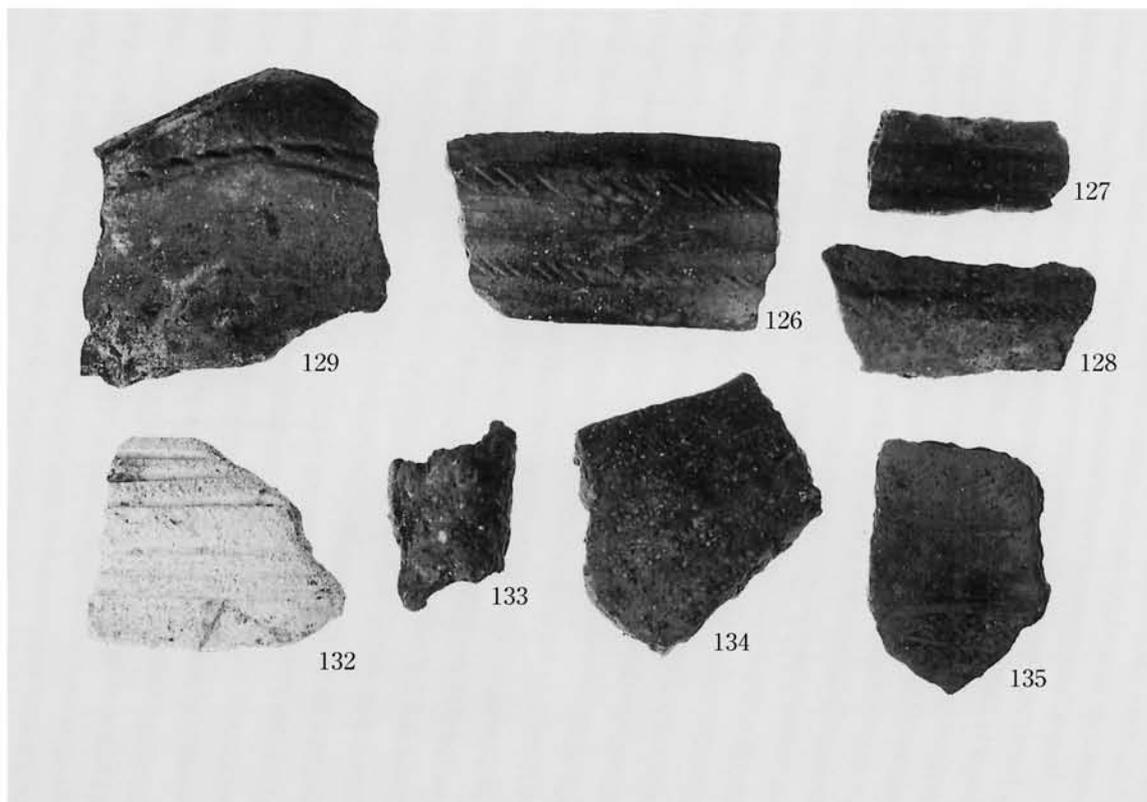
縄文後期土器（後期6類）② 内面



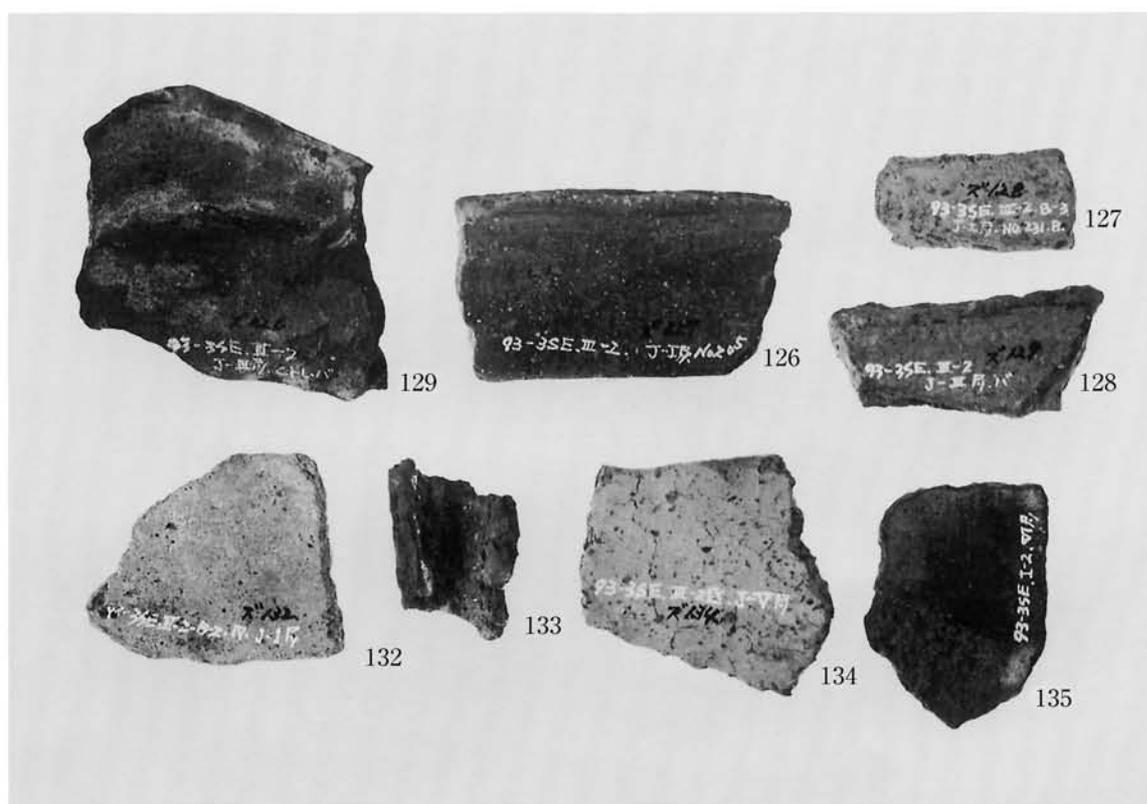
縄文後期土器（後期6類）③ 外面



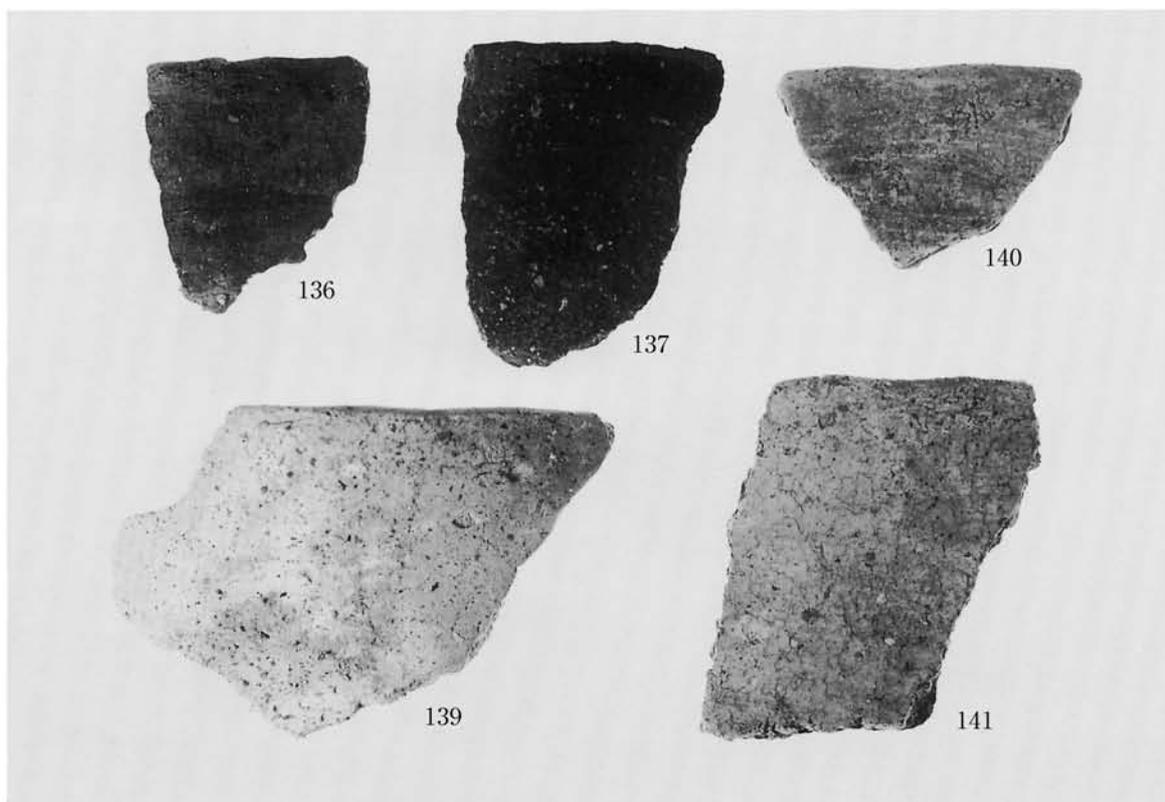
縄文後期土器（後期6類）③ 内面



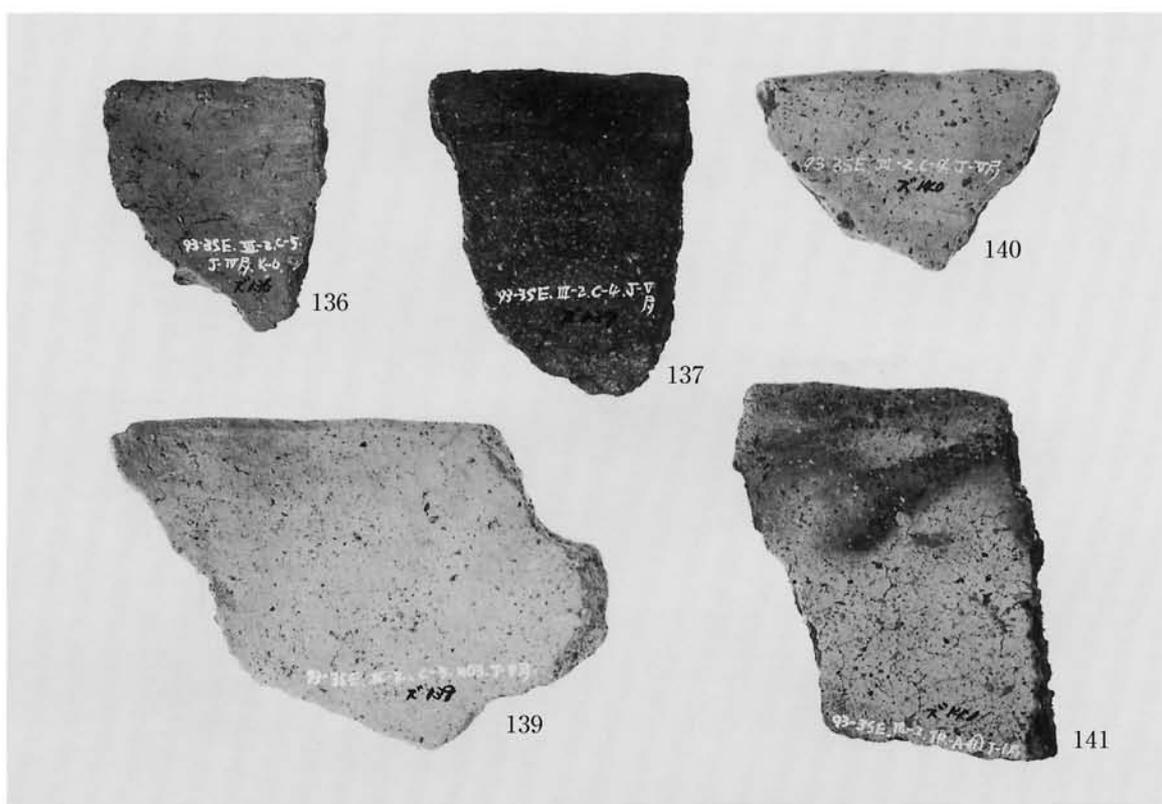
縄文後期土器（7・8類，その他）外面



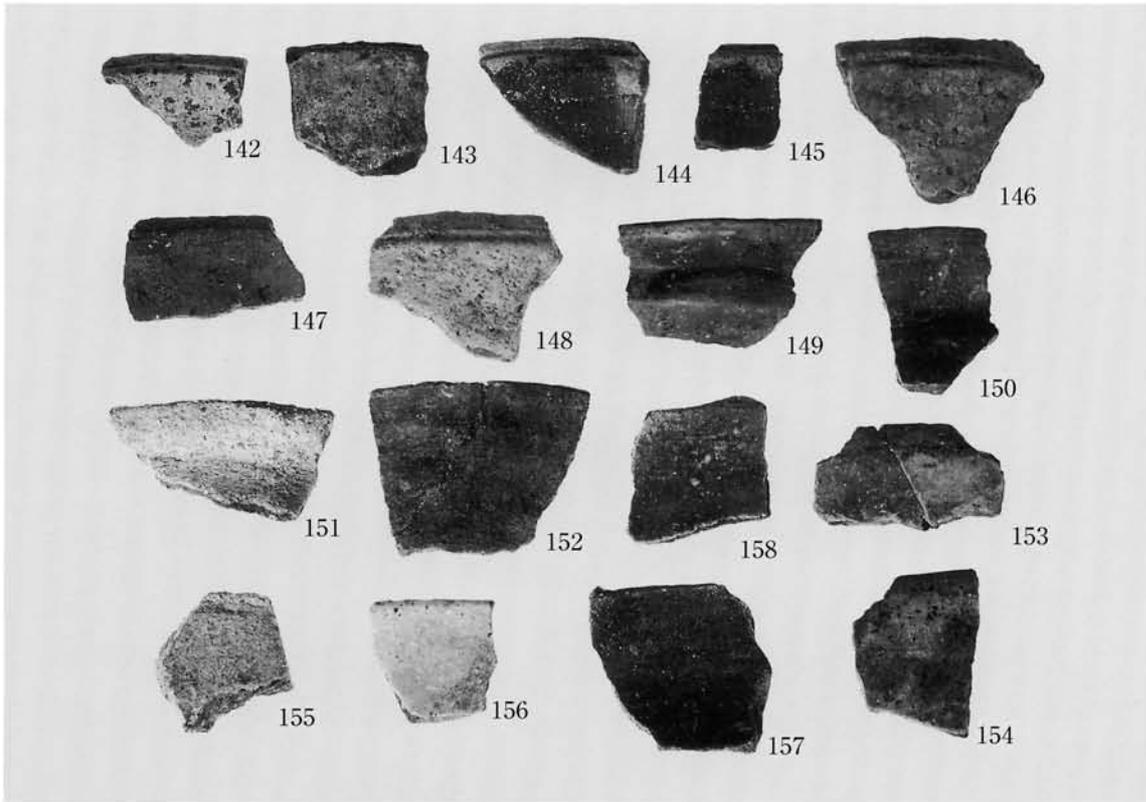
縄文後期土器（7・8類，その他）内面



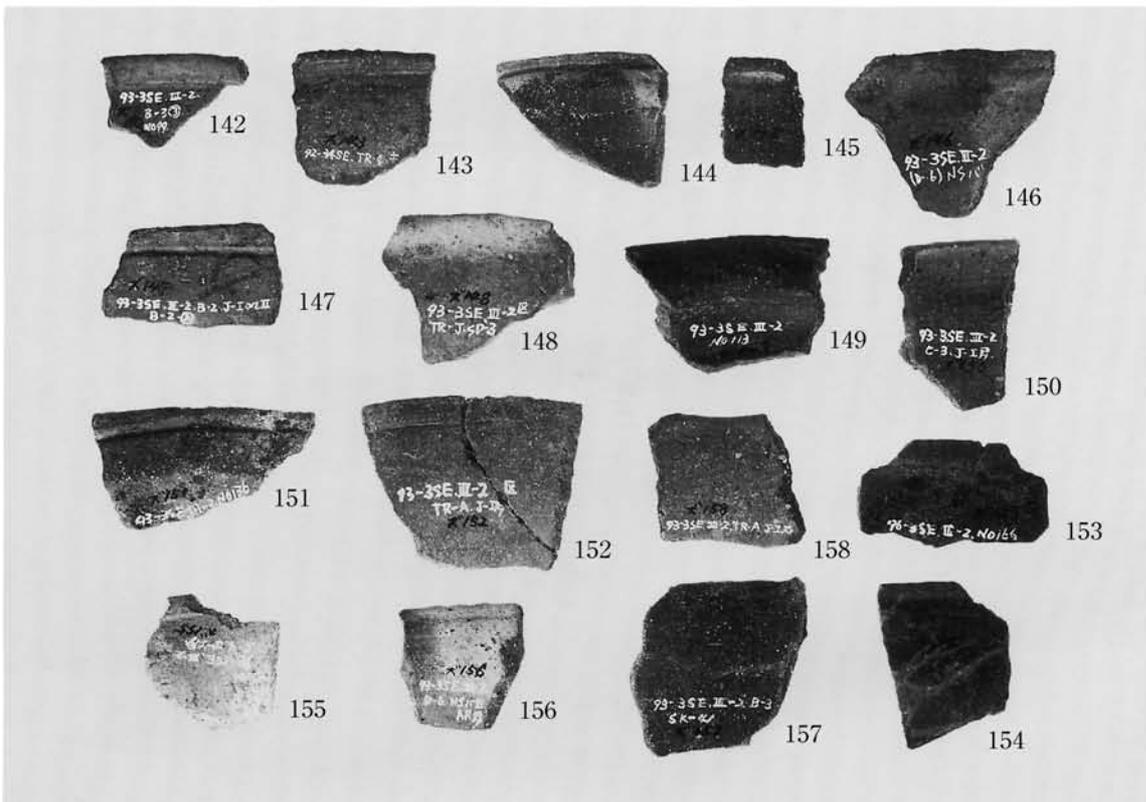
縄文後期土器（後期粗製深鉢）外面



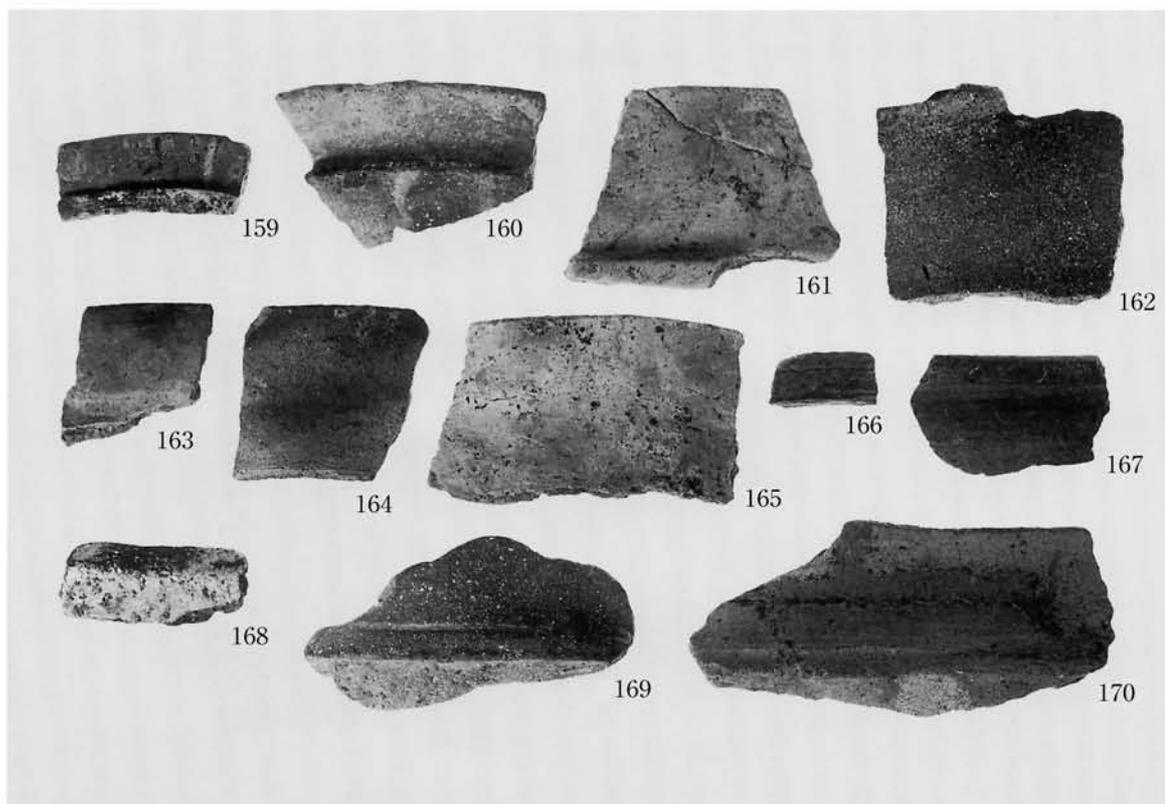
縄文後期土器（後期粗製深鉢）内面



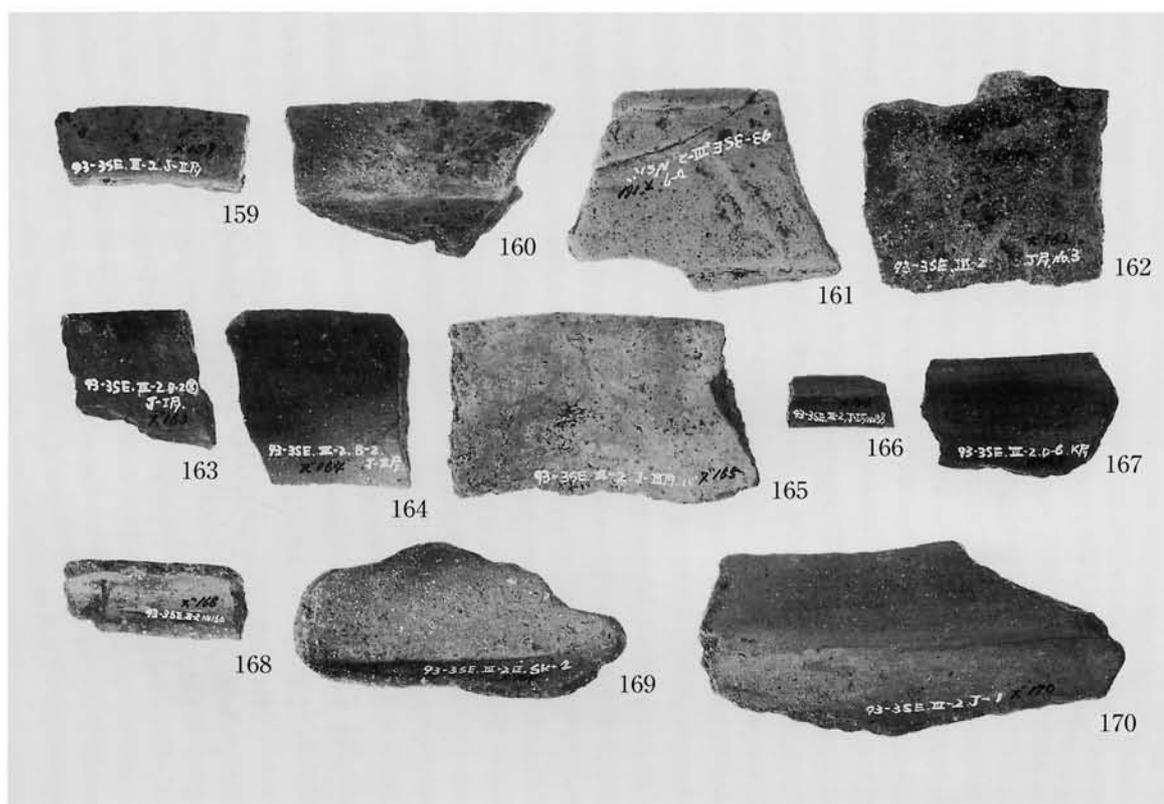
縄文晩期土器（晩期浅鉢1・2類）外面



縄文晩期土器（晩期浅鉢1・2類）内面

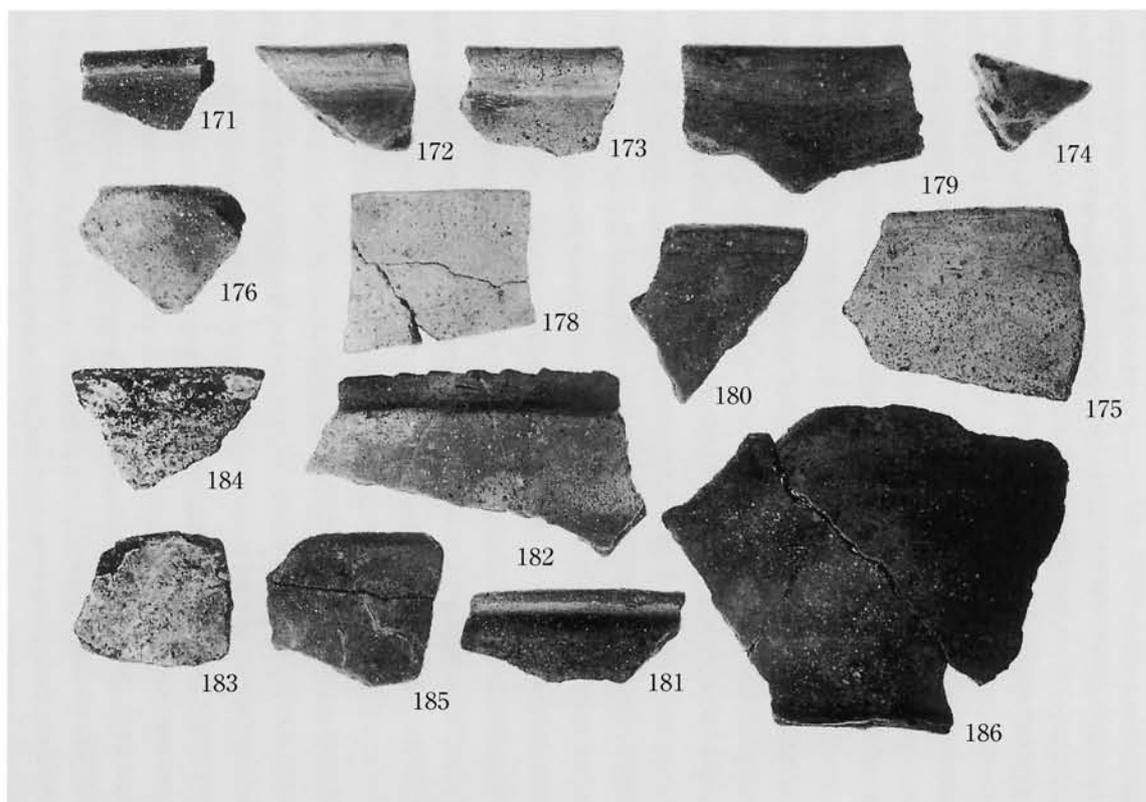


縄文晩期土器（晩期浅鉢3類）外面

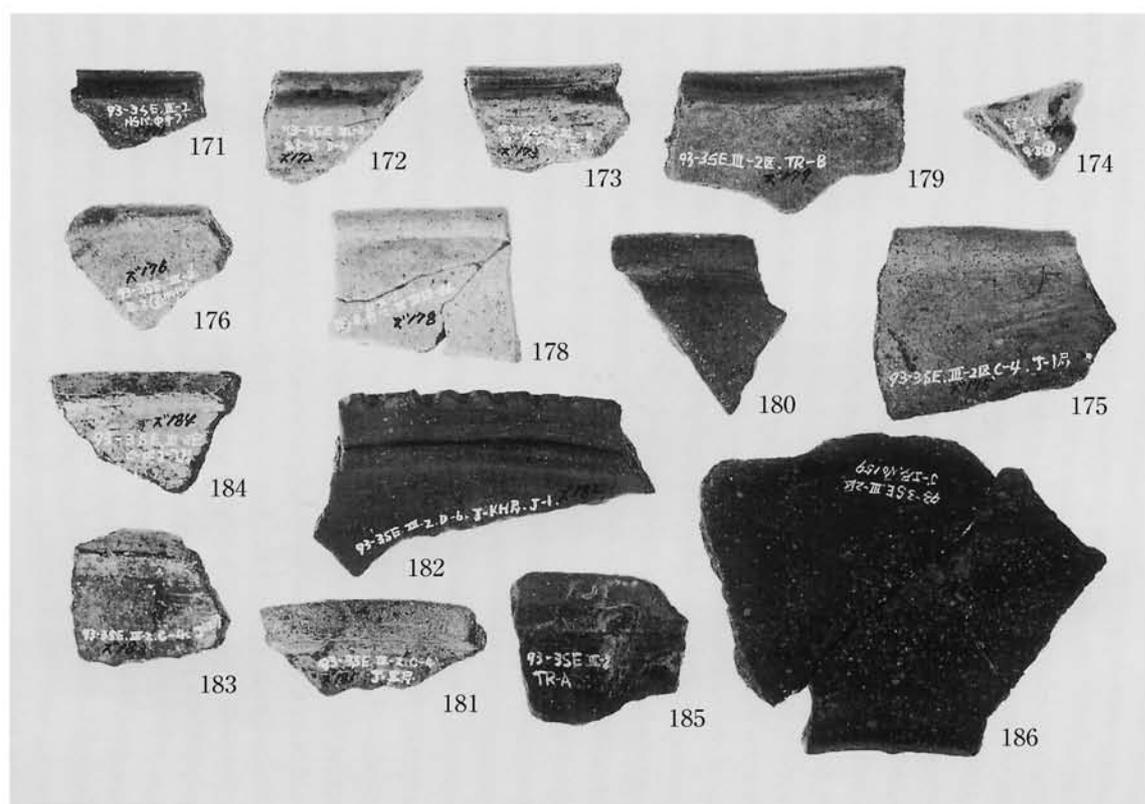


縄文晩期土器（晩期浅鉢3類）内面

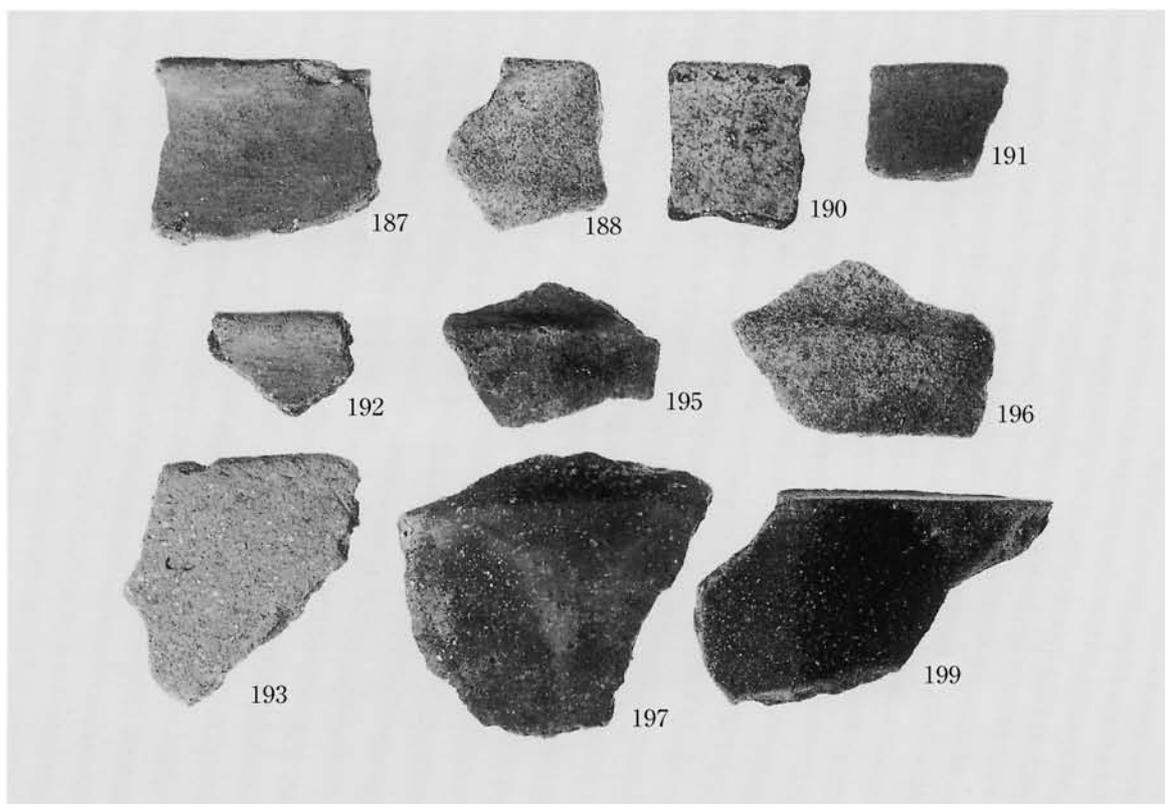
PL 32



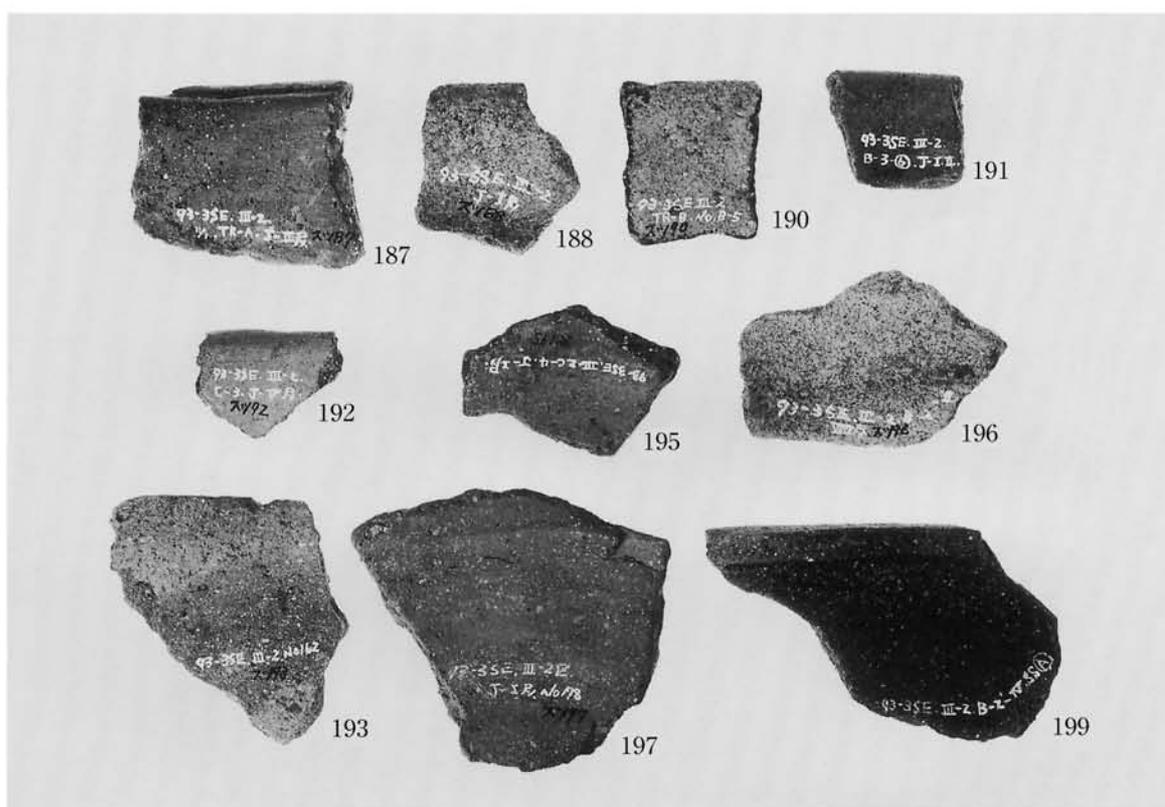
縄文晩期土器（晩期浅鉢4類）外面



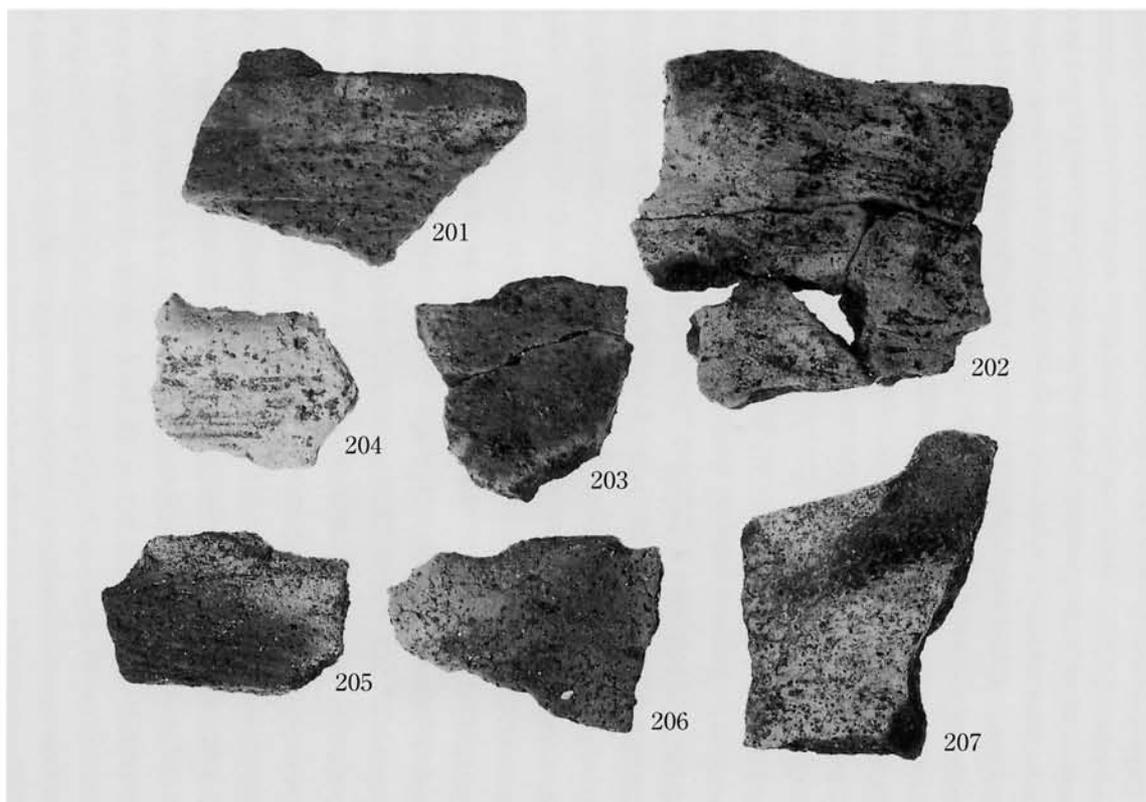
縄文晩期土器（晩期浅鉢4類）内面



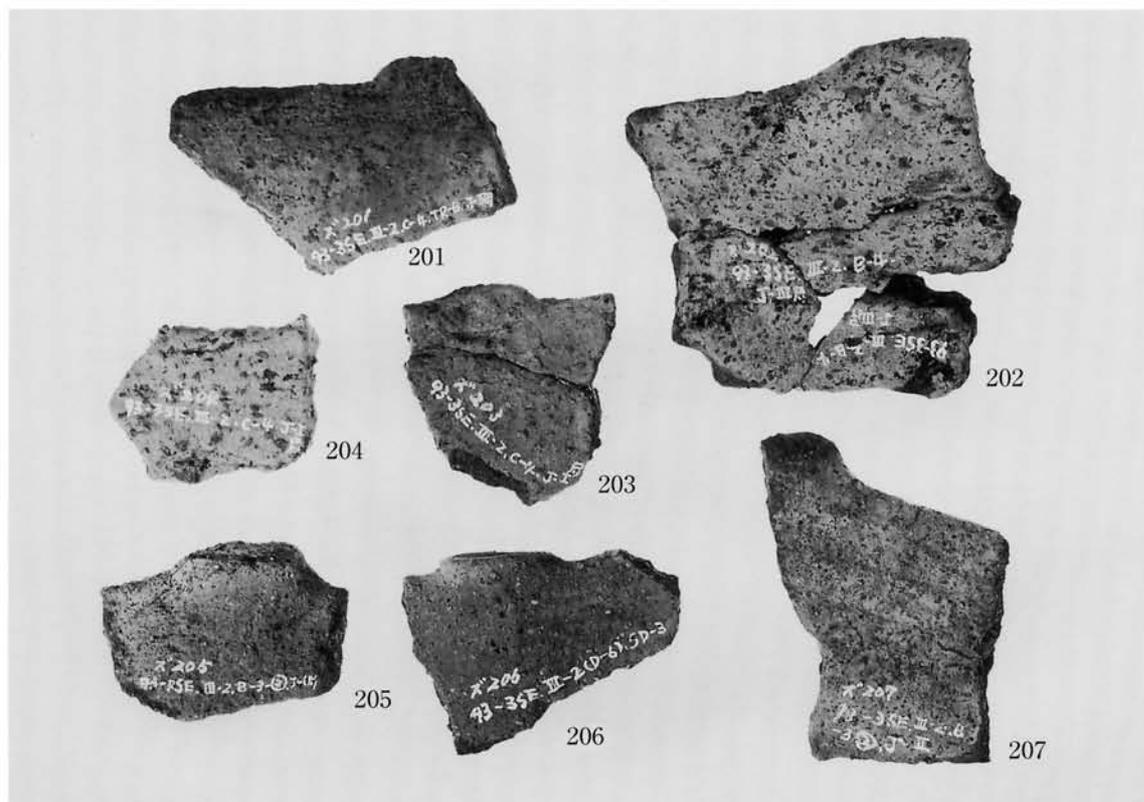
縄文晩期土器（晩期浅鉢5類）外面



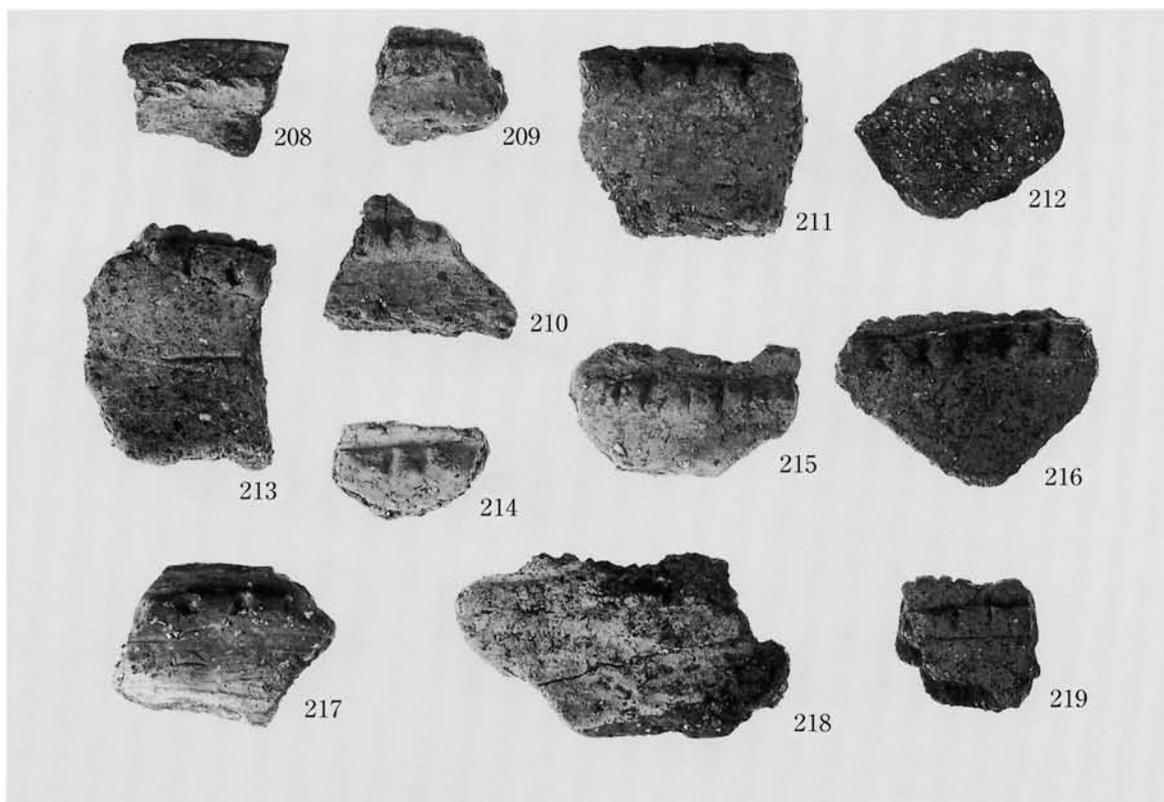
縄文晩期土器（晩期浅鉢5類）内面



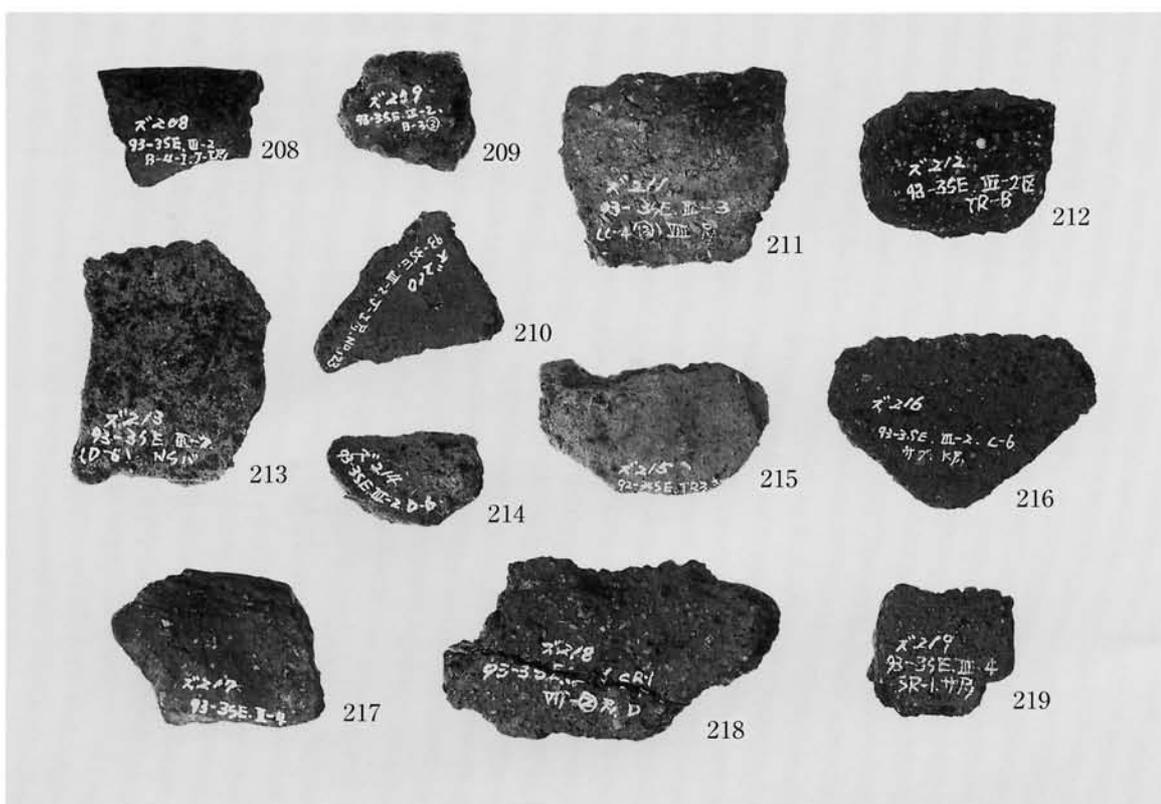
縄文晩期土器（晩期深鉢1類）外面



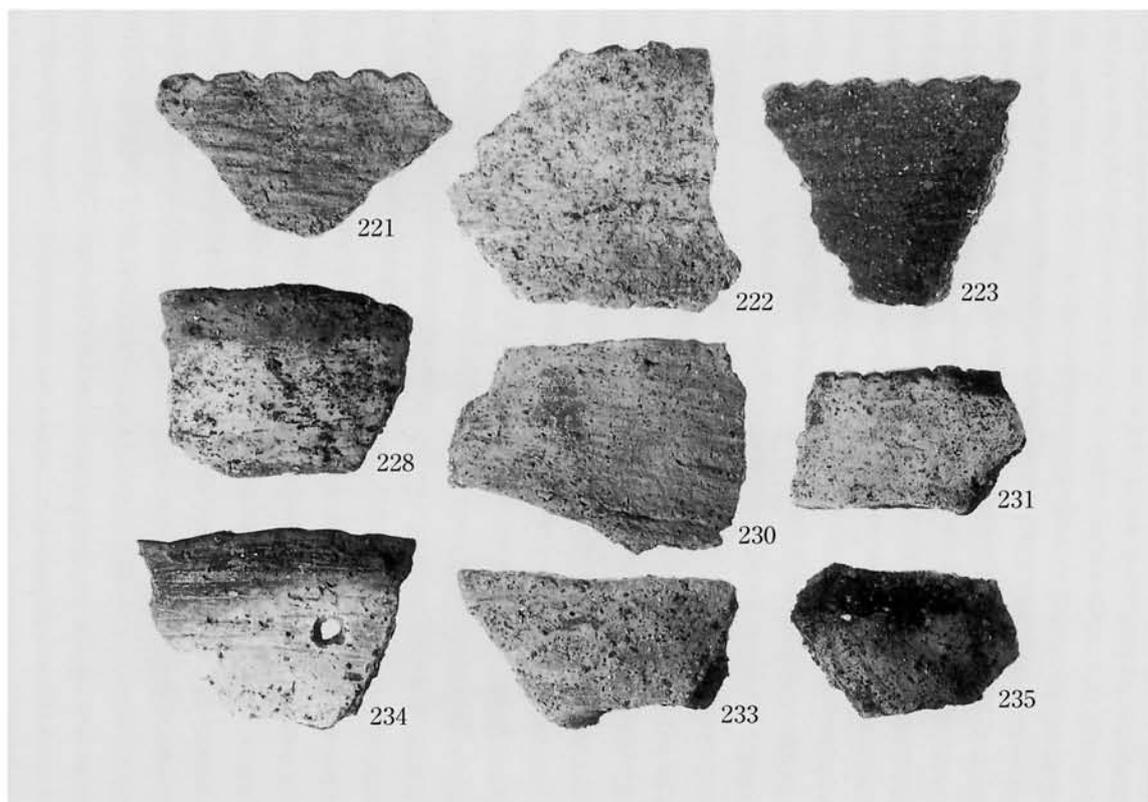
縄文晩期土器（晩期深鉢1類）内面



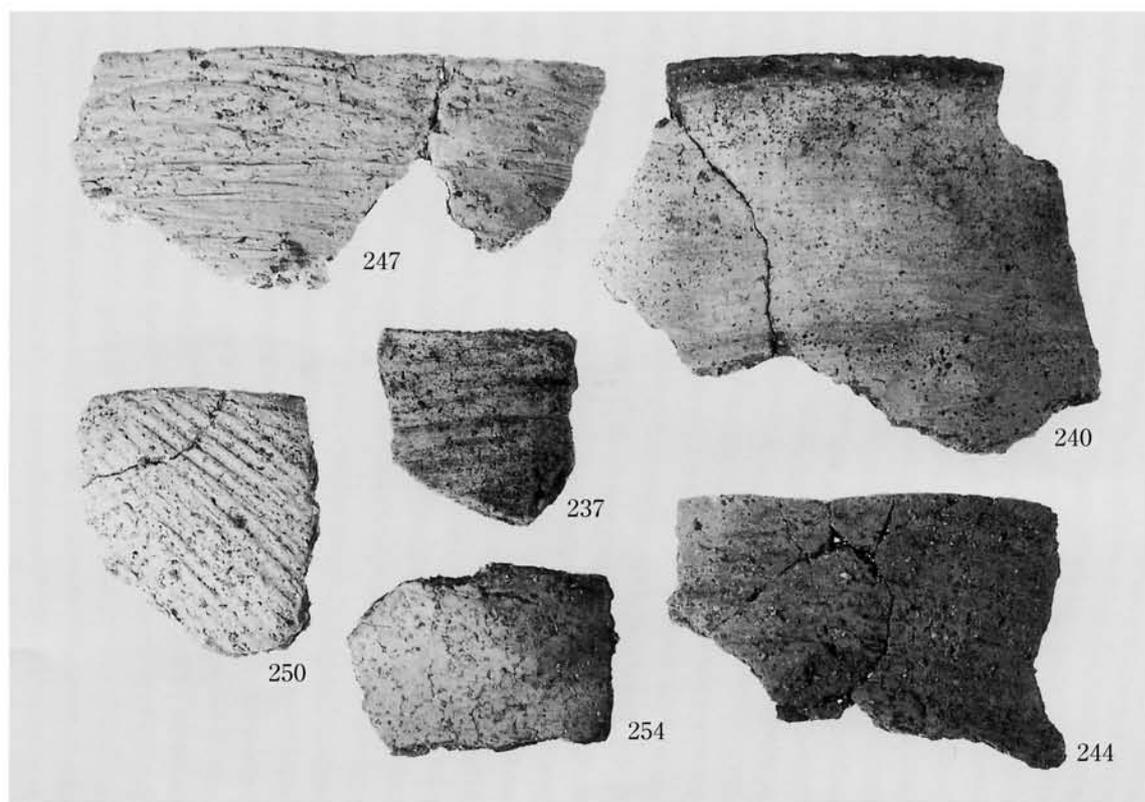
縄文晩期土器（晩期深鉢2類）外面



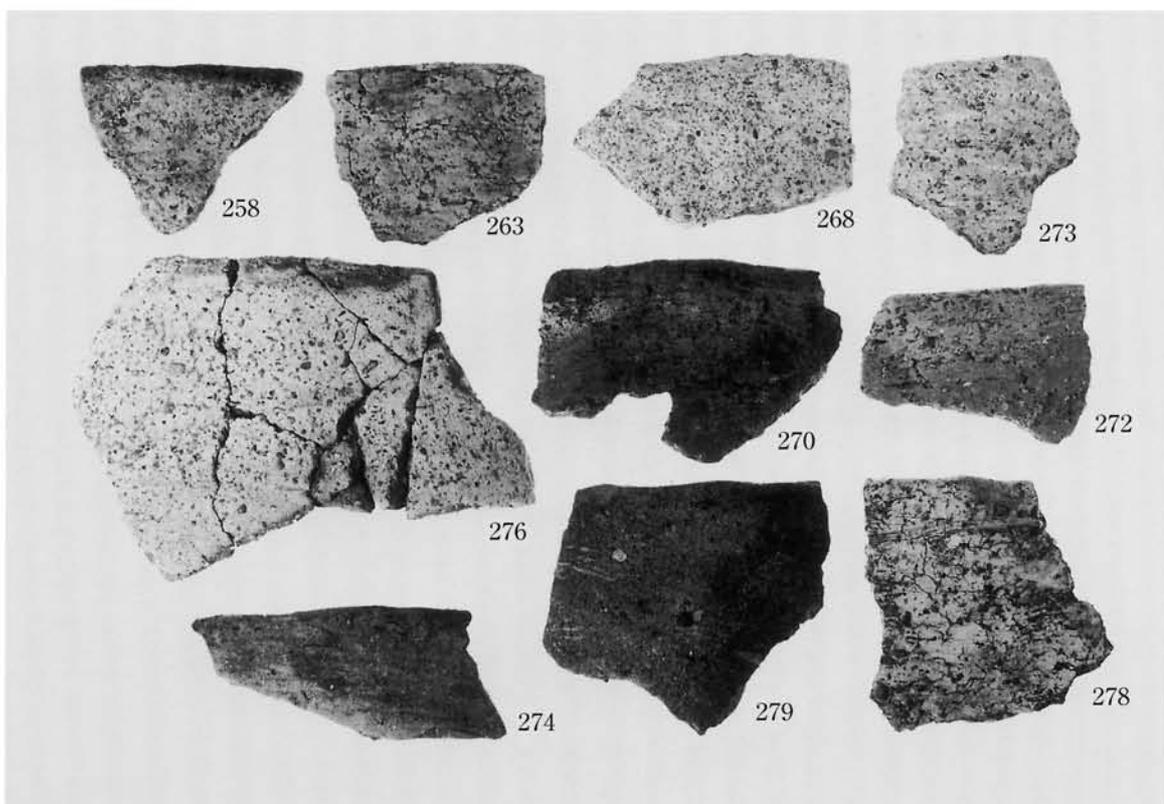
縄文晩期土器（晩期深鉢2類）内面



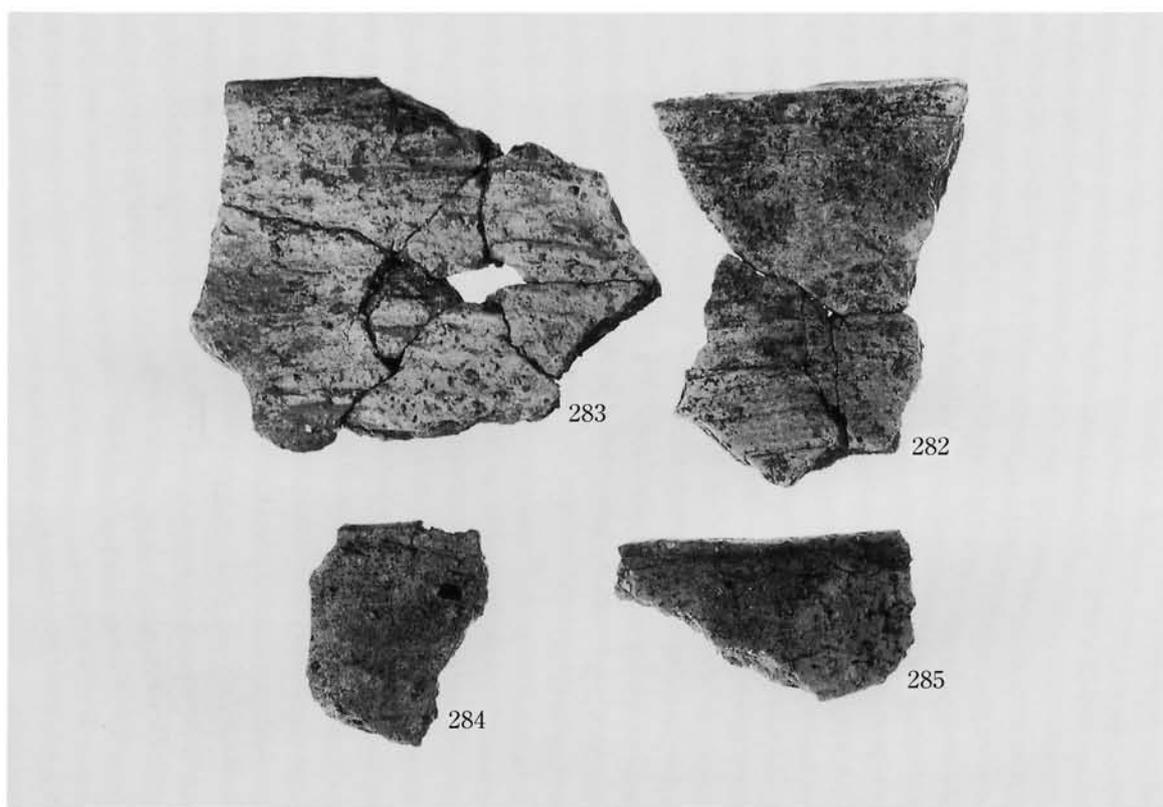
縄文土器（粗製深鉢）



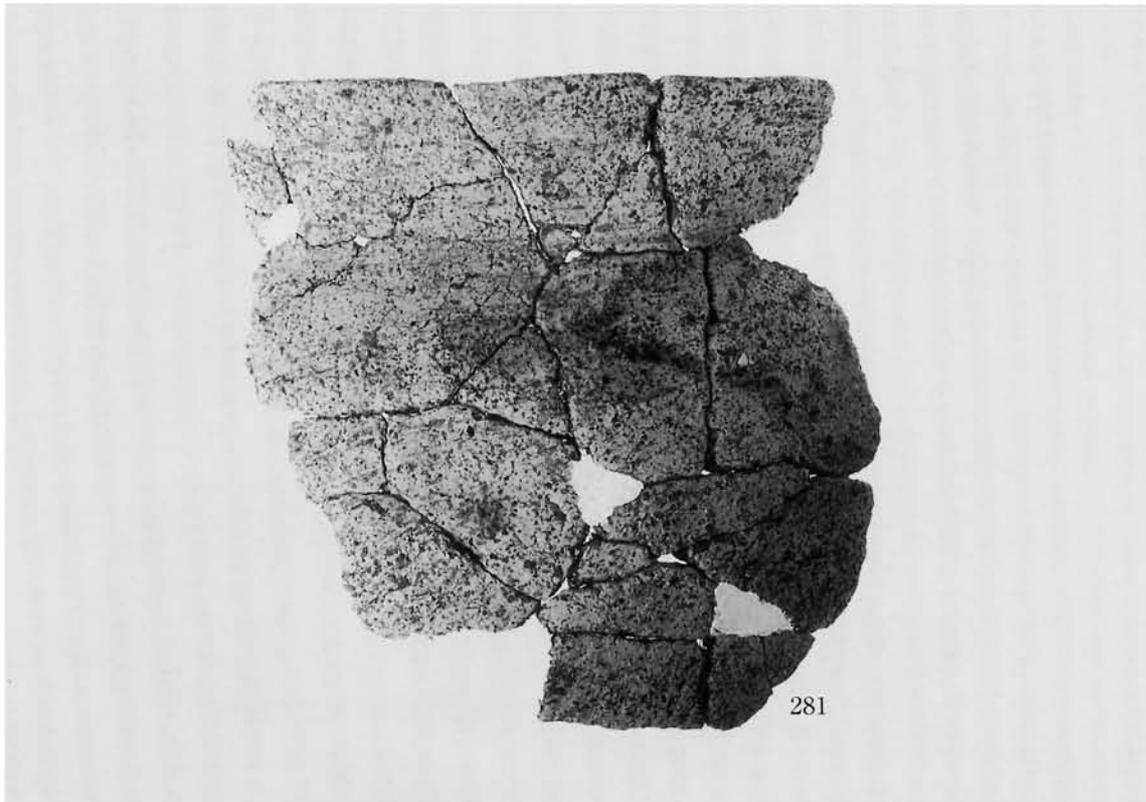
縄文土器（粗製深鉢）



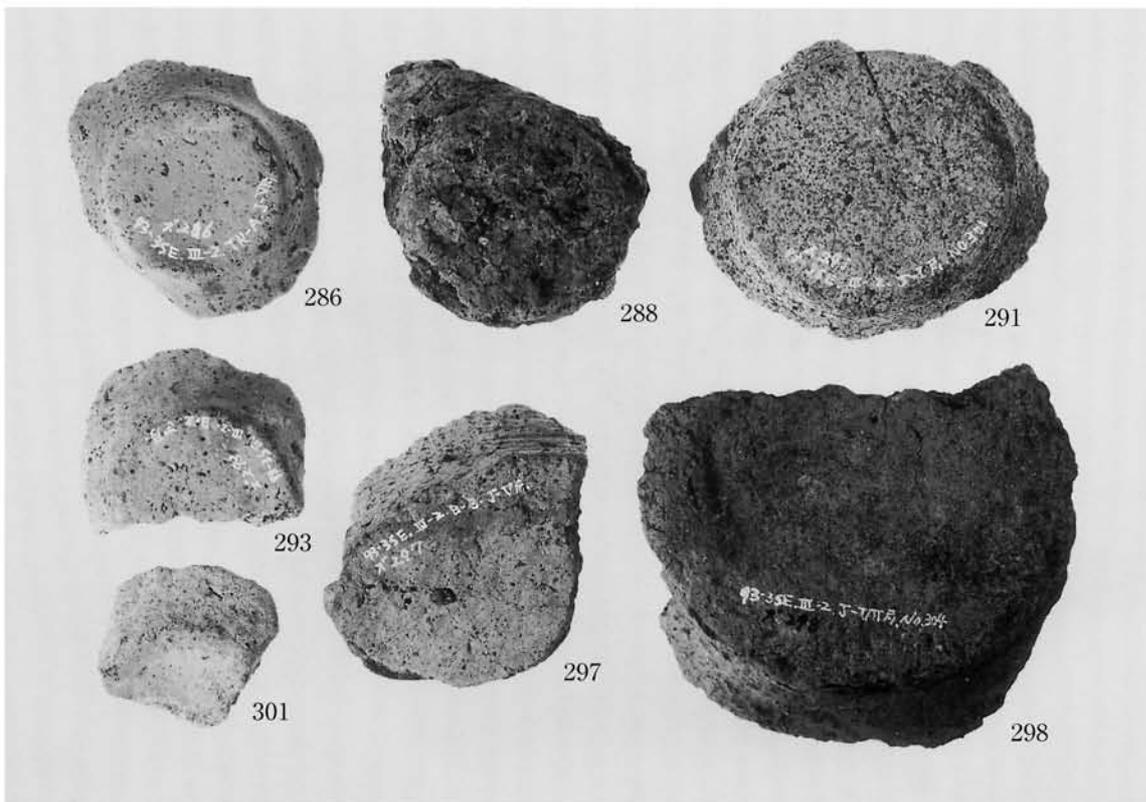
縄文土器（粗製深鉢）



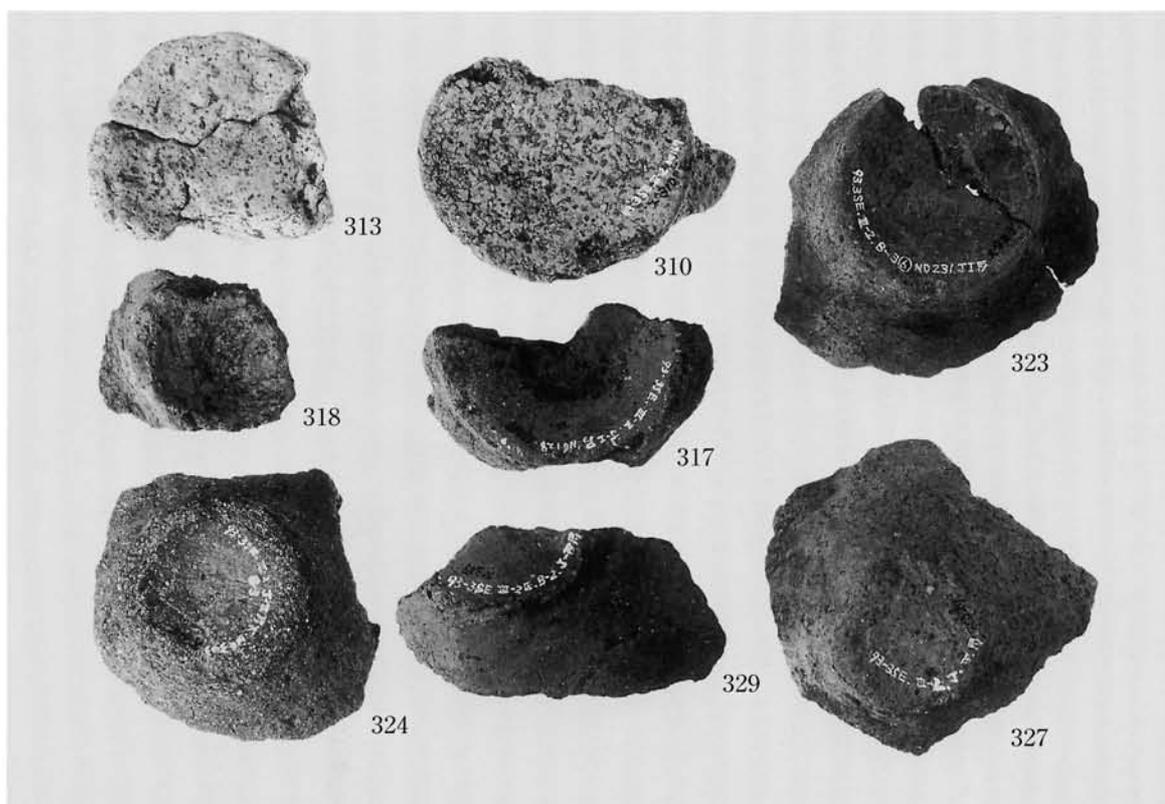
縄文土器（粗製深鉢）



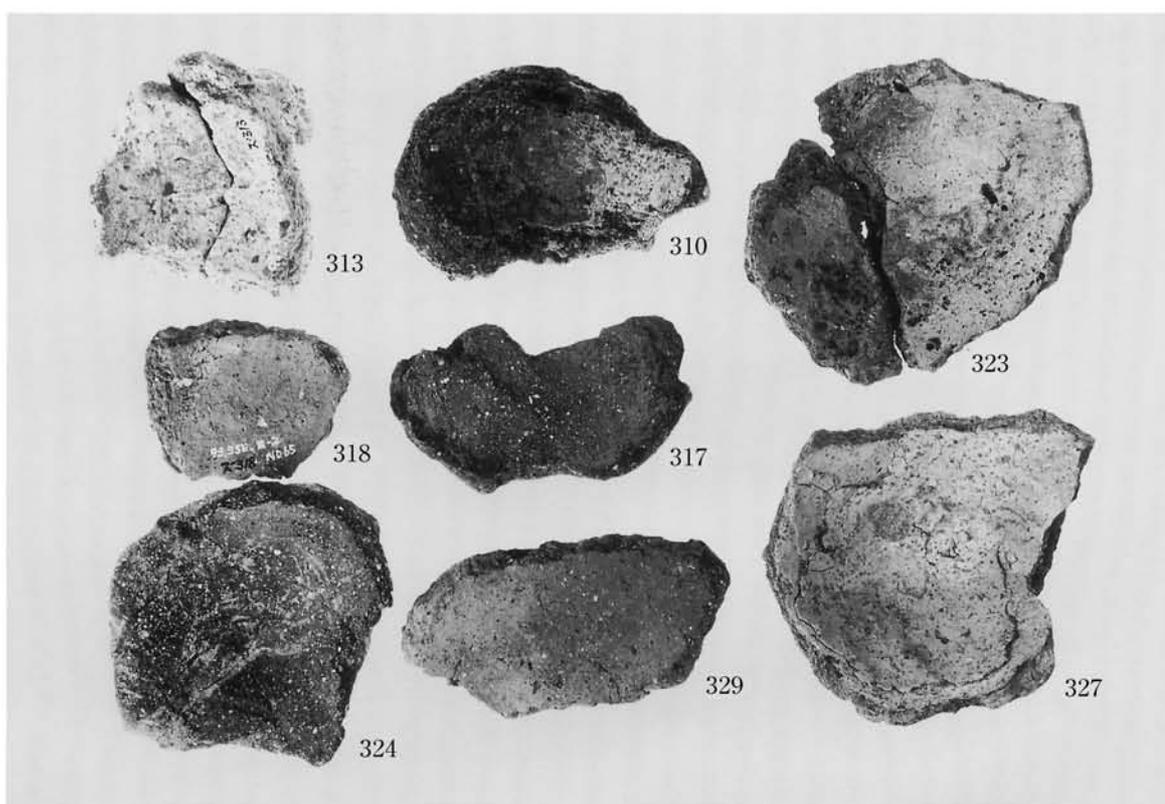
縄文土器（粗製深鉢）



縄文土器（底部）

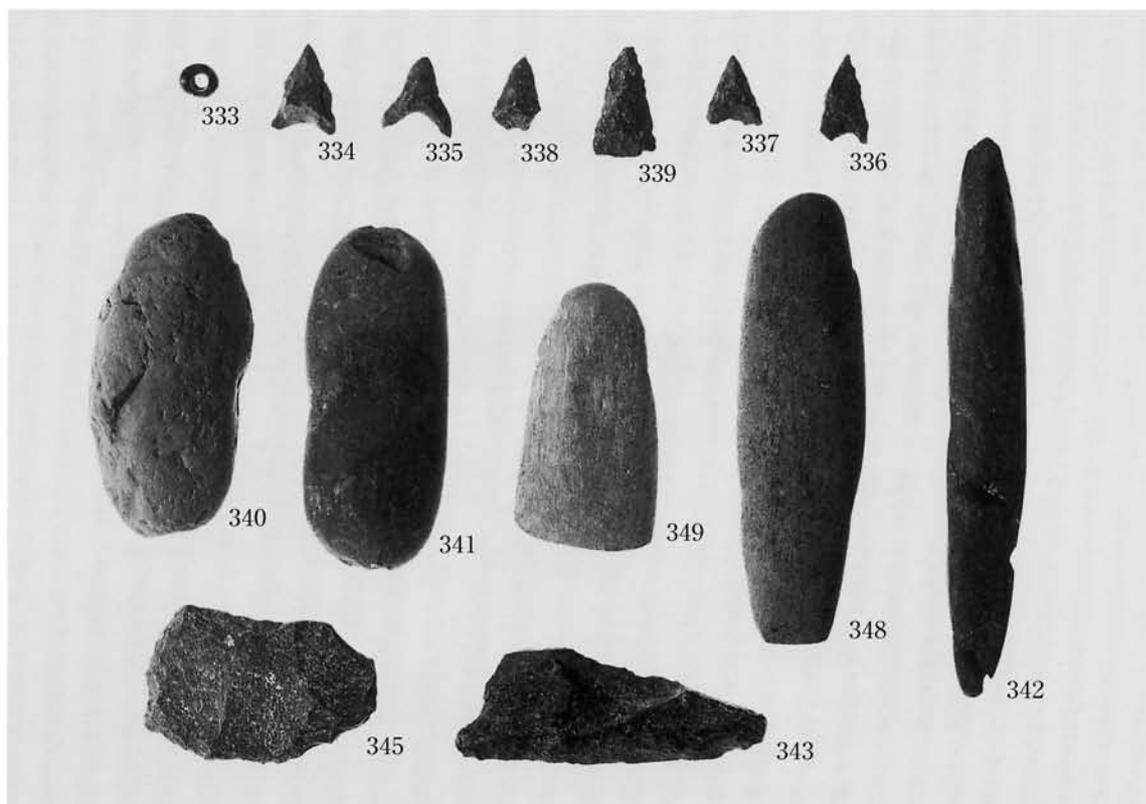


縄文土器（底部）外面

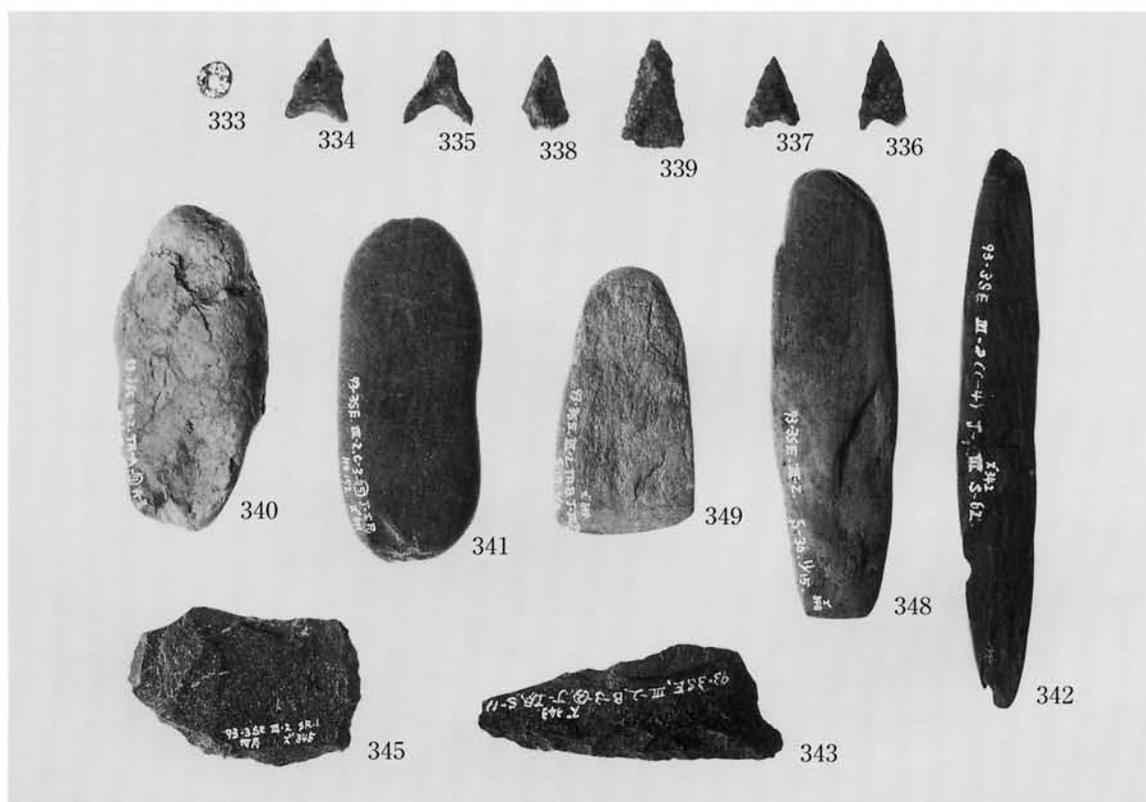


縄文土器（底部）内面

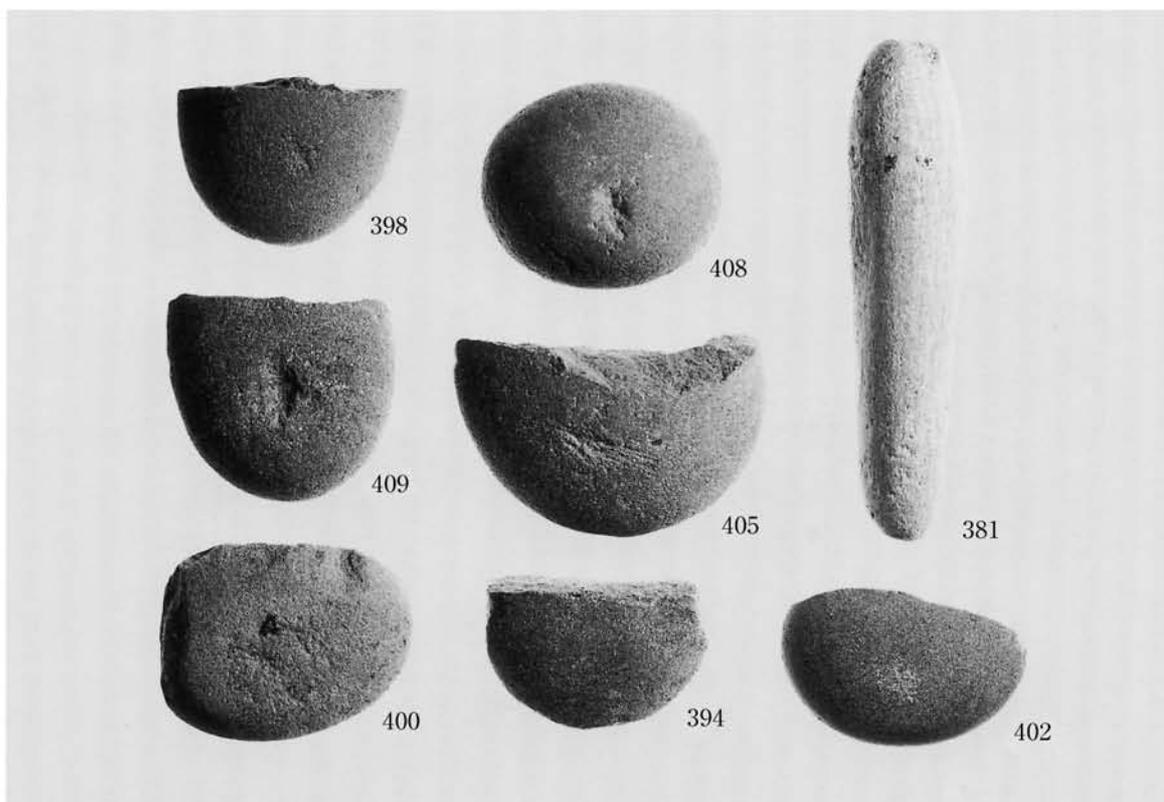
PL 40



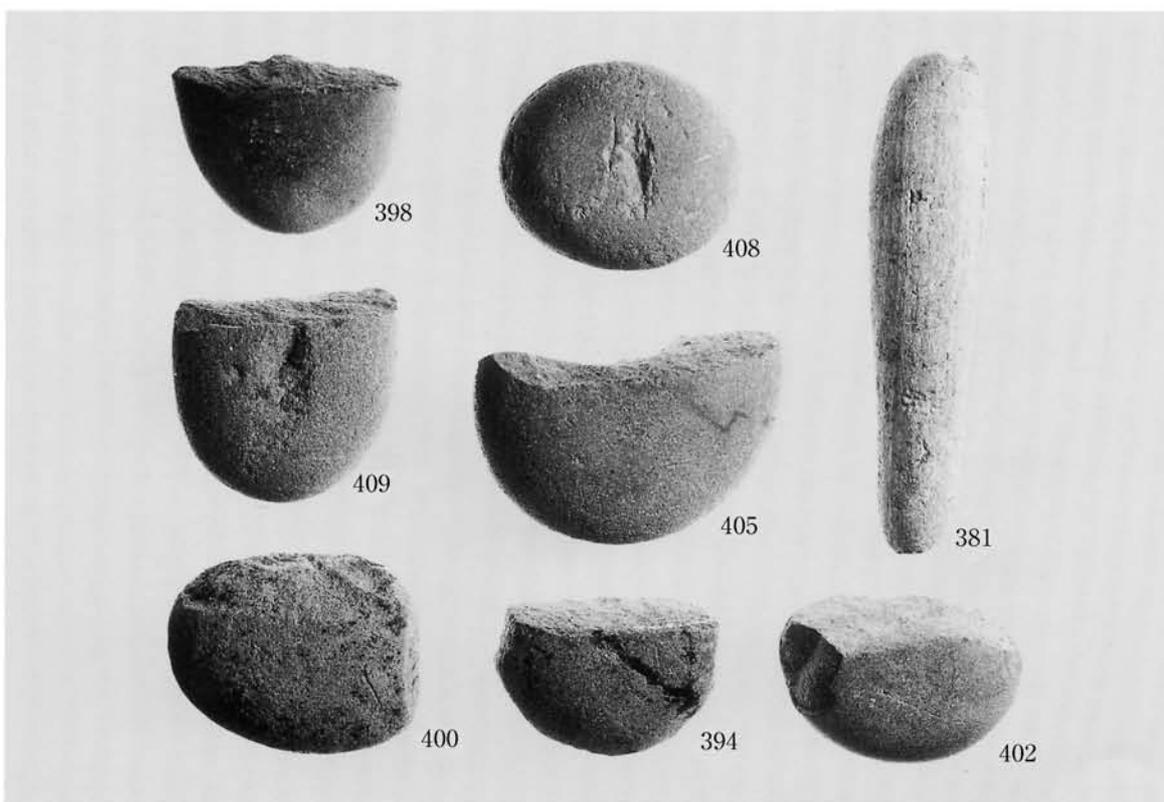
石器（縄文時代）石鏃，石錘，磨製石斧，スクレイパー類（表面）



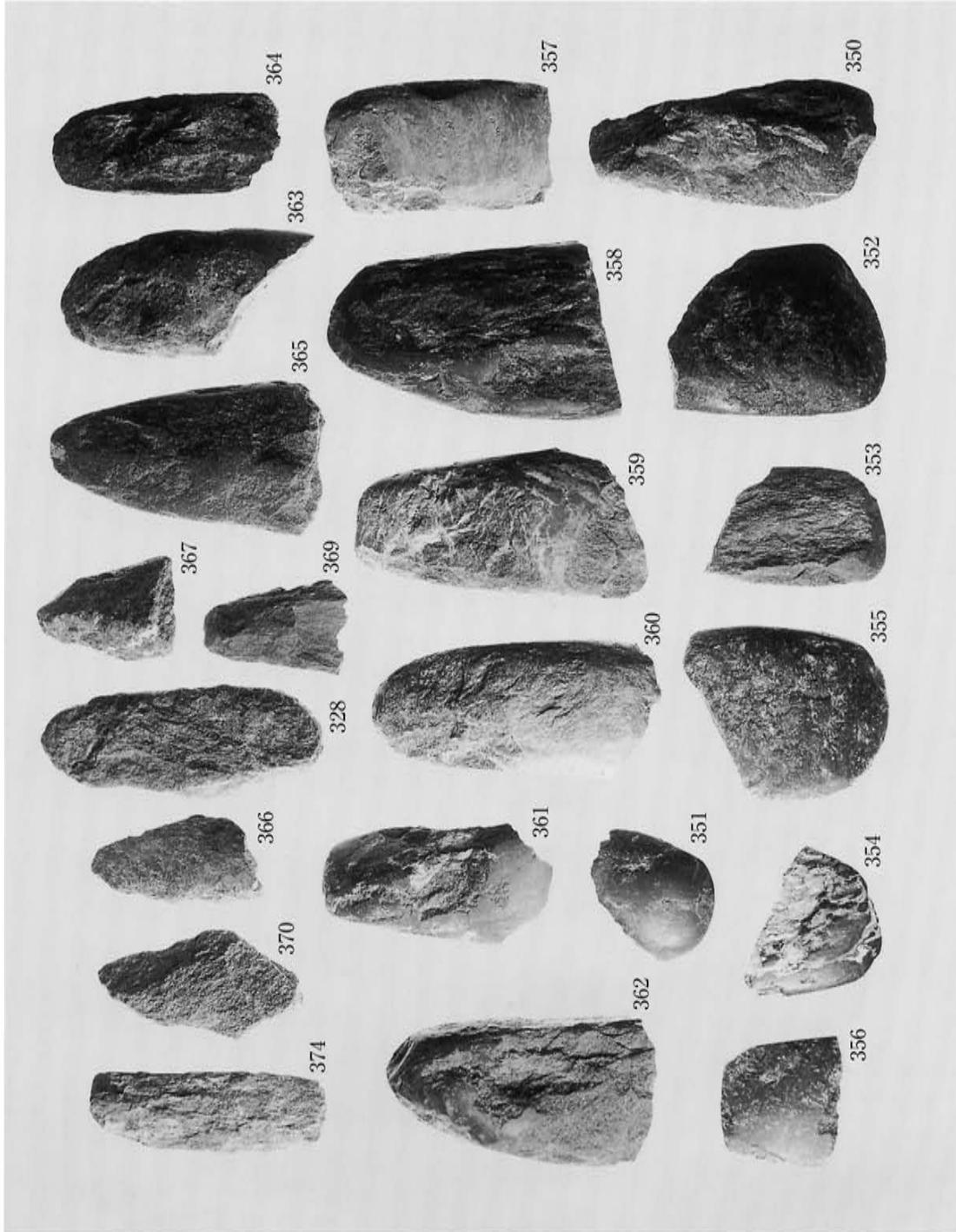
石器（縄文時代）石鏃，石錘，磨製石斧，スクレイパー類（裏面）



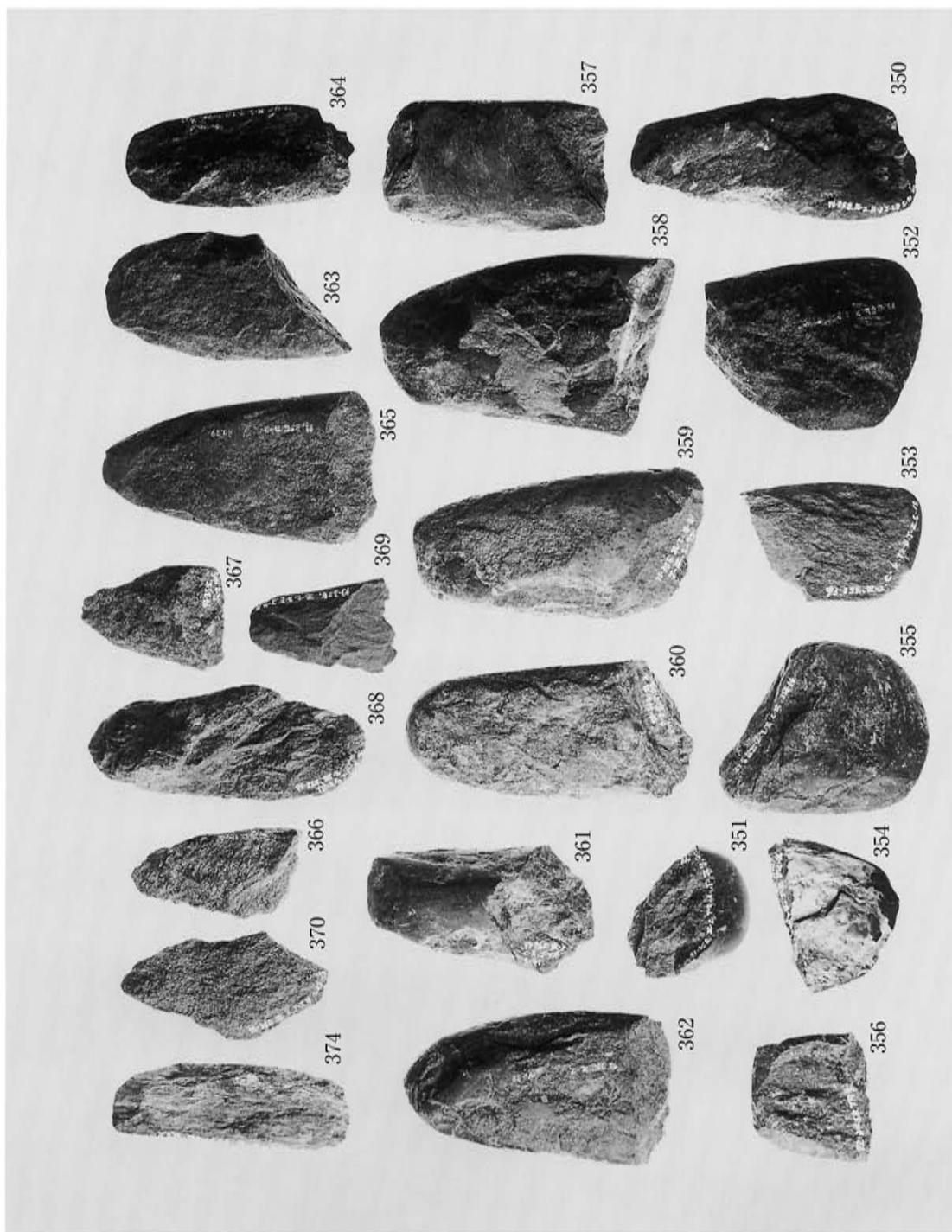
石器（縄文時代）叩き石類（表面）



石器（縄文時代）叩き石類（裏面）

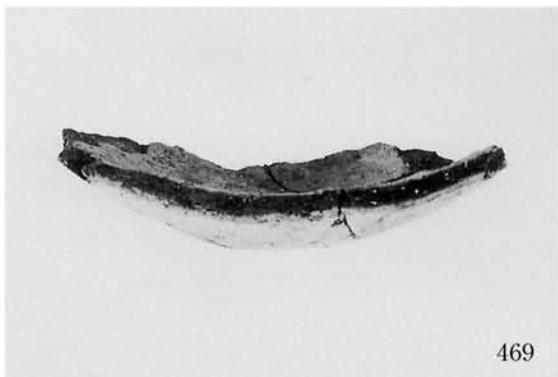
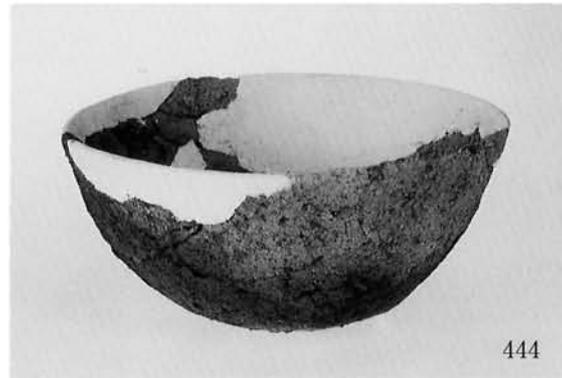
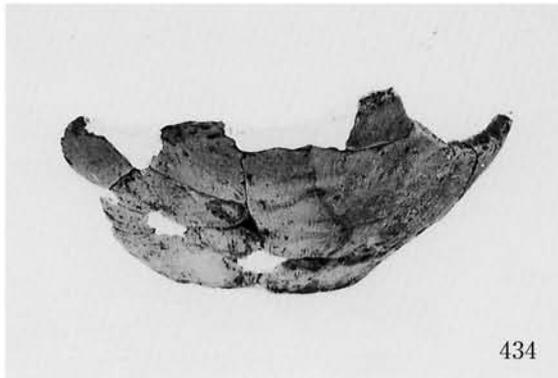


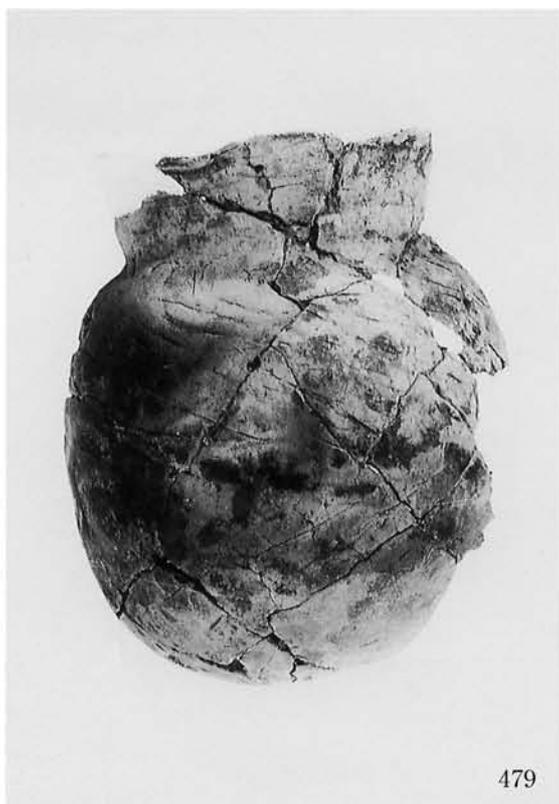
石器 (縄文時代) 磨製石斧 背面



石器（縄文時代）磨製石斧 腹面

PL 44





I-3区, II-3区出土遺物

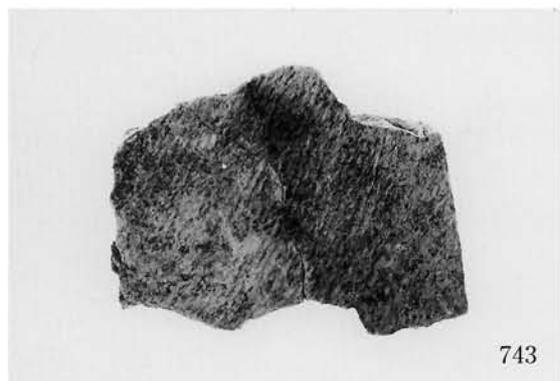
PL 46



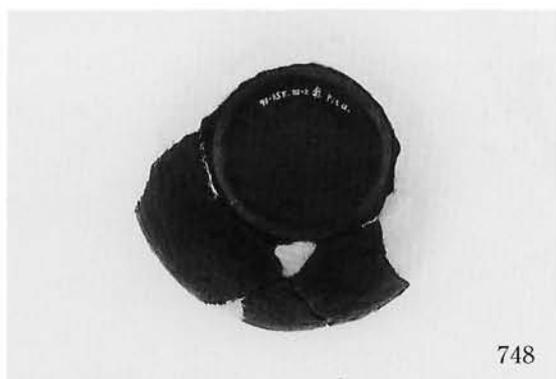
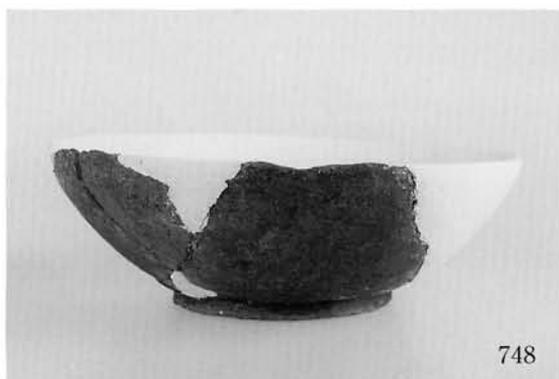
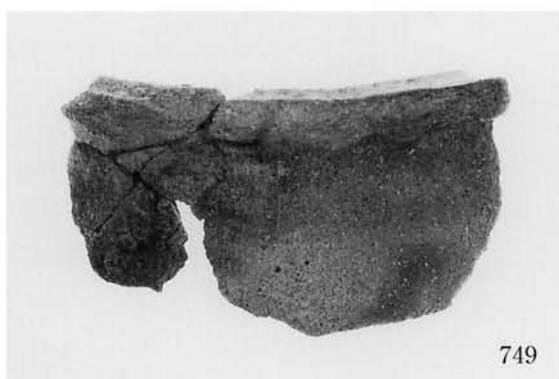
I-1・3, II-1・3区 出土遺物



PL 48

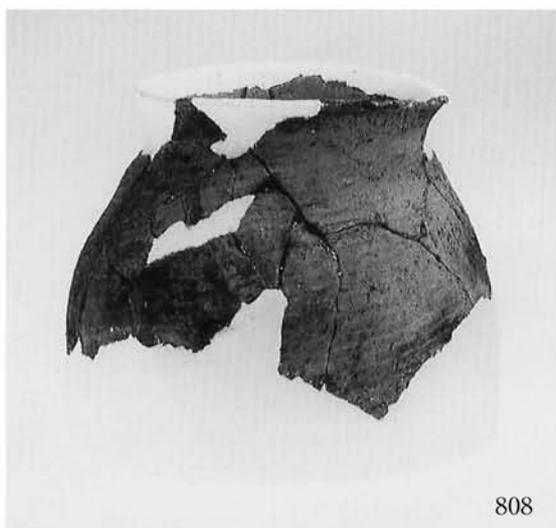
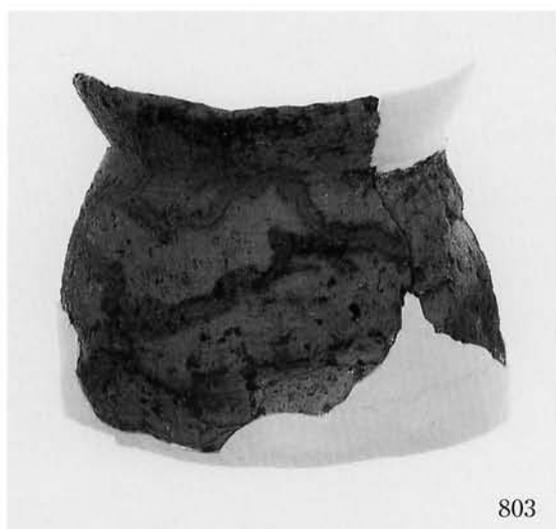
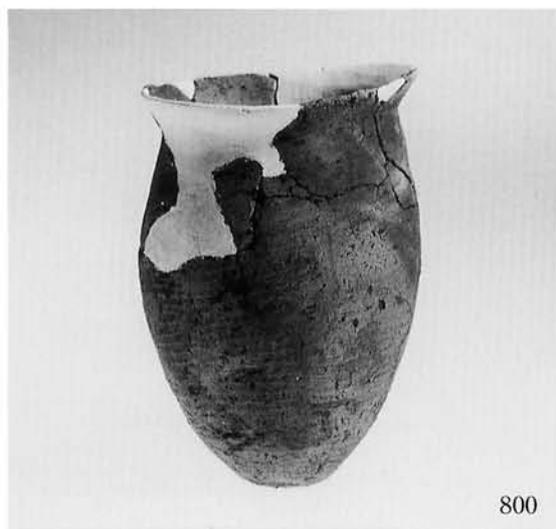
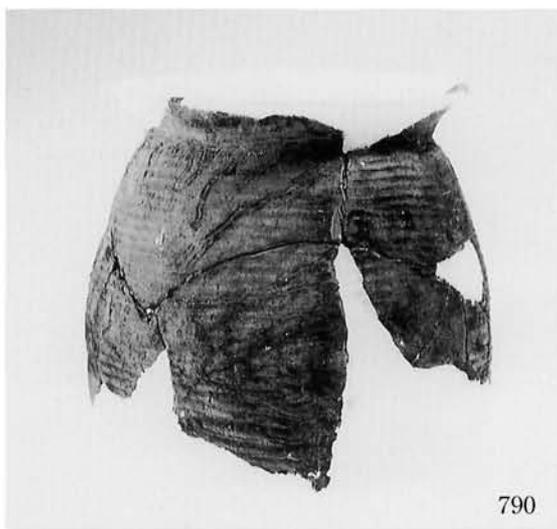


II-4・5, III-2区 出土遺物





Ⅲ-2区 出土遺物 (SD-29)



PL 52



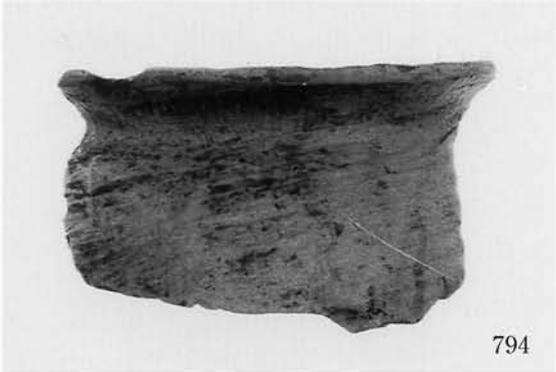
786



789

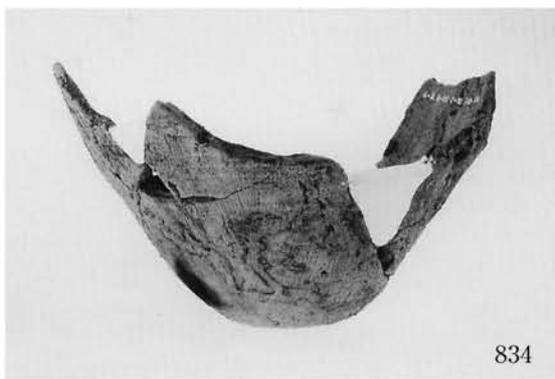
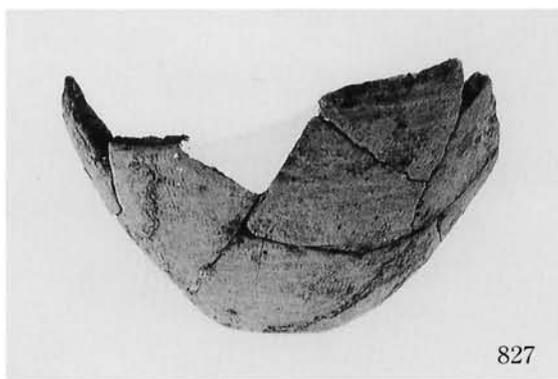
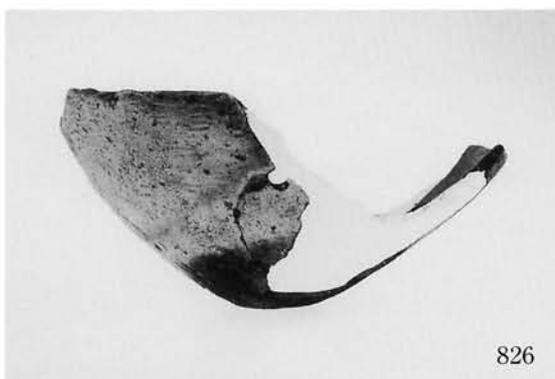
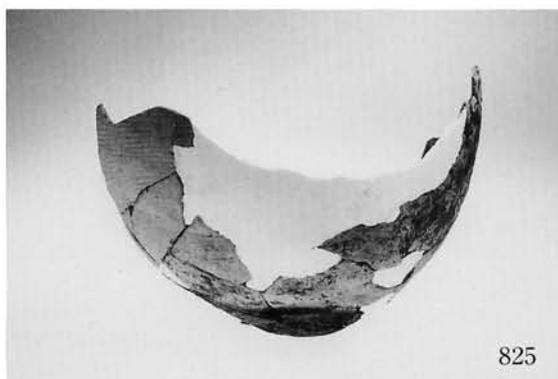


792

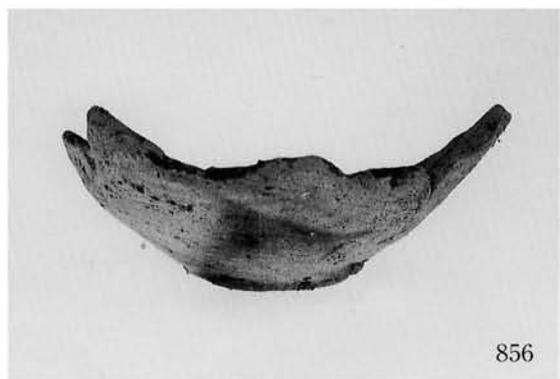
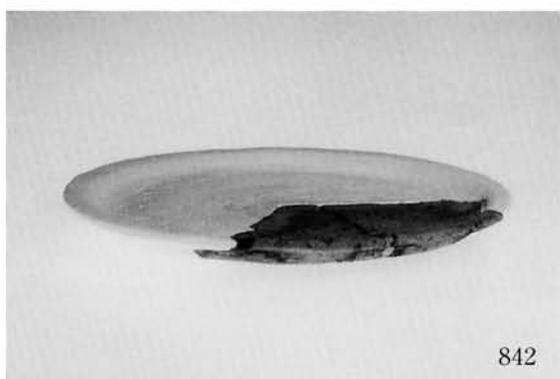
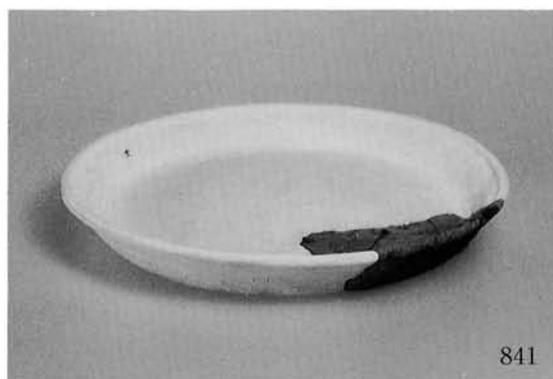


794





PL 54



Ⅲ-4区 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さかえだいせき							
書名	栄エ田遺跡							
副書名	四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	松村信博・江戸秀輝							
編集機関	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃〃	東経 〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さかえだ 栄エ田遺跡	なんこくし おこうちよう 南国市岡豊町 じょうりん じ あださか 定林寺字栄 えだ みやのまえ エ田・宮ノ前 他	04	0058	33° 35′	133° 36′	1993.5.17 } 1994.12.6	2,400	高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
栄エ田遺跡	集落跡	縄文時代 ～近世	掘立柱建物跡 柱穴 土坑 溝 自然流路	縄文土器 弥生土器 土師器 瓦器 瓦質土器 青磁 常滑 磨製石斧 打製石斧 石鏃 石錘 叩き石 他			縄文後期～晩期の自然流路 弥生後期～古墳初頭の溝 古代～近世の集落	

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第22集

栄 工 田 遺 跡

四国横断自動車道（南国～伊野）建設に伴う発掘調査報告書

1995年3月

発 行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市篠原南泉1437-1
電話 (0888)64-0671

印 刷 西村 謄 写 堂
高知市上町1丁目6-4